
オロチ様はイタズラがお好き！？

ネギトロ井

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

オロチ様はイタズラがお好き!?

【Nコード】

N8270C

【作者名】

ネギトロ井

【あらすじ】

ひよんなことから、最強の妖魔オロチに取り憑かれてしまった、悪人面の落ちこぼれ騎士候補生スサノ・フウガ。傲岸不遜なオロチは、とんでもない呪いをフウガに掛ける。それは三ヶ月以内に、学園最強と謳われるツクヨミ・ウズメにガチンコで勝てなければ、女になってしまおうという呪い。実は、オロチは、三度の飯より悪戯が大好きという、妖魔の中でも質の悪い、変わり者だったのだ。「こんな悪人面で、女になんてなったら、絶対に未来はない!」男としての人生を守るため、疫病神の妖魔に憑かれたフウガの受難の学園

生活が幕を開ける――！

プロローグ（前書き）

登場人物は、全て苗字・名前の順で表記されています。

読者の方がわかりやすいよう度量衡（長さや重さの単位）は、現実と同じものとなっています。

より読みやすい文章を目指して、随時、管理人が修正を入れています。そのため時間を空けて読み直しますと、以前と内容が微妙に違う場合がありますが、どうぞ御了承下さい。

プロローグ

「やめようよお、レナちゃん……」

「ここまで来て、何言ってるのよ、ミヨ」

二人の少女は、互いの対照的な性格を感じさせる言い合いをしながら、暗闇の中を歩いていた。

光源となるのは、レナと呼ばれた少女の持つランタンだけだ。地下である。

天井は高く、闇に目が慣れても奥の方は視認できない。

相当に広い空間だった。

鼻につく空気は、地下特有の湿っぽさを含み、ひんやりと肌を刺す。

滅多に人が踏み入れる場所ではない。

そのため床に厚く積もった埃を歩く度に舞い上がらせながら、二人は慎重な足取りで進んでいった。

左右には、巨大な棚がいくつも立ち、そこには所狭しと宝物が並んでいる。

切れ味鋭そうな生身の剣、怪しげな文字が彫られた壺、魅惑的な輝きを放つ宝石、エトセトラ、エトセトラ――全てが、ただの骨董品などではなく、曰く付きの品物ばかりだ。

見ているだけで呪われそうとも思ったのか、ミヨがごくりと唾を呑む。

「ねえ、レナちゃん、やっぱり……」

「もう、まだ言ってるの？ おばあちゃんの目を盗んで、〈極・重要宝物庫〉の鍵を手に入れるのって、すつつつごい苦労したんだから。今更、後になんか引けないわ」

レナは、つり眼に僅かな苛立ちを見せて反論した。

自身の栗色のおさげを掴んで、ミヨは眼鏡をかけた眼を伏せる。

「だけど、あの魔帝オロチを封じた〈八尺瓊勾玉^{やさかにのまがたま}〉を見たいだなん

て……もしも、バレたら……」

「大丈夫よ。ただ見るだけだし、バレたりしないって。それに、この学園にそんなものが保管してあるなんて聞いたら、私、じつとなんてしてられないのよね」

「……レナちゃん……うう」

自分の言葉に全く耳を貸してくれない親友に、ミヨは困り果てる。レナはとにかく積極的で、思いつくと考えるよりも先に行動に移してしまう。

それは彼女の長所だったが、同時に一番の短所でもあった。歩く事、数分。

結局、二人は、そこに辿り着いた。

〈極・重要宝物庫〉の最奥。

レナがランタンを掲げ、目的の物がある場所を照らす。すると、それが二人の目に飛び込んできた。

〈八尺瓊勾玉〉。

朱色の大きな台座の上に、拳大ほどのそれは嵌め込まれていた。綺麗な若草色をした勾玉の中心には特殊な文字が刻まれ、形容しがたい不思議な輝きを放っている。

レナが息を呑んだ。

「これが〈八尺瓊勾玉〉……魔帝オロチを封じた神器……」

「す、すごい……」

神器の放つ、理屈ではない圧倒的な迫力に、二人は完全に言葉を失う。

ミヨは急に怖くなったのか、レナの腕を掴んだ。

「ねえ、レナちゃん。もういいでしょ。帰ろうよ」

「まあ、ちょっと待ちなさい。もう少し近くで……」

伝説の神器を前にして、逆にレナの方は好奇心を刺激されてしまったらしい。

興奮した様子で、台座に近づいていく。

そして、

「あっ！」

声が上がった。

暗いせいで、彼女は気づいていなかったのだ。

台座のある場所が、一段高くなっている事に。

ものの見事に躓いたレナは、〈八尺瓊勾玉〉に向けて一直線に倒れこみ、

——がしゃーん！

滅茶苦茶、嫌な音が宝物庫内に響いた。

「あ……………」

「え……………」

二人は一樣に、愕然とした声を洩らす。

レナの全体重を乗せた肘打ちを喰らった〈八尺瓊勾玉〉は、砕け散っていた。

完全に。粉々に。取り返しのつかない形で。

「「きゃ……………」」

二人の少女は、一步、二歩と後退り、一瞬で血の気を顔から引かせると、

「「きゃああアアアアあああああああああああ！？」 うそお

おおおおおおおおおっ！」

喉から全身全霊を込めた悲鳴を迸らせた。

さらに。

〈八尺瓊勾玉〉のあった場所に一つの光球が生まれる。

それは、ものすごい速度で二人の少女の間を抜けて、宝物庫を飛び出していった。

◇ ◇ ◇

鐘が鳴っていた。

王立第一ヒノカワカミ学園の予鈴だ。

(あー、どうするか。今日もサボろうかな……)

不謹慎な思考に耽りながら、スサノ・フウガは、屋上で寝転がっていた。

若芽のような淡い緑の髪に、碧眼という変わった色の組み合わせを持つ少年だ。

それだけを取れば、美しいと言えるだろう。

しかし、彼を初めて見た人間は、絶対に好印象を抱く事はない。なぜなら悪いのだ。

致命的なまでに――目付きが。

それは、同級生から、「今までに二、三人は余裕で殺してそんな悪人面」という不名誉な称号を与えられるほどだ。

本人も気にはしているが、こんな顔で生まれてしまった以上、今更、どうしようもないと半ば諦めている。

「ふわ……」

欠伸を噛み殺す。

どこまでも広がる空は、綺麗な蒼。

晴天だ。

陽気も、眠りに誘うかのように心地良い。

一時限目は、すぐに始まるだろう。

だが、そんな状況など関係なく、彼の意識はまどろんでくる。

今日は一時限目はサボり決定。

二度寝だ。

フウガが誘惑に負け、そんな駄目な選択をしようとした――その瞬間だった。

「……………」

空に、不自然なものを見つけたのだ。

光だ。

凄い速さで、不規則な動きを見せている。

一瞬、流れ星かと思った。

しかし、今は、もう朝だ。そんなものが見えるはずもない。
光が、徐々に、だが確実に大きくなってくる。

「あれ……？　これ？」

何だか……近づいてきている気がする。

いや、近づいているのだ。

間違いなく、こちらへ、一直線に。

「え？　いや、ちょい待ち……」

いい加減、危険を感じたフウガは、慌てて身を起こす。

すぐにでも屋上から離れようとする。

遅かった。

光はあっという間に、目前に迫ってくる。

「おい！？　待てって！　どわあああああ！？」

逃げ切れず、光がフウガの身体へと飛び込んだ。

「くうっ……！？」

軽い衝撃はあったが、痛みはない。

ただ自分の内に、何かが入り込んでくるような——そんな感覚がした気がする。

咄嗟に閉じた目を開く。

すでに、あの光は跡形もない。

「……な、何だったんだ？」

わけが分からず、戸惑いのままフウガは、自身の両手を見下ろす。

『ふむ、ようやく落ち着ける場所を見つけたな』

（！？）

フウガは目を剥いて、自分の口を押さえる。

今のは、自身の意思とは別に、彼の唇が勝手に動いて言ったのだ。
耳に届いた声も彼のものではない。

「ど、どうなってるんだ！？」

『そう驚くな、少年。我が名は、魔帝オロチ』

また勝手に口が動いた。

だが、その事以上に、台詞の中に出てきた名にフウガは驚愕する。

プロローグ（後書き）

お読み頂きありがとうございました。

一章 オロチの呪いは○転換！？ その一

アマテラス神聖王国。

万象の創造神の名を冠すこの国は、タカアマバラ大陸の中央部に位置し、ヤマトと呼ばれるこの世界で、最強最大の王国だ。

そして、王国軍隊の軸でもあり、他国の追隨を許さない圧倒的な王国の強さを支えるのが、アマテラス神聖騎士団だった。総勢三万人を越えるこの騎士団は、地位、民族を問わずに、実力ある者を広く採用する事で、常に優秀な人材を確保していた。

その事を最も端的に表したのが、王立ヒノカワカミ学園の存在だろう。

この学園は、国内に三校まで存在し、表面的には学園の体裁をとってはいるが、実際は、才能ある神聖騎士候補生を育成する、王国の騎士養成機関だ。

十四歳の少年少女だけが入学可能で、五年制。

その間に、一定の水準を超えた実力を身につけた候補生だけが、卒業後に騎士見習いとして王城に出向し、経験を積んだ後、正式な神聖騎士となれるのである。

現在では、誰もが憧れる神聖騎士を目指す上で、これが最も実現の可能性が高い手段とされ、故に入学を希望する少年少女は、年々が増えていた。

フウガが通うのは、三つある学園の中で最初に設立され、二百年以上の長い歴史を持つ、王立第一ヒノカワカミ学園である。

彼は、現在、その学園の学園長室に居た。

校舎の中では、最も大きい第三校舎の最上階にあるその部屋は、非常に広い。さらに床は一面が赤絨毯、外に面した壁は全て硝子張りになっており、学園の敷地内のほぼ全域が見渡せる。

フウガは、今日初めて、この部屋に入った。

そして、そんな事態になった理由は、唯一つ。

今日の朝の出来事である。

すぐに状況を察した学園長タマヨリ・シズネの命を受け、フウガのクラスの担当教官シンラン・ソウゴが、ここまで彼を連れて来たのだ。

部屋の最奥に置かれた黒檀の執務机に腰を下ろしたシズネは、普段は温和な顔を、苦渋も含んで、厳しく強張らせていた。

彼女は、すでに齢七十を越えているが、いつもは、それを全く思わせないほどに若々しい。ただ今は、その硬い表情もあって、年相応の思慮深さを感じさせた。

「……スサノ君。私の孫の失態で、貴方にとんだ迷惑を掛けてしまいました。本当にごめんなさいね」

重苦しい口調で言うと、シズネは頭を深々と下げた。

「あー……」

フウガは困った顔で、緑髪の手を掻く。

「正直、この状況を未だに自分の中で整理出来ずにいるんで、謝られても何と返せばいいやら……」

学園長室に来て、まずフウガが聞かされたのは――

この学園の騎士候補生でもあるシズネの孫とその友人が、興味本位で〈極・重要宝物庫〉に忍び込み、神器である〈八尺瓊勾玉〉を誤って壊してしまった。そして、中に封じられていた魔帝オロチが解放され、自分に取り憑いたらしい――と、そんな話だけだ。

全く持って自分には関わりない所で起きた事である上、いきなりオロチに取り憑かれましたと言われても、「はい、そうですか」と容易く受け入れられるはずがない。

まあ、憑かれたといっても、とりあえずは身体に異変などはなかった――

『何を言う、少年。我を中に住まわせられるなど、最高の栄誉だろう。泣いて喜べ。そして、この幸運をすぐにでも両親に手紙で報告するのだ。ぬはははは！』

……いや、あった。

「人の身体を使って勝手に喋るな！ 気色悪い！」

『心が狭いな、少年。それでは女子にはモテないぞ』

「ほっとけ！ つうか、なんでお前に心配されるんだ、そんなもん！」

「ええと、スサノ君」

シズネの脇に控えていた、ソウゴが申し訳なさそうに口を挟んだ。長いボサボサの髪に、分厚い眼鏡。

無駄に背が高い所を除けば、見るからに頼りなさそうな男だったが、これでも学園の教官の中では、かなりの実力者だ。フウガも、それ相応の信頼をしている。

「悪いとは思うんだけど、少しオロチに話があるんだ。彼に身体を貸してやってくれないかな？ たぶん危害を加えるような真似はしないから」

「ですけど、シンラン教官！ なんかムカツクんですよ、こいつ！」
相手が歴史の授業にも出てくる強力な妖魔である事も忘れて、フウガは不満を口にする。

こんな悪人面ではあったが、フウガは決して気性の激しい方ではない。

なのに、なぜかオロチに対しては、無性に苛立ちを覚えた。

無駄に偉そうな態度の事もあるが、たぶん、相性が致命的に悪いのだろう。

『全く困った少年だ。思考の柔軟さが足りんな』

またもやフウガの身体を使って嘆息交じりに言うと、オロチは指を鳴らした。

すると、フウガの真横に突然、大柄の男が出現する。

「お、おおう！？」

フウガは思わず後退る。

灰色の長髪に、宝石のような紅の瞳。精悍な顔つきは、大人の渋みを感じさせる。しかし、その身体は何故か半透明だ。

どうやら、これがオロチの姿らしい。

とは言っても、彼が妖魔である以上、本当の姿とは限らないが。

『これなら文句あるまい、少年』

オロチらしい男が、そう言ってにやりと笑う。

「なるほど。〈妖術〉で作った幻体ですか。さすがに安易にスサノ君の中から本体を出すほど、馬鹿ではないようね、オロチ」

シズネが得心した様子で言った。

『当然だ。また封印などされては敵わんからな。この少年の中に居る限り、お前達もそうそう手は出せまい？』

「……………」

シズネは無言で目を伏せた。

どうやら凶星らしい。

しばらく何か考え込むような様子を見せた後、シズネは再び口を開いた。

「……オロチ。私達と取引をしませんか？」

『ほう』

楽しげに、オロチが口の端を吊り上げた。

（取引……だって？）

この状況にあつては、なんとも不穏な響きな言葉だ。

だが、なんとなく口を出しづらくてフウガは沈黙を守る。

シズネは、さらに続ける。

「貴方は長い封印によって、著しく妖力を低下させているはずです。それを完全に取り戻すには、〈妖界〉に一度、戻る必要があるのではない？」

『なかなか聡明だな、タマヨリ・シズネ。五十年前は、もう少し血気盛んで、頭の足らん所があったものだったがな』

今のシズネの印象とは繋がらぬ事を、オロチは言う。

（そういえば学園長、若い頃は神聖騎士で、オロチの封印にも参加してたんだっけ……）

フウガは、候補生内で聞いた噂を記憶から掘り出す。

それにしても、オロチが当時の学園長の事を覚えているのは意外

だった。

正直、妖魔は人間など鼻にもかけていないというイメージを持っていたのだ。

シズネは厳しい表情を僅かに崩して、苦笑いする。

「もう五十年よ。人間ならば変わるのには十分過ぎる時間でしよう」

『まあ、そうだな。それで?』

オロチが続きを促す。

シズネも表情を引き締め直した。

「本来、私達のすべき行動は一刻も早く〈八尺瓊勾玉〉を修復し、貴方を再封印する事でしよう。ですが、それには時間も手間もかかりますし、何より封印が成功しても、今回のような事がまた起きる可能性はゼロではない……だから」

シズネは一拍を間を空けて、こう口にした。

「オロチ、もしも貴方が大人しくスサノ君の中から出て行き、〈妖界〉に帰るというのなら、私達は、貴方には手を出さずに置きましょう」

「ちょよ！ ちょっと待ってくださいよ！」

さすがに黙っては居られず、フウガは声を上げた。

執務机に歩み寄り、両手を叩きつけるように上に乗せる。

「魔帝オロチって言ったら、五十年前、突如としてヤマトに現れたと思えば、暴虐の限りを尽くして、王国を地獄絵図へと変えたっていう最凶最悪の妖魔じゃないですか！ そんな奴が、こんな取引を受けるわけが……！」

『ぬははははははははは！』

フウガの台詞は、突然のオロチの大笑で遮られた。

勢い良く振り返ったフウガは、オロチを睨みつける。

「何が可笑しいんだ！」

『いや、すまんすまん。そうか、私はそんな風に今の人間達の間では言われているのか。これは愉快』

「?」

オロチが何を言っている意味が掴めず、フウガは眉根を寄せる。

「……ええとね、スサノ君。非常に言いにくいんだけど……」

気まずそうに口を挟んだのは、ソウゴだ。

ずれた眼鏡の位置を直しながら、彼は言った。

「その話はね、間違いではないんだけど……正確でもないんだよ」

一章 オロチの呪いは○転換!？ その一(後書き)

お読み頂きありがとうございました。

一章 オロチの呪いは○転換！？ その二

「どういう事ですか？」

フウガは不審を隠さない表情のまま、ソウゴとシズネの顔を交互に見る。

「本当なら、この事はあまり話したくはないのだけど……ここに至っては致し方ないわね」

シズネは観念したように頷いた。

「スサノ君、確かに貴方の言った話は間違いではないわ。オロチは五十年前に何の前触れもなく姿を見せ、王国を地獄絵図には変えた。ただ……地獄とは言っても、大都市を一晩で滅ぼしたとか、大挙した兵達を独りで返り討ちにしたとか、そういう事ではないの」

「僕も当時は生まれていなかったから、聞いた話だけだね。オロチによる直接的な人命の被害は、一つもなかったらしい」

「ええ？」

シズネとソウゴの言葉に、フウガは、ますます困惑する。

では、一体、オロチは何をしたというのだろうか？

少なくとも神聖騎士団が出張り、神器を用いてまで封印をしたのだから、何かしら只事ではない事を引き起こしたはずだ。

シズネは、フウガの疑問を察して、本題を口にする。

「オロチはね……その最強の力を使って——」

「使って？」

「うん……その……悪戯をしたの。思いつく限りのありとあらゆるね」

「……………」

シズネの言った意味をすぐには呑み込めず、フウガは目をしばたかせて、しばらく沈黙する。

時間にして、二分ほど。

そして、ようやく、

「い、悪戯……？ 悪戯って、あの悪戯？」

そのあまりに馬鹿馬鹿しい事実を理解した。

ソウゴがなんとも微妙な表情で頷く。

その顔から見ると、彼も初めてこの事実を知ったときには、フウガと似たような反応をしたのかもしれない。

シズネは顔をしかめて、当時の事を説明していった。

「いやね？ 当時の王国の混乱は凄まじかったのよ？ なにせ、オロチの悪戯といったら、浮気している男達が愛人と逢引している場に妻を放り込んだり、女性の目だけ男の服が透けて見えるようになり、王国中の街の地面を全て氷みたいに滑るようになりという大掛かりなものから、砂糖と塩をこっそり入れ替えたり、会う人と会う人を背後から大声で脅かしたりとかいう小さなものまで……もう無茶苦茶で」

「……………」

それは、確かに——ある意味で地獄絵図なのかもしれない。

普通に暴れるよりはマシではあるうが、相手が最強の妖魔である以上、ただの悪戯でも、やたらと質が悪過ぎる。

だが、それにしたって、

「……………く、下らない……………」

その一言に尽きる。

こんな阿呆で馬鹿馬鹿しい妖魔を封印するために、神聖騎士団が動いたというのは、確かに後世には残したくない事柄だろう。

羞恥心を誤魔化すように、シズネは曖昧な笑みを見せる。

「と、ともかく、本当の事を貴方達に教えなかった理由は理解してもらえたでしょう？ 一応、嘘は言っていないわけだから、そこは勘弁してもらえると助かるわ」

「はあ……………」

「また、あんな事態を招くのは絶対に避けたいし、オロチは呆れるほど悪戯好きな部分を除けば、理性的で人間に対しても悪感情を抱いていない善良な妖魔よ（……………認めたくはないけど）。だから、こ

の取引は、決して無謀なものではないはずなの」

『まあ、そういう事だな。私はこう見えて、紳士なのだぞ?』

「騎士団を動かすような悪戯をしまくる紳士がどこに居る!？」

自慢気に言うオロチに、思わずフウガは突っ込む。

そして、次に盛大な溜息を吐き出した。

「……とりあえずわかりました。正直、納得はしたくはないんですけど、そうしないと話が進まないですし……」

「そう、助かるわ!」

シズネは安堵し、隣でソウゴが申し訳なさそうに笑みを浮かべていた。

次いで、シズネの視線がオロチへと移動する。

「それで、オロチ。貴方は取引を受ける気はあるのかしら?」

『ふむ、そうだな』

顎に指を当て、オロチは考え込む。

『まあ、〈人界〉での悪戯は、ほぼやり尽くしたしな。また封印されるぐらいなら、このまま〈妖界〉に戻る事自体に異存はないが……』

「では……」

『ただな』

オロチ以外の三人がぱっと明るい表情を見せかけた所で、悪戯好きの妖魔は言った。

『このまま、あっさりと帰るのも味気ない。せっかくだから、最後に私も〈人界〉で思い出作りをしたいのだよ』

「思い出作りだって? 一体何を……」

嫌な予感を覚えて、フウガが訊く。

しかし、それには応えず、オロチは腕を組むと、うんうんと唸り声を上げながら、何かを長々と考え込む。

そして、不意に、

『よし、思いついたぞ!』

ぽんっと拳で自身の掌を打った。

「マ、マジかい……」

怒りを通り越して、フウガは絶望をする。

それでなくても、自分は悪人面で苦勞しているのだ。

これで女になったりしたら、どれだけ悲惨な人生を歩む事になるか……。

——いや、それだけじゃない。

自分にはもう一つそれを受け入れられない理由がある。

『逸るな、少年。ある条件を満たせば、その呪いは自動的に解ける』

「な、何だ、それは！ 教えろ！」

再び復活して、問い詰める。

『シズネ。この学園には、ツクヨミ・ウズメという超強い女子の騎士候補生がいるな？』

「え？」

いきなり話の矛先を向けられて、シズネは目をしばたたかせる。

ツクヨミ・ウズメ。

学園内規定の階位で最高位であるS参に、史上初めて認定された少女だ。

まだ騎士候補生の身でありながら、現在の實力でも神聖騎士団の師団長を務める事さえできるだろうとまで言われている。

彼女に関してなら、フウガも知っている——というか、学園はもちろん、王都でも彼女の名を知らぬ者など居はしないだろう。

シズネは訝し気な顔で首肯した。

「え、ええ。確かに在籍していますが……何故、それを？」

『なに、この少年の記憶を少しだけ探ったのだ』

「何してんの、お前！？」

『怒るな。ちょっとだけだ。それでだな』

びしりとフウガの鼻先を指差すと、最高に嬉々としてオロチは、それを言い切った。

『学園史上最低の落ちこぼれ言われている少年——スサノ・フウガ。お前がガチンコでそのツクヨミ・ウズメと戦い、勝利する事。それ

が、この呪いを解く条件だ。どうだ、面白いだろう!」

フウガは口の端を盛大に引きつらせる。

「……おい、それは本気で言ってるのか?」

『私は悪戯に関しては、常に本気だ』

「で……」

『で?』

「出来るかあああああああああああああああ!!!」

今日、三度目になる絶叫を、フウガは学園長室に響き渡らせた。

一章 オロチの呪いは○転換!？ その二(後書き)

お読み頂きありがとうございました。

一章 オロチの呪いは○転換!? その三

「はああああああああ………」

見ている方が気が滅入ってしまいそうな、重く長い溜息を洩らしながら、フウガはとぼとぼと廊下を歩いていった。

『どうした、少年。元気がないぞ。若い者がそんな事ではいかんな』
フウガの様子とは対照的な明るいオロチの声は、直接、頭に響いてきた。

〈妖術〉を用いた念話である。

文句を言われるので、どうやらフウガの身体を使うのは控える気になったらしい。

正直、そんな気配り程度では何の慰めにもなりはしなかったが。

「……とりあえずお前は、それが誰のせいかを考えてろ!」

怒鳴って、一転、また嘆息する。

オロチは、呪いの結果が出るまでの最大で三ヶ月間、フウガの身体の中に居座る気らしかった。下手に追い払えば、五十年前の二の舞になるかもしれないという事で、大人しく受け入れるしかなかったのだ。

不満は溢れるほどあったが、どうしようもない。

(本当に、何でこんな事に……)

フウガは、先ほどまでの学園長室でのやり取りを思い返した。

「学園長! 教官! 本当に、この呪いは解けないんですか!？」

「それは………」

「さすがにオロチの呪いだからね………」

フウガの訴えに対して、二人は苦渋の表情を浮かべる。

「俺がツクヨミ先輩に勝ってって、そんなの絶対に無理に決まってる

じゃないですか!」

学園に在籍する候補生は、全て規定の階位で実力分けされる。

まずS、A、B、C、D、E、Fの七段階、さらに一つの階位の中で、参、弐、壹の三段階に分けられ、これは数字が大きいほど実力が上になる。

そして、話に出たツクヨミ・ウズメはS参——王国内に三校ある学園全ての中で、最強に位置していた。

そもそも学園規定の階位はAまでしかなく、Sという階位そのものが、彼女のために用意されたものなのである。この事実からしても、ツクヨミ・ウズメの常軌を逸した実力が察せられるというものだった。

『ファイトだ、少年。私を楽しませるために!』

「やかましいっ! おめーは必ず殴る! あらゆる手段を用いて殴り倒してやるからなっ!」

またもや人の口を使って喋る呪いを掛けた張本人に、フウガは怒りを沸騰させる。

「お、落ち着いて、スサノ君」

なんとかフウガを落ち着かせようと、ソウゴが両手を前に出しなから言った。

「とりあえず呪いといっても命に関わるものじゃないんだから……」

「命には関わらなくても、今後の人生に関わるでしょーが!」

「いや、まあ、確かにそうなんだけど……」

そう言われると、返す言葉もないのかソウゴは口ごもる。

そして、助けを求めるようにシズネへと視線を移した。

当の彼女は眉根を寄せて俯き、深く考え込んでいた。しかし、しばらくすると何か意を決した様子で、顔を上げる。

「スサノ君」

「……え? は、はい?」

学園長としての威厳を感じさせる凜とした声音に、フウガも思わず我に返る。

「その呪いは、オロチの言う通り、我々には解く事は不可能でしょう。何より、ここでオロチに逆えば、また五十年前の地獄の再現になってしまうかもしれません。――ならば取れる手段は一つしかない」

「そ、それは一体？」

シズネは小さく頷き、言った。

「頑張るんです」

「……………は？」

間の抜けた顔で、フウガは、ぽかんと口を開ける。

シズネは両の拳でガッツポーズをして見せた。

「頑張って強くなって、ツクヨミさんに勝ちましょう！」

「あの……それって要するにお手上げ宣言という奴では？ 遠まわしに俺にオロチを〈妖界〉に帰すための犠牲になれと言ってるんじゃない……」

「大丈夫！ 勝てば良いんですよ！ 私達も全面的にバックアップします！ 本来なら学園が特定の候補生に肩入れするのはご法度ですが、今回のような事態ならば許されるでしょう！ だから、頑張るって！」

「否定してくださいよっ！ 本気ですか!？」

「え、えーと……だ、大丈夫。君なら出来るよ！ スサノ君！」

これ幸いとソウゴもシズネの提案に乗っかる。

「……シンラン教官、励ますんなら、俺の目を見て言ってください」
「イヤイヤ、僕は君を信じているよ」

「だったら、なんで棒読みで、しかも目が同情と哀れみを浮かべてるんですかああっ！」

「はいはい！ スサノ君、そこまで」

シズネは手を叩いて言い争いを遮る。

そして、これ以上の反論を許さないと言わんばかりの笑顔にっこりと浮かべた。

「この話は、もう終わりです。スサノ君は、今日はもう授業に出な

くていいわ。これからの三ヶ月間のために、ゆっくりと寮で休んで、明日から頑張りましょう！ 打倒ツクヨミさんに向けて！」

「え、えええ！？ ちよっと待って……！」
そうして。

フウガは学園長室からあつという間に追い立てられてしまったのだった。

＊ ＊ ＊

「……………」

思い出したら、余計に憂鬱な気分になった。
理不尽にも程があるというものである。

だが、あの二人にも、本当にどうしようもないのだという事は、フウガも良く理解していた。だからこそ、あれ以上、責める事も出来なかった。

なにせ、掛けたオロチ自身にだって解けない呪いなのだ。このヤマトのどこを探そうとも、これを解ける人間など、まず存在しないに違いない。

「ああ、くそっ！」

フウガは、思わず悪態を吐く。

だいたい、オロチが解放された原因は……！

「ちよっと、そのの！」

と、暗い思考に囚われていた所を、前方から鋭い声が掛かる。

フウガが俯けていた顔を上げると、見知らぬ二人の少女が居た。

一人は、気の強さを表すようなつり目で、蜜色の長い髪を後ろでポニーテールにしている。なぜか仁王立ちで、こちらを威嚇するように睨んでいた。

もう一人は、栗色の髪をおさげにし、大きな眼鏡をかけている。如何にも真面目で気が弱そうな印象を覚えた。実際、彼女は、つり眼の少女の斜め後ろに、どこか怯えた様子で立っている。

正反対な性格を感じさせるこの二人の少女に共通しているのは、白に山吹色のラインの入った学園の制服を身につけている事だ。さらに腕には、フウガと同じ三年生である証の黄の腕章がある。

どうやら同学年の女子騎士候補生らしい。

ただ二人の顔は、フウガの記憶の中のクラスメイト達の誰のものとも一致しない。

つまりは別クラスという事だ。

つり目の少女が、びしりと指を差してくる。

「あんた……〈三の風〉クラスのスサノ・フウガね！」

「あ、ああ、そうだけど……」

フウガは困惑して、首を傾げた。

「俺になんか用か？　　というか知り合いだったっけ……？」

「どっかですれ違った事ぐらいはあるでしょうけど、ほぼ初対面よ！」

つり目の少女の方が、語気も強く答える。

同じ学園の騎士候補生で、しかも同学年ならば、確かにこれまですれ違った事ぐらいはあるだろう。実際、フウガも彼女達の顔は、どこことなく見覚えがあるような気がする。

だが、こうやって会話を交わすのが、初めてであるのも間違いないようで、いきなりこんな喧嘩腰の剣幕で声を掛けられる理由があるとは、やはり思えない。

「レ、レナちゃん、スサノ君、困ってるよ。もうちょっと他に言い様が……」

眼鏡の少女が、弱々しく諫める。

「黙ってて、ミヨ。……いい？　あんたに一言だけ言わせてもらおうわ、スサノ・フウガ！」

しかし、レナと呼ばれたつり目の少女は聞く耳持たずに、挑戦的に言った。

「……よくわからんけど、言いたい事があるのなら、さっさと言うてくれ」

話を聞かない所には状況が掴めないと判断し、フウガは促す。

「良い度胸ね。だ、だったら言うわよ！」

レナは大きく息を吸い、

「わ、わ……わる、わ……」

不意にしどろもどろになって、意味不明な事を言い始める。

フウガは、わけがわからず顔をしかめた。

「？ 何だ？」

「だ、だから……！ わ！ わ！ わ！」

「わ……？」

「——わ、悪かったわ！」

最終的に彼女が叫んだのは、その一言だった。

だが、フウガは余計に困惑する。

なぜ、別クラスで、今になるまで会話も交わした事もないような

少女に、いきなり謝られるのか、全く理解できない。

「いや、悪かったって……何がなんだ？」

「に、鈍いわね！ すぐにわかりなさいよ！」

「レナちゃん、いくらなんでも、それは無茶だよ……」

これでは話がいつまで経っても進展しないと判断したのか、ミヨの方がおずおずと前に出てくる。

「えと……スサノ君、初めまして。私は〈三の水〉クラスのナスノ・ミヨです。で、こっちが同じクラスで友達のタマヨリ・レナ」

「……ああ、なるほど」

その自己紹介を聞いた時点で、フウガは事情を察した。

レナという少女の苗字——タマヨリ。

これは学園長と同じものだ。

要するに彼女は、学園長の実の孫であり、学園地下の〈極・重要宝物庫〉に入り込んで、〈八尺瓊勾玉〉を破壊した張本人なのだ。

たぶん、ミヨの方は、そのときに一緒に居たという友人なのだろう。フウガが一応、それをミヨに確認すると、彼女は正直に認め、心

から申し訳なさそうに頭を下げてきた。

「ご、ごめんなさい！ 学園長室での話は、扉の前でレナちゃんと盗み聞きしてました。その事もそうなんですけど、まさか何も関係ないスサノ君がオロチに取り憑かれて呪いを掛けられちゃうなんて……本当に！ 本当に！ ごめんなさい！」

ミヨは、必死に頭を下げる。

何度も、何度もだ。

その大きな瞳には、涙が溜まっているようにも見えた。

後ろに立つレナは、

「……そ、その、悪かったわよ！」

ぶっきらぼうに言って腕を組むと、そっぽを向く。

実際に〈八尺瓊勾玉〉を壊してしまったのは、彼女のはずなのだが、これでは、まるでミヨの方に落ち度があったかのようだった。

先ほどまでの言動からして、たぶんレナという少女は、素直に謝るのが苦手な性格なのだろう。ただ、口を引き結んで逸らした彼女の顔には、隠し切れない悔恨と苦渋が浮かんでいた。

「……………」

フウガは思う。

さっき考えていた、オロチ解放の直接の原因は彼女達である。だから本来、フウガが責めるべきは、この二人——そのはずだ。

だけど……

「ああ、うん……もういいって。気にしてないから」

フウガは、気づけばそう言っていた。

「え……？」

何度も頭を下げていたミヨが呆気に取られて、動きを止める。

「ちょ、ちょっと……どういふつもりよ？」

レナも背けていた顔を、慌てて向けてくる。

「どういふつもりも何も、気にしてないから、もう謝らなくてもいいって言ってる。そういう事だよ。……そんなじゃ俺は、学園長に今日はもう寮に帰っていいって言われてるから」

フウガはひらひらと手を振ると、二人の間を通って、さっさと階段へと向う。

なんとなく照れ臭い予感がして、一刻も早くこの場から離れたかったのだ。

「ま、待ちなさいよ!」

だけど、レナに呼び止められてしまい、フウガは仕方なく足を止めて振り向く。

「あんた、私達のせいでオロチに憑かれて、しかも、ツクヨミ先輩に勝てなきゃ、女になっちゃう呪いを掛けられたんでしょ! 私達を責めないの!？」

「……一瞬、そうしようとも思っただけだな」

フウガは頬を掻くと、苦笑する。

「二人して、本当に後悔してるのが見ててわかったからな。なんか責める気が失せたんだよ」

「……………」

「……………」

予想外の台詞だったのか、レナとミヨは言葉を失う。

「それに、俺が朝から屋上で授業をサボろうとしてなかったら、オロチに目を付けられて取り憑かれる事もなかっただろうしな。ある意味で、自業自得なわけだ。だから、必ずしもお前達だけが悪いわけじゃない」

そこまで言って、フウガはまた前を向いて歩き出す。

「それじゃあな」

振り返らず手だけ振って、フウガは角を曲がると、すぐに早足で階段を下りていく。

その間、二人の少女は、ただただ啞然と立ち尽くしていた。すると愉快そうなオロチの声が頭に響く。

『ぬははは。なかなか格好良いじゃないか、フウガ』

「うるさい。黙れ。気安く名前を呼ぶな」

本当に我ながら恥ずかしい事をしてしまったものだ。

だけど、おかげで覚悟も決まった気がする。

あの少女達にも言った通り、この状況に陥ったのには、自分自身にも少なからず責任がある。さらに今、誰かを責めた所で、この面倒な呪いは消えはしないだろう。

そして。

仕組まれたものであるのが甚だ不愉快ではあったが――希望は潰えたわけじゃない。

酷く絶望的で困難ではあるけれど、可能性は残されている。

――ツクヨミ・ウズメに勝つ。

だったら、結局は、

「――もうやるっきゃないんだよな」

その一言には、もはや自身の状況を嘆く響きは、何一つ含まれてはいなかった。

一章 オロチの呪いは○転換!？ その三(後書き)

お読み頂きありがとうございました。

二章 完全無欠の最強少女 その一

翌日。

〈三の風〉クラスの教室は、朝から騒がしかった。

フウガは、一日の始まりから、さっそく後悔の念に駆られる。

いつ以来だったか、久々に朝から教室に顔を出した途端、あつという間にクラスメイト達に取り囲まれたのである。

一体、どこから話が洩れたものか。

フウガがオロチに取り憑かれ、さらにはツクヨミ・ウズメに勝てなければ女になってしまうという呪いを掛けられた事実までもが、クラス中に知れ渡っていたのである。

この様子だと、すでに学園全体に広まっていると考えた方が良くかもしれない。

そして、クラスメイト達は、

「ねー、ねー、オロチって出せないの？ 見たい見たい！」

「女って、明日くらいにはなんのか？」

「ツクヨミ先輩相手じゃあ、もう女になるの決定だな——ご愁傷様」

「見た目は変わってないんだ。本当に憑かれてんの？」

「……強く生きろよ」

……と好き放題である。

仮にも大陸中の人間が憧れる神聖騎士の候補生達のものとは思えぬ姿だったが、もともと騎士としての心構えや規律などは、学園を卒業し、騎士見習いになる事が出来てから初めてみっちり叩き込まれるものなのだ。故に、あくまで今の彼らは神聖騎士の卵にしか過ぎず、こういうノリは世間の若者達とほとんど変わらない。

「おう、来たか。こっちや、こっちー！」

不意に、独特の訛りのある声が教室の奥から聞こえた。

フウガは、次々と飛んでくる質問やからからの言葉を適当にあしらうと、声のした方に歩いて行く。

窓際が一番後ろ。

そこは一年の頃からのフウガの指定席だ。

学年が上がリ、教室が変わっても、そこだけは常に一緒だった。席は基本、学年が上がった最初にくじ引きで決められ、一年間それが維持される。当然、三年間同じというのは、不正があるわけだが、この辺りは皆やっている事なので、特に責められる事もない。フウガの席の前と隣に、見知った顔の男子の騎士候補生が二人居た。

共に、フウガが学園に入ってから以来の友人だ。

隣の席に座る少年はミカヅチ・ライ。

少女と見間違ふ美少年で、銀色の髪に深い海色の瞳が、その美貌をさらに際立たせている。纏う空気也非常に落ち着きを感じさせ、彼の内面の成熟度を表していた。

前の席の少年は、フドウ・ゴウタ。

ライとは反対に軽薄な雰囲気を持つ、まさに三枚目といった容姿の持ち主だった。栗色の髪と瞳という平凡な色からしても、ぱっと見は完全にライの引き立て役である。

「今日の主役の登場やな。なんやめっちゃ注目されとるやんか」

「うっさい。俺が目立つの嫌いなわかってて言ってるんだろ」

へらへらと笑うゴウタを睨みつけながら、フウガは自分の席に腰を下ろす。

「皆が騒ぐのも無理はないと思うけどね。あの魔帝オロチに憑かれるなんて学園はもちろん、王国全体でも大事件だし」

机で頬杖をつきながら、ライは冷静に言った。

そして、女はもちろん、男さえも見惚れそうな笑顔をにっこりと浮かべる。

「でも、まあ、大丈夫。女になっても僕達はフウガの親友だから」「そやそや。何の心配もいらんで」

ゴウタも腕を組んでうんうんと何度も頷く。

フウガは、もともと悪い目付きを、さらに陰しくする。

「勝手に女になるのを決定事項にするんじゃない。まだ呪いを解く方法は残ってるんだからな」

「だけど、ツクヨミ先輩じゃあね」

「無理やな。あの人は、俺らとは住んでる世界の違う人やで」

「……否定できないのが無性にムカツクな」

頭をがしと搔いて、フウガは溜息を吐いた。

自身の状況に対しては昨日は開き直りに近い形で受け入れたばかりだが、やはり周囲に騒がれるのは楽しくはなかった。

そもそもが不必要に目立つのが好きな性格ではないのだ。

ゴウタが興味津々な視線を、こちらに向けてくる。

「それでオロチはお前の中に居るんやったよな？　おい、聞こえますか、オロチさーん」

「あ、こら……！」

『おうおう。呼んだかね、輝かしい未来に向けて邁進する、若き騎士候補生の少年達よ』

無駄に仰々しい言い方をして、オロチの念話が三人の頭の中だけに響く。

「うおお。本当に居たで！」

「これは、なかなか貴重な体験だね」

二人は驚きを隠さず、目をしばたかせる。

「……できるだけ出てくるなって昨日、釘を刺しただろうが」

『いやいや、挨拶をされたのに無視をしては失礼に当たるではないか。私には、そんな真似はできんよ。なにせジェントルメンだからな。ぬはは』

不愉快そうなフウガの文句を軽く流して、オロチは笑う。

フウガは口のへの字に曲げたが、それ以上は何も言わなかった。

オロチと言い争うのは不毛だという事は、昨日、思い知ったばかりである。

『ライにゴウタだったな。長ければ三ヶ月の付き合いになる。今後共、よろしく頼むぞ』

「おう、よろしゅうな」

「よろしく、オロチ」

二人は、いともあっさりとオロチを受け入れる。

そして、ゴウタが楽しそうに、不機嫌なフウガの肩をバンバンと叩いた。

「妖魔の割には、良い奴っぽいやないか。なあ、フウちゃん」

「あのな……俺は、こいつに呪いを掛けられたんだぞ？　良い奴なんて評価を死んでも下せるか」

「そこはやらかい思考で適当に流せばええやん」

「流せるわけあるかい！」

突っ込んだ後、フウガは呆れた顔で教室を見回す。

「……っというか、なんでお前ら、普通にオロチに馴染んでるんだよ。他の奴らも全然、怖がってないし」

ああ、それは……、とライが言った。

「悪戯好きを除けばオロチが無害って事、もう皆知ってるから。何より〈三の風〉クラスって妙に適応力が高い上に、良くも悪くも神経図太いのが揃ってるしね。一応、他のクラスでは、普通に怖がってるのも居るみたいだけど」

「ああ、そうやな。自分で言うのもあれやけど、このクラスって変やもん」

ゴウタも肯定して、笑う。

「——そういえばこういうクラスだったんだっけ……」

フウガは強張った顔で額を押さえると、その事をようやく思い出す。

あまり授業にも参加しないので、すっかり失念していた。

ゴウタの言う通り、なんとも変わったクラスである。だが、悪人面の上、学園史上最低の落ちこぼれと言われているフウガをまるで差別しない寛容さには、ある意味で助けられているのも彼はわかつ

ていた。

「とりあえず余計なトラブルに巻き込まれなかったら、無闇に校内をうろつかない方が良い思うよ。特に、この騒ぎが落ち着くまではね」

ライが少しだけ真剣さを含んだ口調で言う。

次いで、ゴウタが歯を見せて笑い、拳を掌に打ちつける。

「ま、もしものときは俺らがどうにかしたるけどな」

フウガはすまなそうに苦笑いを浮かべた。

「気持ちはあるがたいけど――三ヶ月しかないんだ。そうもいかないだろ」

己の力のみでツクヨミ・ウズメに勝たねばならない以上、この三ヶ月で少しでも力をつける必要がある。面倒事は確かにごめんだが、寮に引っ込んでいるわけにもいかない。

ゴウタが首を傾げる。

「ってゆー事は、やっぱ特訓か？」

「気は進まないけど、少しでも勝ち目を上げるためにはするしかないだろ。何もしないで勝てる相手じゃ絶対ないからな」

と、そのとき。

少々乱暴に教室の扉が開けられる。

騒がしかった教室が静まり返り、異変に気づいた候補生達の視線がそちらに集中した。

立っているのは、三人の少女。

腕には一様に赤の腕章が見える。どうやら四年生らしかった。

彼女達は、集まる視線も意に介さず、ずかずかと教室内へと踏み込んでくる。

その向かう先は――

「ありやりや……完璧に俺らを睨んどるよな」

「正確には、フウガだけどね」

ゴウタとライとの呑気な台詞に、フウガは口を引きつらせる。

どうやら面倒事は向こうから勝手にやって来てしまったらしい。

候補生達が気圧される様に道を空けていき、程なくして少女達がフウガ達の前に立つ。

三人揃って、どう見ても、こちらに好感は持っていないさそうだった。

向けられる視線は酷く冷ややかで、特に先頭に立つ長い金の巻き毛の少女は、間違いなくフウガ達を見下しているように思える。

最初に口を開いたのは、その巻き毛の少女だった。

「貴方がスサノ・フウガかしら？」

「……………」

思えば、昨日も似たような状況で同じ質問をされた気がする。

フウガはなんだか馬鹿馬鹿しい気分になって、咄嗟に答える気になれない。

「……貴方は自分の名前も理解できていないのですか？」

巻き毛の少女が、あからさまに苛立ちを見せた。

「あ、ああ……すいません。俺がスサノ・フウガです」

上級生なので、一応の敬語を使って、フウガは仕方なく答える。

巻き毛の少女は前髪をかき上げて、嘲笑に似た笑みを見せた。

「そうですか。では、私達わたくしが誰だかは当然わかつているのでしょうね？」

「いえ……？」

なんとも不可解な質問をするものだ。向こうが自分の顔も知らないのに、なぜこちらが彼女達の事を知っていなければならぬのだろう。

巻き毛の少女の笑みが、本物の嘲笑へと変わる。

「やはり下賤の者というのは無知のようね。私達の事を知らないなど……愚かにも程がありますわ」

隠そうともしない明確な侮辱に、フウガは怒り飛び越えて呆れてしまう。

オロチとは違った意味で、傲岸不遜な少女である。間違いなく無意識に敵を多く作ってしまう人種だろう。

「ナキ様の言う通りです」

不意に、背後で沈黙を守っていた残りの二人が見事に声を揃えて言う。

フウガは目を剥いた。

巻き毛の少女の方に気を取られていて気づいていなかったが――童顔な顔、低めの身長に細身の体つき、ショート黒髪と茶瞳、抑揚のない声など、二人は全てが感心するほどにそっくりだったのである。

つまりは双子だ。

もしもフウガが彼女達の名前を知っていたとしても、どちらがどちらなのか区別できる自信はなかった。

ナキと呼ばれた少女が誇るように、自身の胸に手を当てる。

「では、その中身のない軽い頭に、これから口にする名をしかと刻みなさい。私は王国屈指の名門、サワメ家の長女であり、ツクヨミ・ウズメ様親衛隊隊長を務めます――サワメ・ナキですわ。そして後ろの二人は副隊長の……」

「ハニヤ・スビコ」

「ハニヤ・スビメ」

ナキの台詞に合わせて、二人が計っていたかのように名乗った。

ふと、どっちが姉で、どっちが妹なんだろうか、という、どうでもいい疑問がフウガの脳裏を過ぎる。だが、どのみち本人達に聞いても教えてくれないだろう。答えの出ない疑問はさっさと忘れて置く事にして、フウガは肩を竦めた。

（しかし……親衛隊とは……）

ツクヨミ・ウズメの人望の高さは、フウガも良く知る所であるし、そんなものが存在しても確におかしくはないだろう。だが、この学園の本分を考えると、何か間違っている気がしなくもない。

不遜な態度を崩す事なく、ナキがさらに言う。

「貴方のような低俗な方と長々と話をするつもりは毛頭ございません。単刀直入に私達の用件だけを告げましょう」

「はあ……まあ、どうぞお好きなように」

相変わらず容赦のない言い様に、フウガは失笑すら浮かべながら、先を促す。

それが癪に障ったのか、ナキはぴくりと眉を動かしたものの――結局そのまま教室中に響くほど高らかに用件を告げた。

「スサノ・フウガー――大人しく女になりなさい。貴方のような格の低い人間がウズメ様に近づいては、気高く美しいあの方が穢れてしまいますわ。どのみちウズメ様に勝つなど、千回生まれ変わっても不可能なので、問題はないでしょう？」

「……は、はあ？」

フウガは目を丸くして、間拔けな声を洩らす。

いくらなんでもあんまりな要求に、すぐには意味が理解できなかったのだ。

「……キツツイわあ」

「目眩がするね」

こそこそと呟いたのはライとゴウタである。

二人は、すでに完全に他人事モードに入っていた。

これに狐に摘まれたようだったフウガは我に返る。そして、二人の親友を半ば睨むように一瞥した後、ナキ達に反論するため口を開こうとして――

「私達の要求は確かに伝えましたわ」

ナキに、あっさりと遮られた。

「良いですか？ これに従わない場合は、それ相応の覚悟が必要であると知りなさい。我々、親衛隊は甘くはありません」

「甘くはありません」

それが定番なのか、双子が続けて言う。

三人共、もはやフウガの答えなど聞く気もないらしい。

「では、ごきげんよう」

「「ごきげんよう」」

ナキは、口を半開きにして呆然と固まったフウガから目を逸らす

と、双子を伴って颯爽と教室から去って――

「あ……ふぎゃぶっ！」

――行く途中で盛大にずっこけた。

『……………え、えええええ？』

その場に居る全員が啞然となる。

緊張感に満ちていたはずの教室には、今やしらけた空気が漂っていた。

さっきまでの緊迫感とか、話の流れとか、傲岸不遜な先輩キャラのイメージとか……いろんなものが根こそぎ台無しにされた感じであつた。

なんかもう、誰にかはわからないけど、謝って欲しい。

「「だ、大丈夫ですか、ナキ様！」」

すぐさま双子に抱え起こされたナキは、鼻を押さえながら「むぐう……」とくぐもった声を洩らす。そして、突然に振り向いたかと思えば、きつと教室内の候補生達を睨みつけ、

「わ、忘れなさい！ 今、見た事は！」

と、言い残して、今度こそ足早に去って行った。

しかし、涙目な上、鼻血を垂らした情けない顔で言われても、いまいち迫力に欠けるといふものである。

見事なオチを残して三人の上級生が姿を消すと、先ほど以上に教室がざわめき出し、ゴウタが感嘆の混じった吐息を洩らした。

「あの人の事、噂には聞いてたんやけど、ほんま（いろんな意味で）凄い人やなあ。こっちの都合なんてお構いなしって感じやんか」

「だね。何より、あれだけ（天然で）プライドの高いサワメ先輩を心酔させる辺り、ツクヨミ先輩も恐ろしい人だ」

言って、ライの視線がゴウタから隣の少年へと流れる。

「で、フウガ」

「……なんだよ」

フウガは不満を前面に押し出した顔を向ける。

美貌の少年はそれに苦笑しながら、続けた。

「サワメ先輩達の要求を呑んで、大人しく女になってみる？」

「冗談」

ライの問いを、フウガは一笑に伏した。

「最後にはなんだか拍子抜けしたし——俺があんな脅しを怖がって、言う事を聞くとでも思ってるのか？」

ゴウタが悪戯っぽく笑い、

「ま、思わんなあ。フウちゃんも例に洩れず神経図太いやん。……あ、サワメ先輩の言葉を借りるなら、頭の中身もないんやっただけ？」

と、からかうように言った。

「誰がだよ。お前じゃあるまいし」

「そうそう。頭の中が空なんて人間は、ゴウタ以外に存在しないから」

「あっはっは！　そうやな！　頭の中身がないのは俺しか……って、それ、どういう意味！？」

しかし、逆に二人に苛められて、今にもゴウタは泣きそうな顔になる。

「だけど、相手がツクヨミ先輩となると、生半可な訓練した所で、三ヶ月で勝つのは不可能に近いでしょ。どうするつもりなの、フウガ？」

傍で膝を抱えていじけるゴウタを軽くスルーして、ライが訊いてくる。

フウガは表情を引き締め、頷いた。

「ああ、とりあえず、今すぐやるべき事は決めてあるよ」

「それは？」

「とりあえずツクヨミ先輩の強さが実際どれほどのものなのか——知らないじゃないだろうな」

相手の強さを正確に知る事は、目標を具体的にするという意味で

も決して無駄にはならないはずである。そして、そのためには直接それを肌で感じる必要があった。

つまり――

フウガの言わんとしている事を察して、立ち直ったゴウタが呻いた。

「おいおい、フウちゃん、まさか……」

フウガは、不敵な笑みを友に向ける。

そして。

珍しく朝から教室に顔を出した本当の理由を口にした。

「――さっそく今日、ツクヨミ先輩に手合わせを願うのさ」

二章 完全無欠の最強少女 その一（後書き）

お読み頂きありがとうございました。

二章 完全無欠の最強少女 その二

不必要と思えるほどの広大な敷地を持つ王立第一ヒノカワカミ学園の一角には、〈錬技場^{れんぎじょう}〉と呼ばれる施設がある。そこは授業での実技訓練や候補生達の自主訓練、また学園の催し物など、様々な用途で使われていた。

放課後になり、フウガ達は、その〈錬技場〉へと向かった。

「お、あれってシンラン教官やないか？」

〈錬技場〉が見えてきた所で、ゴウタが声を上げる。

フウガが目を凝らすと、確かにソウゴが何か難しい顔で〈錬技場〉の入り口の前に立っていた。

「シンラン教官！」

「……ああ、スサノ君。あと、ミカツチ君にフドウ君も」

フウガに呼ばれ、ソウゴが少し気まずそうに顔を上げた。

「……って、何でお前達が居るんだ？」

小走りに駆け寄ったフウガは、彼女達に気づいて目を丸くした。ソウゴの背に隠れるように、なぜかレナとミヨが居たのである。

「う、うるさいわね！」

いきなりレナは怒鳴り、

「あんな許され方しても納得がいかなかったのよ！ 悪い！？」

そう一方的に言って、そっぽを向いた。

「いや、いきなり逆ギレされてもな……」

相変わらず対処に困る反応に、フウガは曖昧に笑うしかない。

「ご、ごめんなさい、スサノ君！」

ミヨがわたわたと慌てて、口を開いた。

「えっと、レナちゃんは、『もう気にしてないって言われても、それじゃやっぱり自分が納得できないから、スサノ君がツクヨミ先輩に勝てるように、自分達も出来る限りの手伝いをする』って言うんです」

「……一体、どこをどう訳したら、そういう意味になるんや？」

ゴウタは呆れた顔で呟く。

隣でライが肩を竦めた。

「素直じゃないんでしょ、要するにさ」

ちなみに二人は、レナとミヨの事は、すでにフウガより聞いている。なので、フウガとのやり取りから、彼女達が話に聞いた、この件の発端となった二人だと察したようだった。

「とりあえず、フウちゃんを手伝うんなら、俺らとも協力関係って事やろ？ 俺は〈三の風〉クラスのフドウ・ゴウタや。よろしゅう」

「僕は、ミカヅチ・ライだよ。同じく〈三の風〉クラス」

「あ、〈三の水〉のナスノ・ミヨです。よろしくお願いします」

「……タマヨリ・レナ。よろしく」

ミヨがぺこぺこ頭を下げ、レナは、どうも気まずいのか、未だに顔を逸らしたままだった。

「……やれやれ、だな」

フウガは、思わず苦笑していた。

藁にもすがりたいフウガにとっては、協力者が増えるのは助かったが、なんとも先が思いやられそうなメンバーではあった。なにせ、それぞれがそれぞれ個性に溢れ過ぎなくらいに溢れているのだ。

「まあ、俺も改めてよろしくな。それと——ありがとう」

責任を感じてのものとはいえ、手伝いたいと言ってくれたレナとミヨの気持ちは、純粹に嬉しかった。

ミヨがぶんぶんと手を振る。

「い、いえ、もとはと言えば、私達のせいですから……！」

「そ、そうよ。礼なんかいらないわ」

「レ、レナちゃん！ ……もう！」

頬を紅潮させて無愛想な態度を取るレナを、ミヨが叱る。

フウガは、彼女達に気づかれないように小さく笑った。

相反する性格の二人だが、だからこそ良いコンビになっているらしい。

そして、改めてソウゴの方に向き直る。

「それで、シンラン教官。ツクヨミ先輩は呼んでももらえましたか？」
ウズメとの手合わせを決意したフウガは、彼女にその旨を伝える役をソウゴに頼んだのだ。

なにせ今のフウガは、オロチの一件が広まり、現在、学園でやたらと目立つ存在と化してしまっている。そんな状態で堂々とウズメに手合わせを願に行けば、間違いなくいらぬ面倒を起こすだろう。朝のナキとのやり取りを考えれば、その事は想像に難くない。

故に、フウガは出来る限り穏便に事を済ませるために、教官の中でも気心の知れたソウゴに伝言役を頼んだのである。

もちろん、それでも少なからず騒ぎにはなるだろうが、フウガが直接、出張るよりはマシのはずだった。

「……ああ、うん。ツクヨミ君は問題なく来てくれたよ。今、〈錬技場〉の中で待ってる」

ソウゴはどこか歯切れも悪く、答えた。

「そうですか。助かります」

それにフウガは安堵して、息を吐く。

彼女も噂でフウガの事情は聞き知ってはいるだろうが、あまりにいきなりな頼みだ。

内心、断られるのでは少し不安だったのである。

「――一応、確認しますけど、出来るだけ目立たないようにしてくれましたよね？」

「も、もちろんしたよ！ で、出来るだけね……」

「……………」

先ほどから明らかにおかしいソウゴの様子に、フウガ達は顔を見合わせる。

「なんだか気にはなるけど……ともかく中に入ろうか」

ライに促され、フウガは頷いた。

「そうだな。よし、行くか」

覚悟を決め、フウガ達は〈錬技場〉へと足を踏み入れ――

目の前に広がった光景に、呆然と立ち尽くした。

〈鍊技場〉は、広い空間に白い枠線で区切られた舞台が整然と並んでいる。さらに、それらを囲み、見下ろす形で千人分を越える観客席が設置されていた。

どちらかと言えば、見た目は闘技場のような趣である。

そして、今、その観客席は――満員になっていた。

ほぼ全てが学園の候補生達である。

学年、性別問わず、席という席を埋め尽くし、今や〈鍊技場〉内は、人の熱気とざわめきで包まれていた。

「な、なんだ、これは……」

フウガは呻くように洩らすと、ぎぎぎと油の切れたからくり人形のようにソウゴへと振り返る。

「……ごめん、スサノ君。僕も頑張って目立たないようにツクヨミ君と話したんだけど、彼女って普段から注目されてるだろう？ 何人かに気づかれたら、あつという間に話が広がって行って、気づけばこんな状況に……」

平身低頭に、ソウゴが謝罪する。

「やはり恐るべしだね、ツクヨミ先輩」

ライの冷静な言葉を、フウガは引きつった顔で聞いていた。

今の自分を取り巻く状況とツクヨミ・ウズメの存在感を考えれば、全く目立たずに行動するのが不可能に近い事は、フウガも理解している。

だが、それにしたって、まさか〈鍊技場〉を埋め尽くすだけの候補生が、この短時間で集まってしまうのは予想外だった。

『ぬはははは！ たいした舞台ではないか。さあ、胸を張って舞台上上がるがいい、フウガよ』

「……本当にその舌を引っこ抜いてやりたい」

大笑するオロチに、フウガは不気味な笑顔で言った。

だが、今更、やっぱり今日はやめます、とは言えないだろう。

そんな事をすれば、それこそ暴動の一つや二つ起きてしまいそう

である。

「フウちゃん、残念ながらこのまま始めるしかないようやで」
さすがに同情した様子で、ゴウタが肩を叩いた。

フウガは小さく嘆息し、

「……そうだな。まあ、やるって決めたのは、俺だしな」
半ば諦めるように覚悟を決める。

「が、頑張ってください！」

「……せいぜい死なないようにね」

ミヨとレナの声援を背にフウガは独り、〈錬技場〉の中央に設置された舞台の一つに歩を進めていった。

途端に〈錬技場〉内を静寂が支配した。

溢れんばかりの候補生達の視線が、フウガに集中する。

わかりきっていた事だが、好意的な視線は、ほとんどない。

おそらくこの場に居るのは、野次馬的な気持ちで来た者を除けば、ツクヨミ・ウズメに心酔している候補生達がほとんどだ。どんな事情であれ、彼女に個人的に手合わせを願ひ、しかも、それを快諾されるなど、妬みの対象以外の何者でもないのだろう。それでも同情めいた表情の候補生が何人か見えたのは、フウガにとっては救いだっただ。

そんな中、ふと、今日の朝に会ったばかりのナキとその取り巻きの双子が、只事ではない怒りのオーラを発している姿が視界の端に入る。

（……まあ、そうだろうなあ）

とりあえず全力で気づかない振りをして、フウガは中央の舞台上へと上がった。

そして、そこに――

彼女は立っていた。

床にまで届かんばかりの長い髪。

波紋一つ立たぬ湖面を思わせる静けさと、烈火の如き猛々しき意思を同居、内在させる瞳。

そのどちらもが夜闇を塗り固めたかのような漆黑だ。

男女問わず見惚れ、羨望する美貌の面は、鋭き刃のような凛々しさで。

鍛え上げられた肉体は理想的な線を持ち、無駄な肉など一切存在しない。

その細く美しい指には、少女の美しさを際立たせるためだけにあつらえたかの様な、漆黑の鞘に収まった長い刀が握られていた。

そう。

彼女こそが——ツクヨミ・ウズメ。

最高階位であるS参に認定され、紛れもなく学園最強を誇る美しき少女。

『——ほう、この娘が』

「……………！」

オロチは感心した様に呟き、フウガは思わず息を止める。

もちろん、その姿を見たのは初めてではない。

以前に、その戦いぶりを目にした事だってある。

だが、それでもなお。

彼女を前にした瞬間、フウガは圧倒的な存在感に戦慄し、身を竦ませた。

……今日の朝。

ツクヨミ・ウズメは住む世界が違うと言っていたのは、ゴウタだったろうか。

確かに、それは的を射ていると思った。

彼女と自分では、間違いなく住む世界が違うのだ。

間近で見て、その事を思い知る。

しかし、——“今は”だ。

呪いを解くには、自分はツクヨミ・ウズメに勝たないといけない。そして、そのためには、彼女と同じ場所にまで這い上がらねばなら

ないのだ。

いや、這い上がってみせる——！

決意と共に、真っ直ぐとウズメを見つめた。

彼女は、意外にも、こちらに向けて穏やかに微笑んだ。

「君がスサノ・フウガか」

その声すらも、彼女は美しい。

「——はい」

一瞬見惚れそうになる自分を諫めながら、フウガは、はっきりと返事をする。

「そうか……なるほど」

意味ありげにこちらを観察するウズメに、フウガを頭を下げた。

「ツクヨミ先輩、急な手合わせを受けて下さって、ありがとうございます」

ウズメは苦笑し、小さく頭を振る。

「そんなに畏まらないでくれ。私は上級生とはいえ、まだ、ただの騎士候補生だ。それに多くの者と刃を交える事は、騎士になる上の大きな糧になる。互いにな」

その後、彼女は顎に手を当て、何か考え込むように少し沈黙する。

「何か……？」

フウガが訝しがっていると、不意に彼女は夜色の双眸に疑念の光を宿した。

「気に障ったら謝るが……君は学園史上最低の落ちこぼれと皆に言われているそうだな。階位もF参と通常の候補生なら有り得ないほどに低い。そんな君が呪いの事があるとはいえ、どうして私に挑もうと思った？ 普通に考えれば、誰だって勝ち目はないと諦めるだろうに」

「ツクヨミ先輩。理由は言えませんが……俺は絶対に女になるわけにはいかないんです。そこだけは何があっても曲げられない。それに——」

「それに？」

興味深げに、ウズメが問い返す。

それに対するフウガの答えには、何の淀みはなかった。

「己を信じ、そして行動しなければ、決して叶う事はないんですよ。

——どんな望みだってね」

「……………」

ウズメは目を見開いて言葉を失う。

その後、くすりと笑った。

「……君は面白い男だな。やはり、この手合わせ受けたのは正解だったようだ」

「どうでしょうね？ いざ戦ってみたら落胆するかもしれませんよ」

「君は私にそうさせるつもりなのか？」

「さすがに今日、自分が先輩に勝てる可能性は皆無に近いと思っ
ます。でも、それなりに面白くするつもりではありますよ」

フウガは不敵に笑った。

——なぜだろうか。

不思議とフウガは心は高揚していた。

こんな気持ち、随分と前に忘れてしまっていたはずなのに。

その美しさ以上に、圧倒的な実力を感じさせるウズメを前にして、
フウガは内心の興奮を誤魔化せなかったのだ。

「そうか。では、君の戦いぶりに期待する事にしようか」

ウズメが微笑を残して踵を返し、フウガより離れる。

フウガも彼女から一定の距離を空けて立った。

二人が所定の位置に移動したのを確認して、後から上がってきて
いたソウゴが膝を突き、複雑かつ奇妙な形をした文字の描かれた舞
台の床に自身の掌を当てる。

「——その身、その技、鍛え磨かんとする者達を守護せよ！ 疾く
為せ！」

ソウゴが唱えた瞬間、描かれた文字が発光し、限りなく透明な壁
がフウガ達のいる舞台を四角く包んでいった。

げんりき
れんしゅけっかい
〈言力〉で張られた〈錬守結界〉だ。

——このヤマトという名の世界には、〈言力師^{げんりきし}〉と呼ばれる者達が存在している。

彼らは、地中深くに存在する〈龍脈〉を流れる世界^{プラナ}の息吹を、己の身へと汲み上げる能力を持っており、それを力^{ちから}在る言葉——〈具^ぐ言^{げん}〉を口にする事で、自身が操るのに最も適した形に改変する事が出来た。

改変されたプラナは〈言力〉と呼ばれ、それを意のままに操る者が〈言力師〉なのである。

〈言力〉は、戦いに用いれば絶大な威力を発揮するため、いつしか神聖騎士になる者は、例外なく〈言力師〉である事を求められるようになっていった。故に、現在、ヒノカワカミ学園に通う全ての騎士候補生達もまた、〈言力師〉の才の持ち主である事を認められた者達である。

「……結果は、無事に展開出来たようだね」
立ち上がったソウゴが、頷いた。

彼が舞台に張った〈鍊守結界〉は、候補生が安全かつ、限りなく実戦に近い訓練をするために開発されたものだ。結界内に居る者達は、いかなる攻撃を受けても、結界がその威力を緩和してくれ、故に滅多な事がない限り、結界内で戦った者が死に至る事はない。

そして、この結果は、〈鍊技場〉の舞台に描かれた〈言紋^{げんもん}〉という特殊な文字を用いて、張られていた。この〈言紋〉は、特定の物や生物に刻んだり、描いたりする事で、通常は短時間しか保てない〈言力〉の力の長時間持続と付与を可能にするものだ。

フウガは、結果が展開されると同時に、腰の後ろに両手を伸ばした。

そこには〈鍊技場〉に来る前に、用意してきた物があつた。

二つの鞘にそれぞれ収まった二本の小剣。

それらをフウガは抜き放つ。

磨き抜かれた二対の銀色の刃が、窓から差し込む陽光を反射して、煌いた。

右手の青色の柄を持つ剣が、イザナギ。

左手の赤色の柄を持つ剣が、イザナミ。

この二振りが、フウガの〈真名武具〉だった。

〈真名武具〉とは、〈言力師〉専用の武器の名であり、〈言紋〉に記された持ち主の名を刻んだ物をそう呼ぶ。そして、この場合の〈言紋〉は、〈言力〉を持続させたり、付与するためのものではない。

名を刻む事で、汲み上げたプラナを武器に馴染みやすくすると同時に、〈言力〉を増幅させるのである。この効果は刻まれた名の術者だけに有効なものだ。

つまりイザナギとイザナミは、まさにフウガがだけが真に扱える、彼のためだけに造られた武器といえた。

次いで。

ウズメもまた抜刀し、鞘を舞台の外に投げ捨てた。

通常のものより、二倍以上に長い刃を持つあの刀の名は、カグツチ。

当然、彼女の〈真名武具〉である。

緋色の刀身には、波打つ炎のような紋様が刻まれ、持ち主と共に引き込まれるような美しさを持ち合わせていた。

ソウゴが、フウガとウズメの間に立つと、教官としての声を張った。

「規定は、通常の実戦訓練用のものに則り、相手に負けを認めさせるか、戦闘不能にした者を勝者とする。――スサノ、ツクヨミ。戦う理由がどんなものであれ、両者共、アマテラス神聖騎士候補生の名に恥じぬ戦いをしなさい」

二人は、それぞれ同意して頷いた。

「では……」

ソウゴが一步だけ後方に下がると、ゆっくりと頭の上に腕を掲げ

る。

〈錬技場〉の空気が一瞬にして張り詰めていく。

(……………)

静かに身構えたフウガは、戦いを目前にしながら、過去に想いを馳せた。

それは、もうこの世には居ない大切な人との思い出――

――ねえねえ、フウガは、私の夢を知ってるっけ？

――夢？ そんなのあったんだ。

――ま！ 失礼な！ 私だってそれぐらいあるわよ！

――……はいはい。じゃあ、言ってみてよ。

――えへへ、それはね。私が二人の子供を生んで、一人目は男の子で、二人目は女の子なの。それで、強く格好良く成長した男の子は、あの人のような立派な神聖騎士になって、綺麗に優しく成長した女の子は、私に花嫁姿を見せくれるのよ。それが私の野望なの！

――や、野望……。もう夢じゃなくなってるし。……でも、まだ僕しか居ないよね？ 確かに男ではあるけどさ。

――むむう、そうなのよね。お腹の二人目が女の子であれば良いんだけど……。あ、もちろんフウガは、ちゃんと強く格好良く成長して、立派な神聖騎士になってね！ 約束しなさい！

――また勝手な事を言ってるよ、この人は……。

――文句を言わな――い！ はい、返事は！

——…もう、わかったよ。まったく。

だけど。

二人目が生まれる事はなかった。

そして、きっと…自分も神聖騎士になる事はないだろう。でも、だからこそ、せめて。

彼女の望んだ、自分が男であるという事実だけは渡せない。相手が誰であろうと。

例え、魔帝オロチであろうと。絶対に。

そのために一時だけ——幼い頃にした己の決意を覆そう。だけど、それは呪いを解くまでだけだ。

それが終われば、自分はまた戻るだろう。

決して神聖騎士になる事など望めぬ、落ちこぼれの男へと——。ソウゴの腕が振り下ろされる。

「——始め！」

その号令を合図に、フウガは二振りの小剣を手に最強の少女へと挑む。

決して譲れぬものを護るために。

二章 完全無欠の最強少女 その二（後書き）

お読み頂きありがとうございました。

二章 完全無欠の最強少女 その三

「……しかし、いくらなんでも無茶じゃないの？」

ソウゴによって、舞台に〈錬守結界〉が張られる中、外で見守るレナが呟いた。

「何が？」

ライが訊くと、レナは呆れた視線をこちらに送った。

「何って……言っちゃ悪いけど、スサノって学園史上最低の落ちこぼれて言われてるのよ？ しかも、階位はF参。最強S参のツクヨミ先輩相手じゃ、強さを直に感じてみるとか以前に、戦いにすらならないでしょ、普通に考えて」

「レナちゃん！ もうちょつと言い方が……！」

ミヨが慌てて叱るものの、彼女もレナの言った内容自体は否定はしなかった。

おそらく内心は、レナとさして変わらないのだろう。

ただフウガの候補生間での評価を考えれば、無理のない事ではあった。

しかし。

ライやゴウタ、さらに学園長を含む幾人かの教官内でのフウガへの評価は、それとは大きく異なっている。

「ま、言いたい事はわからんでもないで」

ゴウタが意味ありげな笑みを見せて、肯定した。

ライもまた頷く。

「そうだね。確かに、今の時点じゃフウガがツクヨミ先輩に勝つのは、まず無理だろう。そこは認めるけれど……」

「けれど——何よ？」

含みを持たせた二人の言い方に苛立った様子で、レナが問う。
表面的な性格通り、遠回しなのは嫌いらしい。

「タマヨリが言ったような戦いにすらならないって事は、たぶんな

いよ。そこそこは善戦するんじゃないかな」

「はあ……？」

何を言うんだ、と言わんばかりにレナが顔をしかめる。

予想通りの反応にライは微笑を浮かべた。

「まあ、答えはすぐに出るさ。とりあえず見守ろうよ。フウガとツクヨミ先輩の戦いをね」

そう言って、視線を舞台へと向ける。

レナも不満気な顔をしつつも、それに従った。

「……いいかげん、ほんまの自分を出すんやろな、フウちゃん」
ふと隣でゴウタが呟いた。

独り言な上、囁くような小さな声だったので、ライ以外は聞き取れていないようだった。

（そう……それを出さなきゃ、ツクヨミ先輩とはまともに戦えないよ、フウガ）

ライもまた胸中で呟き、期待に満ちた眼差しを舞台に注ぐ。
それとほぼ同時。

「――始め！」

ソウゴの号令が〈錬技場〉に響いた。
こうして。

スサノ・フウガの人生にとって、一つの転機となる戦いが始まった。



フウガは、対峙する美しき少女を見据え、一直線に駆けた。

今回の手合わせの目的は勝つ事ではない。

ウズメの実力を直に感じる事だ。

だから、ひたすら真っ直ぐにぶつけるつもりだった。

今、己の持つ力の全てを、ウズメという少女へと。

フウガは静かに感じる。

舞台の床を越え、地を越え、さらにその下深くに存在する〈龍脈〉を。

そこを流れる世界^{プラナ}の息吹を。

〈言力師〉とは、プラナを知覚する事の出来る者だ。

感じ取ったそれを、己が身に汲み上げ、自身のものにする事が出来る者だ。

つまり、それは。

世界と一体となるという事に他ならない。

そして、一時だけ世界そのものとなった〈言力師〉は、紡いだ願いを現実へと変える。

「旋風——我が身を抱け！」

フウガは、世界への願いを——〈具言〉を紡ぐ。

果たして、プラナを犠牲にし、願いは叶えられる。

生まれた〈言力〉の風は、地を蹴る少年の身体を抱き、結界の天井すれすれまで舞い上げていく。

落下地点には、ウズメが居た。

彼女は動かない。

刀を構える事もせず、泰然とフウガを待ち受ける。

二人が激突すると思われた寸前。

フウガは、さらなる願いを世界に乞う。

「我、落葉が如し——」

「！」

まさにそれは、落葉だった。

ただ重力に従い落ちていたはずのフウガの身体は、目で追う事すら難しい不規則な挙動をしたかと思えば、一瞬にしてウズメの背後に居た。

自身の周囲の風を複雑精緻に操る事で可能になる、常識を捻じ曲げた体捌き。

この瞬間、〈錬技場〉内に大きなどよめきが起こる。

フウガは学園史上最低の落ちこぼれ——候補生内での評価はそう

なっている。だから、皆、この戦いはウズメが圧倒的な力の差を見せつけ、一瞬で勝利を決めると思っていたはずだ。

しかし。

今、フウガの見せた動きは、落ちこぼれのF参には決して不可能なものだったのである。

「烈風、研ぎ澄ませ！」

三度紡いだ〈具言〉により、両手の小剣二刀に鋭き風が宿る。

〈鍊守結界〉内では、如何なる攻撃も命を奪うほどの威力は発揮できない。

ならば、相手の身を案じて、躊躇う必要もない。

全力を込めて、二筋の斬撃を放った。

だが、しかし。

二本の刃は、別の一本の刃に阻まれた。

炎そのものかと思間違う模様を纏いし、長き刃だ。

最初の体勢を変えぬまま、背後に刀だけ持っていて、ウズメはフウガの攻撃を防いだのだ。

目で見える事すらしていない。

風の流れだけでフウガの動きを読み切り、防御に動いたのか。

「良い動きだ。やはり君がF参というのは、大きな誤りのようだな」
顔だけ振り向き、ウズメが言った。

なぜか、とても楽しそうに。

そして、刀を持った方のウズメの手首が捻られた。

刹那。

「なっ——!？」

唐突な浮遊感がフウガを襲い、気づけば舞台が遥か下にあった。
〈言力〉を発動してもいないのに、再び結界の天井すれすれを舞っていたのだ。

その高さは、地上より、およそ十数メートル程。

信じられない事に、ウズメは手首の捻りだけで、フウガをそこま
で飛ばしたのだ。

「……んな、滅茶苦茶な……！」

驚嘆しているのは、フウガだけではない。

ライ、ゴウタ、レナ、ミヨ、審判として結界内に留まるソウゴ、さらに観客席の候補生達——この戦いを見守る全員の度肝を抜く所業だった。

〈言力師〉は戦闘の際、ほぼ必ず〈龍身^{りゅうしん}〉という〈言力〉を用いる。これは汲み上げたプラナを自身の血液内で循環させ、身体能力を大きく向上させる術だ。

つまり、肉体を世界に、全身を巡る血管、ないしはそこを流れる血液を〈龍脈〉に喩えるのである。故に通常、戦闘中の〈言力師〉は臂力からして、常人とは大きく差があった。

だが、そうだとしても。

手首の捻りだけで、人一人を飛ばしてしまうというのは、あまりにとんでもない。

(……これが学園最強ツクヨミ・ウズメ、か)

笑みすらこぼれてしまう。

基本の〈龍身〉でさえも、この錬度。

わかっていた事だが、やはり彼女は普通の人間とは一線を画す存在なのだ。

これで騎士候補生であるという事自体が反則に近い。

だが、今更、それを思い知ったからといって、臆する気もなかった。

フウガは空中で身を捻って着地すると、再度、攻撃に移ろうとして――

少女の美貌を眼前に見た。

「――！！」

着地の瞬間を狙って、間合いを詰めてきたのだ。

すかさず少女の刀が疾る。

凄まじい臂力のこもった横薙ぎの一撃を、フウガは咄嗟に二本の小剣を交差させて受け止めた。

支えきれない――！

「ぐっ！」

踏ん張る事は諦め、横っ飛びして威力を受け流した。

だが、長い黒髪を外套の如く翻しながら、ウズメはさらに容赦なく斬り込んでくる。

一撃一撃が重い上、あれほど長い刃を持つ刀でありながら、斬り返しが恐ろしく速い。

武器の間合いの差もあって、フウガは反撃の隙をまるで見出せず、完全に防戦一方に追い込まれる。

そして、その光景を見て、レナとミヨは驚愕の表情を浮かべていた。

ウズメの強さはもちろん、彼女に必死に喰らいつくフウガの姿を目にした事が何よりの理由だった。

「な、何よ、あいつ……防御に手一杯とはいえ、まともにツクヨミ先輩と斬り合ってるじゃない……」

「す、凄……」

二人の驚きをよそに、ゴウタは平然と腕を組むと眉根を寄せる。

「だけど、ヤバイな。あのまんまじゃ、ほんまに何も出来んままに終わるで」

「それにツクヨミ先輩は、まだ〈龍身〉以外の〈言力〉は使ってない。さすがに、この辺で反撃が欲しい所だね」

ライも冷静に相槌を打つ。

もしもこの会話をフウガが聞いていれば、他人事だからって簡単に言うな、とても怒ったかもしれない。

だが、彼とて、このまま終わるつもりは微塵もなかった。

「――疾く、駆けよ！」

両足に風の補助を得て、一瞬だけフウガはさらなる速さを得る。

瞬時に、ウズメの間合いから脱すると、さらに次の〈具言〉を唱える。

「刃風、断ち切れ！」

放たれるは、立ちはあるものを冷酷に切り裂く真空の刃。結界内であっても、相手を昏倒させる程度の威力は十分にあった。

それをウズメは見事な体捌きで躲し――次の瞬間、目を見開いた。すぐ間近にフウガの姿があったのである。

風刃を囷に、彼もまた距離を詰めていたのだ。

これを好機と見て、フウガは叫ぶ。

「剛風、吹き荒め！」

途端、フウガを中心に小さな嵐が巻き起こり、結界内を蹂躪する。至近距離からの広範囲攻撃。

自身が巻き込まれる事も厭わない決死の特攻。

もとより実力差は明白なのだ。ならば、それくらいの覚悟がなければ、攻撃を当てる事など出来ようはずもない。

「なっ!？」

だが、少年は瞠目する。

視界には、すでにウズメの姿はなかったのだ。

「勇氣は認めるが、まだまだ甘い」

反射的に声のした方に顔を向けようとした瞬間。

フウガの脇腹を強烈な衝撃が襲う。

苦悶の声を上げる暇もなく舞台の上を二転三転して、結界の壁へと背中から叩きつけられる。

「……ぐ……つう……」

背中と脇腹に、激痛。

胃液が逆流して、その場で吐瀉しそうになる。――が、さすがにそれはみつともないとフウガはぎりぎりでも耐えた。

「どうした、スサノ。もう終わるのか？」

ウズメは追い討ちを掛ける事なく、静かに佇んだまま問うた。どこか試すような口調でもあった。

「……まだ、ですよ」

震える膝を押さえて、フウガは立ち上がる。

息が酷く荒れ、身体が石のように重い。

最後の〈言力〉には渾身を込めていただけに、消耗が激しかった。今の体力では、せいぜい残り〈言力〉一発が限界といった所だろう。

まだ自分は、ウズメに、まともに一撃を決める事も、基本以外の〈言力〉を使わせる事も出来ていない。

（負けは覚悟してても——それは駄目だよな）

こんな自分にだって矜持はある。

譲れない一線はある。

このままで終われない。終わるわけにはいかない。

「俺の意地……見せさせてもらいますよ——！」

咆哮し、フウガはイザナギ、イザナミを構える。

「そう……そうでなくては面白くない」

ウズメが嬉々として笑む。

「さあ、スサノ・フウガ——君の全てを私に見せてしろ！」

「おおおおおおおっ……！」

咆哮し、フウガは駆ける。

駆けて、駆けて、駆けて、駆けて——ウズメとの間合いを詰めていく。

そして、不意に。

彼の唇が笑みを象った。

「——なっ！」

この戦いで初めて、ウズメが動揺を見せた。

疾駆するフウガが、何を思ったか、手にした二本の小剣を真上に投げ上げたのだ。

この思わぬ行動に、さしものウズメも困惑し、視線がそれを追ってしまふ。

そこをフウガは見逃さない。

一気に間合いを詰め、

「烈風、集え！」

右の掌に、残った力の全てを込めた風を結集させた。

投げた剣は彼女に隙を作らせるためのもの。
本命は、こちらの一撃。

「しまっ——！」

一瞬、遅れてウズメはそれに気づく。

構わずフウガは、風を纏った掌底を叩き込んだ。

爆風。轟音。

観客席から、ウズメを案じる悲鳴が上がり、僅かに遅れて二本の小剣が舞台の上に落ちる音が響いた。

数瞬の静寂の後、

「……後一步、か」

フウガが苦笑を含んだ声で言った。

「そうだな。だが、見事に虚を突かれたぞ」

ウズメは微笑し、素直な賛辞を送る。

フウガの掌底は、彼女には届いていない。

寸での所で、刀の鐔の部分で止められていたのだ。

自ら武器を手放すというフウガの行動は、完璧にウズメの想定範囲を越えたはずだった。

それでもなお——この結果だ。

それは、現在のフウガとウズメの実力の差を明確に表していた。

反撃を避けるために、フウガは後方に跳ぶ。

もはや〈言力〉を練る力も残っていなかったが、まだ身体が動くのなら、最後まで負けを認めるつもりはない。

「君の戦いぶりに敬意を表して——私もまた渾身の一撃で応えねばな」

ウズメはそれを追う事なく、カグヅチを頭上に掲げた。

ぴりぴりと空気が震え、強大な圧迫感がフウガを後退りさせる。

「……………っ！」

「——劫火、万象焼き尽くせ」

歌うように紡がれる〈具言〉。

しかし、それによって叶えられる世界への願いは、鮮烈かつ苛烈。

一瞬にして、〈鍊技場〉内は、赤色に染め上げられる。

ウズメの〈真名武器〉であるカグヅチが纏うのは――大火の獣。それを従える彼女の姿は、まるで一枚の絵画のようで。

まるで炎姫とでもいうような雄々しさと美しさで。

思わず見惚れたフウガは、次に放たれた一撃を躲すという考えすら浮かばなかった。

――カグヅチが振り下ろされる。

「ぐっ……うああああああああああああっ……!!」
開いた炎獣の顎が、容赦なくフウガを飲み込み、吹き飛ばし――その瞬間、彼は敗北を確信した。

＊ ＊ ＊

気づけばフウガは、服の各所からくすぶった煙を上げながら、舞台の上に大の字になっていた。

疲労と、先ほど一撃による痛手で、まるで身体が動かない。

（もしも結界内でなかったら、消し炭だったかな……）

と、他人事のようにぼんやりと考える。

すうっと喉下に、刃が突きつけられた。

視線を上げると、ウズメが静かにこちらを見下ろしていた。

「まだやるか？」

「……まさか。もう戦う力なんて残ってないですよ。完敗です」

まさにその一言でしか表せないだろう。

結局、自分は彼女に一太刀すらも浴びせる事はできなかったのだ。

本当なら悔しいはずなのに、ここまで完膚なきまでやられると、いつそ清々しかった。

負けを認める台詞に刀を引いたウズメは、フウガの脇に移動すると膝を突き、こちらの顔を覗き込んでくる。

「君との戦い、久々に心躍った。礼を言わないといけないな」

「いや、そんな……俺は何も出来ませんでしたよ」

「そんな事はない。君が真っ直ぐと向かって来てくれた事が、本当に私は嬉しかった。おかげで君に興味が湧いたよ。だから――」

ウズメが、どこか艶やかに微笑んだ。

「――これを受け取ってくれ」

「え――……」

――甘い白梅香の香りがした。

何かが優しく頬を撫で、唇に柔らかい感触が広がる。

目の前にあるのは、凜々しい少女の美貌。

（まさ、か……これって……）

頬を撫でていたのは、彼女の長い漆黒の髪だ。

そして、唇に重ねられているのは――

「!?!?」

ようやく状況を頭が理解しても、身体がまともに動かないフウガは、なすがままになる。

ウズメがゆっくりと顔を離した。そして、曲げた指を、さっきまでフウガのそれと触れ合っていた唇に当てて、悪戯っぽく笑う。

「つまらないものだが、ほんの礼代わりだ」

フウガは何も答えられない。

ただただ固まって、呆然と彼女の顔を見つめていた。

ライ達やソウゴ、さらに他の候補生達も、あまりに突然の展開に付いて行けずに、呆気にとられて静まり返っている。

ウズメはそれに苦笑しながら立ち上がると、倒れたままのフウガに告げた。

「三ヵ月後、また戦う事になるのだろうか？ その日までに君がどこまで強くなっているか――楽しみにしている」

そう言って身を翻すと、ウズメは〈錬技場〉を去って行った。

フウガはその背中を見送った後、

「……………」

痛みも忘れて腕を持ち上げると、掌で顔を覆った。

……一体、なんなのだろう、この状況は。

おかしい。

何かがおかしい。

昨日から、明らかに自分の日常が大きく狂い始めているのを、フウガは感じていた。

『ぬはははは！ 思いのほか、面白い事になってきたではないか』
間違いなく、その元凶であるオロチが、機嫌も最高潮に大笑する。
だが、今のフウガには、それに怒りを覚える心の余裕さえもなかった。まず間違いなく、この後この場で起きるであろう騒動の事を考え、途方に暮れる。

「……本当……どうしよう……」

もう、そんな言葉しか出てこなかった。

それから数秒後。

フウガの予想通り〈錬技場〉は大騒ぎとなった。

ようやく何が起こったのか状況を理解した候補生達（八割が親衛隊所属）により、阿鼻叫喚の如き絶叫と悲鳴が響いたのである。

フウガの受難の日々は、悪化の一途を辿るばかり――。

二章 完全無欠の最強少女 その三（後書き）

お読み頂きありがとうございました。

三章 純白の憎悪とひび割れる平穏 その一

湧き出した地下水の生んだ水溜りが、ぱしゃりと跳ねる。

一人の少年が歩いていった。

洞窟である。

深い森の奥にある崖肌に自然に生まれた横穴で、かつては妖魔の巣でもあった場所だった。

中は相当に深く、少しでも奥に入れば、外界の光が一切届かなくなる。だが、少年の歩みには、まるで迷いがなかった。むしろ闇に導かれるかのように、奥へと進んでいく。

「……………」

ふと少年が足を止めた。

何か考え込むように、こめかみを何度か叩き——ぱちんと指を鳴らす。

途端、洞窟内の一部が明るく照らされる。

未だ何の光源も在りはしない。

なのに、限られた空間だけ闇は侵略され、光が支配していた。

そこは洞窟の最奥のようだった。今まで歩いて来た場所に比べ、大きく開けており、天井も高い。

どこことなく異質な空気も流れていた。

それは、ここが外界と隔たれた洞窟であるからという事ではない。ほんの微か。

洞窟特有の湿気に混じって、古き血臭と妖気の名残があったのである。

少年がその場で膝を突いた。

そつと地面を指で撫でる。

「ふうん……どうやら当たりらしいな」

黒と紫紺の瞳を満足そうに細め、少年は懷から何かを取り出した。一輪の百合の花。

それを先ほど撫でた場所に放ると、立ち上がり、数歩後ろに下がる。

次いで、置かれた百合に向け、掌をかざし――

「我、汝に花を捧げよう」

――詠う。

「それは決して手向けの花に非ず。夜見の国より、復讐の道へと誘う血濡れの道標なり。汝、狂おしき怒りと憎しみを纏うならば、それを掴み、我が前へと這い出せ――」

瞬間。

百合が散った。

そして、落ちた白き花卉が舞い上がったかと思えば、次々と増殖し、洞窟内を埋め尽くしていく。

花卉の乱舞。

集う無数のそれらは、次第にある形を象りだし、固まっていく。

形は、人だった。

細身で小柄な少女である。

髪も肌も清廉過ぎるほどの純白で、まるで色という存在から見放されたかのようにだった。

「問うぞ」

少年が言った。

そして、花卉の肉で生まれた裸体を晒したまま浮かぶ少女へと訊く。

「お前の望みは何だ」

少女が、ゆっくりと目を開いた。

瞳すらも、純白だった。

だが、そこは怒りと憎しみに血塗れてもいた。

「私の望みは……」

少女が言った。

まるで恋焦がれるように、その名を。

甘美な愛の囁きのように、その行為を。

熱を宿した恍惚な声音で言った。

「スサノ・フウガを――殺す事」

かくして過去と現在は、血の鎖で結ばれる。
無垢なる白き憎悪と殺意が生誕する。

◇ ◇ ◇

「……………ふう」

シズネは、一つ息を吐いた。

一通り目を通した雑務の書類をまとめ、執務机の端に置くと、椅子の背もたれを軋ませる。

「さて……………スサノ君は、大丈夫でしょうか」

つい先ほど、朝からソウゴが彼についての報告に來たばかりである。

内容は、昨日の〈鍊技場〉でのフウガとウズメの一件だ。聞いた所によると、どうやら少々面倒な騒ぎになっているようだった。

だが、ウズメが関わっているのなら、特にこちらから手を出さなくても、彼女が何かしら対処をしてくれるだろうとシズネは判断している。

ウズメは、学園長のシズネから見ても、それだけの信頼に値する少女だったし、やはり候補生間の問題は、候補生達だけで解決するのが一番望ましい。

大人の不用意な介入は、子供の過剰な反発を呼ぶ。候補生達の微妙な年頃を考えれば、それはなおさらだろう。

十数年、学園長を務めてきた経験から、彼女はそれをよく理解していた。

（……………私も年寄りになったという事ですな）

そんな事実を再確認して、少し寂しげに目を細める。

と。

『――学園長という立場は、なかなか大変そうだな、シズネ』

それは、まったくこの学園長室にふさわしくない者の声だった。

シズネは驚いて、声のした方に顔を向ける。

「……オロチ。どうしたのですか、こんな場所にわざわざ幻体で」

『なに、ずっと少年の中に居ても、気が滅入るだろう？　少しばかり気分転換だ』

「気分転換に、五十年前、貴方の封印に関わった私の所に来るとは、なかなか皮肉が利いていますね」

『それは邪推だ。私は、そんな低俗な事せんよ。そう、なにせ紳士なのだからな、ぬっははは！』

「よく言うわ、本当に……」

シズネは失笑を浮かべる。

こんな疲れる相手を身体の中に住まわせているフウガには、同情を覚えずにはいられない。

……まあ、最終的にそんな状況に追い込んだのは自分だったが。

「――で、本当の目的は何ですか？　貴方が気分転換という理由だけで、私の前に顔を見せるとは思えないのですが？」

『ふむ。まあ、たいした事ではないのだが、一つ確認をな』

オロチは顎を撫でながら、切り出した。

『お前達は、あのフウガという少年を随分と気にかけているようだな』

「どういう事です？」

『〈三の風〉クラスだったか？　あれの顔ぶれは、皆、特別な意味を持って選ばれているように思えたのだよ』

「……………」

シズネは顔を強張らせ、沈黙する。

安易に答えるのは、憚られる問いだったのだ。

『そう……例えば本来の実力を隠し、わざと落ちこぼれを演じるフウガが心ない差別を受けぬよう、そういう事に無頓着な人間を選ん

でいる、とかな』

シズネを静かに目を閉じた。

「……確かに今となっては、そういう部分もあります。ですが、それだけではありません」

『では、やはりフウガの父——スサノ・ラシンの事か?』

「!　なぜ、彼の事を……!」

思わぬオロチの台詞に、シズネは瞠目する。

『以前に、少年の記憶を探った際に、真っ先に流れ込んできたのが、その男の事だったのだよ。フウガにとって、それだけ重い意味を持つ相手なのだろうさ。単に父親であるという理由だけでなくな』

シズネは表情を曇らせ、目を伏せる。

「そう……でしょうね」

シズネは遠くを見る目になって、思い出す。

——スサノ・ラシンは、かつて歴代の神聖騎士の中でも最高最強と謳われた男だった。その実力は鬼神の如きもので、実力者揃いで有名な第一師団の中に在りながら、他者の追隨を一切許さなかったという。

学園内でいえば、それこそウズメのような存在だったのだ。

だから、シズネが〈三の風〉の編成に意識的に手を加えたのは、フウガが父親のラシンと比較され、肩身の狭い思いをしないため——というのが最初の原因であった。

ただ。

現在、ラシンは騎士団には所属してない。

九年前、妖魔との戦いの際に右目と左足を失った事で、騎士を続ける事が不可能になり、多くの者達に惜しまれつつ引退したのである。今では、どこかの山奥で、ひっそりと鍛冶師を営んでいるとシズネは聞いていた。

そして、ラシンが騎士を引退をするきっかけとなった事件。

これに、息子のフウガは深く関わっている。

彼が自ら落ちこぼれを演じ、神聖騎士となるのを拒もうとしてい

る理由も、おそらくそこにあるはずだった。

シズネは椅子から立つと、一面硝子張りの壁へと歩み寄った。外は穏やかな春の陽気に包まれ、平和な喧騒が微かに聞こえてくる。

それは今のシズネの胸中とは、酷く相違する光景だ。

「幸い……という言い方は正しくはないのでしたが、スサノ君が入学してからずっと落ちこぼれとして振舞い、父親の事を一切口にしなかったので、今では、彼とラシンはたまたま同姓だっただけだと思われているようです。候補生内で彼が本当にラシンの息子だと知っている人間は、ごく僅か。おかげで彼が変に注目され、白い目で見られるのを防げたというのも皮肉な話ですが……」

もちろんそれでも、落ちこぼれを演じるフウガが、周囲から差別的な目に晒される事は多かった。しかし、ラシンと比較されぬようにと、肩書きにこだわらない人間を集めたクラス編成が、結果的にはそれを緩和する事に繋がったのだ。

『だが、今回の事で少なからず状況は変わるかもしれんな』

フウガは、ウズメとの手合わせで、隠していた本来の実力を明らかにしてしまった。それは間違っても、彼が落ちこぼれなどという評価をされるものではない。

さらに、他にもいろいろな要素が重なって、彼を取り巻く状況は大きく変わろうとしている。

シズネは暗いを表情を、ふと優しい微笑に変えた。

「もし、そうなったとしても大丈夫でしょう。今の彼の周りには心許せる友人が居るようですから。少なくとも独りになるような事はないはずです。何より——私達が、彼をそんな風にさせるつもりはありません」

『ぬはは、思いのほか教育者が板についているようだな、シズネ』

オロチは楽しげに笑いをこぼす。

シズネは、外の景色から視線を外して振り返ると、最強の妖魔を見つめた。

そして、一つの疑問を覚える。

なぜ、彼は、わざわざ自分とこんな話をしたのだろうか。

単に悪戯する事しか考えていないのなら、シズネ達があの少年を特別に気にかける理由などには興味を持たないはずだ。何よりも個を重視し、己の事しか考えない傾向のある妖魔であるのならばなおさらである。

もともと五十年前から、妙に人間臭い変り種の妖魔ではあったが、やはり行動が不可解ではあるのは否定できない。

「オロチ、一つ訊いても良いですか？」

『構わんよ』

「口振りからすると、貴方はスサノ君の記憶を探った際に、“例の事件”についても知ったのですね？」

『ああ、おおよそは父親の事と一緒に見えた。なにせ、お前の言う例の事件と関係深い人物であるようだしな』

「……………そうですか」

そこまで訊いて、シズネは——簡単には信じ難いものではあったが——ある推測を立てる。

フウガがオロチに取り憑かれた、あの日。

シズネが例の呪いの件を容易く受け入れたのは、もちろんオロチを確実に〈妖界〉に帰らせるためだった。

だが、そこには、もう一つ秘した理由があったのである。

この件をきっかけに、ある重い過去を背負うフウガが変われるのではないか——シズネはそう考えたのだ。

呪いを解くためにはフウガはウズメに勝つしかない。そして、その条件を達成しようと思うのなら、彼は落ちこぼれを演じ続ける事は出来ないのだ。女になってしまおうというリスクこそあったが、少年が過去を乗り越えるきっかけとしては、これほど都合の良いお膳立てはなかったのである。

だが。

逆に考えれば、あまりに都合の良すぎた展開ではなかったか？

それこそ、まるで仕組まれたかのような……。

「オロチ……まさか貴方がスサノ君にあんな呪いを掛けたのは……」
『考えすぎだな、シズネ』

オロチは、シズネの思考を読み取ったかのように問いを遮り、
『私は妖魔だ。常に己を第一に考え、人心や人命など気にもかけない忌まわしき人間達の天敵。……そのはずだろうか？』
にやりと、それこそ悪人のように笑って見せる。

『それに、私がどんな理由で呪いを掛けたにせよ……最後に未来を選択するのは、フウガ自身なのだよ』

最後に、そう言い残して。

何の前触れもなくオロチは、学園長室より姿を消した。

◇ ◇ ◇

逃げていた。

フウガは逃げていた。

ひたすら。全力で。一目散に。

なぜかと言えば、彼は追われているのである。

現在、学園の八割近くの候補生は、フウガを狙う追手と化していた。要するに、行く所、行く所、敵だらけなのだ。

ライやゴウタ、さらにレナやミヨの協力のおかげで、なんとか今の今まで逃げおおせているが、捕捉されるのは時間の問題だろう。

なにせ、追手の人数が半端ではない上に、全員が全員、血眼だ。

到底、逃げ切れるものではない。

だが、それでもフウガは逃げた。

今、彼が居るのは、一年から三年の教室の並ぶ第一校舎。下の階や他の校舎に繋がる渡り廊下は全て固められてしまったため、フウガは上に逃げるしかなく、三段飛ばしで階段を駆け上がる。そして、上がって行けば最後に辿り着くのは、当然、屋上だ。

少しばかり強めの風の吹きつけるそこは、二日前にフウガがオロ

チに取り憑かれた場所でもあった。

「……はあ……はあ……はあ……はあ……！」

フウガは屋上の端に歩み寄ると、転落防止用の手すりに背を預ける。

ずっと全力疾走だったので、息は酷く荒れ、汗だくだ。

なんで朝っぱらから自分は、こんなに疲れているのだろうか。

そんな疑問が湧き上がるが、深く考えるとますます凹みそうだったので、とっとと脳内から削除する。唯一の救いと言えば、なぜか今日はオロチが静かな事だけだ。

「……はあ……はあ……さて、どうするか……」

この場所も、どうせすぐに突き止められるだろう。

ともかく、今は逃げる事を最優先に考えねばならない。

屋上への出入り口は、さっき駆け上がってきた階段に繋がる扉しかないが、〈言力〉を使えば、屋上から地上まで飛び降りる事は、さして難しくはなかった。

学園内での〈言力〉の使用は極力自粛するよう言われている。しかし、こんな危機的な状況で、そんな指示に素直に従う気などあるはずもない。

こちらら身に危険が、すぐそこまで迫っているのだ。

それこそ、「んなモン知った事か！ 規則は破るためにあるんだ

！」ぐらいなものである。

ようやく呼吸が整った所で、フウガは早速、屋上を脱出しようと

「追い詰めましたわよ、スサノ・フウガ！」

心から、聞きたくなかった声を聞いた。

それを合図に階下に繋がる扉から次々と追手の候補生達が姿を見せる。

それはもう出てくるわ、出てくるわ。

そろそろそろそろと湧き出してきて、背後の手すりの方からも何人か這い上がって来たりしたので、さすがにフウガはぎょっとした。

ほんの数秒の間に屋上は、人で埋め尽くされる。

彼らが囲むのは、当然、フウガであった。

一様に殺意と怒りと妬みと……その他諸々の負の感情に満ちた視線を、こちらに突き刺してくる。背中には、ズオオオオウ、と黒い何かが立ち込めているように見えた。たぶん錯覚だが。

彼らは、皆、ツクヨミ・ウズメ親衛隊の隊員だ。

フウガを追っている理由は、言うまでもなく昨日の〈鍊技場〉での一件であった。

と、不意に、少年を囲む人垣が割れた。

「うわ……出た……」

その間を通して、姿を見せたのは、サワメ・ナキだった。後ろには、取り巻きの双子も居る。

ナキは、フウガの前に立つと腕を組んで、ふんぞり返った。

「年貢の納め時ですわね、スラウノ・フウガ」

「……噛んだ」

「か、噛んでなどいませんわ!」

「いや、噛んだし」

「だ、黙らっしゃい!」

ナキは、顔を真っ赤にする。

「「そうです、お黙りなさい、変態!」!」

「へ、変態!」?

双子のハニヤ姉妹のあんまりな物言いに、フウガは耳を疑う。

「そうよ、この鬼畜!」

「ツクヨミ先輩を穢しやがって!」

「ケツの穴から拳突っ込んで、奥歯をガタガタ言わせてやるわ!」

「死ね! 三・五回死ね!」

さらに怒涛の如く押し寄せる隊員達の罵倒の数々。

もはや今のフウガは悪の権化——勇者に討ち取られるべき忌まわしき魔王か何かのような扱いとなっていた(オロチの事を考えると、否定はしきれなかったが)。

そして、勇者側は当然、ナキ率いる親衛隊の方である。

「ふん、どんな減らず口を叩いた所で、もはや貴方に逃げ場はありません。覚悟しなさい」

「何ですか！ 俺が何をしたって言うんです！」

「我々は、ウズメ様には近づくなど親切にも忠告したはずです。それは無視したのは、貴方でしょう。しかも、あろう事かウズメ様の……く、く、く、く、唇を奪うなんて！ 許せませんわ！ 骨の髄まで恐怖を叩き込んで差し上げます！」

「いや、あれはツクヨミ先輩の方から……！」

「そんなわけではないでしょう！ どうせ卑劣な手段で脅して……ああ、なんて御可哀想な、ウズメ様！ 大丈夫です！ 今、この世界でも稀に見る最凶最悪の悪漢には、我々が粛清を！」

「「粛清を！」」

『粛清を！』

ナキの台詞を、双子が、さらに周りの親衛隊の隊員達が復唱する。フウガは、もう啞然とするしかない。

「……どんだけ理不尽なんだ……」

もはや何を言った所で、彼女達は耳を貸さないだろう。

やはり手段は選んでいられない。

ナキ達が殺気すら纏いながらにじり寄って来る中、フウガは「言力」を発動しようとして、

「そこまでだ！」

凜とした声が、緊迫した屋上に響き渡った。

その場にいる全員が引き寄せられるように、声の主の方を見る。

「嫌な予感がして来て見れば……やはりこうなっていたか」

「う、ウズメ様！？」

真っ先にナキが驚愕の声を上げ、あっという間に他の隊員達の間にも動揺が広がっていく。

そう。

屋上に姿を現したのは、紛れもなく、この騒動の発端となったツクヨミ・ウズメ本人だったのである。

三章 純白の憎悪とひび割れる平穏 その一（後書き）

お読み頂きありがとうございました。

三章 純白の憎悪とひび割れる平穏 その二

ウズメは静かだが、有無を言わせない声を張った。

「皆、そこに居るスサノは、昨日から、もう私の大切な友人だ。すまないが、ここは黙って退いてもらえないか？」

「で、ですが、ウズ……ツクヨミ先輩」

隊員の一人が言った。

しかし、ウズメは取り合わない。

憤激すら感じさせる空気を放ちながら、告げる。

「聞こえなかったのか？ 彼は私の友人だ。君達が私を慕ってくれているのはわかるし、その気持ちは嬉しいとも思う。だが、どんな好意も、行き過ぎれば害悪でしかない。厳しい言い方になるが、私は君達の存在を迷惑だと思わざる負えなくなる。できる事なら、私もそんな事はしたくない。……わかってくれるな？」

漆黒の双眸が、隊員達を鋭く睥睨する。

誰も何も言い返せない。

それも当然だ。

彼らの行動の動機は、そもそもが彼女なのだから。

数瞬の間を置いて。

「……わ、わかりました」

ナキが肩を落とし、消沈した様子で頷いた。

隊長がそう言った事で、他の者達も次々と士気を失っていく。

途端、ウズメは穏やかな微笑を浮かべた。

「ありがとう。——辛辣な言い方をしてすまなかったな」

「い、いえ、構いません。そ、それでは……」

ナキは丁寧に会釈をすると、双子を伴って屋上の出口へと向っていく。

そして、途中に一度だけ振り返ると、ウズメに気づかれぬように、こちらを睨んできた。

その目は、「これで終わったなどと思わないで下さいませ!」と言わんばかり——いや、間違いなく言っている。

その後、ナキが去り、双子が去り、隊員達が去り、屋上にはフウガとウズメだけが残された。

紙一重の所で、脅威は去ったのである。

「はああああ………た、助かった……」

フウガは手すりに背を預け、大きく息を吐いた。

ようやく生きた心地がした気がしたのだった。

＊ ＊ ＊

「大丈夫か、スサノ」

ナキを含めた親衛隊の隊員達が去ると、ウズメが声を掛けてきた。

「……な、なんとか」

額の汗を拭いながら、フウガは答える。

本当に危機一髪であった。

あそこでウズメが止めに入らなかったら、そして、逃げ損ねていたら、自分はどんな目に遭っていただろう。想像するだけで、ぞつとする。度の過ぎた心酔というのは、やはり質が悪いと、心からそう思った。

——と、安堵したのも束の間。

不意に、思いもよらぬ光景が目飛び込んでくる。

「すまない、スサノ。私の軽率な行動が君に多大な迷惑を掛けてしまった」

いきなりウズメが深々と頭を下げたのである。

そんな姿まで絵になっていて、相変わらず反則な少女だったが、フウガはそんな事に気づく余裕もなく、慌てふためく。

「ええ!?! ……や、やめてください! 別に俺は先輩のせいなんて……!」

「君がそう思っているとしても、原因は私の行動にあるのは確かなのだ。」

謝罪させてくれ」

「わかりました！ わかりましたから！ 頭を上げてください！」
フウガは必死に、そう叫んだ。

確かに親衛隊があそこまで暴走したのは、彼女の口づけがきっかけかもしれない。

しかし、それ以前にも、自分はナキの忠告を無視している。全てを彼女のせいにするなど、フウガには出来なかった。

「きっかけは何であれ、先輩のおかげで俺は助かったし、もういいじゃないですか！ チャラにしましょう！ そう、それがいい！」

「……そうか」

ようやくウズメは頭を上げる。

そして、どこか嬉しそうに微笑んだ。

「君は優しい男だな」

「い、いえ……」

途端、どぎまぎしてしまうフウガだった。

よく考えてみれば、ウズメとは、まさに昨日、キスをしてしまったばかりだ。それを意識すると、急に気恥ずかしくなり、彼女を直視できなくなってしまう。

異常に身体が火照る。今、酷くみつともない顔を自分はしているのではと不安だった。

ウズメは屋上を見回して、他に誰も居ない事を確認すると、

「まだ一時限目まで時間があるな。スサノ、少し話をしないか？」

「え……？ か、構いませんけど」

唐突な提案に、咄嗟に承諾してしまう。

そして、すぐに後悔した。

こんな状態で、まともに会話が出来るだろうか……。

懊悩するフウガには気づかず、ウズメは隣まで歩み寄ってくると、その場に腰を下ろした。男らしい口調の彼女だが、意外にも座り方は、女性らしい清楚なものだった。

「さあ、君も」

「……はい」

促され、フウガは観念すると、素直に腰を下ろした。
春の暖かな風が、二人の周囲を吹き抜けていく。

少しの沈黙の後、

「一つ……訊いてもいいだろうか」

最初にウズメはそう切り出した。

フウガが頷くと、彼女はこう言った。

「――なぜ、君は本当の自分を隠すんだ？」

「………」

やはり来たか、とフウガは思った。

それは、昨日の手合わせを観た者なら、誰もが覚える疑問だろう。
「私の見立てでは、君は階位B……いや、Aレベルでも遜色ない。

単純な戦闘能力だけなら、確実に学園内でもトップクラスだ。だが、
今のままF参で居れば、君は神聖騎士の道を断たれる事になるだろう。
それはあまりに惜しい」

「買いかぶり過ぎですよ」

「そんな事はない。私は君と直接手合わせをし、その上で客観的に
判断した。君の父親が、本当にあのスサノ・ラシンである事を私は
知っているが――そんな事は関係ない。他の教官達もそう思ってい
るはずだ」

「………」

フウガは押し黙る。

胸が……疼いた。

決して忘れられない――でも、周りを心配させないため、自然に
笑顔を浮かべられるよう、心の奥に押し込めた過去が、傷を押し広
げて僅かに顔を出す。

――本当は言いたくはない。

でも、ここまでの出来事で少なからず疲労し、冷静さを失ってい
たフウガは、噴き出す感情を抑え切れなくて、口を開いていた。

「……夢だったんです」

「え……?」

とても静か。

でも、あまりに哀しい響きを宿したフウガの声に、ウズメが驚いた顔で、こちらを見る。

「一人目は、男の子。二人目は女の子。男の子は、親父みたいに強くて格好良い神聖騎士になる。女の子は優しく綺麗に育って、花嫁姿を自分に見せてくれる……それがあの人の――母さんの夢だったんです」

「スサノ……?」

「でもね。夢は叶わなかった。一人目の子供は、確かに男の子として生まれたけれど、二人目は生まれる事なく、母さんと一緒に……。親父も取り返しのつかない怪我を負って、神聖騎士を引退するしかなかった。……そんな風に多くの大切なものを奪った男が居たら、そいつは神聖騎士になるにふさわしいでしょうか?」

フウガは激しく頭を振る。

「いいや! そんなわけない! あっていいはずがない! だから

……だから! 俺は……!」

気づけば、硬い石の床をフウガは拳で叩いていた。

遅れて痺れと痛みがじんわりと脳に伝わってきたが、気にはならなかった。そんなものより、胸を何度も突き刺す痛みの方が、よほど辛かった。

「……スサノ」

床を叩いた拳に、そつとウズメが掌を乗せてきた。

伝わってくる感触は柔らかく、温もりは優しい。

「……すまない。何かしらの深い事情がある事はわかっていたのに、君の過去に土足で踏み込んでしまった。本当に……すまない」

ウズメが心から後悔している事は、すぐにわかった。

だから、フウガも暗く淀んだ感情をねじ伏せ、押し込め、なんとか微笑を形作った。

「……いえ、いいんです。ただ俺がこの学園に入ったのは、自分の

意思じゃなくて、親父が勝手に手続きしてしまつて……だから、俺は最初から神聖騎士になるつもりなんてなかったんですよ……」

「……それが君の母の夢だったとしても？」

「はい。俺が叶えられる事は、男として生まれた事だけです。でも、だからこそ守りたい」

「……君が絶対に女になれない理由、か」

納得がいったように呟くと、ウズメは立ち上がった。

不意に突風が吹き、彼女の長い髪が大きく靡く。そんな中、ウズメはどこか悔しそうな顔で俯いた。

「本当なら、君に辛い思いをさせるつもりなどなかった。私は昨日から、配慮が足りなさ過ぎだな。学園最強などと言われた所で、所詮はまだ小娘で、未熟者だ——情けない」

「……やめてください、先輩。俺は、その先輩に昨日、完敗したばかりなんです。それなのに未熟者だなんて……俺の立つ瀬がなくなっちゃいますよ」

フウガがおどけて笑う。

どんなものであれ、自分の事で、彼女に責任を感じさせたくはなかったのだ。

「ありがとう、スサノ」

ウズメが少しだけ安堵したように、頬を綻ばせる。

それを見て、フウガはなんだか無性に落ち着かなくなる。とにかく話題を変えようと、ずっと気になっていた事を訊いた。

「先輩……昨日、なんであんな事をしたんですか？」

それは〈練技場〉での、あの口づけの事だ。

「あれか……」

少しだけ照れ臭そうに、ウズメは鼻の頭を搔く。

彼女もそんな普通の仕草をするのだな、とフウガは意外に思った。「もちろん礼代わりでもあるし……それ以上に私は君を気に入ったんだ」

「気に入った？」

「ああ……いや、違うな。少し違う。そう、あれだ……たぶん……君を好きになったんだな」

「……………へ？」

迷った末にウズメの口にした一言に、フウガは硬直する。

——今、彼女は何と言った？

有り得ない。

世界が十回二十回、いや、百回千回ひっくり返ったとしても、有るはずのないと思っていた事。

でも、ウズメは確かに言ったのだ。

君を好きになった、と。

「な、なんで……？ いや、だって、あれじゃないですか。先輩とまともに話したのは昨日が初めてで、俺は悪人面な上に無様に負けちゃって、好きになる要素なんて、何一つなくて……え、えええ！？」

もはや混乱の極致である。

だが、当のウズメは平然と言った。

「理由、か。そうだな。強いて言うなら、君が真正面からぶつかって来てくれたからだよ、スサノ」

「……………？」

「君も知っているだろう？ 私は軍閥の貴族、ツクヨミ家の長女。代々、幾度となく將軍を務めた人間を輩出し、長年、名門と呼ばれている家だ。その名に恥じぬよう、私は常に精進してきたし、相應しい振る舞いだって心がけてきた」

そう。

彼女が学園で一目を置かれ、あれほど多くの候補生達に心酔や尊敬をされるのには、そういう理由も多分にあった。

フウガがラシンの息子であるという事を知っているのも、その関係なのだろう。

なにセラシンは騎士現役時代、当時から現在まで代わらず神聖將軍を務めているウズメの父と個人的に親しかったらしいのだ。おそ

らくはその親交は、今なお変わってはいないのだろう。

ウズメは、不意に沈んだ面持ちになり、さらに語る。

「……だが、そのせいなのか、周囲の人間達は、どこか私に距離を置くようになった。それは、この学園でも同じだ。私はいつも当たり前のように高みの存在。訓練でも相手はどこか手を抜き、ただ負けるためだけに向かってくる。そして、負けた事を悔しがりもしない。

……でも、君は違った。勝てないと半ば覚悟しながらも、一矢でも報いようと必死に戦ってくれた。負けた後も、次を見据えた目をしていた」

「だって、それは呪いがあるからで……俺は……」

「それでも、だよ。私は嬉しかったんだ。そして、そんな君が新鮮で……どこか眩しかった。だが、たぶん……」

ウズメは、そこで一拍だけ置いて、

「本当は、そんな事も関係ないのかもしれない」

フウガは怪訝な顔になる。

「どういう……事ですか？」

「誰かを好きになるのに、理屈なんてない。私は君が君だから、好きになれた——そういう事だよ」

そう言って、ウズメは悪戯っぽく笑む。

「……………」

フウガは口をぽくぽくと動かすだけで、何も言えなかった。

こんな目付きの悪い、悪人面なのだ。今まで恋愛になど、全く縁がなかったし、当然、告白された事など、これが初めてだ。

しかも、相手が学園の候補生のほとんどが羨望の眼差しを送るウズメとなれば、もうどうすればいいのか……。

そんなフウガの反応を見て、ウズメは可笑しそうにくすくすと笑う。

これも、フウガの中のウズメのイメージとはかけ離れていた。

「別に、今すぐ返事を求めたりはしないさ。確かに君と私が共に過

ごした時間は、あまりに短いからな。君が自分の気持ちにはつきりと向き合えたときに、答えを教えてくださいればいい」

「……は、はい」

もはやフウガには、肯定する事しかできない。

ウズメは満足気に頷くと、

「……そろそろ一時限目も始まるし、今回はここまでにしておこうか。また時間があるときに、ゆっくりと話をしよう。——では、お先に失礼するよ」

そう告げて、屋上の出口へ向けて歩いて行く。

フウガは、ただただその背中を見守るしかなかった。

「ああ、そうだ」

ふとウズメは足を止めると、こちらを顔だけで振り返り、

「これからは君の事は、フウガと呼ばせてもらうよ。スサノでは、他人行儀だしな。どうせなら君にも、ウズメと呼んでもらいたいのが——」

そこまで望むのは、さすがに贅沢かな」
はにかむような微笑と共に言い残して、今度こそ扉の向こうへと姿を消した。

静寂が落ちる。

「……………」

なんだかもう茫然自失だった。

しばらく、ここで頭を冷やしてからでないと、下に降りられそうもない。

本当に、ここ数日の出来事といったら……どうかしている。

それにしても——

「……好きになった、か」

ウズメの言葉を反芻する。

嬉しい——と思う。

フウガから見ても、彼女は魅力的な少女だし、好意をあんな風に真っ直ぐに向けてもらえたら、男なら悪い気などするはずもない。でも。それでも。

「あの日の俺を知ったら、先輩はきつとそんな気持ちではいられない……。だって、俺は——」

その先は、言葉に出来ない。

そうするには、あまりに辛く重い事実だったから。

唇を強く噛んだ。

切れて、鉄の——血の味が口の中に広がる。

いつも以上に、苦く感じた。

三章 純白の憎悪とひび割れる平穏 その二（後書き）

お読み頂きありがとうございます。

三章 純白の憎悪とひび割れる平穩 その三

「ふおれで、つふよふいせんふあいふあふけられたの？ やふあ
りすほおいひほおよへえ……」

「ふおふやなあ。まつふあくかなふあんほひいとや」
「……………」

フウガは眉間に皺を寄せ、

「？ ほうふいたの、ふああの？ ふあふまって？」

「ふおおひでもふあるいんか？」

「……よし、とりあえずお前ら、食うのを止めろ」

両肩をわなわなと震わせ、

「ふおに？」

「ふおうひゅう事や？」

「だ・か・ら……！」

目を怒りで吊り上げて、

「「ふうふあら？」」

「何を喋つとるのかわからんだ！ ドアホ！」

腹の底から絶叫した。

——ここは食堂である。

学園の敷地内に建てられた騎士候補生のための寮。男子寮、女子寮と当然のように分けられたそれらに挟まれる位置に、その食堂はある。他にも購買や大浴場など、生活に必要な施設が全て同じ建物内に揃えられていた。

寮からは、食堂らのある建物に直接移動できるため、その気になれば寮から一切外に出なくても生活するだけなら全く支障はない。

学園の全寮制なので、この食堂は、候補生のほぼ全員が利用するという事でもあった。

故にフウガは、いつも食事を共にするライやゴウタはもちろん、協力関係になったレナとミヨも誘って、昼食のために食堂を訪れた

のだ。

ずらっと並ぶ長机の一つに座り、両脇にライとゴウタ、対面にはレナとミヨが居る。そして、人言語と思えぬ言葉を発していたのは、食物をリスの如く口いっぱい頬張ったゴウタとレナだ。

今日の朝のウズメとの出来事の報告をしたのだが、この二人は食べる手を止める事がなかったので、今のような事態に陥っていた。ちなみにライとミヨは礼儀正しく話を聞くときには食事の手は止めているし、あんなに口の中に物を詰める事などもちろんしていない。

フウガの叫びを聞いて、二人はようやく食物を咀嚼し、飲み込む。

「何よ、そんな声を上げる事？ 礼儀がなってないわ」

「そやそや。食堂は飯を食う場所やで」

「あれ？ 何これ？ 凄い殺意的なものが湧き上がってくるんだけど？ いいのか？ これを解放してもいいのか？」

「……わ、私が全面的に悪かったわ」

「……堪忍して。いや、マジで」

フウガの笑顔があまりに危機感を煽ったのか、二人は額にびっしりと脂汗を浮かべながら、一転して謝罪に移る。なにせフウガには、もともとの目付きの悪さがあるので、それこそ睨み殺されそうな迫力があつたのだ。

「それは当然だよ……。明らかに二人が悪いもの」

「僕的にはフウガの暴走も見えたかったけど、まあ、他に迷惑が掛かるし仕方ないね」

呆れたように指で眉間を押さえるミヨはともかく、ライの発言は聞き捨てならないが、この辺りはいつもの事なので流しておく。

フウガは怒りを収めて、溜息を吐いた。

「……ったく、せっかく律儀に恥ずかしい事まで話した俺が馬鹿みたいじゃないか」

「だ、だから謝ってるでしょ」

レナはそう叫んだ後、一転真剣な面持ちで、

「……しかし、まあ、今更だけど、まさかあのツクヨミ先輩があん

たに告白なんて大事件よね。これがバレたら、今度こそ親衛隊に抹殺されるんじゃない？」

と、一応は気を遣っているのか、声を潜めて言った。

……確かに親衛隊に、この事実がバレる事だけは避けるべきだろう。またウズメの制止が間に合う保障などないのだから、避けられる危険を避けるべきだ——っていうか、なんで同じ騎士候補生に命の危険を感じねばならないのか、甚だ納得はいかないのだが。

「まあ、バレなければ良いんだし、今はそれは置いておけばいいと思うよ。今の状況なら、ツクヨミ先輩の存在があれば、親衛隊は面倒は起こさないだろうしね。何より僕達の本当の目的かつ、最優先なのはフウガがツクヨミ先輩に勝てる手段を見つける事——そうじゃないの？」

海色の瞳を細め、ライが言った。

この少年は、生来の毒舌家でありながら、非常に物事を冷静に見る。

おかげで話を本題に戻せたようだ。

フウガは頷き、

「ああ、そうだな。なんだかんだとあったけど、なんとかツクヨミ先輩と手合わせは出来たんだし、この先の対策をしないと」

「それで、直に戦ってみて、フウちゃんの感想は？」

ゴウタが興味深げに訊いた。

手合わせの結果やウズメの強さはわかりきっているが、彼は直接手を合わせたフウガの具体的な言葉を聞きたいのだろう。

それは他の皆も同じようで、四人の視線がフウガへと集う。

フウガは難しい顔で腕を組んで、

「ほぼ完璧だよ。膂力、速力、剣技、〈言力〉技術、プラナの汲力量、どれを取っても、隙なし、欠点なし。全てが高いレベルで備わっている。あの人は、間違いなく騎士候補生なんて枠組みは外れている。強いて欠点を挙げるなら、実戦経験の不足だけど、それでもあの人は、学園に来る前から家の指示で、いろいろとやらされてい

るみたいだから、他の候補生とは比べるべくもないだろう」
そんな自ら希望を断つような事をつらつらと口にした。

「で、でも、それじゃどうしようもないんじゃない……」

ミヨが眉尻を下げて、もったもったな意見を言う。

他の三人もそれに同意のようだった。

しかし、フウガは首を横に振る。

「いや、逆に答えが明確で良いと俺は思う。彼女にそれらしい弱点は見当たらない。なら、当然、下手な小細工なんて通用しない。それに正面から戦って勝たないとオロチも納得せず呪いも解けないんだから、やる事は一つだ」

「……それは、つまり？」

ライが先を促した。

「この三ヶ月間で、出来る限り俺が強くなるしかない。そうすれば低いながらも勝てる可能性は少しは高くなる。ツクヨミ先輩も人間だ。真の意味で完全無欠は有り得ないんだから、まぐれでも何でも勝ちを拾う事が出来ないなんて言い切れないだろう？」

理屈は通っている。

確かに誰にも絶対の否定は出来ないだろう。

しかし、それは――

「なんだか本当に絶望的の一手手前って感じよね……」

レナの言葉は正しい。

たった三ヶ月間で、フウガがいくら特訓を重ねようが、あれほどの実力を持つウズメと同等になるという事は、まず有り得ない。不可能だ。これは、むしろ絶対。

それでも、少しでもウズメの強さに近づいて、人である以上彼女も必ず持っているだろう僅かな綻び――そこにつけ込める可能性を引き上げるというのが、フウガの計画。

あまりに頼りない計画だが、これしか手段が思い浮かばないし、おそらく他にありはしないのだろうから、どうしようもない。

ライが思案顔で顎を撫でる。

「まあ、フウガの計画はわかったよ。じゃあ、次の問題だ。フウガは三ヶ月間で少しでも今より強くないといけない。その方法は？ 中途半端な特訓をしても、むしろ逆効果だと思うけどね」

「ああ、それはアテがあるよ。一番糧になるのは、限りなく実戦に近い訓練だろう。――本当は実戦そのものが良いんだろうけど、いろいろと問題があるから、それは無理だしな。んで、訓練では勝つべき相手と実力が近い人間と出来れば、なおの事良い」

「？ そんな都合の良い人が、この学園に居ましたっけ……？」

ミヨがお下げを揺らしながら、首を傾げる。

それに自信に満ちた面持ちで頷き、フウガはさらに言った。

「ああ、居る。だからそれとは別に皆に頼みたい事があるんだけど、いいか？」

四人は怪訝そうに顔を見合わせ――それでも承諾してくれる。

それを確認して、さっそくはフウガは、自分の計画の内容を説明した。

「ははあ、なるほど。あの人ね」

「で、でも、大丈夫なんですか……」

「ま、フウちゃんが決めたんなら、俺は手伝うだけやけどな」

「フウガって普段は目立ちたがらないくせに、やる事は意外に大胆だよ」

それぞれの反応を見せながらも、フウガの話に四人は納得する。

ただ一様に「本当に大丈夫なのか？」という不安と疑問も一緒に垣間見えていたが、そこは仕方がないだろう。

フウガ自身だって、不安はある。

だが、現状ならば、これが最善の策だと思うのだ。

「それじゃ、準備の時間も考えると実行は三日後かな。皆、よろしく頼む」



そして。

三日があつという間に過ぎた。

すでにオロチに呪いを掛けられて約一週間。

それでなくても時間は少ない。もはやゆっくりしている余裕はなかった。

「……思いのほか立派なモンが出来たなあ」

フウガはそれを目の前にして、額の汗を拭いながらしみじみと呟いた。

場所は学園の敷地内、寮より少し歩いた場所にある人目につかない空き地だ。学園は敷地自体が無駄に広いので、こういう場所は探せばいくらかもあるのだ。

そして、今そこには三日前までにはなかったものが作られている。綺麗に整地し、大きく正方形に掘った地面に石板を敷き詰め、さらにその石板の表面には、〈鍊守結界〉の〈言紋〉が細かく描かれていた。

つまりは、簡易の実戦訓練用舞台。

〈鍊技場〉では人目が多く、気兼ねなく訓練に励めないために、わざわざ作ったものである。

三日前、フウガがライ達に協力を頼んだのは、これを作る手伝いだったのだ。ちなみに必要な道具や材料は、学園長に頼んだら、すぐに用意してくれた。

「ふーむ、〈鍊技場〉のものより〈言紋〉が洗練され、無駄が少ない。これなら少ないプラナで、より効果的な結界を張れる。さすがにナスノさんは、この手の事に関しては、見事な才の持ち主だ。……そう思いませんか、ミカヅチ教官？」

簡易舞台を感心した様子でまじまじ眺めていたソウゴは、隣に立つ人物に同意を求めた。

「……………そうですね」

ぼそりと相槌を打ったのは、教官服を纏った美麗で小柄な女だ。

〈三の水〉クラス——つまりはレナとミヨの居るクラスの担当教官、

ミカツチ・フヨウだ。

ミカツチの姓でわかるように、彼女はライの姉である。

長い銀髪に、海色の瞳。まるで人形のように整った美貌。

その人並み外れた美しい容姿だけで、もはやライの肉親である事は一目瞭然であろう。

ただ非常に眠そうなところとした目だけが、その美点を損なわせてもいた。ちなみに彼女は普段からこんな感じなので、別に今日が特別寝不足であるとかそういう事ではない。

ソウゴとフヨウには、ライ達と共にこの簡易舞台を作るのを手伝ってもらっていた。

なにせ重労働な上に、かなり大事な作業なので、一人でも多くの人手が欲しかったのだ。

幸いソウゴもフヨウも、教官の中ではフウガ達と親しい間柄だったので、快く引き受けてくれた。もちろん学園長であるシズネがあの日に口にした「私達も全面的にバックアップします」という台詞が効いているのも間違いないが。

「いやー、使える時間は全部使ったとはいえ、三日でここまでのモンを作るとは、俺らって頑張ったやん！」

「……そりゃそうでしょ……普段から鍛えてあるのに、それでもあれだけの筋肉痛になったんだから……」

ゴウタは両手を腰に当て満足気だったが、脇で地面にへたり込んだレナは疲労困憊といった感じだった。体力的な差というより、性格面の違いが態度に出ているのだろう。それでもレナは作業中、文句は何一つ口にしなかった。

「……だ、大丈夫かな。念入りに確認はしたんだけど……」

「そんなに心配しなくても、ちゃんと結界の〈言紋〉は構成できてるよ。シンラン教官や姉さんも納得してるし、問題ないと思うけど」さらに向こうでは、ミヨとライが刻んだ〈言紋〉に不備がないか、最終確認をしている。

おそらくミヨは心配性なのだろう。相当に丁寧に確認をしている

ようだった。

しかし、それもすぐに終わり、数分後。

完成した簡易舞台は、さっそくその役目を果たす事になる。

「……本当に良いのかい？ その……わかっていると思うけど、僕は始めたら手加減は出来ないよ」

ズレた眼鏡を直しながら、ソウゴが改めて確認してくる。

彼の手には、今、三つ又の槍が握られていた。多くの戦いで使い込まれた事を感じさせる重厚な空気を纏う武具だった。

フウガは迷いなく頷き、

「もちろんです。むしろそうじゃないと意味がないんですから」と、はっきりと答えた。

つまりはそういう事。

フウガが特訓の相手に指名したのは、〈三の風〉クラス担当教官シンラン・ソウゴその人だったのである。

「……そうか、わかったよ。君がそこまで言うなら仕方ない」

ソウゴは観念した様子で、特訓の相手を引き受けた。

ウズメのときと同じように、一定の距離を置いて二人は舞台の上で対峙する。

「ミカヅチ教官、お願いします」

「……………はい」

フヨウはこくりと頷くと、

「……………疾く為せ」

〈錬守結界〉を発動させる。

展開した半透明の結界の中、ソウゴは眼鏡に手を掛けた。

「では、行くよ。——覚悟は良いね、スサノ君」

「はい。いつでも」

フウガの返事を聞いて、しばし気持ちを切り替えるように目を閉じた後、ソウゴは眼鏡を外した。

途端。

彼の気弱そうな雰囲気は一変する。

「……………っ！」

ソウゴの身から放たれる強烈な闘気。

研ぎ澄まされた刃のような鋭い眼光は、一瞬でフウガの身体を強張らせ、全身から冷たい汗を噴き出させた。

先ほどまで穏やかだったその場の空気は、すでに凍ったように張り詰めていた。

見守る誰もが喋らない。喋れない。

ソウゴの手にした槍がゆらりと動く。

三つの切っ先はゆつくりと下を向き、ソウゴは戦闘の構えを取る。握る槍の名は、ヒボコ。

彼の〈真名武具〉だ。

「……………」

フウガは深く息を吸い、それを吐き出す。

ぐっと歯を噛みしめ、頬を叩き、ソウゴの空気に吞み込まれそうな自分を叱咤した。そうやって身体の強張りを少しでも和らげながら、腰の後ろの鞘からイザナギ、イザナミを抜き、構える。

僅かな静寂が過ぎ、

「……………始め」

フヨウが開始の合図を小さく口にした。

刹那。

「——がっ!？」

腹部を挟まれる感触と共に、視界が明滅した。

立ってられない。

身体をくの字に折ると、がくりと膝を突き、上がってきた胃液が口の端からこぼれる。

眼前には、目にも留まらぬ速さで間合いを詰めたソウゴが立っていた。

いつものおとなしい風貌の片鱗は見られず、容赦のない視線で跪くフウガを見下ろす。

「立て」

ソウゴが冷たく口にする。

「……………く、つう…………」

がくがくと震える膝と苦痛を押さえつけ、フウガは立ち上がる。接近にはかろうじて気づけた。

だが、放たれた初撃は軌跡さえ掴めなかった。

これほどか、と思い知る。

もはや改めて確認するまでもないだろうが、ツクヨミ・ウズメという少女の実力は候補生という範疇を大きく越えている。彼女には、元神聖騎士やかつて名のある戦士だった者ばかりである学園の教官達でさえ敵わないのだ。

だが。

ただ唯一、未だウズメも勝てないと認める教官が一人居る。

それが、シンラン・ソウゴだ。

——神聖騎士団が生まれた当初。

まだ所属する騎士の人数が多くなかった事もあり、師団ごとにはたいした役目は定まっていなかった。そんなものを割り振るほどの余裕はなかったし、必要もなかった。しかし、年月を重ね、王国が強くなるにつれ、騎士団の規模は拡大し、人員も増える。自然とそれぞれの師団には決まった役目が与えられ、それに特化した人間が配置されるようになったのだ。

そんな中、第一師団には、ひたすら戦闘に優れた騎士が集められた。

その使命は唯一つ。

圧倒的な戦力で国を脅かす敵を殲滅、駆逐——そして必勝。

第一師団の騎士に求められるのは強さはもちろん、戦士としての冷徹さだった。

戦場において、中途半端な甘さは自身の死を招き、それは周囲の仲間達にも波及する。さらに、王国最強を誇る彼らが敗北する事は、同時に王国の敗北を意味すると言っても過言ではない。故に第一師団には、決して勝利以外の結果は許されなかった。

九年前。

まだフウガの父、ラシンが第一師団の師団長を務めていた当時。ソウゴは、副師団長として彼の補佐をしていた。

普段は気弱で大人しく、そして優しい男である彼は、戦場に立つたとき、誰よりも冷徹に敵を屠る騎士となった。その豹変ぶりは静謐な憤怒を思わせた事から、いつしか彼はこう呼ばれるようになる。氷怒のソウゴ——と。

神聖騎士を引退し、騎士候補生を育成する学園の教官となった今でも、彼は戦いに際し、人が変わったような冷徹さを見せる。それは実戦を想定した訓練であっても例外ではない。そして。

だからこそフウガは特訓の相手に、彼を選んだのだ。

ウズメに匹敵する強さに、戦いになれば決して手を抜かない性格。僅か三ヶ月、無理を承知で強くなるというのなら、それぐらいの人間と特訓しなければ意味がない。

「がっ！ くっ！ つうっ！」

まだ完全に立ち直っていないフウガへ、怒濤の勢いで槍の連撃が襲い掛かる。

狙いは、全て人体の急所だ。

それがわかっていのに、フウガには無我夢中で防御をする事しか出来なかった。乱雑に見える攻撃なのに酷く防ぎ辛く、それでいて一撃一撃には、ウズメ以上の速さと重さがある。

「こ——のっ！」

それでも振り下ろされた槍を止め、弾き、かろうじて一瞬の隙を見出す。

「烈風、研ぎ澄ま——」

「三連、穿て」

フウガの〈具言〉は、ソウゴのそれに遮られた。

「————！」

もはや声も出せない。

肩を胸を腹を、槍の穂先から放たれた三本の矢のような衝撃が同時に突き抜け、フウガは無様に昏倒する。

「……………がっ!？」

だが、途切れそうになった意識は、不意の衝撃で無理矢理に覚醒させられる。

ソウゴがつま先で脇腹を抉ったのだ。

「げっ!　ぐはっ!　はっ!」

途端、痛みと苦しさでフウガは喘ぎ、虚ろな目で別人のようなソウゴの冷たい顔を見上げる。

「立て」

それだけをソウゴは命じる。

「……………っ、はあ!」

この場を求めたのは、フウガ自身だ。

だから、彼は弱音も文句も口にする事なく、ふらふらと立ち上がる。

戦いが始まって数分——すでに剣を振るう事も辛くなっていた。

ソウゴが無言で槍を薙いだ。

そこに気遣いや手加減は一切ない。

フウガはそれを手にした小剣で必死に受け止め、次の突きを紙一重で躲す。

だが、下から跳ね上がった蹴りを受けて、再び倒れる。

「ぐっ——っうっ!」

「立て」

ソウゴがまた命じる。

フウガもそれに従い、苦痛を噛み殺して立ち上がる。

その後は、ひたすらこれの繰り返しだった。

ライ達は、野次を飛ばす事もからかう事もなく、ただ無言で特訓を見守り続ける。

ソウゴに特訓の相手を頼むと知った時点で、これは予想出来た光景だ。だから、彼らも取り乱す事はない。

そして、それから約一時間後。

この特訓という名の拷問は終了を迎えた。

それまでにフウガは、五度の失神と数える気にもなれないほどの敗北を味わう事になったのだった。

三章 純白の憎悪とひび割れる平穏 その三（後書き）

お読み頂きありがとうございました。

三章 純白の憎悪とひび割れる平穏 その四

黄昏時。

陽が沈みかけた薄暗い世界では、すぐ傍の人間の顔さえ陰ってしまい、誰だかわからなくなる。

故に、“誰そ彼”。

それは逢う魔が時とも言われ、世界が赤で塗り潰されるとき、人は人ならざるモノと出会うという。

まさに魔性の時間帯。

事実、夕闇の中は多くの妖魔が好んで活動すると言われる。

「まったく腹立たしい！」

そんな不吉さを漂わせる時間、サワメ・ナキは激昂していた。

四年生と五年生——上級生の教室の在る第二校舎。

三階の端にある空き教室である。

ここはツクヨミ・ウズメ親衛隊の作戦会議室のような場所とされていた。

もちろん無断に、だ。

だが、特別誰かに迷惑が掛かるわけでもなく、そもそも使われてない部屋だったので、教官達は放置している。

……単に異様なまでの団結を誇る親衛隊に関わり合いになりたくなかっただけかもしれないが。

空き教室は窓から入る夕陽の光で、外と同じく赤で染め上げられている。

現在、人気のないそこに居るのは、サワメ・ナキを除けば、彼女の取り巻きである双子のハニヤ姉妹のみだった。

「ナキ様の言う通りです」

「一体、どうしてあんな男にウズメ様は御執心なのか……」

スビコとスビメは、二人してナキに同意する。

あまり感情を表に出す双子ではないが、内心はナキと変わらぬよ

うだった。

「どうせ、あの男がウズメ様をかどわしたに決まっています!」
ナキは苛立たしげに吐き捨てる。

そうだ。

そうに決まっている。

間違ってもウズメの方から、あの男に好意を寄せたなど有る訳がない。

だから、これは嫉妬の感情などでは決してない。

そんな無様な感情を、あんな平民の男相手に抱くなど、貴族の名門出の自分が出来ようか!

ナキは悔しげに爪を噛み、

「なんとしてもスサノ・フウガをウズメ様から引き離さないといけませんっ」

そう語気も荒く口にした。

「しかし、ナキ様……」

「下手に動けば、今度こそウズメ様の機嫌を損ねてしまいます」

「……………」

ナキは歯噛みする。

実際、その通りだろう。

フウガをどうにかするなら、絶対にウズメに気づかれてはならない。

だが、昨日の今日に行動を起せば、それがナキ達の仕業だとあの少女が気づかぬはずもなかった。

少なくとも、ほとぼりが冷めるまでは、下手な事は出来ないだろう。

「……歯痒いですが、今は様子を見るしかないという事かしら……」
望まぬ結論にナキが至ろうとした、そのとき。

「あら、そんな面倒な事をする必要があるの?」

鈴を鳴らしたような声が、その場に響いた。

「だ、誰ですか！」

三人の視線が一斉に声のした方に集まり——息を呑んだ。声の主は沈む夕陽を背に、窓際にひっそりと佇んでいた。

一言で表現するならば、白。

髪も肌も瞳も——外套のような服すらも、全てが純白。

赤の世界の中で、その色を喪失した小さな少女は独り立っていたのだ。

年は、まだ十歳程だろうか。

少なくとも学園の騎士候補生では有り得ない。

学園に入学出来るのは、十四歳になった子供のみだからだ。上過ぎてても、下過ぎてても入学は許されない。それは騎士として教育するのに、精神的にも肉体的にも、十四歳という年齢から始めるのが最も適しているからである。

少女はころろと笑うと、

「大切な先輩のためなんでしょう？　だったら、彼女にどう思われようが邪魔な人間は排除すべきよ」

幼い容姿にそぐわぬ大人びた口調で、いきなり物騒な事を口にする。

可愛らしい仕草なのに、見る者を酷く不安にさせる——そんな矛盾した空気を彼女は持っていた。

そう。

まるで、この世の者ではないような——

「ど、どこの誰だかは知りませんが、そんな事は貴方に言われる筋合いはありません！　それよりも——一体、いつの間に入って来たのですか？」

そう問うたナキの声は緊張を含んでいる。

彼女の異常な風体や、わからぬ正体の事もあるが、何より。

あの少女が居るのは窓際なのだ。

つまり、廊下が続く扉とは、正反対の位置。

それなのに、ナキもスビコもスビメも——三人の中の誰一人もが彼女が教室に入って来た事に気がつかなかった。〈言力〉を用いて窓から入って来たにしても、誰にも感づかれずに侵入するなど出来るとは思えない。

いや、そもそも、そんな“普通の行為”で、ここに姿を見せたかすら怪しいだろう。

ナキの言葉に、少女はつまらなそうに唇を尖らせる。

「どうでもいいじゃない、そんな事。それよりもフウガをどうにかしたいんなら、私が良い方法を教えてあげるわ」

「なんですって……?」

ナキは不審を隠さず、怪訝な表情を浮かべる。

傍に居る双子も警戒した様子で、身構えていた。

「簡単よ」

少女がにこりと笑う。

そこに邪気など一切ない。

まるで楽しい玩具を見つけた子供のような笑顔で、

「彼を殺せばいいの。引き裂いて、突き刺して、踏み潰して、ぐちゃぐちゃにして捨ててしまえばいいのよ。……ねえ、簡単でしょう?」

そんな事を言った。

「なっ——」

ナキは絶句する。

スビコもスビメも、ただ呆然としていた。

あまりに突然に姿を見せた白の少女は。

無邪気な笑顔で、こう言ったのだ。

邪魔だというのならば、スサノ・フウガを殺せと。

無慈悲に、残酷に、冷酷に、殺し尽くしてしまえと。

そんな行為は、当たり前で簡単なのだと。

「み、見損なわないうでくださいませ! 如何に相手が下賤の者であろうと、貴族たる私がそんな非道な、事……を……」

ナキの怒りは続かない。

細まった少女の双眸が、不意に怪しい光を灯していたのだ。

「ねえ、そうしましょう？」

「――」

引き込まれる。

心が引き込まれる。

思考が。意思が。信念が。

捻じ伏せられ。踏み躪られ。叩き折られ。

ナキの心は、別のどす黒い何かに埋め尽くされていく。

それは、傍に立つ双子も同じだった。

何かの正体は、憎悪。

彼女達のものではないそれに、三人は身も心も支配される。

「さあ、行きましょう。貴方達の大切なツクヨミ・ウズメを穢したスサノ・フウガを殺すの。望むままに。憎むままに。ただ一途に」

血を塗ったようにそこだけ紅色の唇を三日月にして、少女は笑う。
「大丈夫。許されるわ。血も罪も後悔も、全て貴方達に降りかかるけれど――私だけが許してあげる」

黄昏時。

陽が沈みかけた薄暗い世界では、すぐ傍の人間の顔さえ陰ってしまい、誰だかわからなくなる。

故に、“誰そ彼”。

それは逢う魔が時とも言われ、世界が赤で塗りつぶされるとき、人は人ならざるモノと出会うという――。

◇ ◇ ◇

「いいか！ アンタらは阿呆で！ 馬鹿で！ 考えなしで！ どうしようもない大ボケ野郎共だ！」

「「……………はい」」

容赦なんて欠片一つない罵倒を食らって、ベッドに横になったフウガとそのすぐ傍で椅子に腰掛けたソウゴは身を小さくする。

ここは学園の第三校舎の一階にある医務室だ。

あの特訓を終えて、当然のように立ち上がる事も出来ないほどロボロになったフウガはそこへ運ばれたのだ。そして、それに驚き、ライの話を聞いて事情を知った医務室の責任者――スクナ・ヒナコに速攻で叱責されたのである。

ヒナコは、切れ長の目に、赤色の髪を肩の辺りで無造作に切り揃えた男勝りな二十代後半の女傑だ。第一ヒノカワカミ学園の騎士候補生の健康管理は全て彼女が受け持っており、候補生の男女問わず「スクナ先生にだけは逆らってはならない」というのは共通の意見だった。

ウズメが学園最強なら、ヒナコは学園最恐なのだ。

ちなみに、白衣を自分流に着崩す彼女は、〈言力師〉の中でも数少ない治癒専門の〈言力師〉でもある。

ヒナコは煙草を口の端に咥えたまま柳眉を逆立て、

「簡易の訓練場を作ったって所までは良い！　だがな、そこで教官と一候補生が〈鍊守結界〉内だとはいえ、本気で戦い合うなんて正気か、アンタらは！　〈鍊守結界〉ってのは、確かに中に居る人間がどんな攻撃を受けても、死なない程度にまで緩和してくれる。それでも、それはあくまで“死なない程度”に過ぎないんだ！　強い攻撃を受けりゃあ、骨の一本や二本はヒビいたり折れたりもするし、内臓にも損傷は蓄積する。それが積みかさなりゃあ、万が一でも死ぬ事もある！　……おい、聞いてんのか！」

「「き、聞いてます！」」

二人は背筋を伸ばして、すぐさま返事をする。

怪我一つなく椅子に腰を下ろすソウゴはともかく、フウガの方はベッドに横になっている上、肋骨やその他各所の骨に何本かヒビが入っており、吐き気や痛みのオンパレードだ。しかし、そんなものを一時的に忘れるほどにヒナコの怒りは凄まじかった。

ちなみにライ、ゴウタ、レナ、ミヨの四人は、口を挟む事も出来ないで、医務室の端っこで大人しくしていたりする。フヨウの姿がないのは、医務室に入る前に「……………用事があるから」と言い残して姿を消したからだ。今にして思えば、彼女は、この事態を予想して、先んじて逃げ出したのだろう。

ヒナコは呆れ果てた顔で、手入れなど全くしていないのに滑らか髪を保つ頭をがしがしと掻いた。

「ったく！ ソウゴもソウゴだ。アンタが戦いの場に立ちゃあ、歯止めが利かなくなるのは本人が一番わかってるだろうが…………！」

「……………面目ない。もう、出来る弁解もないよ」

眼鏡を掛け、いつも通りに戻ったソウゴは項垂れて、謝罪を口にする。

しかし、フウガは、

「いや、スクナ先生。特訓の相手を無理言って頼んだのは俺なんです。だから、シンラン教官は悪くない」

と、すぐさまソウゴを庇う言葉を口にした。

だが、それはヒナコの鋭い視線で封殺される。

「誰が言い出したのかが問題じゃないんだよ。結局の所、教官であるコイツが候補生のそんな無茶を容認した事をアタシは怒っているんだ」

「……………」

そう言われると、何も言い返せずフウガは沈黙する。

彼女は何よりフウガの身を案じているからこそ、本気で怒っているのだから。

ヒナコは啞えていた煙草を指で掴むと、ベッドのフウガへと突きつける。

「いいか。学園の医療責任者の人間として命令する。もう、こんな馬鹿げた特訓は一切禁止だ。スサノの事情はわかるが、呪いを解く前に身体を壊してちゃあどうしようもないだろ」

だが、それに、

「それは——出来ません」

フウガは、即座に反抗した。

「……んだと？」

ヒナコは明らかに癪に障った様子で、眉をひそめる。

下手な事を言えば、それこそ拳の一つや二つは飛んでくるだろう。それでも退けなかった。

「俺は強くななきゃいけない。ツクヨミ先輩に勝って、こんな呪いをすぐに解いて、オロチを〈妖界〉に叩き返すんです。だから、特訓を止める事は出来ません」

「スサノ君……」

ソウゴが驚いた顔で振り返る。

——そう、これはすでに決めた事。

これ以上母の夢を裏切らないためにも、フウガは男で在り続けなければならぬのだ。

これだけは譲れない。譲るわけにはいかない。

例え、それでヒナコの心配する気持ちを蔑ろにする事になろうとも。

「……ちっ。生意気な」

強い意志を宿した瞳で満身創痍のフウガに見据えられ、ヒナコは忌々しげに舌打ちする。

「アタシが何と言おうと退く気はなしか？　それでソウゴやアンタの友達に迷惑が掛かる事になっても？」

「退きません。もし、そうなったなら教官やライ達には、後で土下座して頭を何度地面に擦り付けてでも謝罪をします。それで足りなければ、埋め合わせが出来るまでどんな事でもするだけです」

数瞬の沈黙。

対峙する二人以外の顔には、あのヒナコに正面から反抗する少年への驚きが浮かんでいた。

そして、不意に。

「これだから意固地なガキってのは……本当に質が悪い」

腰に手を当て、ヒナコは諦念を面に浮かべながら溜め息を吐いた。同時に、先ほどの怒りや威圧感は収まっている。

「それじゃあ……」

「――ああ、特訓を続ける事を許してやる。……ただし」

ヒナコは指を三本立てる。

「三日に一度だけだ。それ以上は、いくらアタシが治癒してやろうが、アンタの身体が保たないだろう。それに文句があるなら、一日でも早くソウゴともっとまともに戦えるようになるんだね」

きつとそれが、この特訓に対する彼女にとって最大限の譲歩なのだろう。

同時に、これ以上は決して譲らないという意思表示でもある。

フウガは首の痛みも無視して、力強く頷いた。

「……わかりました。その……ありがとうございます、スクナ先生」

「ふん。言っておくが、約束を一度でも破ったら、即座に特訓は中止させるからね。覚えときなよ」

そう言って、ヒナコは再び煙草を咥えると、紫煙を吐き出した。

「……とりあえず一件落着いて事みたいやな。いやー、良かった。

あの後、俺らも叱られるもんやとひやひやしとったんですよ」

医務室に端にいたゴウタが、ほっとした様子で口を開いた。

それに反応して、ヒナコがじろりとそちらを睨む。

「そういやアンタらの事を忘れてたね。黙って協力してた時点で、アンタらも同罪だし、本当ならガツンと言っておく所だけど……」

途端、「げっ！」っと後方に退くゴウタを含む協力者の四人。

しかし、ヒナコは鼻を鳴らして、ただ咥えた煙草を器用に上下させるだけだった。

「まあいい。今回は勘弁しといてやる。この先、こいつが無茶しないように、アンタらがしっかりと監視しときな。もしものときは、今度こそ一緒にお置きだからね」

『りよ、了解しました！』

敬礼でもしそうな勢いで、四人は返事をする。その後、「助かつ

た……」と胸を撫で下ろしていた。

「それじゃ、これからこの馬鹿の治療に入るから、関係ない奴はとっとと帰りな。本当なら、もうとっくに寮に戻ってる時間だろ。ソウゴも明日の準備があるんだから、こんな所でゆっくりはしてられないんじゃないの？」

「あ、そうだね！」

ソウゴは慌てて席を立つと、

「じゃあね、スサノ君。僕が言えた事じゃないけど、調子が悪いようなら、明日は無理に学園に来なくても大丈夫だから」

最後にフウガの身を案じる言葉を残して、医務室を出て行った。続いて、

「んじゃ、俺らも先に帰るわ。フウちゃん、また明日や」

「スクナ先生の治療は荒っぽいから覚悟しておいた方がいいよ、フウガ」

「……ま、死なない事を祈ってるわ」

「レナちゃん、それって今から治療を受ける人に言う言葉じゃないよ……」

四人が四人、それぞれの台詞を口にして姿を消した。

その様子は、明らかにとぼっちりが来る前に退散したいという本音が見え見えである。

「良い友達を持ったもんだな、スサノ」

ヒナコが皮肉交じりに言う。

それにフウガは苦笑で返すしかない。

「さて、それじゃ上を脱ぎな」

「はい」

フウガは身体を起こし、ベッドの端に腰を下ろすと、身体の節々の痛みに顔をしかめながら、服を脱いだ。

ヒナコは、フウガの怪我の具合を指で丁寧に触れて確かめながら、ふと、

「――これは呪いとか特訓とかとは別の話だけどね……」

そう切り出した。

「……何ですか？」

フウガは静かに問い返した。

脇腹の部分を触診するヒナコは俯いているので、表情は読み取れない。

だが、声だけでそれが真面目な話である事はわかっていた。

「アタシなんかが安易に言える事じゃないだろうが……それでもアタシにとっちゃ辛い過去だというのだけはわかる。けどどね、いつまでもそこに囚われていたままじゃ、アンタは前に進めないだろう。いいかげん忘れる事は無理でも、なんとか振り切る事ぐらいは出来るんじゃないのか？」

「……………」

それはつまり。

スサノ・フウガは、いつまで学園で落ちこぼれを演じ続けるのか、と。

そう問うていた。

だが、それは今まで様々な人間に、何回も言われてきた事。故に、フウガの答えは変わらない。

「先生、違いますよ。忘れるとか、振り切るとか——俺にとってあの過去は、もうそういうものじゃない」

「スサノ、アンタ——」

ヒナコが顔を上げた。

途端、とんでもないものを見たように絶句し、固まる。

それは。

フウガの目があまりに空虚だったからだろうか。

まるで大切な部品こころが壊れた人形にんげん——そんな虚ろな姿。

「あの光景は、俺にとってもうどうしようもないほど心に深く刻み込まれたもの。取り除きたかったら、それはもう抉り取る以外にない。だから——俺はもう死ぬまで、こう在るしかないんです」

「っ…………スサノ」

驚きから我に返ったヒナコは、憤怒を抑えるように唇を噛む。
そうだ。

スサノ・フウガは、あの日、あの瞬間、過去に囚われたのでもなく、止まったのでもない。

そういう存在に成り果てたのだ。

悪意に満ちた呼び方をすれば、まるで過去の亡霊のように。
妄執の幽鬼のように。

——と。

「この……！」

不意にヒナコが、ぐいっとフウガの腕を捻った。

「——っ！ いっつうううううう！？」

完全な不意打ちの激痛に、フウガは涙目になって絶叫を上げる。

「な、何してんですか、スクナ先生！ そこヒビいてるんですよ！？
痛い！ 半端なく痛い！！」

「やかましい、このクソガキめ！ さっきから生意気なんだよ！
こうしてくれるわっ！！」

「ひぎっ！？ ま、参った！ 参りました、先生！ だからもう勘弁してくださいっ！！」

「いいや、勘弁しないね！ もうそんな下らない事を言いたくなくなるくらい苛め抜いてくれる！」

「それって本当に医者が言う台詞ですか！？」

ヒナコが的確に骨にヒビを入った箇所を押さえ、フウガが悶絶する。

そんな異様な光景が医務室で繰り広げられ、他の医者や看護婦達は止める事も出来ずにおろおろと見守るだけだった。

——そして。

痛みに夢中で、フウガは気づいていなかったのだ。

そうやって少年を容赦なく叱咤するヒナコの目元が。

自身の不甲斐なさ悔いて歪んでいる事に。

三章 純白の憎悪とひび割れる平穏 その四（後書き）

お読み頂きありがとうございました。

三章 純白の憎悪とひび割れる平穏 その五

外に出たときには、すでに陽は完全に沈み、夜の帳が落ちていた。漆黒の天には無数の星が瞬き、煌々と輝く月が寮に向けて整えられた道を歩く少年を頭上から静かに照らしている。

「……いっつう……スクナ先生、本気なんだもんな。一体、何が気に食わなかったって言うんだ……？」

首を傾げながら、フウガは呟く。

あれから一時間も掛からず、治療は終わった。

各所の骨のヒビを含めた、大まかな怪我は全て治癒されていた。ああ見えてヒナコは、世界でも数少ない〈治癒言力師〉であるだけでなく、その中でも紛れもなく天才に位置する人物である。

故に、処置になんら問題はない。完璧だ。

だが、その過程にあったヒナコの容赦ないお仕置きにより、フウガは未だ残る身体の節々の痛みをしかめていた。

『いやいや、なかなか愉快な女ではないか。周囲の仲間達といい、お前は良き縁に恵まれているようだな、フウガ』

「……うっさい。お前の意見なんて聞いてないんだよ。口を閉じてろ」

最近是比较的大人しいオロチの戯言に対し、フウガは冷たく返す。仮にも人に呪いなんてものを掛けたくせに、この妖魔はやたらと馴れ馴れしいのだ。

「……………」

オロチを黙らせた後、なんとなく脇腹を押さえてみる。

もう痛みはない。

間違はなく肋骨のヒビは完治している。

ただヒナコによると、怪我の治癒——特に骨に関しては自然に時間を掛けて治す方が良いらしい。理由は簡単、そうした方が骨は以前より丈夫な形で治るからだ。

治癒の〈言力〉とは、それ自体に傷を癒す力があるわけではない。対象の人間の治癒力を強制的に促進させ、通常よりも早く傷を治すだけだ。そのため、人間の自己治癒力で治せない傷は癒せず、治療を施される人間自身に傷を治すだけの体力が残されていないなければならない。〈言力〉は効果を発揮出来ない――それどころか瀕死の患者であれば、むしろ追い討ちをかける事にもなりかねないのだ。

時間を掛ければいずれは治る怪我を、身体の摂理を捻じ曲げて急速に癒す――それが治癒の〈言力〉だ。

だから、自然に治す場合よりも精度が落ちてしまうのは当然で、例を挙げれば、切り傷ならば痕が残ってしまったり、骨折や骨のヒビならば以前よりも強度が落ちてしまったりする。

要するに治癒の〈言力〉は即効性に優れる代わりに、完璧な結果は残す事は出来ないという事だ。それでも、より自然治癒の結果に近づける事が出来るならば、すなわちその人物は〈治癒言力師〉として優秀であるという証拠だ。

そういう意味では、ヒナコは間違いなく一流であろう。少なくともフウガは、彼女の治癒を受けて不満を口にした人間を見た事などないのだから。

「……ま、それはそれとして」

いかげん寮に戻って、大浴場で汚れを落として休まなければ。

特訓と治療で体力は極端に落ちているし、ソウゴとの訓練が三日に一回なってしまう以上、間の二日間で他に何か出来る事を考える必要がある。

そのためにも、消費した体力は少しでも回復しないといけない。

自然と進める足は速くなり、寮まであと少しという所で――

その異変は起きた。

「――っ」

驚愕に、足を止める。

一緒に息まで止まっていた。

最初に起きた変化は、月光と夜闇の消失。

空は淀んだ桃色の靄に覆われ、太陽や月という光源も見えないのに、周囲は昼間のように明るくなっていた。

それ以外には、景色に特別な変化はない。

遠い背後には先ほど出てきたばかりの学園の校舎は在るし、前方にも目的地である寮は当然のように建っている。

だが――違う。

決定的に異質だ。

何故なら……人の気配がないのだ。

ほとんどの候補生が戻っているはずの寮からは、人の気配は一切しない。事実、あの内部には誰も居ないだろう。どこも朽ちてなどいないのに、それはまるで廃墟のような趣があった。

だから、これはフウガの帰ろうとした寮ではない。

それを綺麗にそっくりと模倣した偽者。

寮も背後の校舎も踏みしめる地面も全て偽り。

つまりは。

「――〈異界〉、なのか……!？」

フウガは驚きから抜け出せないままに、その正体を口にする。

〈異界〉。

それは、中級から上級に値する妖魔だけが駆使する〈妖術〉の名称である。

簡単に説明すれば、自身の居る場所とは異なる、限定された空間を一時的に創り出し、そこに狙った敵を引き摺り込む術。

自ら創り上げた世界なのだから、当然、創り出した本人にとっては力を発揮するには非常に有利な空間であり、逆に引き摺り込まれた者は相手の手の内に入ってしまったのと同義だ。

この術を回避するのは難しく、それこそ上級妖魔と戦おうというのならば、まず〈異界〉に入る事は覚悟しないといけないと言われている。

一旦、〈異界〉に入ってしまった者が脱出するには、外部からの助けを期待するか、特殊な〈言力〉で〈異界〉そのものに干渉するか——もしくは、それを創り上げた妖魔自体を倒す以外にはない。だが、外側からならまだしも、檻のようなものである〈異界〉に中から干渉し脱出するなどというものは超がつく高等技術だ。そんな事が可能な〈言力師〉などヤマトの中でも指で数えられる程しか存在しないだろう。

故に、外からの助けが期待できなければ脱出は、〈異界〉を展開した妖魔本人を倒すが常套だ。

おそらく今のフウガの状況は、それに当てはまる。

夜の学園。

まさか騎士を育成するという戦う者だらけの場所に妖魔が侵入し、〈異界〉などを広げたなど、誰だって夢にも思わないだろう。

だから、少なくともすぐに助けはない。

誰かが異常に気づくまでには、例えば昼間であったとしても時間が掛かり過ぎる。

しかし——

「何でだ？ どうして妖魔が学園に侵入するなんて事をして、しかも、〈異界〉に俺を取り込む……？」

そう、理由がわからないのだ。

こんな事は無謀で、本当に意味などない。

いくら〈異界〉といっても、所詮は一時的ものであるため外界からの隔たりはさほど大きくない。内部で派手に戦えば、外に何かしらの物音や影響が出る事も多い。

故に、例えばここでフウガを殺め喰らったとしても、さすがにそれまでには教官の誰かが異変に気づく可能性は高いだろうし、そうなれば妖魔は見つけ出され、囲まれ、排除される。

つまり、リスクが大き過ぎるのだ。

いや、もしもこれを行ったのが上級妖魔ともなれば、目的を達した後、退避するのも存外に容易いかもしれない。だが、だとしても

こんな手間が掛かる事までして、フウガを——学園の候補生などという逆に引っ掻かれかねない獲物を狙う必要はない。

人気のない場所に戦う力のない人間を誘き寄せ、襲う。

知能が高い中級から上級の妖魔は、普通はそういう手段しか取らず、獣並みの下級妖魔でさえ、本能で危険な場所は察知して近づく事はないのだ。

だからこそ妖魔は人間の天敵と呼ばれる。

そういう意味でも、やはり今の状況は不可解であった。

「……まあ、わからない事を考えても仕方ないか。ともかく〈異界〉に入ってしまった以上は原因の妖魔を探すしかない」

混乱しそうな思考を必死に纏め、フウガはなんとか冷静な判断を導き出す。

『ふむ、妥当な対処だな』

念話で響いたオロチの声に、フウガは眉をひそめる。

「おい、一応、訊いておくがお前の仕業じゃないだろうな」

『まさか。こんな無駄な事をして、それでなくても少ない妖力を消費しても仕方あるまいに』

返って来たオロチの答えは、思いのほか真剣だった。

……どうやら嘘は言っていないらしい。

「——そうかよ。だったら、やはり探すし、か——」
そこで。

フウガはようやく、最後の異変に気づいていた。

「……サワメ、先輩と……ハニヤ先輩達……？」

呆然と視線を送った先。

寮へと続く道には。

確かにサワメ・ナキとハニヤ姉妹本人達が佇んでいた。

その手には己の〈真名武具〉を携え。

紛れもない殺意と憎悪を瞳に宿して——。

「先輩達、どうしてこんな所に……？　まさか先輩達も一緒に〈異界〉に取り込まれたんですか？」

問いながらも、フウガは歩み寄らない。

彼女達の様子がおかしい事など、とうに気づいている。

だから、近づかない。

いや、近づくな、と本能に近い何かが全力で警告を発している。

『……………』

三人は、誰一人口を開かなかった。

ただただ、フウガを負の感情に塗れた視線で射抜く。

「……………っ」

——どうしたというのだろう。

確かに彼女達は、フウガを忌々しく思っていただろうし、見下してもいた。

だが、あそこまで暗いものを向けてきてはいなかったはずなのに。
瞬間。

フウガにはどちらがどちらなのか判断がついていないが——ナキの右側に立っている姉のスビコの右腕が動いた。

翻る得物は、妹と全く同じ形状の漆黒の鞭。

「蛇鞭、彼方へ伸び、弾け」

眩かれる〈具言〉。

彼女とフウガの間合いは、およそ五メートル。

どう考えても鞭など届く距離ではなかったが、発動した〈言力〉はそんな常識など当然の如く破壊する。

「っ！」

フウガは、咄嗟に後方に跳び退さる。

間合いを超越した鞭は、先ほどまで少年の立っていた地面を抉り、弾き飛ばした。

舞い上がり、ぱらぱらと落ちる土の破片。

「……………」

その音を聞きながら、フウガは険しい顔でいきなり襲ってきた双子の片割れを無言で見据える。

もしも避けていなければ、死にはしなかったにしても、確実に両足の機能は奪われていた。

そんな容赦のない一撃。

間違いない。

彼女達は——こちらを殺す気にいる。

その事実が背筋が凍るような寒気を覚え、

『フウガ』

そこにオロチの声が割って入った。

「っ、なんだ！　今はお前の戯言に付き合う余裕は——」

『話など無駄だ。あの娘達、〈妖術〉に掛けられているぞ』

「っ……………」

オロチの言葉に、フウガは僅かに目を見開いた後、切れて血が滲み出すほどの強さで唇を噛む。

ああ、そんな事は予想していた。

この〈異界〉は妖魔の仕業。

なら、そこに様子がおかしい人間が姿を見せれば、すでに妖魔の毒牙に掛かってしまった可能性を考慮しないわけがない。

それでも。

そんな許せない事は否定したかったから、彼女達に話し掛けたのだ。

だが、そんな淡い希望など、泡の如くあっさりと消えた。

「……助ける方法は？」

余計な事など口にせず、フウガは要件だけをオロチに問う。

〈妖術〉による洗脳ならば、妖魔であるオロチの方が詳しいのは必然だ。

フウガからすれば、妖魔に頼るなどという行為は死んでもごめんだったのだが、事は自分だけものでなく、少女達の命も掛かっている。

ならば今は、そんな嫌悪感など後回しにするしかない。

『そうだな。あれはおそらくは娘達の内に存在する何かしらの負の感情を増幅する事で対象を支配しているのだろう。だが、幸いその侵食は浅いもののようなのだ。確証はないが、意識さえ失わせれば術が解ける可能性は高い』

「……………え？」

正直、そんなに素直に答えるなどとは思ってはいなかったフウガは一瞬、呆気にとられる。オロチの答えは少年の予想に反して、真面目で納得のいくものだったのだ。

『どうした？ 訊いてきたのはお前の方だろう？』

「……………いや、いい。気にするな」

『ふむ、そうか。……では続きだが、どうやら術を掛けた者は、本気で娘達を手駒にするつもりはなかったのだろうな。そうでなければ、あんな軽い洗脳で済ますはずがない。良い気分のする想像ではないが——やった妖魔からすれば遊びのようなものか』

「遊び……………」

湧き上がった激しい怒りに一瞬、目の前が真っ白になった。

ぎりつと歯を噛みしめる。

人と思うままに操り、誰かを殺させる。

例えば自分以外の誰かの意思だとしても、手を下すのは操られた彼女達本人であり、血に汚れるのも、罪を被る事になるのも彼女達。

仕向けた本人は、それを遠くから眺め、嘲笑う。

そんな。

そんな非道な事を、この〈異界〉を創った妖魔は、遊ぶような感覚でしようとしているのか。

「ふざ、けるな……………」

唸り、腰の後ろ鞘から愛剣である二対の得物を引き抜く。

こちらの戦う意志を感じ取ったのか、対峙する少女達も動きを見せる。

ナキの左右に控えていた双子がそれぞれ移動し、一定の距離を保

ったままフウガの両脇に立つ。ナキは最初と同じ場所で――彼女の〈真名武具〉なのだろう――細い棒のような一振りの刺突剣を手にしたまま一歩として動かなかった。

あれが、彼女達の得意とする陣形なのかもしれない。

例え操られていたとしても、頭と身体が覚えた経験が彼女達を動かしている。

フウガを殺すために。

「……………」

静かに深呼吸をする。

怒りで熱を持った頭を少しでも冷却し、心を落ち着ける。

今から為そうとする事は激情に囚われていては、決して達成できないからだ。

フウガは、彼女達を倒す。

それはもちろん殺すという意味ではない。

気絶させ、〈妖術〉を解くだけだ。

出来る限り、傷つけたくはなかった。

ナキ達とは決して良好な関係などとは言えなかったが、フウガ自身は決して彼女達を嫌ってなどいない。

フウガを邪魔者のように扱うのはウズメを心から慕っているからこそだし、見下した態度を取るのは名門貴族の人間であるという事に誇りを持っているからだろう。

やり過ぎの感はあるが、言動自体は理解できないものではなく、彼女達の芯が純粹故の過剰なのだと思う。

そして、何より。

そんな風を感じる理由はわからなかったが、家族でもない他者に一途な想いを向けられるという彼女達が、何故か酷く羨ましかったのだ。そんなものは、人間なら当たり前だと理解していても。

だから、フウガは彼女達が嫌いではない。

胸に在るそんな事実を確かめ、フウガは戦いに備え、腰を落としていく。

すでに〈異界〉として模倣された学園の敷地には、緊張と殺気の入り混じった空気が呼吸すら困難にするほどに満たされていた。

頬に、冷たい汗が一筋流れる。

フウガが目指すのは、ナキ達を可能な限り無傷で無力化する事。

しかし、それは奇跡にすら肉薄する、酷く困難な行為でもある。

単純に相手の命を絶つと事と、傷つけないように無力化する事では、その難易度の違いは比べるべくもないからだ。

しかも、相手は三人。

ライとゴウタに聞いた所によれば、ナキ達の階位はB。壱から参のどれかまではわからないが、つまりは学園内でも有数の手練れであるという事である。

もう一度言うが、それが三人なのだ。

ウズメの言葉を信じて、フウガの実力がAに至っているととしても、それは例え一対一でさえ決定的な実力差ではなく、状況の悪さは何も変わらない。

さらに悪い条件は、もう一つ。

今のフウガは著しく疲労している。

特訓と治療による体力の消費。

おそらく使える〈言力〉は基本の〈龍身〉ぐらいで、それも長時間は無理。身体もほとんどの怪我は治療されたとはいえ、万全とはほど遠い。

数の不利を覚悟で、実力も有利というにはあまり心許ない差しかない相手を三人、傷つき疲労した身体で無傷で無力化する。

そんなものは、ほとんど自殺行為だ。

——でも、やるしかない。

やるしかないのだ。

何故なら、スサノ・フウガはそれを為すと決意してしまったし、何より——

自分ハそウいう存……ザ……ざざざい、イイイ……!!? ?

——何か。

脳裏に、声が聞こえた。

「……………」

血が滲み出すほど剣を持つ手に力を込めて、雑念を振り払う。

今は余計な事を考える余裕はない。

目的を達成するために必要な事だけ思考し、他一切を遮断する。

ナキ達の纏う殺気は濃密になり、もはや臨界を越えようとしている。

明確な行動を起こすのは、すぐ。

集中しろ。

集中しろ。

集中しろ。

限界など二つ三つ越えなければ、ただ自分は無駄死にするだけだ。そうすればナキ達に、まだ背負う必要のない罪を背負わせる事になる。

神聖騎士になれば、いずれ誰かの命を奪う事を覚悟しないといけないとしても、それは今ではないし、こんな形ではないはずだ。

故に許さない。

こんな事は許さない。

左右にきっちり五メートルの距離を保ったままの双子が、同時に右と左——鞭を手にした自身の利き手を持ち上げ、

「蛇鞭、彼方へ伸び、喰らいつけ」

戦闘開始の宣告となる、全く同一の〈具言〉を綺麗に重ねて紡いだ。

三章 純白の憎悪とひび割れる平穏 その五（後書き）

お読み頂きありがとうございました。

三章 純白の憎悪とひび割れる平穩 その六

左右から、同時。

鞭は、それこそ蛇の如くうねって襲い掛かってきた。

双子の〈言力〉は、本来は三メートルもないだろう鞭の長さを倍以上にまで伸ばしている。しかも、振るう度にそれは微妙に変化し、フウガに正確な間合いを計らせない。

「くっ——！」

すかさず〈龍身〉を発動させたフウガは、必死に身を捌き続ける。躲して躲して躲して躲して、躲し切れないものは剣で弾き、防ぎ、そしてまた躲す——

一時すら足を止める事をしない。

いや、止める事が出来ない。

体力も不足し、万全でない身体は、最初から悲鳴を上げ続けている。

息は激しく切れ、一步ごと一步ごとに足は重くなっていく。

それでも、止まれなかった。

傍から見る者からすれば、少年の姿は、巧みに舞う二匹の蛇に追いつ込まれる哀れな獲物とでも映った事だろう。

だが、この戦いは訓練でもないし、〈鍊守結界〉内でもない。

どんな一撃が致命傷になるかわからないし、死んでしまえばそこで終わりだ。だから、例え無様に見られようが、必死にひたすらに無我夢中で攻撃を躲し続ける。

ただ、双子の鞭自体は、さして攻撃力はなかった。

鞭はフウガに傷を負わせる事より、縛り上げて動きを封じる事を念頭に振るわれているからだ。だが逆に言えば、一度捕らわれてしまえば、一瞬で完全に足を止められてしまうだろう。

そして、そうなれば——

「——っ、来る」

鞭を躲し続けながらも、ずっと注意を払っていた人物からの殺気の高まりを感じ、フウガは僅かにそちらに視線を送る。

その相手は、当然、ナキだ。

彼女は刺突剣の切っ先を真っ直ぐにフウガへと向け、後方へと引いていた。同時に大量のプラナがその身へと汲み上げられていく。

集った世界の息吹は、全て剣の刀身へ。

「一心——」

〈具言〉が——世界への願いが乞われる。

同時に剣が眩い破壊の光を放ち、

「——貫き、殺せ」

斬るという行為を排除し、貫く事だけに特化した刃が突き出される！

瞬間。

その突きの延長線上の空間を、細く圧縮された光の奔流が真っ直ぐに貫いた。

光線が向かう先は、フウガの左胸——人体の急所の一つ、心臓。

「————っ！！！」

圧倒的な死の感触が、フウガの肌を撫でた。

纏わりつく二本の鞭を半ば強引に弾き、渾身の力で後ろ斜めに身を捻りながら跳躍する。

まさに紙一重。

ほんの一瞬前までフウガの左胸のあった場所を、細長い閃光が穿つと、遙か後方にまで伸びていき、すぐに見えなくなった。

「っ、はあ——！」

地面を足で抉りながら、フウガは跳躍の勢いを殺す。

一撃は胸を掠めていたのか、どろりと赤い血が服を塗らしていた。体勢と整え、素早く鞭の追撃に備える。

だが、幸いな事にハニヤ姉妹の方も持久力に一旦限界がきたのか、鞭を手元に戻していた。ナキの方も一撃必殺の突きを放った直後のため、まだ次の行動には移れていない。

「……はあっ……はっ……はあっ……！」

この僅かな間隙に、フウガは必死に息を整える。

ナキ達は、またすぐに攻撃を再開するだろう。

しかし、

（このままじゃ……駄目だ）

そもそも長期戦に耐えられる体調ではないのだ。

こんな防戦一方では、すぐに終わりが来る。

無謀でも何でも、特攻じみた方法で一瞬で蹴りをつけなければ、

こちらの勝利は有り得ない。

「……どのみちこの戦い自体が自殺行為みたいなものなんだ。やるだけやってやるさ」

覚悟は、思いのほかあっさりと決まる。

おそらくは後がない事を、頭の中だけでなく、頭頂から爪先まで身体が嫌と言うほど理解しているからだろう。

フウガの移動した位置に合わせて、三人の少女は動き、陣形を整える。

左右にきっちり五メートルほど離れた位置に双子、同じ程度の間合いで前方にナキが一人。

……よく考えられているものだ。

この位置関係なら、直線的なナキの攻撃が双子に当たる危険は少ないし、左右の死角から同時に襲ってくるハニヤ姉妹の鞭は、躲すのも防ぐのも至難の業だ。さらに双子は間合いを無視する鞭で、ナキへの敵の接近を防ぐと同時に束縛し、それが成ればナキが必殺する。もしも敵が双子の片割れを先に潰そうと動いたとしても、注意を削いだナキからの攻撃は躲せず死ぬだけだろう。

だが、それは逆に考えれば。

三人の内、一人でも倒せれば、この陣形は容易く崩れるという事。

そうなれば間違いなく逆転の好機となるはずだ。

フウガが狙うのは当然それで、まず最初に倒すのは――

「……………」

ナキを真っ直ぐに見据える。

彼女は必殺の一撃こそ持っているが、威力がある分、攻撃の軌道は単純で読み易いし、一度躲してしまえば隙だらけだ。何より、左右という真逆の位置で距離を保たれる以上、同時に倒す事はほぼ不可能な双子は、ナキが健在な限りは狙う事は出来ない。

「蛇鞭——」

再び双子が動く。

最初に倒す相手は決まった。

フウガは〈龍身〉の流れを足元へと集中させる。

つまり、脚力のみを重点に置いた身体能力強化。

ナキを狙うならば、まずは双子の鞭を振り切る必要がある。

「——彼方へ伸び、喰らいつけ」

そして、二匹の蛇が奔った。

唸る鞭は、振るう前以上のリーチとなって獲物を捕らえんとする。

（まだだ……）

蛇の顎が迫る中、フウガは動かない。

すぐに動いては捉えられる。

（まだまだまだ……）

ぎりぎりまで引きつけ、今まさに喰らいつかんとした刹那。

「——っ！」

足に溜めに溜めた力を爆発させた。

後方に吹き飛ぶ土塊。

残像すら残しながらの急加速。

蛇を連想させる二本の鞭は敵を見失い、空を薙いだ。

だが、その隙も長くはない。

ハニヤ姉妹は、すぐに追撃をしてくるだろう。

それまでにナキを仕留める——出来なければ、もはや〈龍身〉を保つ体力すら、数秒も待たずに尽きようとしているフウガに待つ運命は死だけだ。

ナキへの間合いが瞬きの間に詰まっていく。

——時間は緩やかに。

徐々に近づくナキはすでに弦を引き絞る弓のように、刺突剣を後ろに引いていた。

あちらとて、自身が狙われる事は百も承知なのだろう。〈具言〉が紡がれ、貫殺の一撃は、刹那の後に放たれようとしている。

思考が雷鳴のように、フウガの脳裏で走った。

——自ら高速で接近しながら、敵の突きを回避する。

そんな神業を可能にするならば、向こうがこちらのどの部分を狙っているかを正確に読んでいなければならない。

頭部か、首か、再び心臓か——もしくは、それ以外の急所か。あえてここで必殺を狙わず、足だけ止め、後で確実に止めを刺そうとする可能性だってあるだろう。

どこだどこだどこだどこだどこだどこだ？

考える時間はない。

相手の視線、体勢、腕や足、剣先の動き——それらの情報から直感的に判断しろ。

思考を回すのではなく、何よりも速く奔らせ、行動に直結させる。

(———)

駄目だ、迷いが——

———心臓だ。

「っ！」

その声が誰のものかとか、それが正しいかとか、今更間に合うのかとか、そんな事を考えるよりも速く身体が動いた。

「ぐうつっ！——！」

速度を緩める事なく前に向かう身体を強引に斜めにずらす。

相手の突きは直線かつ、破壊を為すのは極小の一点のみ。その軌道から僅かでも外れさえすれば、もはや必殺足りえない。

無理な挙動に足の筋肉がぶちぶちと断裂し、骨が今にも折れそう

なほど軋んだ。

それでも身体は、望んだ形に動いてくれた。

一点のみを狙った愚直なまでの閃光は、声の通り心臓狙いだっただけ、左腕の肉を抉るのみに留まる。

「うっ！　おおおおおおおっ！！！！！！！！」

前のめりに倒れるように、剣を突き出した状態のナキの懷に飛び込んだ。

「……………」

次の瞬間。

フウガが左手に持った剣の柄尻が、少女の脇腹を抉っていた。

「……………あ——」

糸の切れた操り人形のようにナキが崩れ落ちる。

フウガは剣を持ったまま地面に手を突くと、反動を利用して跳ねる様に立ち上がり、ほとんど反射的に背後に剣を振るった。

ばちんっとなんかが弾かれる音。

鞭だ。

真っ直ぐに後を追ったが故に、軌道が単純になってしまっていた双子の鞭が、二本一緒にフウガの剣に弾かれたのだ。

それを視界に収めつつ、フウガは剣を二本共捨て、すかさず両腕を伸ばした。不意打ち気味に防がれた二本の鞭は空中で一瞬停止し、無防備だ。故に、いとも容易くフウガの手に掴まれる。

「！！！！」

「こ、のおっ！」

双子が対処に移るよりも速く、フウガは渾身の力を込めて鞭を引く。

手を離す暇もなかったハニヤ姉妹は、同時に体勢を崩して地面に手をついてしまう。

フウガは最後の力を振り絞って、地面を蹴った。

まずは、まだ立ち上がる事も出来ていない妹のスビメへと迫ると、手刀で首の後ろを打って意識を刈り取る。次いで、ようやく膝を立て

てた所だった姉のスビコまで疾駆すると、鞭を振るわれる寸前で同じように昏倒させた。

それで最後だ。

ナキ、スビコ、スビメの三人はほぼ無傷で意識を失い、フウガの〈龍身〉も限界を迎える。

「ぐ、つう……」

苦悶の声を上げ、フウガは数歩よろよろと歩いた後、その場に膝を突いた。

奇跡にも近い所業を為し得た喜びなどない。

限界を越えた疲労で、今にも途切れそうな意識を必死に繋ぎ止める。

酷使した両足はがくがくと振るえ、もう立ち上がる事さえ出来そうになかった。胸と左腕の傷は浅いものの、未だ止まる事なく血が溢れ出している。

「……くそっ……まだ妖魔も倒さなきゃいけないってのに……」

歯噛みする。

なんとかナキ達は救ったものの、代償が大きかった。

もはや今の少年の身体では、どう無理をした所で、到底戦う事など出来ないだろう。

『無理をせん事だ。とりあえず動くなら止血をしてからだろう』

「……………」

『？ 何だ？』

「……………いや」

あのととき、フウガの迷いを振り払った声は、間違いなくオロチのものだったはずだ。

だが、素直に礼を言うのも癪で、無言で止血だけを施す。

治癒の〈言力〉としては初歩中の初歩である血止め程度なら、フウガにも扱う事は出来る。

「――よし、これでいいな」

止血を終え、ようやく足の震えも少しは収まり始めた、そのとき

「へえ……。頑張ったのね、フウガ」

そんな満足そうな若い少女の声がその場に響いた。

＊ ＊ ＊

「な……」

顔を上げる。

視界に入ったのは、声の印象の通りの十歳ほどの少女。

髪、瞳、肌、服。

全てが純白。

ただ一つ紅い唇だけが、嬉しそうに笑みで弧を描いている。

その手には、小柄な身体にはあまりに不釣り合いな大鎌が握られ、曲線を描く刃が鈍く怪しい光を放っていた。

『……この娘』

何かを訝しがるようにオロチが呟く。

フウガも、自身の胸中でざわめく何かを感じていた。

（……俺は……この娘を知って……いる……？）

だが、それを確信するには、酷く違和感を覚えた。

知っているのに——“知っているはずがない。”

そんな噛み合わない感覚。

フウガの戸惑う様子を見て、少女がくすくすと愉しそうに笑う。

「でも、そうじゃなきゃね。フウガに簡単に死なれたら、後の楽しみがなくなってしまうもの」

フウガは膝を突いた状態のまま、目付きも鋭く少女を睨む。

「……君は、誰だ。まさか——」

「ええ、そうよ。私が〈異界〉を創り、この娘達を操った張本人」
「……………！」

白を纏う少女は、フウガが啞然とするほどあっさりと己の行った事を認める。

怒りで心が沸騰し、フウガはぎりっと拳を固く握った。

「お前、妖魔なのか……！」

「妖魔？ 失礼ね、私、そんなのじゃないわ」

「嘘を吐くな！」

〈異界〉もナキ達を傀儡にしたのも〈妖術〉。

そして、それを行ったのは、この少女。

ならば、彼女が妖魔である以外の結論が有り得るものか。

「まあ、信じるかどうかは貴方の勝手。正直、そんな事はいつでも良いし。それよりも――」

明らかにその細腕では支える事も出来なさそうな巨大な鎌。

しかし、少女は、それをぶうんと頭上で軽々と回転させ、

「――白花、咲き誇れ」

呟かれたのは、紛れもなく力に在る言葉――〈具言〉。

〈言力〉を発動させる鍵である世界への願い。

そうして中空に生まれたのは無数の純白の百合だった。

次の瞬間。

花の群れは、飛来してきた矢のような速度でフウガの周囲へと降り落ち、鋼の如き強靱な茎で次々と地面に突き刺さる。

だが、フウガ自身には一本足りとも刺さってはいなかった。少年を避けて、周りだけが綺麗に白花に覆われている。

「――」

フウガは一步も動けない。

身体が重いつか、足が動かないというそういう話ではなかった。寸前まで全く発動を悟らせなかった洗練された少女の〈言力〉。

さらに妖魔であるはずの彼女がそれを操ったという驚愕で動けなかったのだ。

妖魔にとって〈妖術〉が彼ら特有のものであるように、〈言力〉は人間のみが操れる術で、決して妖魔には扱えない。

何故なら、そもそも人間とは、生命としての成り立ち自体が異なる妖魔は、〈人界〉にのみ在る〈龍脈〉との繋がりを持たないのだ。〈龍脈〉との繋がりがなければ、プラナを汲み上げる事も出来ず、当然、〈言力〉を扱う事など不可能だ。
なのに。

そのはずなのに。

この妖魔であるはずの少女は、さも呼吸をするような気軽さで〈言力〉を行使してみせたのだ。

「何でだ……？ 何故……」

呆然としつつも、意識は自然と数メートル後方にある自身の剣へと向いていた。

六メートル……いや、七メートルはあるだろうか。

〈龍身〉すら使えず、足はまともに動かない。

果たして、この状態で眼前の少女を出し抜いて、あそこまで行け

「――」

思考は、背筋が凍りつくほどの冷たい感触で遮られた。

気づけば、首には鎌の刃がぴたりと押し当てられている。

いつ少女が動いたかすら、わからなかった。

「無駄よ。余計な真似をする前に、私が貴方の首を刎ねるもの」

「……………くっ」

指一つ動かせなかった。

少女の言葉は脅しではない。

それを確信させるぐらいの殺意と憎しみが声には内包されていた。

「フウガ……貴方を心から愛しているの。」

そして、それと同じくらい憎くて憎くて堪らないの。

だから――ここで哀れに死んでくれる？」

声音は、とても優しく。

その幼い容姿にそぐわぬ熱を帯びて。

――沈黙が落ちる。

フウガは声すら出せず、少女もただ冷たい眼差しでこちらを見下ろしている。

必死にこの危機を脱する手段を考えるが、何一つ思いつかなかった。

あまりに自身の状態も状況も悪過ぎる。

このままでは間違いなく殺され――と。

「なーんてね。冗談よ」

突然、少女は殺意も憎しみも収めて、あっさりと鎌を首から離れた。

これにフウガは、呆氣に取られる。

「……………どういう、つもりだ？」

「さっきも言ったでしょう？　ここで、貴方を殺したら楽しみがなくなるの。貴方には今後、私の掌の上で散々もがいて苦しんで、それでも生き残って――最後の最後に絶望に抱かれたまま私の手で殺される。だから…………その日が来るまでは生かしておくのよ」

「……………」

本氣だ。

この正体の知れぬ少女は、そんな馬鹿げた事を本氣で口にしていった。

「さあて…………」

少女は相変わらず軽々と片手で大鎌を持ち上げると、唇に指を当てて笑んだ。

「それじゃあね、フウガ。私はもう行くわ。この先、貴方に苦しんでもらうため、いろんな奴にちよっかい掛けさせるけど、私に殺されるまで死んじゃ駄目よ？」

「……………」

――止める事は出来ない。

今の自分は、見逃されただけの無力な獲物だ。

だから、黙って少女が去るのを見守る事しか出来なかった。

しかし、その前に。

一つだけ訊かねばならない事があった。

「――待て！　最後に教えろ。お前は……お前は何者なんだ……！？」

「私？　そうね、名前くらいは言い残しておこうかしら――って、そういえば自分の名前とか考えてなかったわ」

少女は困ったように首を傾げ、数瞬、考え込む様子を見せた後、

「――シラユリ……そう、私はシラユリ。忘れないでね、フウガ」と、そう名乗った。

「……シラユリ」

フウガは、口の中で小さくその名を反芻する。

その前で、少女の周囲を白い花卉が舞い出す。

白の帳は、ゆっくりと――だが、次第に速度を上げつつ旋回し始める。

回る毎に花卉は数を急速に増やしていき、シラユリの姿を覆い隠していった。

「愛しているわ、フウガ。誰よりも。狂おしいまでに。……また必ず会いましょう――」

舞う踊る花卉と共に、少女の姿が消える。

愛とも憎しみとも取れぬ響きを持った声と共に。

同時に、周囲に刺さった花も〈異界〉も消え去っていた。

夜闇も月光も――世界の在り方は全て元に戻り、夜の静寂だけが辺りを包んでいる。

「……………」

ふわり、と。

何かがフウガの足元に舞い落ちた。

――白い。

唯一つ残った、どこまでも白い百合の花卉だった。

三章 純白の憎悪とひび割れる平穏 その六（後書き）

お読み頂きありがとうございました。

四章 その悪夢、甘美に傷を抉り その一

「サワメ・ナキ、そしてハニヤ・スビコ、スビメの三名には、目立った怪我もなく、〈妖術〉による洗脳の後遺症もなし。問題なく明日には復帰可能。比較的重傷だったスサノ・フウガも数日以内には快復するだろう——というのがスクナ先生の判断です、学園長」

早朝の学園長室。

そう部屋の主に告げたのは、細長の眼鏡を掛けた伶俐な空気を纏う一人の男だった。年の頃は三十代前半。整った風貌からもその生真面目な性格が覗える。

タワラ・ミチザネ。

第一ヒノカワカミ学園の教頭として、シズネの補佐を務める人物である。

教官を含めて、ほとんどが〈言力師〉であり、戦う者ばかりの学園において、数少ない事務能力のみで雇用されたのが彼だった。

「……そうですか。その程度で済んだのは本当に幸いでしたね」

椅子に深く腰を沈めながら、シズネは安堵の吐息を吐く。

昨夜。

フウガが正体不明の少女により展開された〈異界〉に引き摺り込まれ、〈妖術〉で操られたナキ達に襲撃されたのだ。

しかし、フウガの活躍によりナキ達は無事に術を解かれると、〈異界〉も閉じられ、駆けつけた教官達に四人は保護された。

今は全員がヒナコの治療を受けて後、寮で休んでいるはずだ。

奇跡的に、命を落とすような犠牲者は誰も出なかった。
だが。

「スサノの話によると——シラユリ……でしたか。学園内で〈異界〉などを展開し、候補生に手を出した許しがたい妖魔の名は」

机の向こうで姿勢良く立つミチザネが感情を抑えた低い声で言う。
シズネは思案するように、目を伏せた。

「妖魔……ですか。しかし、彼女は〈言力〉を操ったとも聞きました。確かに〈異界〉は妖魔特有のものですが、逆に〈言力〉は人間特有のもの——妖魔には決して扱えません」

「そんなもの、〈妖術〉をそれらしく見せただけかもしれないではないですか」

「どうでしょうね……。〈言力〉を発動するなら、必ず〈龍脈〉よりプラナを汲み上げる事になる。スサノ君もそれを感じたから、シラユリという者が〈言力〉使ったと判断したはずです」

「……………。ですが、そうならばシラユリは何者なのか。本来、両立出来ない力を扱うなど……」

目を歪め、眼鏡を指で押し上げながらミチザネがこぼす。

学園内で好き放題を許した上に、その者の正体が掴めぬ事が不愉快でならないらしい。

シズネは静かに頭を振る。

「わかりません。人間と〈妖魔〉の混血は数少ないながらも存在しますが、彼らは迫害を恐れて人前にはまず出てこない上、〈妖術〉と〈言力〉のどちらも操るなど聞いた事がない。——唯一、わかっている事があるとすれば……」

「シラユリがスサノを狙っている——という事ですか」

「ええ、彼女の言葉を信じるなら……という条件つきですが。どちらにしろ、今後も彼女がこの学園内で何かしら行動を起こす事是否定出来ないでしょうね」

ミチザネが眉根を寄せながら、顎に手をやる。

「スサノに狙われる心当たりでもあれば、少しは相手の正体の想像も出来ようものなのですが……」

「しかし、彼本人はそれが無いと言っている以上、仕方ないですよ。今はわかっている事だけで、出来る限りの対処をするしかありません」

ミチザネは目を閉じ、しばし思案した様子を見せた後、納得したように頷く。

「――確かにそれが最善ですか。では、教官、候補生共に警告を発し、特に教官陣には常に学園内とスサノの周囲を警戒させましょう」シズネもその判断に同意し、さらに付け加える。

「スサノ君の警護なら、シンラン教官とミカツチ教官が適任でしょう。シンラン教官はスサノ君のクラスの担当ですし、二人共、彼とは個人的に親しいですからね」

「わかりました。では、そのように」

ミチザネは恭しく礼をすると、

「――失礼します」

それ以上は余計な事を口にする事なく、静かな足取りで部屋を退出して行った。

「……………」

その背中が扉の向こうに消えるのを、シズネは無言で見つめる。落ち着いた風に装っているが、ミチザネが内心で強い憤りを覚えている事に彼女は気づいていた。

容姿や言動から、冷たい印象を与える事の多いミチザネだが、あ見えて候補生の事を心から案じている男だ。だからこそ今回の事は、未然に防げなかった自分自身の不甲斐なさを含めて、忸怩たるものがあるのだろう。

そして。

それはシズネとて同じ事だ。

「正体の知れぬ少女……彼女はスサノ君を狙う、ですか」
独り呟く。

タイミング的に、一時はオロチとの関連も考えたが本人はそれを否定し、シラユリの言動からもその可能性は高くなさそうだった。

あくまで彼女は、フウガに執着している。

殺せたはずなのに、あえて生かしたという事実が逆にそれを告げているように思えた。

だが、その目的の経過で他の候補生が巻き込まれる可能性がある限りは、フウガだけに気を配るわけにはいかず、学園全体の警戒は

決して怠れない。

何より。

「……“敵”の背景が掴めない以上、今は後手に回るしかありませんか」

そう——敵だ。

この学園と、そこで生活する候補生達に危害を加えようというのなら、それ以外には有り得ない。

ならば、全力を持ってその存在を排除するだけ。

「今の状況では少なからず自由を許してしまうとしても——それがいつまでも続くとは思わない事です」

シズネはかつての騎士として顔を僅かに覗かせ。

未だ正体わからぬシラユリと名乗る少女へと決然とそう告げたのだった。

◇ ◇ ◇

「……………おはようす……」

朝。

青空の広がる爽やかな陽気の中。

黒くどんよりとした空気を背後に背負いながら教室に姿を見せた少年に、ライとゴウタは目を丸くする。

「ど、どうしたんや、フウちゃん？ 病み上がりとはいえ、がっつり休んだ後なんやから、もうちょい爽やかに朝を迎えようや」

「確かに。それじゃあ余命三日とか告げられた重病人みたいだ」

久々に顔を合わせた二人の親友の、心配しているのかそうでないのかよくわからない台詞に、フウガは重い溜息で応える。

「仕方ないだろ。いろいろ悩む事があったし、貴重な時間を大幅に無駄にしたんだ。気落ちするのかもしれないじゃないか」

あのシラユリを名乗る白の少女の襲撃より、すでに四日。

ようやく全快を果たしたフウガは久々の学園への登校を迎えた所

だった。

教頭のミチザネにより――内容の程度はともかくとして――学園全体に襲撃の事実は伝えられている。なので、朝から〈三の風〉クルスの教室も僅かな緊張感を含んでいた。

いつシラユリが行動を起こすともわからないのだからそれも無理のない事だ。だが、それでも皆がほとんど普段と変わらぬ態度を崩さないのは、さすがは腐っても騎士候補生という所だろう。

ゴウタが考え込むように首を捻る。

「悩む事って、フウちゃんを狙って来たっていうシラユリとかいう娘の事か？」

途端、フウガは表情を引き締めた。

「！ 何で、その事を？！ あいつが俺を狙ってたっていうのは、他の候補生には伏せるって教頭から聞いてたぞ」

「ああ、フウガの周囲の人間は知っておいた方が良いつて僕達は特別にね。タマヨリにナスノも――あと、ツクヨミ先輩も聞いているはずだよ」

相変わらず落ち着いた口調で、ライが補足する。

これに得心して、フウガは強張っていた顔を緩めた。

確かに、それは当然の対処だろう。

シラユリがフウガを狙っているのなら、自分に近い人間にその事を伝えていなければ、何の心構えのないまま襲撃に巻き込まれかねない。

しかし、ウズメにまで伝えている辺り、教頭のミチザネは抜け目がなかった。

「……そういう事か。全く脅かさないでくれよ」

そう言って、自身の席に着こうとして――

「……………なあ、これは何だ？」

自身の机の上にある不自然な物を発見し、首を傾げた。

それにゴウタがおかしそうに笑うと、

「ああ、ようやく気づいたんや。それが何かは内容を確認めれば、

すぐにわかると思うで？」

などと意味在り気な事を言ってくる。

「……………」

フウガは無言で手を伸ばすと、“それ”を手にとった。

一言で言えば、それは他愛のないただの紙。

ただし紙は紙でも——手紙である。

何の装飾もない白い封筒に、中に入っている便箋も味気ないただの白。

その中央に一言、やけに上品かつ丁寧な文字で、

——感謝しておきます！

と、書かれている。

差出人の名前はない。

ただ、それだけが記されていた。

「えーと……一体、誰がどうして誰に感謝してるんだ？」

「相手は当然、フウガ。手紙を出した人物とその理由は、ここ数日の出来事を思い返せば自然と思い至ると思うけどな」

「……………ふーむ」

ライの言葉に従い、フウガは自分の記憶を探る。

ここ最近で誰かに——しかも、こんな遠まわしな形で礼を言うような人間に感謝されるような事をしただろうか？

——が。

よくよく考えてみれば、そんな人物は“彼女達”しかいなかった。

「……サワメ先輩とハニヤ先輩達、か」

やっと手紙の差出人に気づいたフウガに、ゴウタがけらけらと笑う。

「そういう事や。フウちゃんが来る前に物凄い形相で教室に入ってきたと思ったら、その手紙だけ置いて出て行くから何事かと思ったもんや」

「まあ、先輩らしいといえば先輩らしいんだろうな……」
と、フウガは妙に納得してしまう。

四日前、ナキ達を助けたのは、間違いなくフウガだ。
いくらフウガを見下し、邪険に扱っていたナキ達とて話を聞けば
その事実は否定出来ない。さらに誇り高い貴族の人間として、恩の
ある人間に何一つ感謝の意を示さないのは彼女達の矜持が許さな
かったに違いない。

だが、今までの態度の事もあり、面と向かってはどうしてもそれ
が出来ず、已む無くこんな方法を取ったのだろう。

ただフウガとしては、シラユリが自分を狙っていた以上、ナキ達
を巻き込んでしまったのはこちらであり、礼など言ってもらうのは
本意ではなかったのだが……。

「――何にせよ、誰かを彷彿とさせる素直じゃなさ、だな」

「ああ、タマヨリね」

「それは、もうタマヨリ以外に有り得へんな」

未だ二週間にも届かない付き合いでしかないのに、速攻でライ達
にわかってしまわれる辺り、レナのそれも相当のものらしい。

そんな風に三人が三人、妙な共感に包まれていたとき。

「――スサノ！」

まさか、当の本人が教室に姿を見せようとは誰も思っていなかつ
た。

「タ、タマヨリ!? お前、どうしてここに?」

思わず激しく動揺しながら、フウガは振り向く。

ゴウタとライはすかさず何事もなかったように振舞っていた。こ
の辺りのふてぶしさは、いつまで経ってもこの二人には敵わない。

「何よ、そこまで驚く事?」

「い、いや、気にするな。ちょっと考え事してたから驚いただけだ」

「……………? まあ、良いけど」

怪訝な顔をしつつもレナは納得する。そして何を思ったか、フウ
ガを足元から顔まで、やけに念入りに観察して来た。

「……な、何だ？　じろじろと気持ち悪いな」

「ふん……怪我したって聞いたけど、思ったより元気そうじゃない」
レナは鼻を鳴らすと、そんな事をぼそりと口にする。

これにフウガは目をしばたたかせた。

「へ……？　……あ、もしかして心配してくれたのか？」

「……………っ！　ち、違っ！　断じて違う！」

何故か、顔を紅潮させて大きく後退るレナ。

なんとなくフウガは切ない気分になる。

「そんなに全力で否定しなくても良いだろうに……」

「う、うるさい！　あんたが勝手に勘違いするからでしょっ！」

「わかったわかった。悪かったよ。それで、何の用で来たんだ？」

「……………昼休みよ」

「え？」

いきなり小声で言うので聞き取れず、咄嗟にフウガは訊き返す。

途端、

「だから、今日の昼休み！　授業が終わったら第一校舎——この

屋上に来なさい！　ミカヅチとフドウを連れて来ても良いから！

わかったわね！」

ががーっとレナは怒鳴ってくる。

「あ、ああ……」

その勢いに圧されてフウガは気づけば頷いていた。

それを確認すると、レナは「じゃあね！」と、一方的に立ち去って
いってしまう。

フウガ、ライ、ゴウタの三人は、それを呆然と見送った。

「……何やったんや、あれは」

「さあ？」

ゴウタの呟きに、ライがお手上げと言わんばかりに肩を竦める。

正直、フウガも同じ気持ちだ。

「……まあ、言われた通りにしないと後が恐そうだし、昼休みは屋
上に顔を出してみるか」

——と。

そこにレナと入れ替わるように、一人の人物が教室に姿を見せた。これにフウガは、それこそ度肝を抜かれる。

「つ、ツクヨミ先輩!？」

「ああ、フウガ。今日は学園に来ていたのだな」

フウガの顔を見た瞬間、ウズメは心から安堵した表情を見せる。

「え……いや、どうして……?」

「……例の件で君が怪我をして寝込んでいると聞いてな。本当はすぐに見舞いに行きたかったんだが、君は寮で休んでいただろう?」

男子寮は女子禁制だからな。仕方なく断念したんだ。それで今日復帰すると聞いて様子を见に来たんだが……どうやら元気そうだな。良かった」

「あ……はい。おかげさまで。その……わざわざすみません」

思わず恐縮するフウガに、ウズメはくすりと笑う。

「何を謝る事がある。私が君の事を心配するのは当たり前だろう」

「……………ええと……………」

そんな直球な言葉を返されると、フウガには二の句が告げない。

顔が赤くなるのを抑えるので精一杯だった。

そして。

「……………これは……………」

びっしりと額に脂汗が浮かぶ。

今更だが、ウズメの存在は、ここが三年の教室であるという事を除いても、非常に目立つ。さらにこれまでの彼女との経緯もあり、興味深げなライ達や他のクラスメイトの視線が、どうにも気まずかった。

（と、とにかく何か言わなければ……………）

咄嗟に口を開きかけた、その瞬間。

紛れもなくフウガにとって救いとなる、予鈴の鐘が外で鳴り響いた。

それに気づいてウズメは、残念そうに眉尻を下げる。

「む、もう授業が始まるな。……仕方ない」

そして、長い髪を翻して踵を返すと、

「……フウガ、あまり無理をしないようにな」

と最後に気遣うように言い残して、教室を去って行った。

これにフウガはほっと胸を撫で下ろす。

心配してもらったのは素直に嬉しいのだが、この状況と場所では、やはり気がでないのだ。

（それにしても何というか……）

久々に学園に來たと思えばあまりに怒濤の展開である。

気を休める暇もないとは、この事だろうか。

——とは言っても。

オロチに取り憑かれて以来、何だかこういう事ばかりな気もしなくもなかった。

「何とゆーか、フウちゃん、モテモテ？」

「あれだよ。オロチの件の不幸分に比例した幸運が、今になって舞い込んでるんじゃない？」

「……あのな」

フウガは好き勝手な会話を交す親友二人を睨みつけ、

「お前ら……本当にそう思うなら、オロチを譲ってやろうか……？」
半ば本気でそんな事を口にしていた。

——もちろん、あっさり拒否されたのは言うまでもない。

四章 その悪夢、甘美に傷を抉り その一（後書き）

お読み頂きありがとうございました。

四章 その悪夢、甘美に傷を抉り その二

「……………これはまた」

「なんちゅーか」

「かなり予想外の光景だね」

午前の授業を終えての、昼休み。

レナの言葉に従って第一校舎の屋上を訪れたフウガ、ゴウタ、ライの三人は、待ち受けていた物に目を丸くしていた。

「——非常に気になる感想ね、それは」

床にシートを敷いて、そこに座っていたレナが明らかな不満顔で片眉を吊り上げる。

「お、落ちついて、レナちゃん」

同じく隣に腰を下ろすミヨが慌てて親友を宥める。

彼女達の前。

シートの中央には、四角い箱があった。

いわゆる弁当箱である。

しかも、三段重ねの容量十分の代物だ。

弁当箱と言うからには、当然、中にはお馴染みの御握りや卵焼きから始まる色とりどりの料理が詰められており、さらにその脇には、お茶が入っているであろう水筒までもが置いてある。

まさに、屋上での食事のための準備は万端と言った様子だ。

「タマヨリ……お前が俺達を呼んだのは、これのためか？」

どう考えてもあの量は、少女二人で食べられる量ではない。

ならば、フウガ達と一緒に食べるために作ってきたであろうが——しかし、その動機がいまいち掴めなかった。

「そうよ。わざわざ朝から食堂の炊事場を借りて作ってあげたんだから。黙ってありがたく食べなさいっ」

レナは腕を組むと一方的に言って、そっぽを向く。

ただ、そこまで手間を掛けてまで弁当を作った理由は口にしよう

とはしなかった。

「いや、それは素直に礼は言うけど、なんでまた……」
フウガは困った顔で頭を掻く。

それがわからないと、どうも決まりが悪くて、このまま弁当に手をつける気になれなかった。

すると、見かねたミヨがそれを説明してくれる。

「えっと……まだ私達はスサノ君がオロチに取り憑かれた事に対するお詫びをきちんとしていません。だから、それと怪我からの復帰祝いを兼ねて、お弁当を作ろうって言う話になったんです」

「ミ、ミヨ！ わざわざ言わなくても良いのにっ！」

「だって、そうしないとフウガ君達も困っちゃうよ」

「……それはそうかもしれないけど。ああもうっ。とにかくそういう事よ！ わかったら、とっとと食べる！」

改めて、こういう事をするのが照れ臭くて堪らないのか、フウガ達には一切目を合わせず、レナは怒鳴る。

「むう……」

もちろんフウガは、あの件については、もう全く気にはしていない。

だが、二人の方はそうはいかなかったらしい。あの慌てた様子からして、たぶんこれを言い出したのはレナの方だろう。

（意外に義理堅い奴だなあ……）

フウガは思わず良い意味での苦笑を浮かべ、

「――まあ、理由はわかったよ。二人共、ありがとう……せっかく作ってくれたからには食べないわけにはいかないよな」

ようやく納得すると、シートの上に座った。

「そんなら、まあ」

「僕達も」

他の二人もそれに倣い、五人が弁当箱を囲んだ。

と、不意にゴウタが難しい顔で弁当を眺めた。

「これ、一緒に呼んだからには俺らも食べて良いんやろうけど……」

作ったのは全部、タマヨリなんか？」

「あ、いえ。半分は私です」

手を挙げて、ミヨが答える。

「そうなんや。つまり……五分五分か」

ゴウタの呟きに、そっぽを向いていたレナの顔がぐると戻ってくる。

「——そこ。ちょっと待ちなさい。今の台詞はどういう意味かしら？」

「いや、だってナスノはともかく、タマヨリはどう見ても料理は上手そうには見えへんし……食べれるモンになってるんよな？ 塩はしょっぱくて、砂糖は甘いんやで？ ちゃんとわかつとるか？」

「あははは殺すわよ」

にっこりと花のような笑顔で、殺意勧告。

ぎりぎりと握った拳は、今なら岩でも簡単に粉碎しそうな気がした。

「—————ごめんなさい」

ゴウタはだらだらと冷や汗を流しながら、すかさず謝罪する。

本人として軽い冗談だったのだろうが、起こしてはならない鬼を起こしたらしい。

ミヨは笑顔を引きつらせながら、咄嗟にフォローを入れる。

「え、ええと……こう見えてレナちゃんは料理上手ですから平気ですよ」

「こう見えて？」

「あ、いや、違うのっ。意外に——じゃなくて、思いのほかっ」

「全部、同じ意味でしょうが！」

「ご、ごめんなさい——っ」

「……………」

フウガはなんとも言えない複雑な顔で、そんな二人の少女を眺める。

どうやらミヨは、レナとは違った意味で本心を隠すのが苦手な人

間らしい。

「うん、この肉団子美味しい」

「……って、この状況で何故お前は、もう食ってんの!？」

隣のライは、揉めるレナとミヨと、精神的ダメージで項垂れるゴウタを尻目に、すでに弁当に食べ始めていた。

「だって、他人事だし」

「お前な……。そんなんだと、いつか後ろから刺されるぞ」

「大丈夫。タマヨリやナスノと違って、本心を隠しつつ、人間関係を円滑に保つ自信はあるから」

「……どんだけ腹黒だ、お前は」

呆れ果てて、フウガは溜息を吐く。

と、そこに、

『ちなみに、お前は常に苦勞を背負うタイプの人間だな、フウガ』
こういう余計なときだけ、オロチが口を挟んでくる。

「全力でほっとけっ!!!」

つまりは、お人好しという事だ。

正直、そんな事はとくにフウガも自覚済みである。

そうでなければ、自分だって三人を放置して、とっととライと一緒に弁当を食べていただろう。

「……とりあえずタマヨリ、もう機嫌直してくれ。少なくとも俺は、お前が料理下手なんて思ってたぞ。それとゴウタもだ。元氣出せ。あれは単なるお前の失言だろ」

「む……な、何よ。わかってるなら良いけど……」

「優しいなあ、フウちゃん……」

これにレナも憤りを収め、復活したゴウタはわざとらしく泣き真似などしてみせる。これにミヨがほっと胸を撫で下ろしていた。

「大袈裟なんだよ。ほら、早く食べよう」

フウガがそう促すと、ようやくその場は穏やかな昼食な時間へと移行する。

そして、ミヨはともかく、本当に料理が上手かった事がわかった

レナに、フウガ達が驚いていると、誰かが屋上へと上がって来た。

「……おや、フウガじゃないか」

その人物は、フウガ達を見つけると意外そうな声を上げる。

「つて、ツ、ツクヨミ先輩!？」

途端にフウガは、御握りを手にしたまま瞠目する。

そう。

屋上に姿を見せたのは、朝に会ったばかりのウズメだったのだ。

「ど、どうしたんですか、こんな所に……?」

ここは一年から三年までの教室がある第一校舎だ。

もしもウズメが屋上に用があったとしても、普通は四、五年生の教室のある第二校舎の方に行くはずである。

だからこそ、フウガ以外の四人も一緒に驚いた顔をしていた。

フウガに問われて、ウズメは、手に持っていた四角い何かの包みを顔の横に掲げる。

「ああ、いや……食堂だと人目があれでな……。それで昼食だけでも普段は弁当にして、裏をかいて、こっちの屋上で食べるようにしてるんだ」

「……なるほど」

裏をかいて——というのは、たぶん親衛隊の事だ。

彼らは、事ある事にウズメについて回っている。確かにあれでは食堂では食事は取り辛いだろうし、実際、フウガは、昼休みに彼女を食堂で見かけた事は、ほとんどなかった。

だから、こっちの校舎の屋上の方が、五年生であるウズメにとっては親衛隊に見つかりにくく、ゆっくり食事が出来る場所なのだろう。そのために、わざわざ弁当を毎回、用意しているようだった。

(まあ、あの人達も悪気はないんだろうけどな……)

ナキ達も含めて親衛隊は、ウズメに心酔するあまり周りが見えていないのだ。それは以前の騒動で嫌と言うほど思い知っている。

「ああ、そっか。だからツクヨミ先輩、朝早く、私達と同じで食堂の炊事場に居たんですね。いつも昼に食堂で姿を見ないと思ったら、

そんな手間の掛かる事してたんですか」

と、これはレナだ。

祖母であるシズネとの繋がりなのか、この口ぶりからして、彼女はウズメとはすでに既知の間柄らしい。ならば、レナの親友のミヨもそうなのかもしれない。

「まあな。だが、料理はそれなりに好きだし、そんなに手間でもないさ。……しかし、今日はやけに賑やかじゃないか？　どうかしたのか？」

「あ、実は……」

ミヨが、ウズメに手早く今の状況を説明した。

それを聞いたウズメは得心したように何度か頷いた後、

「そうか。だったら、私も一緒に良いかな？　やはり食事は大勢でした方が楽しいからな」

「あ、はい。もちろんですよ」

断る理由もなくて、フウガは快諾する。

「ありがとう」

ウズメは嬉しそうに微笑すると、何故かあえて選んだようにフウガの隣に腰を下ろす。しかも、そこは元々ライが居た場所だ。気を利かせた——というより、たぶん面白半分で、わざと移動して場所を空けたのだ。

「……………あ」

ウズメから漂う、以前と同じ白梅香の香りがふわりとフウガの鼻腔を撫でる。

（……お、落ち着け、俺）

またしても身体が固くなってるのに気づいて、フウガは必死に自分にそう言い聞かせた。こんな事でいちいち緊張していたら、きりがない。

そんな少年の懊悩には気づかず、ウズメは、ライとゴウタの方を見た。

「そちらの二人は、こうやって話すのは初めてだな。……知ってる

とは思うが、ツクヨミ・ウズメだ。よろしく」

「あ、俺はフドウ・ゴウタっす。フウちゃんとは親友で」

「僕はミカヅチ・ライです。フウガとの関係は、右に同じ」

「ミカヅチ？ ああ、ミカヅチ教官の弟の……」

「ええ、そうです」

フヨウの弟が学園の候補生である事は知っていたのか、ウズメは納得したような表情を見せた。

そして、朱色の上品な包みが解かれ、中にあった彼女の弁当箱が露になる。

黒塗りの、さすがはツクヨミ家のご令嬢の使う物だと言った感じの高級感溢れる品物だった。ただ、蓋を空けてみると、意外に中身は庶民的で、レナとミヨの作った物と内容は大差ない。

「そうだ。せっかくだから皆も私の弁当を食べてくれ。代わりに、私もそちらのを少しもらって良いか？」

「あ、そりゃ良いですね！ ぜひそうしましょう！」

これ幸いと言わんばかりに、ゴウタが勝手に了承する。

それでも他の四人も特に異論なかったので、誰も文句は言わなかった。

「じゃ、さっそく……」

ウズメ以外の五人が同時に箸を伸ばし、彼女の料理を口に入れる瞬間。

『！！！……う、美味しい？！！』

これまた五人同時に驚嘆していた。

もはやそれ以外の表現が出来ないほど、素晴らしい味だった。

見た目は普通なのに、中身は最上だったのである。

「そ、そうか……？ いつも通りに作ったただけなんだが……そう言うってもらえると嬉しいな」

ウズメが少し照れ臭そうにはにかむ。

「……私も料理には自信あったのに……これは……」

「完敗、だね……」

少なからずショックだったのか、レナとミヨが項垂れる。

「いやいや、レナ達のも十分に美味しいぞ」

彼女達の弁当を口にしながら、ウズメが言う。

それは世辞ではなく本音なのだろうし、確かにレナ達の弁当も決して不味くはない。だが、

（……先輩の弁当を前にしたら、さすがに霞む……）

しみじみとフウガは思ってしまう。

ただの弁当でこれとは、やはりこの少女は只者ではない。

だが、レナ達の弁当は仮にも自分のために作ってくれたものだ。

やはり今回の所は、そちらを中心に食べようとそう思った所で――

「―――良い匂い」

いきなり背後でそんな呟きが聞こえた。

「ひえっ?!」

普段は決して出せない声を出して、フウガは跳び上がる。

それに皆も驚き、ゴウタなどはお茶を噴き出しそうになっていた。

「だ、誰だ!？」

フウガは慌てて振り向くと、そこには一人の美女が長い銀髪を風で揺らしながら、ぼんやりと立っていた。

「ミ、ミカヅチ教官っ!」

「やあ、姉さん。突然、どうしたの?」

驚くフウガとは違い、相変わらず冷静な弟が声を掛ける。

フヨウは、いつも通りの眠そうな顔のまま答えた。

「……………私はシンラン教官と一緒に、スサノ君の護衛だから」

「あ、ああ、そういうばそうでしたね。でも、だからって何で気配もさせずに背後に立つんですか」

「……………匂いに釣られてたら、いつの間にか」

「犬ですか、あんたは……」

どうやら気配を消したのではなく、単に無意識だっただけらしい。

彼女は非常に羨ましがな視線で、弁当を凝視していた。

「ま、まあ、せっかくですし一緒に食べますか？ 量的にもう一人ぐらい居ても大丈夫でしょうし」

「……………お言葉に甘えて」

フヨウは遠慮など全くせずそう答えると、懷から——常備しているのだろうか——箸を取り出す。

そして、

「……………頂きます」

普段ののんびりした言動からは考えられぬ速度で、ひよいぱくひよいぱくと弁当を口に運んでいく。その速さは驚異的で、瞬く間に弁当の中身は彼女の胃の中に納まっていく。

「は、はやっ！？ お、俺達の分が！！」

「ちょ、ちよつと教官！ セっかくスサノに作ってきたの——じゃなくて！ 一人でそんなにガンガン食べないで下さい！」

これにレナとゴウタが悲鳴を上げる。

ミヨは呆然とその光景を見つめ、ライはいつもの事なのか平然と姉の箸の間隙を縫って、自分も食事を進めていた。

「……………ああ、せっかく一度は騒ぎが収まったってのに」

フウガは頭を抱えた。

またもや昼の屋上は、阿鼻叫喚の大騒ぎである。

『ぬははは。いや、愉快、愉快』

こういう状況は大好きなのか、オロチが楽しげに笑う。

フウガは頭痛すら覚えて、眉間を指で押さえていた。

と。

「————良いものだな、こういうのも」

「え？」

ふと呟いたウズメの言葉に、フウガはきよんとする。

彼女の目はどこか羨まし気に、騒いでいる皆に向けられていた。

「ああ、いや。こんな風に賑やかに誰かと食事を共にするのは、久々だな。少し……………嬉しいんだ」

「……………」

以前にウズメは言っていた。

自分は、名門ツクヨミ家の長女として相応しい振る舞いを心掛けて来た、と。

そのために彼女は、周囲の人間から自然と距離を空けられてきた。おそらく彼女にとってそれは当たり前で、決して辛いとか苦しいとかそういう気持ちはなかったのだろう。

だが、それでも。

寂しいという気持ち、心のどこかになかったはずがない。

人は、どんなときでも独りでは生きていられない生き物なのだから。

「……大丈夫ですよ」

「え……？」

不意に言われて、ウズメが不思議そうに隣のフウガを見る。

フウガは出来る限りの暖かい笑顔を面に浮かべて、言った。

「もう一緒に飯食った以上は、先輩は俺達の友達で仲間ですから。

いつだって、こうやって一緒に居ても良いんです」

「……フウガ」

ウズメは驚いたように目を見開き――

次の瞬間、本当に嬉しそうに微笑んでいた。

「ああ、ありがとう……」

そして、次に少し意地悪な光を瞳に宿す。

「だが、出来れば君とは友達以上で在りたいんだがな」

「えっ？ あ、えっと……それは出来れば保留の方向で……」

「ふふっ」

酷く動揺するフウガに、ウズメは堪え切れなかったように吹き出す。

もうフウガは曖昧な笑みで誤魔化すしかなかった。

――そうだ。

これは、きっと人ならば誰にでも必要で、当たり前前の時間。

大抵の人間ならば求めるまでもなく隣にあるモノ。
でも。

だからこそ、かけがえのない日々。

そんな時間を、完璧だけど、酷く重いものを背負う事を定められたこの少女に、今だけでも過ごして欲しいとフウガは思っていた。

……何故ならば、彼自身も。

そんな暖かい時に救われた一人だから――

結局。

やたらと大人数になった昼食は、大騒ぎのままに幕を閉じた。

弁当をほとんどフヨウに食べられたため、午後はかなり空腹だったものの、今日は少しだけ――それは心地よいものにフウガには思えたのだった。

四章 その悪夢、甘美に傷を抉り その二（後書き）

お読み頂きありがとうございました。

四章 その悪夢、甘美に傷を抉り その三

まるで異質なる者達だけに許された居場所とでもいうように。そこは、世界という名の檻から隔てられた場所だった。

「……えぐいねえ」

椅子に背を預けながら、男はわざとらしく身震いして見せた。年は、三十代の前半辺りか。

彫りの深い顔に、細身ではあるが、しなやかな力強さを感じさせる身体つきをしている。

黒髪に褐色の肌、さらに纏う服まで黒一色でありながら、その瞳だけが血を塗り固めたような紅色だった。

「初っ端にちよっかい掛けさせるのが、“あれ”なのはちよっとキツイんでないかい、姐さんよ」

軽い口調で、豪奢の卓を挟んで対面に座る人物に声を投げる。

それは、黒衣の男とは対照的に白のみで構成された少女。

——シラユリだ。

まるで城の一室を切り出したような明るい、豪華な家具の並ぶ部屋。

しかし、窓から見える景色は桃色の靄で閉ざされ、扉の向こうへ出れば、闇の支配する無骨な洞窟しかない。

シラユリの創り出した〈異界〉である。

いかに〈妖術〉で生み出す偽りの空間と言えど、ここまで思い通りに〈異界〉を構築するのは至難の業である。それはシラユリという少女の力の程を明確に表していた。

彼女はハープ独特の匂いを香り立たせる紅茶の入ったカップを手に取り、唇を湿らせる。

「そうでもないわよ？　ここ数年で彼も随分と腑抜けてしまったようだし、まず最初に昔をしっかりと思い出してもらわなきゃ」

そう言つて、軽やかな音と共にカップを受け皿の上に置く。

一連の動作は、幼い容姿にそぐわぬ優雅さを伴っていた。

男は、やれやれと苦笑する。

「まあ、姐さんがそれで良いなら俺は構わんが、あの坊主……壊れちまっても責任は取れんよ」

「そのときは、彼がその程度の存在だったという事。ならば、残念だけれど仕方のない事よ」

平然と言う白の少女に、少し呆れたように男は鼻を鳴らした。

「……んな事言いながら、姐さんは坊主が生き残る事を疑ってさえないだろうに。嫌だねえ。この先、坊主の所に送り込まれる役目になるのは。だって、ほぼ死ぬ事前提の命令だろう？」

「あら？ 別に彼を殺してはいけなんなんて私は言っていないもの。ちゃんと活路を残しているだけ優しいとは思うけれど？ ただの傀儡の妖魔に対してにしては破格の待遇でしょう。それに――」

少女の純白の瞳が怪しい光と共に細まる。

「貴方に関して言えば、私と同じく一度は夜見へと至った身。戻った仮初めの時間は、刹那と同義のようなもの。なればこそ、今更、死を恐れる意味もないでしょう。どうせ今の生などあってないようなものよ」

「……まあ、確かにな」

男は肩を竦めて、それを認める。

自身の特殊な境遇など微塵も悲観していない様子だった。

それ所か、黒衣の男はどこか愉しそうに笑むと、

「ま、どのみち俺の出番は、もうちょい先かな。……せめて無意味な二度目の生にならぬよう、あの坊主に奮起してもらうさね」
まだ見ぬ未来に期待を込めるように、そんな風に囁いていた。



――夢を見ている。

朝、自分の部屋で目覚める。

顔を洗い、身支度を整え、寮を出た。

教室ではいつものように、担任のソウゴが来るまで、ライやゴウタと他愛無い世間話をする。今日は、〈三の水〉の教室から、レナやミヨも顔を出していた。

授業をサボる頻度は、以前より格段に減った。

未だに自分がオロチに取り憑かれた際の事を気に病んでいる節のあるレナとミヨの事があるからだ。自身で、あれは授業を朝からサボった自分も悪かったのだと言った手前、はじめは見せないと彼女達に筋を通せないだろう。

ただ、学園の授業は、講義にしろ、実技にしろ、全てが候補生を鍛え、騎士へと昇華させるためのものだ。故に、呪いを解く――すなわちウズメに勝つために強くなる、という目的のためにも決して無駄でもない。

――夢を見ている。

午前の授業が終わった。

あの日以来、昼休みには、第一校舎の屋上で、皆が集まって食事する事が自然と決まっていた。

弁当は、レナ、ミヨ、ウズメがいつも作ってくれている。

ウズメにとっては、もともと普段通りの作業だし、レナとミヨにしても、「ツクヨミ先輩に勝てる弁当を作り上げる！」と燃えているようで、むしろ自ら進んでやっているようだった。

口にはしないが、ウズメは、この時間をとても楽しんでいるのがわかる。

それが、なんとなく嬉しかった。

――夢ヲ見ている。

その日の授業が全て終わり、放課後になる。

前から随分と日が空いてしまったので、今日こそソウゴとの訓練をしようと思ったが、生憎と彼の方に暇がなく、仕方なく筋力鍛錬やライ達との簡単な手合わせなどに終始した。

明日は、ソウゴも時間が取れるようなので、少しでも遅れを取り戻さなければならない。

ただヒナコには、焦るな、と何度も釘を刺された。

――夢を見てイる。

陽が落ちた。

寮の前で皆と別れ、自分の部屋へと戻る。

何故か酷く眠く、瞼が鉛のように重い。

大浴場に行こうと思いつつ、気づけばベッドの上で

――夢ヲ見テイル。

気づけば、学園の廊下を歩いていた。

夜の校舎は、まるで異世界のような不気味な空気が流れている。

静寂の中で、かつんかつんと甲高い足音が反響。

自分のものだ。

だけど、まるで宙を歩いているかのように実感がない。

自分という存在にも実感がない。

そういえば何故ここに居るのかそれ以前にこれは夢なのになんでこんなに現実感に溢れていやこれは夢だったのかああどうでも良いか良くはないけどどうでも良いその方が楽だと結論して間違いだとか己に警告して忘れた。

――ユメをミている？

教室に入った。

学園に幾つかある空き教室の一つだった。

窓から見える景色の高さから、第三校舎の三階だろうか。

ふと視界の端に、さらりと黒いものが流れるのが映った。

俯き気味だった顔を上げる。

射し込む月光を背に、床に届かんばかりの長髪の少女が立っていた。

遠くない未来に少女から、成熟した女と呼ばれるだろう彼女は、ツクヨミ・ウズメだった。

（先、輩……？）

口に出したはずなのに、声になっていなかった。

「――」

逆に、ウズメの方が紅い唇で何かの言葉を紡いだ。

おいで、と。

そう言った気がした。

何も聞こえなかったけど、そう言った。言っていないけど言った。

自分の身勝手さに呆れながら、ふらりと前に進んだ。

ウズメが両手を広げて自分を迎え入れる。今日の彼女は、なんだか普段とは別人のように妖艶に見える。

その細身で柔らかな体躯に身を預ける。向こうも腕を回して抱きしめてくれる。

温かくて、とても心地良かった。酷く安心した。

もしかしたら、自分は心のどこかで、ずっとこれを望んでいた気もした。

少女の細い指が、優しく自分の頬を撫でる。

その冷たく滑らかな感触に理性が溶けそうになる。いや、溶けている。

「――」

ウズメが、艶かしく微笑む。

——次の瞬間。

唇が、唇を塞いでいた。

特に、驚きはない。

数日前に、自分達は同じ事をしたばかりなのだから、驚く必要はない。

本当はあるはずだけど、ないんだと納得した。

口内に彼女の舌が侵入して来て、淫靡に蠢き、自分はされるがままになる。

何故か、それに応える気力が湧かない。

理性の溶解が一層に進み、思考が混濁して白濁になった。

自分が誰だかわからなくなり、そういえばとつくの昔にわからなくなっていた事に今更気づいて、内心で自嘲した。

深い深い口付けはなお続き、自身の存在の輪郭が曖昧になり、自我は遠いどこかへ「行って来ます」と笑顔で旅立とうとしている。

だったらこちらにも、「行ってらっしゃい」と笑顔で見送ろう。こんなに気持ち良いんだから、この快楽に身を任せて、そのままが良いじゃないか。

——お前の存在は

そもそも自分はウ　　を——……？

少女の名前を忘れたのでとりあえず少女と定義し、自分は少女にすでに惹かれ始めていたはずで、

——それをユルスのか？

好きな女の子と繋がり合いたいと一つになりたいと思うのは男らしいや人間として当たり前の事ではないのかそもそも自分は人間？
まあ良い。ともかくこのまま

——ゆるすのか？ カ、カカカ？ 許すのか？

許す？ 許して良い訳がない。だって、こんな少女は少女ではなく、もともとの少女がどんなだったのかすでに忘れているけど記憶としてではなく感覚を手がかりとしてそれは否定されこんな偽りに身を委ねる事は間違いであり自身という存在が守るべきは真実の少女やそこから連なる大切な人々でそしてそのためにも他の理由のためにも自分はここで死んではいけない。それは許されない。

許すな。

許すな。許すな。

許すな。許すな。許すな。許すな。

許すな許すな許すな許すな許すな許すな許すな許すな！

——そうだ。許すな。

お前の存在そのものが……ソレを否定しロツ！

—————。

刹那。

少年を構成する要素のことごとくが一気に覚醒した。

＊ ＊ ＊

「—————！！！！」

気づけば、反射的にウズメの姿をした何かを両腕で突き飛ばしていた。

反動でふらふらと背後へとたたたらを踏み、ぶつかった扉に背を預ける。

急速に自我と意識と記憶とが復帰した。

『ふむ……自力で戻ったか』

感心したようなオロチの声が、酷く遠い場所から響いて来たよう

に聞こえた。

咄嗟に状況の全ては把握出来ないが、とにかく自分がスサノ・フウガで、この場所が夜の学園の中であるという根本的な足元の現実を思い出す。

これが根底に戻っていないと、どうしようもない。

「っ——！ こいつは……！」

次に、目の前に居る女。

もうすでにその姿はウズメとは程遠い、妖艶かつ淫猥なものに変化——否、戻ったのだ。長い紫紺の髪と瞳に、女という特徴を激しく主張する肉体は、申し訳程度に布で隠している。背には、異形の羽が垣間見えた。

その正体はすぐに、これまで積み上げてきた知識から検索された。まず妖魔である事は当然。

その種族の名称は——妖魔。

人心と人身を惑わす妖術を得意とする中級妖魔。

「……いつから……いつからだ……」

理解は、急速に脳に浸透した。

おそらく自分は、この妖魔の幻術に囚われていた。そのまま夢現の状態でこの教室まで誘導され、一気に魂まで掌握されそうになった所で、奇跡的に己を取り戻したのだ。

だが。

だとして、いつから自分は幻術を掛けられた。

過去の記憶を辿る。

どんな些細な事でも良い。何かしら、今思えば違和感を感じる何かが原因で始まりのはず。

そこで、教室に漂っていた覚えのある——だけど、少し記憶のものとは差異のある香りに気づいた。

（白梅香の、香り——？）

昨日の屋上。

ウズメから漂った香と同じ匂い。

そうだ。

今思えば、屋上で匂ったそれは、以前に〈錬技場〉で匂ったものとは微かに……

「……………そうか、先輩のものに紛れて——！」

ウズメの事を意識するあまり、香りの僅かな違和感など流してしまっていた。

すでにあのとき、幻術の種が自身の内に植え付けられていたのだ。種は丸一日を掛けて、じわじわとフウガの内へと侵食し、本人も周りも気づかぬ内に自我や意思を徐々に奪っていったのだろう。

「……………くっ」

不意に先ほどの口付けを思い出して、フウガは忌々しげに口を手の甲で拭う。

こうやって夢魔自身が堂々と姿を見せた以上、ここまで自分が来た事は、半ば操られていた他ならぬ自分自身が誰にも気づかれないうようにしてしまったはずだ。

さらには。

さっきまで当たり前の景色を見せていた窓の向こうは桃色の靄で覆われ、すでに〈異界〉が展開されてしまった事を教えている。

つまりは、前のナキ達の襲撃の際と同じく、まず助けは期待出来ないという事。

「……………はっ……………はあっ……………」

呼吸が荒れる。酷く淀んだ空気が喉にまとわりついて息が苦しい。四肢にはまるで力が入らず、視界がぐにやぐにやと歪んだ。

頭は、脳に直接、大量の酒をぶち込まれたような強烈な酩酊感でぐらぐらとしている。

未だ夢魔の幻術は解け切っていないのだ。

（……………とにかく……………今は、逃げない、と……………）

こんな状態では、〈言力〉も使えず、まず戦いにならない。

——いや、それ以前に。

相手は女の夢魔なのだ。

男である自分には、天敵と呼んでも過言ではない相手。

夢魔は、単純な戦闘能力が極端に低い代わりに、異常なまでに幻術に長けており、歴戦の強者でさえも容易く手の内に落ちる事があるような危険な妖魔だ。そして、その幻術は異性に対して特に多大な効果を発揮する。故に、対峙する夢魔が異性の場合は、まず真つ向から相手にはしてはならないと、妖魔学の授業でも教官に口を酸っぱくして言われていた。

咄嗟に背後の扉の取っ手に指を掛ける。

完全に固定されたかのように、全く動かない。

「……………！」

前を向く。

夢魔は、滑るような足取りでこちらに歩を進めて来た。

フウガが逃げる事も、抵抗する事も出来ないとわかっているからだろう、その足取りはこちらを馬鹿にしているかのように、ゆっくりで余裕に溢れている。

夢魔の舌が、ぬらりと自身の唇を舐めた。

それは、まるで。

雌蜘蛛が、網に掛かった獲物を前にした舌なめずりのようであった。

四章 その悪夢、甘美に傷を抉り その三（後書き）

お読み頂きありがとうございました。

四章 その悪夢、甘美に傷を抉り その四

「ぐっ……!!」

折れそうになる膝を必死に立てて、フウガは迫る夢魔を睨めつける。

だが、揺れる視界に、明確にならない意識。

力の入らない身体は、拳すらまともに固められない。

こんな状態では、無駄を覚悟した抵抗すらも不可能。

夢魔が近づく。

あと、数歩。

まさに万事休す——自ら相手の手の内に来てしまっている以上は、すでにこの戦いは詰められている。

それこそ敵の予想外の介入でもない限りは——

「——断て! ヴィシュヌツ!」

そして、それは来た。

絶望の感情を裂いたのは、聞き覚えのある鋭い声。

次いで、背後で何かの切断音が聞こえて、

「え……………おおおおお!?!」

不意に、フウガは背を預けていた扉の支えを失い、思いつきり後方へと倒れ込んでいた。

「……………っ!!!!!!」

受身も取れず後頭部を強打。

絵に描いたような星が目の前で瞬いた。

そこに、どこかと誰かが近づいてくる足音。

一人ではない。おそらくは二人は居る。

「フウちゃん、貞操は無事かー!」

「どうやら間に合ったね」

耳朵を叩くのは、戯けた台詞と冷静な呟き。

すぐに誰のものかわかった。

フウガの親友の二人、ライとゴウタである。

「……お、フウちゃん。なんや、泣くほど嬉しかったんか。いやー、そんなリアクションしてくれると助けに来たかいがあるなー、ほんまに」

「アホかつ！ 痛みで悶絶してるんだよ、これは！」

後頭部を抑えて蹲っていたフウガは咄嗟に立ち上がると怒鳴る。

当然ながら、ゴウタは確信犯だったようで、けらけらと笑うだけだ。

「こんなにやろう……」

だが、頭を打った痛みのおかげか、それともあの教室から廊下に脱出出来たからか。いつの間にか視界は明瞭、あの酩酊感もほとんど抜け、万全ではなかったが四肢にも力が戻っていた。

くっくっとおロチの念話の笑い声が頭に響く。

『なかなか悪運は強いようだな、フウガ。せっかく恩を売るチャンスかと思ったのだが……』

「悪いが、お前なんかに助けてもらう気なんてさらさらない。引っ込んでろよ」

フウガがそんな風に冷たく突き放していると、

「フウガ、走れる？」

空中を旋回し、戻って来た物を指で受け止めながらライが訊いて来た。

指を中央に通されて回転するそれは、平べったい金属製の輪だった。円の外側の端は、刃のように丁寧に研がれている。

ライの〈真名武具〉であるヴィシュヌだ。

戦輪と呼ばれる、斬る事を目的した非常に珍しい投擲用の武器である。彼はこれを計六輪ほど所持しており、戦闘時は腕に通して持ち歩いていた。おそらくは、先ほど扉を斬ったのもこれだろう。

「俺は大丈夫だ。それよりお前達どうして……」

そこまで問うた所で、近づいて来たライにがっかりと腕を絡められる。

「……ライ？」

「話は後。――ゴウタ！」

「まっかせとけ！」

ゴウタは声も大きく応え、突然の介入者にも何の動揺も見せないまま佇んでいる夢魔へと向き直った。

そして、一歩前に出ると自身の拳と拳を打ちつける。

響いたのは肉と肉のぶつかる音ではなく、甲高い金属音。

ゴウタの手から肘辺りまでを、無骨な装備が覆っていたのだ。

その装備――籠手は、彼の〈真名武具〉であるミョウオウだ。見ての通り基本的な扱い方は接近して殴るのみである。

「剛拳――」

ゴウタは硬質の籠手を身に着けた右腕を振り上げ、

「――打ち碎け！」

紡ぐ〈具言〉と共に、渾身を込めた拳を床に叩き込んだ。

轟く破壊音。

爆砕された床の破片が、がらがらと階下に落ちていく。

さらに巻き上がる粉塵で、フウガ達は夢魔の視界から遮られる。

後方に跳躍し床の瓦解から逃れたゴウタは、すかさずライとは反対側に立ち、彼と同じくフウガの腕にしっかりと自分の腕を絡めた。

「お、おい！ お前ら！」

「んじゃ、まあ……」

「戦略的撤退――っ！」

困惑するフウガを無視して、二人はいきなりフウガを強引に引き摺って逃走に移る。

「のわあああああ！？」

フウガが冷静になる暇もなく。

三人の姿は、あっという間に廊下の奥へと消えていった。

——次第に粉塵の帳が収まっていく。

教室と廊下の境目辺り。

瓦礫の積もる階下を見せる大穴が開いた中。

残された夢魔は慌てる事も、動揺する事もなく自身に掛かった埃を手でのんびりと払う。

口元では、先ほどと変わらず淫靡な舌なめずり。

怪しく光る彼女の紫紺の瞳には。

ただただ新たに獲物が増えた喜びしか映っていなかった。

＊ ＊ ＊

「——うん、ここまで来れば大丈夫かな」
走る事数分。

先ほどの空き教室が視界から完全に消えてから、ライは足を止めた。

合わせてゴウタも走るのを止め、ようやくフウガは解放される。

「……はっ……はあ……それじゃ話を聞かせて……くれるんだろうな……」

息を切らしながら、フウガは問う。

普段ならこの程度走ったぐらいで息など切らさなはずだ。

どうやら未だ体調は万全ではないらしかった。

ゴウタはぽりぽりと頬を掻いた。

「事情と言っても、そんなたいしたもんはあらへんけどな」

「……まあ、一応説明するとね」

銀髪の美貌の少年は、ここまでの経緯を簡単に説明する。

「今日、寮に帰ってフウガと別れた後、部屋に戻る途中にゴウタと話してたんだ。今日一日どうもフウガの様子が変だったってね。それでどうも気になったんで、念のためフウガの部屋に様子を見に行ったら……」

「……幻術で操られた俺がふらふらと出て来たと」

すぐに察したフウガの言葉に、ライは頷く。

「そう。どう見ても普通な様子じゃなかったし、とりあえず気づかれないように後をつけてたら、いきなり〈異界〉に引き摺り込まれたんだ」

「たぶん夢魔の方も俺らがつけてるのには気づいてへんかったんやろうな。だから一緒に〈異界〉に巻き込むなんてハマしたんやろ」

「と言っても、たぶんあっちは獲物が増えたぐらいにしか思っていだろうけどね」

当たり前のように言って、ライは肩を竦めた。

これにゴウタが渋い顔をする。

「ほんまの事やと思うけど、そんな凹む事さらいと言わんという欲しい……」

「現実は見据えないと。しかし、まさか出くわすのが夢魔とは思わなかったよ。とりあえず真正面からやり合える相手じゃないし咄嗟に逃げて来たものの……」

「状況が悪いのは変わらない、か」

フウガが言葉を継いだ。

なにせ、この場に居るのは女の夢魔の獲物以外の何者でもない男ばかりだ。

ライ達が不意を突いて何とか自分を救い出してくれたものの、劣勢なのは何も変わっていない。

——特定の条件が揃った者以外には極端に弱い代わりに、得意な相手には理不尽な程の強さを発揮する。

夢魔はそういう類の敵だ。

故に本来なら相手の有利な条件では、決して戦うべきではない。

だが、ここは〈異界〉。

まず内部から脱出は不可能な檻の中。

夢魔は中級妖魔なので、上級のそれに比べれば脱出の難易度は低いだろうが、どちらにしろフウガ達には無理な話だ。

ならば、何とかして幻術を躲し切り、夢魔を倒す以外に道はないだろう。

「……悪いな。お前達も巻き込んだ」

じわりと罪悪感が胸に広がる。

シラユリが自分を狙う限り、いずれは避けられない事だったかもしれない。

でも、出来ればこれ以上、周囲の人間を巻き込みたくはなかったのだ。

と。

「いってっ!」

いきなり横からゴウタにどつかれて、フウガは思わず声を上げる。

「なっ、何すん……だ……?」

咄嗟に文句を言おうとして、それは尻すぼみになる。

何故か、ライとゴウタは呆れと怒りが無い交ぜになったような目で、こちらを見ていたのだ。

「水臭いにも程があるで、フウちゃん。俺らは親友やろ」

「そうだよ。フウガに危険があるなら、僕達は命を張って助ける。

フウガだって逆の立場なら絶対にそうするだろう?」

矢継ぎ早にそう言われ、フウガは目を白黒させる。

「……いや、まあ、そうだけど……」

「だったら、謝るなんて意味のない事は必要ないよ。今は、ここを力を合わせて切り抜ける事だけを考えよう。……まあ、我ながらクサイ台詞けどね」

「……………」

フウガはしばし言葉を失い。

次に、困ったような苦笑を浮かべていた。

「だったら……助けてくれた礼もいらないわけだな、二人共」

ゴウタはにやりと笑うと、今度は優しく肩を叩いて来る。

「そういうこっちゃ。当たり前。事して礼を言われるなんて、くすぐったくってしゃあないやん」

「……ああ、そうだな」

フウガは微笑と共に頷く。

——本当に。

良い友人を持ったと。

照れ臭くて絶対に口に出来ないけど、そう思う。

そして、だから。

自分が“偽り”であると言う事実は、酷く胸を苛んだ。

だが、今は罪悪感に囚われている状況ではない。

頭を振って、すぐに気持ちを切り替える。

ふと、ゴウタが困り果てた顔で腕を組んだ。

「しかし、まいったなあ。俺ら、中級の妖魔と戦った事なんてないやけどな。学園の実戦訓練で戦こうた妖魔も所詮、下級レベルやし……」

「僕も似たようなものだね。フウガは……訊くまでもないか」

ライが視線を向けて来るのに、フウガは首肯する。

「ああ、俺はある。中級ぐらいならいくらでも」

それを口にしたとき、ふと少年の瞳に苦い過去を思い返すような光が過ぎって——すぐに消えた。

「……ともかく武器を召喚しておくか」

イザナギ、イザナミは寮の部屋に置きっぱなしだ。

フウガは親指の先を噛み切ると、溢れ出した血で床に文字を描く。

〈言紋〉に訳されたフウガ自身の名だ。

〈真名武具〉は、持ち主の名が刻まれた時点で、その名の人間と

目に見えぬ繋がりが構築される。故に、それがある限りは、どこであろうと〈言力〉を用いて〈真名武具〉を召喚出来るのだ。

そう、例えその場所が〈異界〉であろうとも。

描いた血文字の上に掌を置き、フウガは〈具言〉を唱える。

「——遙か越え来たれ、我が下に」

呼応するように血文字が眩い光を放ち。

その光に彩られながら、中空に二本の小剣が空間を越えて呼び出

された。

剣を握る。

まるで己の身体の一部かのような慣れ親しんだ感触。
相棒とも分身とも言えるこの二振りが手元にあるだけで、フウガは安堵と頼もしさを共に感じる。

そうして自身の愛剣を手にとると、フウガは親友の二人に向き直った。

「さて、夢魔が追いついて来る前に何か作戦を考えないと……」

「ああ。正面から戦れる相手やないしな」

「……まあ、作戦があるとすれば一つだろうね」

ライが確信を込めて声音で言った。

「先手必勝。僕達が生き残るには、それ以外にはない」



〈異界〉と化した学園の廊下を、夢魔は独り歩いていた。

しとりしとりと。

ゆっくりゆっくりと。

逃げた獲物を急いで追う事なく、落ち着き払った歩みだ。

この学園のどこかに居るだろうフウガ達は、〈異界〉を脱出する術を持たない。

ならば、後は少しずつ追い詰めれば良いだけ。

虫の羽を一枚一枚もぎ取る様に。

希望を抉り取り、絶望を心の奥深くへと埋め込んでいく。

もう自分は、ただ捕食されるだけの存在なのだと思い知らせる。

それが終われば、後はゆっくりと思うがままに喰らえば良い。

なんて簡単。

思わず嘲笑が口元に浮かぶほどに。

だから、何も慌てる必要などなかった。

「……………」

ふと、夢魔が足を止める。

そして、訝しがるように足元へと視線を向けた。
次の瞬間。

「剛拳、打ち碎け！」

「……………」

そんな声と共に、足元の床が真下から爆砕した。

◇ ◇ ◇

夢魔は、そのまま崩れる瓦礫と共に三階から二階の廊下へと落下する。

先ほどと同じように、巻き上がる粉塵の中。

「雷輪よ——」

出迎えるは、また別の人間の流れるような〈具言〉だった。

「六鎖となり彼の者を縛せ！」

夢魔の周囲を六つの戦輪が取り巻く。

それらは高速で旋回すると激しい雷を纏った。

雷はさらに鎖と化し、夢魔の四肢を縛り上げると、完全に動きを封じる。それだけでなく雷鎖より襲う強烈な雷が、夢魔自身へと多大な損傷を与えていた。

「！」

苦悶の呻きを洩らす、雷鎖の縛られた夢魔の目が見開かれる。

眼前に、いつの間にか両手に剣を手にした緑髪の少年の——フウガの姿があったのだ。

「——終わりだ、夢魔！」

三人の少年の連携。

最初の一人が自分達の前に敵を導き、

次の一人が動きを封じ、

最後の一人が止めを刺す。

一人が一つの役割をこなす事で、ほぼ隙なく相手を仕留めるまで

戦いを一気に運ぶ作戦。

今、それが見事に功を奏した――

渾身を込めて、フウガは叫ぶ。

「烈風、研ぎ澄ませ――！」

刃が風を纏い、切れ味を増す。

放たれた二筋の斬撃は、問答無用で夢魔を断ち斬った。

――はずだった。

「よっしゃ！」

「やったか……？」

背後でライとゴウタの歓喜を含んだ声が聞こえ、

『……いや、まだだ』

オロチの陰しい声音がそれを否定した。

「「なっ!？」」

「ライ、ゴウタ!？」

不意に上がった驚愕の声に、フウガは慌てて振り向く。

目に飛び込んで来たのは、茨の群れに縛り上げられた親友達の姿だった。

「そんな馬鹿なっ！」

敵は、今まさに倒したはずだ。

手応えも完璧だった。

咄嗟に倒れた夢魔の方へと視線を戻す。

「……………っ！」

居ない。

そこには、誰も居なかった。

有り得ない現実気づいた瞬間、フウガもまた茨に捕らわれていた。

「ぐっ……！ 何で？！」

間違いない幻術。

だが、何故だ。

一度は術中に落ち掛けた自分とはともかく、ライとゴウタは一体、いつ幻術に掛けられた——？

「っ、まさか……」

あのとき。

自分を助けに来たとき、ほんの十数秒の対峙の間に——！？

「そんな……理不尽な事があるのかよ……！」

かつての教官が言った台詞。

——決して異性の夢魔とはまともに戦うな。

あれほどしつこく繰り返した理由が、今になって嫌になるほど思い知らされる。

こんなものは反則だ。

一つに特化しているから。

限定された対象のみだから。

型にはまれば有り得ないほどの強さを発揮する。

わかっていたはずなのに、それでも甘かった。

所詮は中級だと高を括っていた。

不意に。

背筋が凍りつきそうな不気味で冷たい感触が頬に触れた。

どこから現れたのか、本物の夢魔が背後からフウガを抱き締めていたのだ。

「フウちゃん！」

「フウガ！」

ライとゴウタが叫んだ。

「……こ、のっ……！」

フウガは必死に抵抗しようとするが、茨はびくともしない。

これは力で肉体を縛るものではなく、精神を侵す物だ。
故に打ち破るのは容易い事ではない。

他の二人もどうにか逃れようと必死に足掻いているが、ただ夢魔に嘲笑われるだけに終わる。

『このままではまずいぞ、フウガ』

「そんなのわかってるっ！」

オロチの言葉に激昂するフウガの頭を、夢魔が無理矢理に横に向け、目を合わせて来た。

碧の瞳と紫紺の瞳が交差する。

「……あ……」

途端に全身が脱力し、どこか間拔けな声が洩れた。

再び、脳が心が魂が深奥まで侵されていく。

自分と言う存在が曖昧にとろけていく。

「……う、あ……ああ、あ……あ……」

何一つ抗えない。

精神の壁は、まるで濡れた紙の様に哀れなほど容易く壊される。
意識が遠いどこか、へと、行って……しま……――――

四章 その悪夢、甘美に傷を抉り その四（後書き）

お読み頂きありがとうございました。

四章 その悪夢、甘美に傷を抉り その五

「――」

気づけば、フウガは暗黒の中に居た。

肌に纏わりつく濁り湿った空気。

目に見えなくても全身から感じられる閉鎖感。

それらの情報から、すぐさま己の居る場所を推測する。

(……………洞窟、か?)

光源は何もないため、確信は持てないが、おそらくは間違いない。

自分は、〈異界〉の中で夢魔に捕らわれ、再び幻術に掛けられていたはず。

それが、何故、独りでこんな場所に居るのか。

別の〈異界〉に飛ばされたのか――もしくは、これ自体が幻術か。おそらく後者の可能性が高い。

ならば、気を確かに持て。

これから現れるものに決して惑わされるな。

ほんの一瞬でも心を弱くすれば、そこにつけ込まれて、今度こそ自分は己を完全に失うだろう。

そうなれば身体は生きていても、心が死ぬ。

心が死ねば、その人間はただ生きているだけの人形だ。次第に闇に目が慣れてくる。

僅かだが周囲の光景が視覚で捉えられるようになる。

――やはり洞窟らしい。

背後には先の見えない通路が一つだけ続いているが、他は無機質な岩の壁。

周囲はかなり広く、天井も高い。

どうやら、相当に広い空間らしかった。

(ここ、は…………いや、まさか…………)

固く蓋をして、でも、封じ切れない記憶が僅かに顔を出す。

自身の居る場所と忌まわしい過去の光景が繋がりそうになる。
と。

「……………」

一歩だけ足を踏み出すと、ぱしゃりと足元で水音がした。
湧き出した地下水の水溜りだろうか。

だが、その割には少し粘り気が強い気がする。

その違和感に引き摺られるように、フウガは膝を吐き、足元に広がる液体を指で掬う。

間近で見て、それが何かを理解した——その瞬間。

「……………っ！！！」

いきなり洞窟内部の暗黒がごとく息絶えた。

光源もないのに、それが当たり前のように視界が明確にされる。
見たくもないものが見えてしまう。

液体の正体、それは——

「血……………！」

真っ赤な。

紅い。

アカイ。

血、血、血、血。

それを溢れ出させたモノもフウガには見えた。
見えてしまった。

「…………あ、ああああ…………ああああああああっ！」

本人の意思とは無関係に迸る絶叫。

倒れていた。

ぱっくりと胸の開いた女が倒れていた。

緑髪碧眼の美しい女だった屍が倒れていた。

そのお腹に膨みがある。

命の宿っていた証。

これから外の世界へと旅立ち、新たな生と名を得るべき存在の居た証拠。

でも、絶えている。

母体の死と共にその未来は絶えて、死んでいる。
生も得てなかったのに、死んでいる。

「……やめろ、やめろやめろやめろ……こんなものは……やめろっ
……！」

屍の正体をフウガは知っていた。

知らないはずがない。

自分は、彼女の緑の髪と碧の瞳を受け継いだのだから。

「……母、さん……！」
そう。

彼女は、スサノ・ヒスイ。

もう立派な大人のクセに、どんな子供よりも無邪気で純粹で。
いつも息子のフウガを好き放題に振り回して。

自分の子供達の未来を希望いっぱいに語っていた、そんなフウガ
の母だった。

その終わりの姿だった。

「……ぐっ……うっ」

吐き出す。

内臓ごと吐き出しそうな勢いで。

胃の中身の何一つ残さず吐き出し尽くす。

それでも消えない強烈な嘔吐感に口を押さえながら立ち上がる。
必死に後退る。

嫌だ！ 嫌だ！ 嫌だ！
逃げたい。 嫌だ！ 嫌だ！
こんなのは嫌だ！

一秒でも早く。

この悪夢から、地獄から、逃げたい。
だけど。

何かが背中にぶつかって、逃走は遮られた。
振り返る。

「……ひっ」

もはや悲鳴ですらない、喉から空気の洩れる音がする。

また別の悪夢がそこに立っていたのだ。

黒いざんばら髪に、無精ひげ。極限まで鍛え抜かれた肉体を持ちながら、快活に笑うのが良く似合いそうな男。

しかし、その全身は血塗れ。右目は深く傷つき、その左足は半ばもげかけている。

妻に負けず劣らず子供みたいな性格でありながら、その実、常に物事の深奥を見抜く、その捉え所のない人物の名は。

——スサノ・ラシン。

父。

偉大なる父。

自分には、あまりに遠過ぎる英雄。

剣を握りすぎてごつごつになってしまった大きな手がフウガの頭を優しく撫でる。

血塗れの顔で、優しく微笑む。

「お前だけでも生きていてくれて良かった——」

「——あ」

それは、あの日、あのときの……台詞。

絶対に忘れえぬ彼の唯一の支え。

でも、すぐに歪んだ。

「お前が生キ……て良かった、良か良かヨカカカカカ——オ、おまエがオマおマおま……——オ前ガ」

「え……」

「オ前が死ネバ良カッタノニ」

「——」

びしりと。

フウガの何かにヒビが入った。

「ナンデ、オ前ダケが生キテイル。何ヨリモオ前ガ死ヌベキナノニ。」

不死不死」

[illegible]

憎惡。

怨嗟。

殺意。

呪い。

そんな感情が、究極の一言に凝縮されて繰り返される。

嫌だ。嫌嫌嫌、嫌だ。やめてよ、やめて、やめて……やめてえ！

!!!!

膝を折って、その場に崩れ落ちる。

耳を塞いで、ひたすらに必死に哀れに頭を振る。振り続ける。

馬鹿みたいに涙が止まらない。

すでに逃げる意思も力もない。

ただ無意味に、拒絶を叫び続ける。

「……あ、ああああ……ああああああああ……アアアアア
アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア
アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア
アアアアアアああああああああああああああああああああ
ああああああああああああ！！！！」

壊れていく。

ぐずぐず。

ぼろぼろ。

スサノ・フウガという心が魂が存在が。

コワレル。

そして、白く。

ただシロく。

マッシロニ……ナル……

——でも。

そんなシロになる直前。

暖かくて、優しくて、力強い。

唯一無二の赤色が見えた。

◇ ◇ ◇

「くっそお！ 解けろお！」

「フウガア！」

二人の少年は必死に、自身を縛る幻術の呪縛に抗っていた。

今、目の前でスサノ・フウガという一人の友が壊されようとしている。

だと言うのに。

自分達は、何一つ出来ずに指を啜えて見ているしかないと言うのか。

歯を折れそうなほどに食いしばる。

血が溢れるほどに拳を握る。

でも、精神を縛る幻の茨はびくともしない。

ただ無慈悲に少年達の無力を思い知らせる。

「のおっ！ 消えろよ！！！」

「このままじゃ……！！！」

フウガの心が陥落するのは時間の問題だ。

それでなくても残酷過ぎる過去を持つ彼は、幻術というものの対し
ての耐性が極端に弱いのだ。致命的な弱点と言っても良い。

だから、自分達が守らなくてはならなかったのに、この体たらく。なんと無力か。なんと無様か。

「うおおおおおおおっ！」

「ぐううう！」

駄目……なのか。

絶対に認めたくない、そんな諦めが過ぎりそうになる寸前。

彼女は——来た。

「——炎獣、その牙を立て！」

赤く染まる空間。

迸り燃え上がる炎牙。

「ギィヤアアアアアアアアアア！」

耳の痛くなるほどの絶叫を上げ、夢魔がフウガから跳び離れる。

その右腕が一瞬の内に消し炭と化して、無残に崩れ落ちていた。

「あ————」

紙一重で幻術から解放された少年が前のめりに倒れそうになるのを、一人の少女が片腕で優しく受け止める。

「……遅くなってすまない、フウガ」

いつも凜としているその声は、今は強い悔恨が滲んでいた。

翻る滑らかな黒髪と烈火の怒りを宿す漆黒の瞳。

細身ながら、無駄なく鍛えられたしなやかな体躯。

手にするのは、炎の赤を照り返す、それ以上に美しい緋色と紋様を持つ長刀。

思わず彼女に見惚れるライとゴウタは、言葉すら発せない。

その美しさ、雄雄しさは——まさに炎姫と呼ぶに相応しいだろう。揺らめく炎火の中。

ツクヨミ・ウズメが今、そこに立っていた。

「ツク、ヨミ先輩……？ 一体、どうして？」

ようやく我に返ったライが呆然と問う。

「——たぶんきっかけは、君達と同じだろう」

振り返る事なく片腕を失った夢魔を睨めつけたまま、ウズメは言った。

「今日のフウガはどこがおかしかったからな。ずっと気に掛かっていた。それでどうにか彼の様子を確認出来ないかと男子寮の方へ向かっていたら——寮を出て行くフウガとそれを尾行する君達が目に入った」

そんな明らかに不自然な光景を見てはとても放って置けず、三人の後を追った所、ちょうど学園の前まで来た瞬間に〈異界〉が展開したらしい。

ゴウタが不思議そうに目をしばたたかせる。

「え……やったら先輩は〈異界〉に巻き込まれたわけやないんですか？」

「いや、違う。私はぎりぎりで外に居た。だから、すぐに〈異界〉に干渉して侵入して来たんだ」

「し、侵入して来たって……」

二人は、再び呆然となる。

〈異界〉への干渉は、外部からならば難易度は大きく下がるものの、それでも本来なら候補生レベルでは行使など決して不可能な高難度のものだ。しかも、それを成功させ、さも当然のように〈異界〉の中へと侵入して来たと口にする彼女は、本当に今更だが非常識過ぎる。

「……学園最強の面目躍如ってやつかな」

ライの呟きは感心を越えて、諦念すら含んでいる。

どう足掻いても、届かない領域に立つ人間は確かに居るのだ、と。何にせよ、これで形勢は逆転した。

この場に男しか居なかったからこそその夢魔の圧倒的優位は、女で

あるウズメの登場で完全に瓦解したのだ。もはや幻術が意味を成さぬ以上は、下級妖魔並みの戦闘能力しか持たない妖魔などウズメの敵には成り得ない。

ウズメの手にする長刃の切っ先が、腕を喪失した苦痛に喘ぐ妖魔へと向いた。

「――覚悟してもらおう、妖魔」

その声音からは、先ほどまでの悔恨は消えている。在るのは、灼熱する確かな殺意と憤怒だ。

隻腕となった妖魔は、ウズメの迫力に圧されるように歯噛みしながら後退る。

「フウガのこの姿を見た瞬間に、私は冷静さも慈悲も捨てた。この先、容赦など一切ない。彼の傷を抉り、耐え難い苦しみを与えた罪――死を以て償ってもらおう！」

他に言うべき事などないとも言おうように。

その宣告そのものが〈具言〉となり、刃を煉獄の火炎が包む。

「塵へと還れ――！」

赤の軌跡を描きカグヅチが振るわれ――

「――穢しタな」

地獄の底から響いてきたような、その声で止められた。

時が止まった――

そう錯覚しそうなほどに、周囲の空気が一気に変質する。それは物理的な変化ではなく、感覚で感じ取るものだ。そして、異変の原因は、紛れもなく――

「……フウ、ガ……？」

刃を振るい掛けた体勢で、ウズメは有り得ぬものを見るように、逆の腕で支えた少年を見下ろす。

そう、あの声は確かに彼のものだった。

なのに、まるで別の誰かのものようだった。

フウガは——そこだけは優しく——ウズメを押し退けた。
そのまま、どこか頼りない足取りで夢魔の方へと歩き出す。
両手に剣はない。

幻術に堕ち掛けた時点で、床に落としてしまっている。そして、
彼自身も拾う気などないようだった。

「……穢したナ……」

少年は、再度呟く。

「……あの人達を……親父を……母さんを……セツナを……！」
暗く、赫怒と憎悪と怨嗟と自虐に満ちた声で叫ぶ。

「穢したな——っ！！！！」

全身から吹き出す。

それは負の風。

普段の彼には、あまりに似つかわしくない黒の感情。

「——！！！！」

歩み寄る少年に何を見たか。

夢魔は無様なほどの焦慮と恐怖を見せて、逃走に移る。

——だが、それは、あまりに遅い。

「魔風——」

少年によって、〈具言〉が口にされる。

世界への願いは。

まるで世界すら呪っているかのように聞こえた。

「——喰らい尽くせ！」

まさしく魔性の風が咆哮し、廊下を駆け抜けた。

硝子という硝子が粉々に砕け散った。

天井が床が壁が破壊され尽くした。

開いた魔風の顎は、逃げる夢魔を無慈悲に残酷に飲み込み、

「ひっ……アアアアアアアアアアアアアアアアアアア——」

「」

その一切の存在を許さずに完全に消し飛ばしていた。
後に残ったのは。

不気味なまでの静寂。

無残な姿を晒す偽りの学園の廊下。

破壊をもたらした少年。

そして。

別人のようになってしまった彼を、ただただ愕然と見つめるウズ
メ達だけだった。

四章 その悪夢、甘美に傷を抉り その五（後書き）

お読み頂きありがとうございました。

四章 その悪夢、甘美に傷を抉り その六

夢魔が息絶えた事により、〈異界〉は消滅した。
外の淀んだ桃色の靄は消え、廊下の無残な破壊の跡も元通りになる。

正確には、今までフウガ達が居た学園は、夢魔の〈異界〉の妖術により模倣された偽者で、もともと本物の校舎は一切傷ついてなどいなかったのだ。

だが、景色は元に戻っても、その場の空気は張り詰めたままだった。

「……………」

夢魔を容赦なく消し飛ばしたフウガは、無言で佇んでいた。

誰も声を掛けられない。動けない。

彼のあまりの変貌による驚愕から未だ抜け出せていないのだ。

「——ライ、ゴウタ」

どこまでも続きそうだった沈黙を破ったのは、他ならぬフウガだった。

「……何？」

ライが静かな声音で応える。

二人を縛っていた幻術の茨も、夢魔の腕がウズメによって焼かれた時点で消滅していた。

「夢魔の事……教官達に報告頼む。俺は、悪いけど先に寮に戻るよ」
少年は振り返る事なく、そう告げる。

どこことなく、皆と今、顔を合わせる事を恐れている風でもあった。
「わかった、任せとけ。フウちゃんは、ゆっくり休むんやで」

応えるゴウタの口調も、普段のおどけたものと比べると随分堅い。
それでも必死に、いつも通りに振舞おうとしているのが感じられた。
「……ああ」

小さく応えると、フウガは足元の剣を拾い上げ、そのまま歩き出

す。

「……あ、フウガ……」

何か。

何か言わなければと、ウズメは一步踏み出し、口を開きかけた所で、

「――先輩」

先にフウガの方が足を止めて、こちらを振り返っていた。

「……………」

思わず身体が強張っていた。

自身の表情の変化に気づき、ウズメは慌ててそれを振り払う。その後、すぐに湧いてきた感情は、激しい自噴と罪悪感。

だけど、フウガはただ穏やかに――だけど、少しだけ悲しげに微笑んでいた。

「助けてくれて、ありがとうございました」

「あ……」

それは。

紛れもない、いつもの彼の口調。声音。

酷く少女の胸が締めつけられる。

少年は、歩みを再開する。

程なく、その姿は廊下の奥の闇へと消えていった。

（……何故……私は……）

強い悔恨に押され、ウズメは固く拳を握る。

フウガが振り返った瞬間。

自分は、一体、どんな表情を浮かべた。どんな感情を胸に宿した。

それは――恐れ。

一瞬とはいえ、紛れもなくそんなものを彼に向けてしまった。

きつと、あるとき。

少年が何よりも望んだのは、普段と変わらぬ態度で接してくれる事だったはずなのに。

――それを裏切ってしまった。

先ほどの少年の微笑みは、瞼の裏に強く焼きついて離れてくれない。

だが、彼を追う事は出来ない。今のフウガの様子を見れば、独りにしてやる事が自分達に出来る精一杯の気遣いだろう。

だから、ウズメは、この場で別の行動を選択した。

「……確か、ミカツチとフドウだったな？」

言いながら、ウズメは二人の少年へと振り返る。

「はい」

ウズメが声を掛けて来るのを予想していたのか、落ち着き払った様子でライが返事をした。

「少しか君達に訊きたい事がある。構わないか？」

「俺らは、フウちゃんと一緒に先輩に助けられた身ですやんか。断るなんて出来へんですよ」

ゴウタはそう言って、少しでも暗い空気を振り払おうとしているのか、笑って見せる。

「では……君達はフウガの過去を——例の事件を知っているのか？」

「「……………」」

問うた瞬間、二人の顔が明らかに強張る。

——これは、彼女がずっと知りたと思っていた事でもあった。

ウズメは、スサノ・フウガという少年の事を何も知らない。

特に彼が神聖騎士になる事を拒む理由は、未だ謎のままだ。きっとそれは、フウガ自身が話す事を躊躇う過去の出来事と切って離せない関係がある。

彼女が、フウガ自身とその過去について知っているのは——

フウガが、あのスサノ・ラシンの息子である事。

ラシンが騎士を引退する原因となった事件で、同時に母親とそのお腹に身籠って居た子供を妖魔の手により失っている事。

そして。

彼自身もその事件が起きた原因に深く関わっているらしい事。

……そのぐらいのものだ。

フウガの深い心情を知れるような詳しい概要は何一つとして知らない。

この学園の候補生でありながら、神聖騎士となる事を拒もうとしてしまうほどの悔恨の根なるものを――知らないのだ。

ウズメの父は、ラシンが騎士を引退する事が決まった際には深く嘆いてこそいたが、事件については全く語ろうとはしなかった。さらに、ラシンの知名度に対して、突然の引退という衝撃的な出来事があったにしては、世間にも詳しい話はまるで流布はしていない。

今思えば、それは不自然な話だ。もしかすると事件の深い概要を伏せる事で、そこに関わるフウガを周囲の誹謗中傷などから守るためだったかもしれない。

つまり……フウガは事件の起きた原因に深く関わっているのではなく――“事件の起きた原因そのものではないか……?”

なればこそ、あの屋上でのフウガの態度や騎士となる事を頑なに拒もうとする理由にも繋がる気がした。

「……確かに、僕達はフウガの過去を知っています。他ならぬ彼の口から、それを訊きましたから」

「やけど……俺らにはそれを話す事は出来ません」

二人は断固とした意思を込めた口調で言った。

それにウズメは、当然のように頷いた。

「ああ、わかっている。私だって本人の気持ちを無視して、他人からそれを訊き出そうなど思っていないさ。ただ……これだけは教えて欲しい。彼が神聖騎士になる事を拒む理由と、そして――さっきの変貌ぶりは、やはりその過去が関係しているのか?」

数瞬の沈黙の後、ライが口を開いた。

「神聖騎士に関しては、原因は例の事件にあるのは間違いないです。ただ……フウガのあの変わりようは、僕達にもわかりません。彼に何か隠している事があるのは薄々察してはいましたけど、あんな風になったのは初めて見ましたから……」

「そうか」

ウズメは納得したように呟いた。

確かに、あのとときの二人の様子を見れば、フウガの変貌に関しては、本当に何も知らなかったのだろう。だが、それでもウズメには、過去の事件と切り離せるものではないような気がしてならなかった。「……ツクヨミ先輩は、何故、そんな事を……？」

問うたのは、ゴウタだ。

ウズメは静かに目を閉じる。

そして、先ほどの己の愚かな行為を戒めるように強くその一言を口にした。

「……………私は、フウガが好きなんだ」

「へ？」

予想外の返しだったのだろう、ゴウタはぼかんと口が半開きになる。

隣でライも目をしばたたかせていた。

「だから、彼の見ているもの、感じているもの、考えている事、好きなもの、嫌いなもの——そんな全てを知りたい。何かに辛いものを背負い、それに苦しんでいるのなら、その原因を取り除いてやりたい。

そうして、彼に笑って欲しい。

自分に——笑いかけて欲しい。

理由あるとすれば、そんな勝手に、本当に他愛ないものだよ。……おかしいかな？」

本当に真っ直ぐに本音を口にして、慕う少年の親友二人へとウズメは微笑を向ける。

「……………」

二人の少年は、呆然と互いに顔を見合わせる。

そして、次の瞬間には、苦笑気味に微笑んで首を横に振った。

「——ツクヨミ先輩。僕達ってね、孤児なんですよ」

「え……？」

何の脈絡もないライの告白に、ウズメは瞠目する。

「ゴウタは捨て子で、姉さんと僕は小さい頃に野盗に両親を殺されて、行き場を失った。それから、ずっと孤児院育ち。この学園にも、孤児院での親代わりだった院長が無理して入れてくれたんです。立派な神聖騎士になって来い、ってね」

「ま、よくある話ですわ」

ゴウタが何でもない事のように笑う。

「……………」

確かに、そんなものはどこにでも転がっている話だ。

でも、だからと言って、決して容易く笑い飛ばせるほど軽い過去でもない。なのに、この二人からは、己の境遇を恨むような様子はまるで見られなかった。彼らの育ての親は、そんな生き方が出来るだけの暖かいものを二人に与えてきたのだろう。

ゴウタは頭を掻きながら言う。

「そんな境遇ですからね。学園に入っつてすぐの頃、やたら孤独な空気を振りまいていたフウちゃんは、妙に気になる存在やったんですよ。なんてーか、勝手な共感ちゅうのかな。上手く言えへんのですけど…………どうも放っておけなかった。それで声を掛けて、気づけば親友になってた」

「僕は、理不尽な理由で大切な誰かと切り離される辛さと悲しみを知っている。それは、たぶんフウガの知っているものと同じものです。だけど、フウガが背負うのは僕達以上に重く、残酷なものだ。そして、だからこそ——僕達も助けたいんです。

親友だから。

仲間だから。

フウガだから——助けたい」

「初めて会ったときに比べれば、フウちゃんはよう笑うようになりました。でも、俺らは本当の意味で、まだあいつを救ってはやれません」

「何で…………そんな話を私に？」

ウズメが当然の疑問を投げかける。

すると、ゴウタはちよつと可笑しそうに言った。

「やって先輩、恥ずかしがる事も躊躇う事もなく、フウちゃんを好きやって、助けたいんやって言ってくれたやないですか。それって言うほど、簡単な事やないって俺らにもわかりますからね」

「そんな貴方なら、もしかしたらフウガを救ってくれるんじゃないかと——そう思ったんです。もちろん僕達だって、まだ諦めたわけじゃないですけどね」

「……なるほどな」

ようやく彼らの言いたい事を理解して、ウズメは苦笑していた。

「つまりは——共同戦線か？」

ライは微笑したまま、肩を竦める。

「そんな大袈裟なものじゃないですよ。ただ僕達になり、フウガを本当に想ってくれている先輩への誠意を見せただけです。」

あいつを——助けてやってください、ツクヨミ先輩」

「ああ……もちろんだ。互いにな」

そう言って、三人で笑い合った。

何か確かな約束が交されたわけじゃない。

だけど。

笑顔の下に未だ大きな傷跡を隠し続ける少年——

彼を助けたいという気持ちだが、また新たな絆を作った瞬間であった。

◇ ◇ ◇

——スサノ・フウガは思い出していた。

それは本来なら、もっと早く抱くべきだった感情。

しかし、己の内に取り憑いたその者は。

あまりに人間染みていて。

あまりに妖魔らしくなくて。

あまりに掴み所がなくて。

それに気づく事が出来ていなかったのだ。

だが、もう思い出した。

その憎しみを。怨嗟を。呪いを。

奴らは、父の未来を、母の笑顔を、これから生まれるべき命を奪った。その発端が自身に在るとしても、その事実が変わるわけではない。

だから、憎む、怨む、呪う。

妖魔。

人間の天敵たる忌まわしき存在。

それは――オロチであっても例外ではない。

「……………出て行け」

学園の廊下を歩きながら、フウガは自身の胸を強く掴む。

それこそ心臓を抉り出さんばかりに強く。

「出て行けよ……俺の中から……っ！」

黒く淀んだ憎悪を吐き出す。

それを向けた相手を呪い殺さんばかりに。

『――そう思うのなら強くなる事だ。ウズメを倒せる程にな』

自身に向けられた負の言葉に動揺一つ見せず、オロチは淡々と言う。

「ああ、なってやるさ……！先輩に勝って、呪いを解いて、お前を必ず俺の中から引き摺り出してやる……！」

――わかつている。

どうしようもなく理解している。

こんなものは逆恨みだ。

彼は妖魔だけど、少年の大切な人達を奪った者とは違う。

彼は妖魔だけど、決して邪悪ではない。

でも、この感情は理屈などでは抑え切れないのだ。

だから、どんな手段を用いても排他する。その存在を絶対に許さない。

そう誓った。あの日から、そうやって生きてきた。
今更、どうして、その生き方を変えられよう。

——なのに。

何故だろう。

こんなに胸が苦しいのは、何故なのだろう？

「……………」

そんな思考から逃げるように、ふと窓の外に目を向ける。

黒い空には、淡く輝く月が一つ。

夜の象徴たるそれは、日を追う毎に欠けていき、朔の日には完全に闇へと溶ける。

その姿が、まるで自分のようだと——

未だ誰にも語らぬ事実を胸に秘めたまま、少年は独りそう思った。

四章 その悪夢、甘美に傷を抉り その六（後書き）

お読み頂きありがとうございました。

五章 心欠け、誓いは胸に宿る その一

しんしん、と。

しんしん、と。

世界がその冷酷な顔を覗かせたかのように。
空気が澄み、そして、張り詰めた冬の日。

しんしん、と。

しんしん、と。

あの人が好きだった無垢な白色の雪が舞い落ちていた。
忘れない。忘れた事はない。

世界の色を奪わんと言わんばかりに降る雪も。

肌を容赦なく刺す冷たい空気も。

忘れるはずがない。忘れる事が許されるはずがない。

しんしん、と。

しんしん、と。

そして。

今もその雪は——止んではいなかった。

＊ ＊ ＊

「うっ！　ぐああっ！」

吹っ飛ばされて、受身を取れずに背中から落ちる。

「はっ、はあっ……」

激痛に呻きながら、それでもフウガは身体を起こした。

霞む視線の先には、ヒボコを手にし、すでに戦士の顔へと切り替わっているソウゴ。

以前に皆で作った、簡易の訓練用舞台である。

あの夢魔との戦いから、すでに六日が過ぎていた。あれからシラユリのものらしき事件も特には起きず、逆に不安を覚えそうなくらいに平穏が続いている。

ウズメに勝つためにと始めたこのソウゴとの訓練も、すでに三回目を迎えていた。

しかし、最初の訓練から変化は見られず、フウガが一方的にやられる光景だけを、見守るライ達は目にする事になっている。

「今日は、ここまでだ」

フウガの様子はしばらく眺めた後、不意にソウゴは告げた。

「――ま、待ってください！」

膝を突き、荒い息をしながら、フウガは叫ぶ。

「まだ……俺はやれます……っ」

「駄目だ。お前はもう限界だ、スサノ」

「いえっ、まだ……ですっ！」

フウガは、すでに言う事を利かなくなっている身体を無理矢理に立たせ、剣を両手に構えた。

だが、剣先は下がり、膝はがくがくと今にも折れんばかりに震えている。誰がどう見ても、訓練を続行出来る状態ではなかった。それでなくても、すでに以前の二回よりかなり長時間、訓練を続けているのだ。

「ちょっと、スサノ！ もうやめなさいよっ」

さすがに見かねたのか、レナが制止する。

「……………」

それでもフウガは断固として、舞台を降りなかった。

ソウゴの目が陰しく細まる。

「――馬鹿が」

途端、彼の放つ威圧感が倍加した。同時に、〈龍脈〉より大量の

プラナが汲み上げられていく。急激な力の高まりに、周囲で強く風が巻いた。

「……………っ?!」

不可視の圧力に押されるように、思わずフウガは後退った。

ぎしぎしと〈練守結界〉が悲鳴を上げ、見守るライ達も、只ならぬソウゴの様子に息を呑む。

そこで、

「……………皆、下がって」

フヨウが、普段とは別人のような鋭い声でそう呟いた。

両腕が華麗に翻る。

「鋼閃、奔れ」

次いで、口にされたのは〈具言〉。

両手の五指、全てに収まっている美麗な銀色の指輪から極細の光が煌いた。それらは訓練を見守る者達の間を瞬く間に駆け巡る。

「え?」

レナが怪訝な声を洩らしたのと、フヨウを除く舞台の外の全員の身体が舞い上がったのは、ほぼ同時だった。

「え、ええええ!?!」

「ちょ、いきなり!」

「わわわっ!」

いかなる〈言力〉を用いたのか、レナ、ゴウタ、ミヨがそれぞれ驚愕の声を上げ、ライ一人だけが平然とした様子で宙を舞う。四人の身体は、簡易舞台から十メートル以上も離れた位置へと移動すると優しく置かれた。そして、すぐに後を追うように、フヨウも後方に大きく跳躍する。

そして、その直後。

「頭を冷やせ、スサノ」

重い響きを持ったソウゴの声。

次いで、汲み上げたプラナが収束された三つ又の槍が突き出された。

「――三連一牙、穿て！」

三つの穂先から放たれる、三つの衝撃波。

それは中空で交じり合い、絡み合い、螺旋を描く。

足し算ではなく、掛け算的に破壊力を高めた一撃は、一直線にフウガへと突き進み――

すぐ真横の空間を轟然と貫いた。

僅かに衝撃が掠めたのか、頬が薄く裂け、鮮血が散る。

「――っ！」

破壊の〈言力〉は、少年の背後にあった結界の壁に激突し、せめぎ合い――そして、それすらも突き抜ける！

舞台の端で力の余波が限界を越えて爆裂し、巻き上がる土塊と共に轟音を学園の敷地内に響き渡らせた。音が収まり、視界が開けたときには、舞台のすぐ脇の地面が冗談のように大きく抉れ飛んでいた。

「……む、無茶苦茶や……〈鍊守結界〉を……」

ゴウタが啞然とこぼす。

その反応は、当然といえた。

〈鍊守結界〉は、複雑かつ大量の〈言紋〉によって構築された非常に強固な結界だ。注がれたプラナの量と発動した術者の力量によってその精度は大きく変わるとはいえ、今回、結界を展開したのは教官のフヨウである。その質の高さは疑うまでもない。

「――」

事が収まったと気づくと、急に全身が脱力し、フウガはその場に膝を折ってしまう。

あの一撃。

〈鍊守結界〉すらも越えていく破壊力。

まともに喰らっていれば間違いなく致命傷――下手すれば即死だったかもしれない。ソウゴには当ててるつもりなどはなかったと理解

出来ていても、噴き出す冷や汗と背筋を凍らせる悪寒はどうしようもなかった。

淀んだ空気を払うようにソウゴは一度、大きく槍を振ると、身を翻す。

「己の限界も悟れぬ奴が、あのツクヨミに勝てると思うのか。下らない強がりを吼えるな」

「……………」

ソウゴの辛辣な指摘に、返す言葉などない。

それは事実であり、現実。

結局は、焦りが己を見失わせていたのだ。

「くそ……っ！」

舞台の床に拳を打ちつける。

怒りは他の誰へでもなく、不甲斐ない自分自身へのものだった。

◇ ◇ ◇

「こんつの……馬鹿がっ！ あれほど無茶はするなと言ったろうがあああああ！」

「いででででででででで！？」

凄絶かつ壮絶な関節技を、ヒナコに完璧に決められたフウガは、医務室で絶叫を上げる。すでに治療は終えた後だが、彼女自身がそれを台無しにしている感があった。

フウガは、涙目になって何度も床を叩く。

「もう限界！ 駄目！ なんかもれなく駄目！ スクナ先せ……うぎゃあああああああああああ？？？！！ ……………ごふっ」

ついに限界を迎えて、かくりと首の落ちたフウガをベッドの上へと放り出すと、ヒナコは次に医務室の端でびくびくと立っていたソウゴへと怒りの矛先を向けた。

「ソ・ウ・ゴォ……」

「……あ、あのスクナ先生……目が、目が尋常でなく怖い……」

すでに分厚い眼鏡を掛け、普段の気弱な状態に戻っているソウゴは後退りながら、突き出した両手をわたわたと振る。

「アンタも！　少しは！　考えて行動しろおおお！」

「いやああああああああああああああっ！」

再度、医務室を埋め尽くす叫び声。

「……鬼だわ」

ぶるりと蜜色のポニーテールと身体を震わせて、レナが呟いた。

他の者達はヒナコを止める事など出来るはずもなく、ただただ内心で合掌しながら地獄絵図を傍観しているしかなかった。ちなみにフヨウは例の如く、気づけばどこかへ逃げ去っていた。

――そして、数分後。

二人の屍がそれぞれのベッドに転がってから。

ヒナコは片方の屍に向けて、至極真面目な声を落とした。

「どうして、アタシの忠告を無視して無理をしようとした、スサノ」
声には中途半端な答えを許さない強い響きがあった。

「……………それは」

残る関節技の痛みで顔をしかめつつ、身体を起こしたフウガは唇を噛みしめた。未だ昏倒しているソウゴを見る限り、この事を問うために先ほどは手加減をしたらしい。

数秒、逡巡した後。

「特別な事は何もありません。ただ少し……………焦っていただけです」

「その焦った理由を、アタシは訊いている」

「……………」

「先日の夢魔の件か？」

「……………俺は……………呪い云々以前にオロチは受け入れられないんです」
それだけ言うと、フウガは端に掛けていた上着を掴み、ベッドを降りる。

「ちょ、ちょっと。どこに行くのよ」

「……………治療は終わっただろ」

レナの問いに、簡潔に一言だけ返すと、フウガは足早に医務室を

出て行く。ヒナコはそれを止めようとはせず、煙草を啜えたまま嘆息をもらしていた。

そんな中、レナは何かを迷うように閉まった扉を見つめて――

「レナちゃん。行ってあげたら？」

脇に居たミヨが、そんな風に促した。

「え、ええ？　なんで私が？　それならミカツチ達に……」

「いいから、ね。行ってあげよう」

「あ、ミヨ！　待ちなさいって――」

彼女に珍しく強引に背中を押して、ミヨはレナを医務室から追いつ立てる。そうして、再び扉が閉まった後、

「で……」

ヒナコの赤瞳が、ライとゴウタへと向いた。

「アンタらなら、少しは理由がわかるんじゃないのか？」

彼らは、先日の夢魔の事件でフウガと一緒に〈異界〉に巻き込まれている。この展開は、当然と言えた。

二人もそれはわかっていたのか、困った顔で互いに視線を交わす。

「ええと、いや、まあ、それはそうなんやけど」

「親友としては、そう気軽には話せないというか……」

「そうか。じゃあ、君達にも楽しい関節技講座が待っているわけだが――」

ぽきぽきと拳を鳴らしながら、ヒナコは満面の笑顔を浮かべた。

天使のような悪魔の笑みである。

「話します！　知ってる事全部話します！」

二人は、すぐさま異口同音で声を上げた。いっそ清々しいくらいの変わり身だった。

それを見るなり、ヒナコは拳を下ろして腕を組むと、顎をしゃく

「そうか。じゃ、話せ」

「き、切り替え早……」

ゴウタがぼそりと呆れたように言う。

隣でライは銀の眉尻を下げながら、仕方なさそうに口を開いた。

「僕達もそんなに話せる事はないんですけど——どうやらフウガ、夢魔の幻術で過去を見せられたみたいなんです」

ヒナコが眉根を寄せる。

「過去、を……？」

「もちろん現実のものではなく悪い形に改変されたものだと思います。幻術なんて……特に夢魔の扱うものに関してはそういうものでしょう」

納得のいった様に、ヒナコは形の良い顎を撫でた。

「なるほどな……。あいつが焦る理由には十分か」

「あの……先生はフウガの昔の事……知ってるんですか？」

あまりに理解の早いヒナコに疑問を覚えたのか、おずおずとゴウタが訊いた。

「ん？ ああ、大体は知ってるぞ。そこでまだ死んでるソウゴもそうだろ。あいつは昔、ラシンの副官だったんだし。もちろん、スサノ本人から聞いたらしいアンタ達ほど詳しくじゃないけどな」

ヒナコは、学園の騎士候補生達の健康を管理をしている。それは肉体面だけの事ではなく、精神面も含めてだ。ならば、そこに関わる情報を学園長などから知らされていたとしても何も不思議ではないだろう。

だから、ライとゴウタも得心いったように頷き、そこにミヨが遠慮気味に声を挟んだ。

「あの……スサノ君の過去って……もしかして父親のラシンさんが引退する原因になったっていう……」

「……ああ、それだ。まあ、世間で流布している話以上に、いろいろと込み入った事情があつてな。アタシからはそれぐらいしか言えないんだ。すまない」

「いえ。……なんとなくわかりますから」

ヒナコの言葉の響きから何か察したものか、ミヨは深くは突っ込んで来ようとはしなかった。

啞えた煙草を指で挟むと、ヒナコは紫煙をゆっくりと吐き出す。

「まあ、アンタやタマヨリ次第で、スサノの方からアンタ達に話してくれる事もあるだろう。それまでは、そつとしいてやってくれ」
ミコは、素直に首を縦に振った。

それを見て、ゴウタが、ちよつとからかうように笑う。

「スクナ先生って、実は意外に優しいですね」

「ほほう……しばかれたいか？」

「い、いえ、遠慮しますっ」

盛大に笑顔を引きつらせ、ゴウタは顔の前でぶんぶんと手を振る。
「ったく。——まあ、スサノがオロチに対して、複雑な感情を抱くのはわからんでもないが……」

一つ間を取って、ヒナコは、少年の前途を憂うように呟いた。

「押し潰されなければ……良いんだがな」

◇ ◇ ◇

「……………ふう」

フウガは、屋上に居た。

すでに山の向こうでは陽が沈み始め、赤色が世界を包んでいる。
端に腰を下ろして、鮮やかな色で染まった天を仰ぐ。

身体だけでなく、心も重かった。

「何をやってるんだか……俺は……」

無意識に焦って、周りに迷惑や心配を掛けて……大馬鹿だ。

身体 of 各所に未だ残る痛みが、そんな自分を責め立てている様で

辛かった。

ふと、右の手の甲に視線を落とす。

そこに浮かぶ蛇の紋様は、オロチの呪いの証。

あの日以来、フウガはオロチに声を掛ける事はなく、向こうも一言も喋る事はなかった。

でも。

間違いなくオロチは自分の中に居る。それがどうしようもなく苛立ちと憎しみを湧き上がらせた。

その感情が自身の抑制を利かなくさせる。

あんな無茶をさせようとしてしまう。

「シンラン教官の言う通りだ……頭を冷やせ、スサノ・フウガ」
握った拳に掌を重ね、さらに強く握った。
目を閉じる。

精神鍛錬の授業で習った、心を落ち着けるための独特のリズムでの深呼吸。

無心に、無心に、無心になれ。

ずっとは無理でも、せめて今だけ。

そうすれば、あの胸に蟠る暗い想いも少しは薄まってくれるだろう。

「……………はあ」

ようやく落ち着いたかと思った所で。

ぎいっと僅かに錆びついた音を立てて屋上の扉が開いた。

「……………あ」

姿を見せたのは。

ある意味、予想外で。

ある意味、いつも通りに姿を見せた人物だった。

そう。

彼女はいつだって少年が傷ついたとき、追い詰められたときにやって来てくれる。手を差し伸べてくれる。だから、あつという間にフウガの中でその少女の存在は大きくなってしまふのだ。本当……卑怯なぐらいに。

「……………フウガ」

少しだけ気まずそうに。

でも、それでも、真っ直ぐに澄んだ黒瞳をこちらに向けて。

ツクヨミ・ウズメは、夕暮れの風に黒く長い髪を靡かせていた。

五章 心欠け、誓いは胸に宿る その一（後書き）

お読み頂きありがとうございました。

五章 心欠け、誓いは胸に宿る その二

「先輩……」

「……………」

互いに、言葉が続かなかった。

あの夢魔の事件以来、二人の間には、ずっと気まずい空気が流れていた。ひよんな事から習慣となった皆との昼食の際も、空々しい会話を交わすだけ。それこそ二人きりで面と向かって話す機会などなかったのだ。

フウガが……というよりは、ウズメの方がどう接すれば良いのか迷っているようでもあった。

「……………フウガ」

しばらくして、意を決したようにウズメが言った。

「……はい。何ですか？」

「その……訓練の方で少し無茶をしたと聞いた。大丈夫なのか？」

（ああ……）

やはりだ、と、フウガは思う。

未だ気まずい空気を払拭出来ていなくて、顔を合わせるだけでも辛いはずなのに——それでも彼女は自分の身を案じてやって来てくれたのだ。

ただ素直に、それがフウガには嬉しかった。

「ええ、平気です。まあ、ちょっとスクナ先生には苛められちゃって、今、独りで反省してた所なんですけどね」

最後の方は苦笑気味に言う。

つられるようにウズメは僅かに微笑を見せて——すぐに消えた。少女は目を伏せ、夜闇を固めたような瞳に悔恨の光を宿す。

「……君は」

「え？」

「君は、以前と同じように私に笑顔を向けてくれるんだな」

「そんなの……当たり前じゃないですか」

「いいや、違う。あのとき——君が夢魔を倒したとき、私は一瞬とはいえ君に恐れ眼差しを向けてしまった。……君とて気づいていたはずだ」

「……………」

「好きだと——そう言ったのは私の方からだ。」

なのに、その言葉を。想いを。私自身が裏切ってしまった。君を傷つけてしまった。だから、私は君に嫌われたとしても——仕方がないだろう」

何よりも強いはずの——少なくともフウガはそう思っていたはずの少女は、酷く何かに怯えるようにそう告げた。

そんな彼女の姿を見たら、とても黙っていられなくて、

「——なりませんよ」

咄嗟にフウガは否定の言葉を発していた。

「え……」

ウズメは面食らった表情で、こちらを見た。

「嫌いになんてなりません。あのときの俺はそういう風に見られても仕方なかったと思うし、先輩は……今、俺の所に来てくれたじゃないですか。それで十分です。嫌いになんてなるはずがない」

自分の出来る精一杯の暖かい笑顔を見せて、フウガは言う。

これに、ウズメは驚きで見開いていた目を、まるで涙ぐむようにゆっくりと細める。そして、

「……フウガっ」

「へ?」

いきなり座ったままのフウガの首に両腕を回して抱きついてきたのだ。

「ちょ、ちょちょちょ、ちょっと先輩!？」

服越しに伝わる温もり。

何かの柔らかい感触。

首の辺りにかかる吐息。

そんな諸々のものが怒涛の如くフウガを狼狽させる

「あの、その、ま、ままままずいですから！ 俺の理性とか良識とかなんかそういうものがいろいろまずい！ ですから離れて！ 至急速やかに離れてください俺が大ピンチ！」

自分でも何を言っているか理解出来ないままに、慌てふためいて叫ぶ。

しかし、ウズメは一向に離れようとせず、むしろ強く抱きついてくる。

そして。

「……良かった。ずっと不安で……良かった……」

「……………あ」

——ああ、そうか。

あんなに強くて、凛々しくて。

軍閥の名門貴族の一人娘で。

学園の候補生の中で最強と言われて。

それでも——

今、ここに居るのは、ただ普通に恋する少女だった。

だから、好きな男の子に嫌われてるんじゃないかと不安になって。でも、そうじゃなかったとわかって泣きそうなほど安堵してしまう。

そんな……当たり前の女の子。

だと言うのに、彼女は普通の人間とはどこか違うのだと、そんな目で知らず知らず見てしまっていた。

「先輩、俺は……」

応えられない。

少女の想いを理解してなお、それでも応じられなかった。

彼女が嫌いなわけじゃない。むしろ好意を抱いているだろう。

だけど、自分みたいな人間にそんな資格はないと、応じたとしてもきつとこの少女を幸せには出来ない——そうわかってしまっているから。

そつと。

もしかすると泣いてさえいるかもしれない少女の背中を撫でる。
これが今のフウガに出来る精一杯の答えだった。

そして、互いに無言の時間が一分ほど――フウガにとってはその数十倍に思えたが――続いて。

「……先輩、あの……そろそろ……」

はつきり離れて欲しいとは言い辛くて、濁して言ってみる。

「……あ、ああ、そうだな。だが……」

「だが？」

「いや、せつかくの機会だし、もう少しこのまま……」

「だ、駄目です！ あれですよっ、いつ人が来るとも知れないわけ
ですし！」

「むう……」

あからさまに名残惜しそうに唸ると、ウズメはようやく離れてく
れる。

立ち上がった後、そつと目元を指で拭っていた。やはり本当に泣
いていたのかもしれない。

取り乱した自分を落ちつけるように、しばし目を閉じた後、ウズ
メは静かに口を開いた。

「突然、抱きついたりしてすまなかった。……思わず、な」

「い、いえ、構いませんよ。俺は平気ですから。ええもう本当に」
むしろ自分に言い聞かせるようにフウガは言い募るが、誰がどう
見ても動揺は明らかだった。

ウズメは少しだけ申し訳なさそうに笑って、ふと真剣な声音で言
った。

「本音を――言えばな。君に訊きたい事がたくさんあるんだ」

「……でしようね」

フウガもまた表情を引き締めて頷いた。

あの夢魘の戦いの際の自身の変貌。

そして、以前にも触れた過去の出来事。

疑問など、いくらでもあるはずだろう。

「だが、今は訊く事はしない。君が話したいと、話せると、そう思ったときに君自身の口から聞きたいと思うから……それまで待つよ」
「ツクヨミ先輩……」

その気遣いが嬉しく、そして申し訳なくて、頭を下げる。

「ありがとうございます。それと……すみません」

「良いんだ。私だって出来れば、君に辛い話を口にさせたくはないからな……。それに、礼を言いたいのはこっちも同じだよ」

不意に彼女の見せた、安堵交じりの喜色満面の笑顔は。

夕暮れの赤に照らされて、まるで一枚の絵画のように綺麗だった。

「――――」

思わずフウガが見惚れてしまう中、ウズメは踵を返すと、顔だけ振り向いて苦笑いを浮かべる。

「これ以上ここに居ると、必要以上に君に甘えてしまいそうだから。今日の所は、もう引き上げるよ」

「……え？ あ……わかりました」

そして、最後に。

「……フウガ」

少女は、こう告げたのだ。

「私は君が好きだ。それだけは何があっても変わらない真実だから――信じて欲しい」

「――……はい」

一つ、強く。

フウガは頷いて応えた。

それに、再び心から嬉しそうな笑顔を残して、ウズメは夕暮れの屋上を後にした。

◇
◇
◇

フウガと別れた後。

階段を独り降りながら、ウズメは思い返す。

多くの命が深い眠りにつく、冬の森。

しんしんと雪の舞い降る、灰色の空。

そんな冷たい世界の中で、彼女は“彼”に出会った。

孤高すら感じさせる、無感情な瞳。

他者との繋がりをことごとく拒絶する空気。

その手に握る、妖魔の命を狩り、血を滴らせる刃。

まるで一匹の誇り高き獣のように“彼”は立っていた。
もしも。

自分と“彼”との物語に始まりを定めるならば。

それは間違いなく、あの日、あのときに他ならぬ。

「今も君は……あの孤独な世界に居るのか……？」
呟く。

“彼”に届かないと知りつつも、口に出さずにはいられなかった。
「もしそうだと言うならば、私は……」
と。

言葉の途中で、ウズメの視線が横に流れた。

ちょうど三階まで降りた所である。

物陰に潜む気配を感じたのだ。

「……………」

僅か視界に入った特徴的な髪の色で、すぐに誰かはわかった。
ウズメの紅い唇が微笑みを象る。

「――レナ」

びくりと気配が動揺するのが伝わってくる。

それに今度は苦笑を浮かべつつ、言った。

「フウガなら屋上に居るぞ」

「……え、あ……はい……ありがとうございます……」

もう黙っていても無駄だと思ったのか、返事があった。ただ、見
つかった事が気恥ずかしかったのか、隠れたままである。

「では、また明日」

告げて、ウズメは階段を降りる作業を再開する。

そして。

微笑ましい気持ちと――少しばかりの嫉妬心と共に思ったのだ。

(……なるほど……恋敵、登場かな……)

◇ ◇ ◇

ウズメの残した笑顔の余韻で、フウガが独り惚けていると、再び
訪問者があった。

なんとなく――いや、明らかに荒々しく扉が開けられ、一人の少
女が屋上に姿を見せる。

「……………タマヨリ」

名を呼ばれたレナは、座ったままのフウガの前まで歩いてくると、
元より鋭いつり目を、さらに陰しくして見下ろしてくる。

「……………どうか、したのか……………」

「別に」

一言で切り捨て、そっぽを向く。

明らかに機嫌の悪い様子で現れたと思ったら、あんな形相で睨ん
できて、別にも何もないだろう、とフウガは思う。だが、それを指
摘するといろいろと怖そうなので、それ以上は突っ込まない……と
いうか、突っ込めない。

ちらりと、レナが顔を背けたまま、覗うようにこちらを見た。

「ツクヨミ先輩……来てたの？」

「え？ ……あ、ああ。途中で会ったのか？」

「あ、会ってないわよ！」

「いや、なんでそんなにムキになって否定を……」

「うるさい！ とにかく会ってないの！！」

「わかった！ わかったって！ 俺が悪かった」

フウガは、慌てて両手を振った。

なんだか知らずに、触れてはいけない部分に触れてしまったらしい。

「……でも、そうなのね。どうせからかってるか、何かの冗談だと思ってたのに——先輩、結構本気なんだ……」

さっきまで怒鳴っていたと思ったら、急にレナはぼそぼそと呟く。内容は聞き取れなかったが、その顔は、何故か少し思い詰めているようにも見えた。

「タマヨリ……？」

「別に何でもないって言ってるでしょっ。それより………平気なの？」

「は？ 何が……？」

「~~~~っ！」

思わず怪訝な顔になると、一気にレナの顔に朱が差す。

（うわ……まずい……）

ぶわっと額に冷や汗が浮かぶ。

どうやら、またもや何か失言をしたらしい。

「いいから、平気がどうか聞いてるんだからとっとと答えなさいよ

！ ほら、早く！ 馬鹿！ あほ！ のろま！」

「だ、大丈夫です！ なんかわかんないけど、とにかく大丈夫！」

「だったら良し！」

何故か命令形で言われて、「はあ……」とフウガは間抜けな返事をする。

そして、ようやく気づく。

「あ、そうか。もしかしてタマヨリ、また心配をしてくれ……」

「っ！ し、してない……！」

と、途中まで否定しかけて、レナは言葉を飲み込む。

その不自然な様子にフウガは眉根を寄せて、少女の顔を見上げた。
「ど、どうした？」

すると彼女は、いきなり鼻先に指を突きつけてくる。

「——そうよ！ 心配してあげたの！！ ……………だから」

最後の方には勢いを失い、それでもレナは最後まで言ったのだ。

「一人で抱え込んで、無茶するんじゃないわよ……。呪いが解けるまでの仮かもしれないけど……。私達、一応は仲間なんですよ？」

「……………」

決まりが悪そうに目を泳がせるレナを、フウガは驚きと共に見つめた。

それは酷く胸を突く、何よりも痛い一言のように思えたのだ。
自省の念と共に目を閉じる。

「ごめん。そうだな……。俺達は……。仲間なんだよな」

改めて、その大切な……。でも、妖魔への憎しみに駆られるあまりに忘れかけていた事実を呟く。

「——タマヨリ」

「な、何よ」

「もう特訓で、あんな無茶はしない。約束するよ。それで——許してくれるか？」

「べ、別に私は許すかと許さないとかそういうのはなくて……。えっと、でも、まあ……。いい、良いわ、許してあげるわよ」

レナはもじもじと俯いて言う。

それに、フウガは安堵の微笑を浮かべた。

「ありがとう」

「れ、れれれ、礼なんか言わないでよ！ なんか恥ずかしいでしょ！」

顔を耳まで真っ赤にして、レナは慌てて背を向ける。

「そ、それに謝るなら私だけじゃなくて、ミカヅチ達とかスクナ先生にもでしょ！ ほら、医務室に戻るわよ！」

「ああ、そうだな」

頷いて、フウガは立ち上がる。

そして、ふと——頭上を見上げた。

鮮やかな赤色だった空は、夕闇へと色を変え始めている。

あの日の……灰色の空とは似ても似つかなかった。

だけど、少年は今も変わらず白の世界に居る。きっと、死ぬまではそれが変わる事はないだろう。

しんしん、しんしん、と。

あの残酷なまでに無垢な色の雪は降り続けるのだ。

そして、フウガは誓う。

例え、そんな世界に居ても、胸に宿るこの暖かい想いだけは守り

抜こう――

否。それは今、始まった誓いではない。

九年前のあの日から在り続ける決意と覚悟だ。

決して折れず、砕けず、消えず、頑ななまでに在るモノだ。

何故なら、それこそがスサノ・フウガの――

「ほら、何をぼーっとしてるのよ！ さっさと行くわよ、スサノ！」

「――ああ、悪い」

レナの声に、己の内から意識を戻して、少年は歩き出す。

決して遠くはないだろう、自身の終わりの訪れを、今もその背に

感じながら――

五章 心欠け、誓いは胸に宿る その二（後書き）

お読み頂きありがとうございました。

五章 心欠け、誓いは胸に宿る その三

フウガとレナが屋上より姿を消し、しばらくして。

すでに夜闇に支配されたその場に、一人の人影が浮かび上がった。褐色の肌と血の色のような紅瞳。

長身瘦軀を包んだ漆黒の衣装。

——以前に〈異界〉で、シラユリと会話を交わしていた男である。その身を構成する色も相まって、夜の屋上に立つ彼の存在は、酷く希薄に感じられた。

「どうだい、標的を直接目にした感想は？」

笑みを湛えたまま、誰もいないはずの背後に声を掛ける。

「特にはない」

——誰も居ないはずなのに返事があった。

「遠目から見ただけで全てを見抜けるような慧眼は持ち合わせておらん。いかに私が、お前と違い妖魔であったとしてもな」

声は、冷静に事実を口にする。

男は、つまらなそうに肩を竦めた。

「そうかい。ま、あれでも妖魔は撃退したらしいからな。油断だけはしない事だ」

「この私を妖魔などと一緒にするな、カラス。お前なぞに心配されずとも、私に敗北などあるはずがない。いかにあの小僧が騎士候補生であり、ラシンの息子だとしても、所詮は、未熟な餓鬼よ。仮にも上級に属する私が膝を屈する相手ではないわ」

「そういうのが油断というんだがね」

じわりと空気に静かな殺気が混入した。

「黙れ。人間風情が」

「おいおい。俺にそんな事を言っちゃって良いのかい？ あんたの主でもある、姐さんへの侮辱にもなるぞ」

「あの方は、また別格よ。我らの〈妖術〉さえも操る、あの強き方

はな」

「なんだか差別を感じるねえ……」

カラスと呼ばれた男は、わざとらしく項垂れて見せる。

「ふん、道化が」

声が忌々しげに吐き捨て、さらに訝しがるように言った。

「……だが、一つ解せんな」

「何がだ？」

「シラユリ様程の方が、何故あんな人間の小僧如きに拘る？ 理由

があるまい。少なくとも私が知る限りではな」

不意に。

月光に照らされる男の顔から、おどけた表情が消失する。

それこそ人形を思わせる無表情。無機質。仮面。

唐突な男の様子の変化に、声の主の気配にも僅かな動揺が浮かんだ。

「俺らは種族は違えど、結局はあの人の傀儡。詮索なんぞ無意味さ。訳を知った所で、抗う術など有りはしないんだからな」

「……わかっている。妖魔である私にとって、力というものは何よりも優先されるべき尊きもの。あの方の前に屈した時点で、私は何も知らず、何も求めず、ただ従うのみ。そう……例えば、あの方が人間より連なる存在だとしてもな。今の問いは、傀儡なりの単なる好奇心に過ぎん」

「だったら、忘れておけ。いらない好奇心は、身を滅ぼすんだよ」

「ふん、知った風な口を利く。……まあ良い。私は命じられた事を為すだけよ」

それを最後に、背後の気配が溶ける様に消えていく。後には、カラスだけが独り残された。

——深更が徐々に近づき、辺りの闇がより深く、より濃くなっていく。世界の全てを暗く塗り潰さんと、その領域を広げていく。

それは、人が本能的に恐れる黒の時間。

だが、カラスは、その訪れをむしろ歓喜するように、夜の静寂の

中、口の端を愉快そうに吊り上げた。

「傀儡なりの好奇心、ね」

くくくと喉の奥で笑う。

「己が使い捨ての存在だと知っている者と知らない者……果たして、それはどちらが幸せなのかね」

一人ごちて、闇から生まれたような男は、踵を返した。

「――ああ、そんなものは後者に決まっているか。無知は罪。でも、その方が余計な苦痛も悩みもない。道化は道化らしく、在りもせぬ幻想を見つめ続けるべきだ」

酷く皮肉めいた口調で呟き。

淡く輝く月の下、彼もまた暗黒へと溶けて消えた。



「……二五六……二五七……二五八……」

「「……………」」

「……三〇四……三〇五……三〇六……」

「「……………」」

「……三四〇……三四一………――なあ、その二人」

いつもの特訓用の簡易舞台。

そこで、片腕立て伏せを行っていたフウガは、自分に向けられる視線に耐えかねて動きを止めた。

こちらを傍観していた二人――レナとミヨが首を傾げる。

「何？ どうしたの？」

「えっと……どうぞ気にせず訓練を続けてください」

「いや、続けてと言われてもな……」

困った顔で、フウガは頬を掻いた。

例のソウゴとの特訓は、ヒナコにより、三日おきと決められてしまっている。なので、昨日、それを行ってしまった以上は、次の特訓の日までは、他に出来る事をやるしかない。

その出来る事の一つとして始めたのが、今やっていた筋力鍛錬である。他にも剣の素振りや体力強化のための走り込みなど、本当に地味で基本的な事を間の二日間には行っていた。

これらを三ヶ月も続ければ、劇的ではないにしても、それなりの効果は望める。その方が付け焼刃で何かを覚えようとするよりはマシであろうというヒナコの助言だった。

しかし――

（あんなじーつと見つめられると気になって集中出来ないんだよね……）

フウガは、こっそりと嘆息する。

なにせ、レナとミヨは一応は女の子である。年頃のフウガとしては、やはり彼女達の視線が気にならないわけがない。

普段はライやゴウタと一緒に訓練に付き合ってくれたり、冷やかしていたりするので、良くも悪くも気にする暇もないのだが、今日は二人は不在だった。放課後になり、ここに向かう途中、教頭のミチザネに捕まっちゃい、そのまま用事を言いつけられたのである。ただフウガだけは、ミチザネも事情を考慮してくれ、一人だけ見逃してくれた。

それは確かに助かったものの、同時に今のような困った状況も生み出してしまっていた。

「二人共、別に今日はシンラン教官との特訓でもないし、無理に俺に付き合う必要はないんだぞ？　用事とかあるだろうし、そちらを優先してもらっても全然……」

「……それは、私達が居ると邪魔って意味？」

非常に不満気な顔で、レナが言った。

うっと、フウガは言葉に詰まる。

「……いや、そういうわけじゃないけどな」

「だったら良いでしょ。それに生憎、私達は用事なんてないし、あんたがこんな特訓をしなきゃいけない状況になった原因の一端がこちらにもある以上、知らん顔というわけにもいかないじゃないの」

「そうです。やっぱり最後まで責任を持って付き合わない」と
大人しいミヨまでも拳を作って力説したりする。

「……………さいですか」

非常に責任感溢れる、嬉しいお言葉である。しかしながら、今だけは素直に喜べなかった。

「それに、あんたを出来るだけ一人にしないようにって、教官達に言われてるんだから。なんかシラユリとかいう変なのに狙われてるんでしょ？ 教官達はずっとついてはられないんだから、私達が傍に居てあげてるのよ」

したり顔で指を振って、レナは言い募ってくる。

「むむう……」

この正論には、フウガも押し黙るしかない。

（だけど、それだったら、二人も何か自主的に訓練するとかすれば良いんじゃないのか……？）

そうすれば、気まずい視線も感じずに済むだろう。

実際、今までは、ただ見ているだけなのは時間の無駄だと言って、そういう事もしていたはずだった。

だが、今日は何か思う所があるのか、二人はただフウガを見張るように訓練の様子を観察しているだけだった。

いや——もしかしたら本当に見張られているのかもしれない。昨日の件があるだけに、それは否定出来なかった。

「——自分が招いた事なら大人しく我慢するしかないか……」

「？ 何か言った？」

「いや、何でも」

ようやく観念したフウガは、肩を竦めて誤魔化す。

そうして、諦めて腕立て伏せを再開しようとしたとき、不意にレナが口を開いた。

「……でも、そうね。せっかくだし、手合わせでもしてみる？」

それこそ面白い事でも思いついたような言い方だった。

フウガは目をしばたたかせる。

「手合わせって……二人とか？」

「他に誰が居るのよ。いつもはミカヅチとフドウとやってたけど、私達とはした事ないでしょ？ やってみましょうよ」

「え、えええ……でもスサノ君って強いし……」

思わぬ展開にミヨが慌てた様子で、わたわたと手を振る。

しかし、レナは両手を腰に当てて、反対にやる気満々といった様子で笑んだ。

「確かに一対一なら勝てないでしょうけど、ミヨと私が組めば十分過ぎるわよ。まあ、それでもシンラン教官やツクヨミ先輩とは比べられないと思うけどね」

「……………なるほど」

フウガは腕を組んで、考え込む。

確かに、この二人は意外にも、学園内では実力のある候補生ではあった。

レナはB参、ミヨはB壱。

三年で階位Bというのは、かなりのものだ。なにせ、学園の卒業時に神聖騎士の見習いとなれる最低のラインが、そこだからである。そんな二人が組んでくるというのなら、レナの言う通り十分な訓練相手と言えるだろう。さらに、仮にも騎士候補生である以上は、二人が女であるからやり辛いなどという、侮辱にも当たるような言い訳が言えるはずもない。

しばらく熟考した後、フウガは納得して頷く。

「――まあ、断る理由もないし、むしろそれは自然な流れかな。やってみるか」

「そうこなくっちゃっ」

何が嬉しいのか、レナは妙に機嫌良く言った。

ミヨが、横目でそれをうらめしそうに見る。

「……もう、役に立てるのが嬉しいからって……」

「ミ、ミヨ！」

「わ、もがっ――」

いきなりレナに口を塞がれて、ミヨが目を白黒させた。

「もがもがが!？」

「へ、変な事言わないでよね! そんなんじゃないんだからっ!」

「もがもが、もっがあっ!」

「だから違うって言うてるでしょっ!」

……不思議と会話が成立しているらしい。

二人の妙なやり取りに、フウガは怪訝な顔で眉根を寄せる。

「……一体、何の話だ？」

「な、何でもない! 本当に何でもない!」

「そうなのか？」

「そうなの! そ、そんな事より、手合わせの準備しないとね!」

「ぷはあっ! し、死ぬかと思った……」

ようやく解放されたミヨは、青い顔で必死に酸素を肺に送り込む。

「ほら、ミヨっ」

「わ、わかってるってば。レナちゃん、横暴なんだから……」

レナと未だ不満そうなミヨが、地面に血文字を描き、自身の〈真名武具〉を召喚する。

二人の〈真名武具〉の紹介だけは、フウガも以前にされていた。

まず、レナが手にしたのは、彼女の細腕には似合わぬ大剣――オトヒメだ。まるで水晶のように蒼く透き通る刀身は美しく、戦うための武器というより、観賞用と言う方が納得出来るような代物である。次いで、ミヨが握ったのは、流れるような曲線を描いた、カグヤという名の一張の弓。しなやかさと力強さを併せ持つこの弓もまた、不思議と惹きつけられる魅力を備えていた。

二人が武器を召喚し終わったのを見て、フウガも舞台の端に置いてあったイザナギとイザナミを拾い上げた。

「じゃあ、〈鍊守結界〉は俺が張るな」

「わかったわ。じゃ、さっそく始めましょうか」

「うう、本当にやるんだね……」

まずフウガとレナが舞台へと上がった後、渋々とミヨが後に続き、

「――悪いが、その手合わせは中止してもらおう」

突然の呼びかけに、三人がはっと振り返る。

こちらに歩み寄って来ていた声の主は、一人の壮年の男だった。整った顔と服装に、丁寧な身のこなしを感じさせる、一見、紳士然とした風貌。だが、普通の人間と呼ぶには、纏う空気が明らかに異質だった。

「……あんた、誰だ？」

あからさまに不審がった響きを声に乗せて、フウガは問う。

二年以上も学園に居て、まるで見覚えのない男だ。現在の自分を取り巻く状況を除いたとしても、警戒をしない方がおかしかった。いや、それ以前に、この男が近づく気配を、この場に居る誰も気づかなかったのは、どう考えても普通ではないだろう。

「失礼。名乗るのが遅れたな」

男は、どこか慙懃無礼な仕草で頭を下げる。

「……私の名は、キジム。シラユリ様の命で参った者だ」

「っ！ シラユリだと……！」

驚愕するフウガの隣で、二人の少女も表情を変えた。

「レ、レナちゃんっ」

「ええ！」

あの白の少女の名が出た事で、その場に一気に緊張感が満ち満ちていく。

彼女に関わる者ならば、もはや敵以外の何者でもない。フウガ達は、すかさずそれぞれの武器を構え――

「遅い」

それより速く、キジムと名乗った男が指を鳴らした。

刹那、フウガ達の周りの石板が一斉に砕け散る。そこから生え出すのは、無数の蠢く木の根だ。

「な――！」

予想外の方向からの襲撃に、全員の反応が遅れる。

木の根の群れは、フウガ達を丸く囲むように次々と飛び出し、凄まじい速さで増殖。あつという間に逃げ道が塞がれていく。

「まずいっ！ 逃げろっ！」

「スサノ?!」

咄嗟にレナとミヨの二人だけでも、突き飛ばして逃れさせようとする。

しかし、遅かった。

魔根は瞬く間にフウガ達を覆い尽くし、完全に飲み込む。

そして、三人の視界と意識は一瞬にして暗黒に閉ざされ――途絶えた。

＊ ＊ ＊

「――ん」

ゆっくりと目を開く。

未だぼんやりした視界と意識の中で、フウガは辺りを見回した。

妙に薄暗い。同時に、植物と湿った土の匂いが、やたらと鼻についた。

森……のようだった。いや、背の高い木々や草が遥か彼方まで鬱蒼と茂る光景は、むしろ樹海と呼ぶべきか。

どうやら自分は、一本の大樹に背を預けて座り込んでいるようだった。

天を仰ぐと、無数に茂る葉の隙間から僅かに覗く空は、桃色の靄に覆われている。間違いなく〈異界〉の中だ。

しかも、ただの〈異界〉とは違う。

ここは、以前のようにその場の空間をそっくりそのまま模倣したものではなく、術者の意志によって改変されたもの。つまりこの空間を創り上げた者が、それだけの実力を伴っている証拠であった。

(……そうか……俺は……)

そこまで認識して、ようやくこんな場所に居る理由を思い出す。

あの簡易舞台に姿を見せた男――いや、妖魔の仕業。

おそらくは、レナとミヨもこの〈異界〉に居るはずだった。

「とにかく急いで探さないと……危険だ」

〈異界〉を見る限り、先ほどの妖魔は上級に属している。いかにあの二人が騎士候補生といえど、実戦経験を多くはなく、個々で相手をさせるのは危険過ぎる。

それでもフウガは、取り乱したりする事だけはしないよう心を静めた。焦っても状況は改善しない事は昨日に思い知ったばかりだし、単に〈異界〉に放り込まれる事だけなら慣れたものだ。

「よし……」

ひとまず冷静になった所で、まず自身の状態を確認する。幸い武器はちゃんと手元にあり、どこも負傷はしていなかった。

次に、静かに立ち上がると、研ぎ澄ました意識の網を周囲に伸ばす。いつ、あの妖魔が再び姿を見せるともわからない以上、一瞬たりとも警戒は怠れない。

と、そのとき。

少し離れた場所の茂みが、がさりと揺れた。

「……………!」

素早く身構え、音のした方向を注視する。また足元からの奇襲の可能性もあるので、そちらへ注意を払うのも当然忘れない。

「……誰か、来る……」

間違いなく、何者かが近づく気配が感じられる。

高まる緊張感に、汗が一筋、頬を流れた。

そして、茂みの中から二つの影が飛び出して――

「……………あ!」

「スサノ!」

「無事だったんですね、スサノ君!」

現れたのは、ポニーテールの少女と眼鏡におさげ髪の少女の二人。今まさに探そうとしていた、レナとミヨだったのである。

拍子抜けしたフウガは、緊張が解けて脱力する身体と共に、構えていた剣を下げた。そして、はあ……と長い息を吐く。

「脅かさないでくれ……。心臓に悪い」

「べ、別に脅かすつもりなんてなかったわよ。まさか、こんな近くに居るなんて思わなかったし……」

「まあ、そうだろうな。俺もそう思った」

てっきり〈異界〉に引き摺り込まれるときに、意図的に離されたのだと思ったのだ。あちらの狙いはそもそも自分のはずだし、わざわざ多数の敵を相手をする必要もない。各個で始末出来るのなら、その方が楽なはずだ。

だが、どうやら向こうにはそんな考えはないらしい。

（よほど自分の力に自信があるか……そもそも人間なんて見下しているかのどちらかだろうな）

そう思うと、強い苛立ちが湧き上がってくるが、すぐに抑え込む。相手の領域である〈異界〉で冷静さを失ってしまったのは致命的だ。

レナは、きよろきよろと辺りを見回した後、足元に指を向けた。

「で、あんまり考えたくはないんだけど……ここって〈異界〉よね？」

「……………。ああ、そうだ」

レナの問いに、フウガは複雑な思いで首を縦に振る。自然と表情が曇った。

すると何故かレナは、ちょっと睨むような目つきでこちらを見てきた。

「その顔……『また巻き込んでしまった』とか考えてるわね？」

「え……」

いきなり凶星を突かれてしまい、フウガは絶句する。

呆れたように頭を振って、レナは溜息を吐いた。

「あの夢魔の件の後、ミカヅチとフドウが言ってたのよ。もしも私達がシラユリの件に関わってしまうようなら、絶対にフウガは責任を感じるってね」

「…………それは」

まさにその通りだったので、何も返す言葉が見つからない。

そんなフウガに、レナは初めて見るような、少しだけ優しげな笑みを見せて言った。

「だけどね。あんたはそんなもの感じる必要はないの。昨日も言ったでしょ。私達は仮だろうが何だろうが仲間なんだから、余計は氣遣いは無用よ。それに、これでも私達だって神聖騎士の候補生だもの。もしものときは戦う覚悟ぐらいちゃんとある」

「レナちゃんの言う通りです。その……怖くないって言ったらもちろん嘘になりますけど……やっぱりスサノ君を見捨てて逃げたりなんて出来ませんから。何も気にしないで下さいね」

面に出そうになる不安を押し隠して、ミヨも氣丈に笑って見せる。

「…………タマヨリ、ナスノ……」

フウガは呆然と呟く。

そして、こうもあっさりと内心を見抜かれた氣恥ずかしさと、また同じ事で叱責されてしまった情けなさが相まって、気づけば苦笑いを浮かべていた。

「そうだな……わかったよ。今更、起きてしまった事を嘆いても仕方ないもんな」

二人の目を真っ直ぐに見返す。

そして、はっきりと告げた。

「一緒にここを脱出しよう、二人共」

——そして。

もしものときは、何があろうとも自分が彼女達を守る——

「当然でしょ」

「頑張りましょう！」

二人が頼もしくも、そう返してくれる。

それ思わずフウガが微笑を見せて——

「え、何……きゃあ！」

突然、ミヨが悲鳴を上げて、その場を飛び退く。

「どうした!？」

フウガとレナが何事かと彼女の視線の先を追うと、地面から、普通ならば有り得ないものが伸びていた。

「腕……？」

そう、それは間違いなく腕であった。

しかし、普通の人間の腕ではなく、すぐ傍に無数に立ち並ぶ木々の表面に似た、凸凹のくすんだ茶色の肌をしている。いや、むしろそのものと言って良い。

「な、何よ、これ!？」

腕の数は次々と数を増やし、後を追うようにその先の本体が土を割りながら這い出してくる。

全身が腕と同じ肌をしたそれは、当然のように人の形をしていた。だが、衣服などは一切身に着けず、目や口に当たる部分は単なる空洞で、渦巻く黒い闇だけが詰まっている。

「……樹鬼」

軽く二十を越える異形が取り囲む中、フウガはぼそりと呟く。

それは、文字通り妖術により木々を操る妖魔。

この妖魔は、生まれた当初は、たいした力も知能も持たない下級妖魔でしかない。だが、木々が長い年月を掛けて大樹となるように、この妖魔も生きた時間の分だけ力を高めていく。そして、数百年を重ねれば、上級妖魔と比べても遜色ない程となるのだ。

「……オオオウ……ク、ラエエエエ……」

「……コロオオオオオセエエ……」

「……スベテエエ……クラアアイ、コオロオセエエエ……」

樹鬼達が、不気味に唸り声のような合唱をする。

片言とはいえ口を利けるといふ事は、この場に居るのは全て、生まれてから百年近くは経ているのだらう。とはいえ、それはせいぜい中級妖魔一步手前程度の力だ。数は多いとはいえ、三人も居れば

対処出来ないような相手ではない。

フウガ達は背中合わせになって、自分達を包囲する樹鬼達と対峙する。

レナは自身の〈真名武具〉——オトヒメの蒼の切っ先を敵に向け、不敵に笑った。

「これはまた……いきなり熱烈な歓迎じゃない」

「今回は、前までと違って、夜を待っての人気を避けた襲撃じゃなかったからな。あんまり時間を掛けられないのをあっちもわかってるんだろうさ」

自分達が意識を失っていたのがそんなに長い時間でないのならば、今はまだ授業が終わってすぐの放課後である。近くを歩く人間も多いだろうし、教官達も確実に異変に気づいているはずだ。ならば、そう遅くないうちに〈異界〉を見つけ出し、自分達を助け出すために侵入するだろう。

そして、そうなればキジムと名乗った妖魔は、不利を承知で迎え撃つか、やられる前に逃げ出す以外にはない。つまり向こうは、出来るだけ早いうちに蹴りをつけようとするはずだった。

再び二本の小剣を構えたフウガは、数秒も待たずに始まるだろう戦いに備え、〈龍脈〉からプラナを汲み上げる。己の内に満ちていく世界の息吹を感じながら、眼前の敵を見据えた。

「さて、雑魚に時間を掛けても仕方ない。さっさと片付けるぞ」

「ええ。——ミヨ、こいつらに私達の実力見せてつけてやるわよ」

「う、うん！」

樹鬼達が獲物の血肉を求め、不気味に唸りながら迫って来る。

フウガ達はそれに怯む事なく、果敢に立ち向かっていった。

五章 心欠け、誓いは胸に宿る その三（後書き）

お読み頂きありがとうございました。

五章 心欠け、誓いは胸に宿る その四

「水流、逆巻けっ！」

〈龍身〉により強化された身体能力を存分に生かして、レナが大剣を豪快に振るう。

蒼の軌跡より生まれたのは、荒れ狂い、渦巻く水塊。

これに巻き込まれた樹鬼達は、次々と上空へと吹き飛ばされる。

そこに、静かな〈具言〉が紡がれた。

「光矢——」

声の主は、光の矢をつがえた弓を引き絞ったミヨ。

「——異形の悉くを射抜け！」

そして、指が離される。

放たれた矢は一直線に妖魔達の舞う上空へと突き進み、途中で拡散。分かれ、数を増やした光矢は、導かれるように空中で無防備となった敵の核を的確に打ち抜いていき、命を絶つ。

後には、屍となった樹鬼達が一体一体と落下してくる。

「——やるな」

フウガは微笑と共に呟く。

伊達に騎士候補生——そして、階位Bではないという事らしい。

レナとミヨの二人は、見事な連携であっという間に樹鬼達の数を減らしていく。

「これは……俺も負けられないな！」

無造作に横に突き出された刃が、迫っていた樹鬼の顔面を貫く。

さらに腕に力を込め、

「烈風、研ぎ澄ませ！」

〈言力〉の発動と共に、妖魔を一気に縦に分かつ！

綺麗に左右対称に立たれた樹鬼は断末魔も上げられず、崩れ落ちた。そんな光景には目もくれず、風を纏った小剣二刀を手に、フウガは地を蹴る。

「有象無象はとつと退場してろ！」

少年と少女達により、強烈な水流が渦巻き、正確無比な光矢が翔け、激しい烈風が唸る。この怒濤の攻勢を前に、樹鬼の群れは、十分も掛からず全滅の憂き目を迎えた。

樹海が再び仮初めの静寂を取り戻して。

「……これで終わり？　なんか楽勝じゃない」

最後の樹鬼に止めを刺したレナは、鼻を鳴らしながら、その場で大剣を振る。

周囲には、もう動かなくなった妖魔達の残骸が散乱していた。

「油断するなよ、タマヨリ。まだ本命が出てきていない。あっちは、こんなに簡単にいく相手じゃないだろう」

緊張を一切緩めず、フウガは、猛る少女を諫める。

この程度の相手は、キジムと名乗った妖魔に比べれば、本当に雑魚以外の何者でもない。中級と上級の壁は、下級と中級のそれとは格が違うのだ。

上級妖魔は、その力、知性、存在——全てが凡庸な人間など軽く凌駕し得る。まともに対抗出来るのは、本当に数少ない実力者のみだ。フウガ達の学園の候補生に限れば、おそらくは個人でそれに値するのは、ウズメぐらいのものだろう。

“普段”のフウガでは、とてもその領域には及ばない。

「そうだよ、レナちゃん。私達はいくまで候補生……もしも相手が上級妖魔なら、とてもじゃないけど勝てる相手じゃないんだよ。出来る事といったら、助けが来るまで力を合わせて生き延びる事ぐらいなんだから」

ミヨもまた冷静に現実を口にする。

これに、レナがむくれる様にそっぽを向いた。

「わ、わかってるわよ。そんな二人で責めなくても……」

「いや、ふてくされなくても」

「ふてくされてなんてないっ！」

「はいはい……」

例の如く、ががーっと怒鳴ってくるレナをフウガは適当に宥める。そこに、乾いた拍手が響き渡った。

ざわざわとやかましく、風も吹いていないのに樹海が震えた。

「……………出たな」

振り向いた先の木々の間から静かに姿を見せたのは、キジム。この〈異界〉の創造者にして、おそらくは上級に属する妖魔。

先ほど樹海がざわついたのは、抑え込まれながらも、なお溢れるキジムの強大な妖気によるものだ。レナとミヨもそれを感じ取ったのか、僅かに残っていた余裕も、すでにその顔からは消え失せていた。

「たいしたものだ。あれだけの樹鬼の群れを片付けるのに、五分も掛からないか。騎士候補生などと言うだけあって、それなりの実力はあるようだな。褒めておこう」

上級妖魔の威圧に身体を強張らせながらも、レナがむっとなって、キジムを睨みつける。

「……………また上から目線で言ってくれるじゃない」

「当然だ。私は妖魔。人間とは、そもそも生命として格が違う。比べる事すらもおこがましい」

「こ、この……………!」

激昂し、いきなり飛び出しそうなレナを、フウガは肩に手を置いて押し止める。

「落ち着け。挑発に乗るな」

「ほう……………。冷静ではないか」

キジムが感心したように言った。

「お前は、我々妖魔に対し、心穏やかではいられない過去があると聞いていたのだから。思ったよりは大人だったか」

「……………冷静?」

フウガは、真っ直ぐとキジムを見据えた。

「それでもないさ」

本当に自然に。

まるで世間話のようなその一言が力に在る言葉――〈具言〉。

唐突に少年の姿は掻き消え、まさに疾風の如き速度でキジムの脇を駆け抜け、背後に到達。同時に交差するように振り抜かれていた刃は、完璧にキジムの体軀を断ち切っている。

「っ、がっ――」

その上級として力を存分に感じさせていた妖魔は、前のめりに崩れ落ち――

「いきなりだな。少々驚いたぞ？」

――たはずなのに、呆然と立ち竦んだままのレナとミヨの背後に立っていた。

「なっ――!?」

愕然とフウガは振り向いた。

未だに自身の斬ったキジムは、すぐ傍に倒れている。

なのに、“もう一人のキジム”は、二人の背後に居たのだ。

「こうなっては私もお返しをせねばいかな」

ゆらりとキジムの腕が持ち上がる。

その肌が樹鬼と同じく、木肌そのものへと変化していく。

この男もまた、樹鬼だったのだ。しかも、おそらくは数百年は軽く生き、上級の力と知性を得た存在――！

「っ！ 逃げろ！」

細かい警告など出来ず、咄嗟にフウガは叫ぶ。

「――っ！」

硬直していたレナとミヨも金縛りが解けたように、その場を跳び離れようとする。

キジムの掌より放たれたのは、無数の小さな棘だった。

それらは、地面や木肌に音も立てずに突き刺さっていく。

かろうじてその攻撃範囲より逃れた二人は、しかし、体勢を崩してしまい、無様に地面を転がる。

「大丈夫か！ 二人共！」

「な、なんとか……」

肩を強く打ったのか、痛みで顔をしかめながらレナが身を起こす。どうやら他に怪我らしい怪我はないらしい。

ほんと安堵しながら、今度はミヨに目を向ける。

「ナスノ、お前は……」

そこまで口にして、はっと息を呑んだ。

倒れた少女は、身体を起こす事も出来ず、信じられないほど顔を蒼白にしていた。その細い二の腕には、小さな棘が一本だけ刺さっている。

「……ごめん、なさい……。避け切れなかったみたい、です……」

「喋るな！」

咄嗟にミヨを黙らせ、傷口を確かめる。

棘が刺さった部分の肌は、不気味な紫に変色していた。

彼女の尋常ではない様子の原因。その細かい概要はわからずとも、簡潔な答えはすぐに脳裏に浮かんた。

「毒か……！」

「そんな……ミヨっ」

レナは血相を変えて、倒れた親友に駆け寄る。

フウガは、無駄とわかりつつも棘を指で抜き取った。

その様子に、さも愉快そうにキジムが笑った。

「死期を早めたくなければ、下手に動かさぬ事だ。その毒は即効性こそないが、じわじわと体力を奪い、存分に苦痛を与え、最後にはその命を確実に奪う。貴様ら程度では解毒など決して叶わぬよ」

「……………」

どくん、と。

フウガの内で心臓が大きく脈打つ。

何か抗いがたい感情が溢れ出してくる。

——守れ。

「あん……たあ……！！」

その隣で、完全に怒りで我を失ったレナが立ち上がる。
フウガが止める暇もなかった。

「絶対に——許さないっ！！！」

大剣を振りかぶり、少女が疾駆する。その刀身を大量の水が取り巻く、さらに巨大な刃を形成した。

「水斧、叩き斬れっ！」

技も計算もなく、まさに怒りのままの力任せの一撃が振り下ろされる。

地面が爆砕。余波で周囲の木々が根元から数本ほど倒れた。
だが。

キジムは容易く一撃を避け、レナの真横に立っていた。

「そんな鈍重な攻撃が当たるとでも思ったか？」

「……！」

レナが再び剣を振るよりも、キジムの動く方が速い。

瞬時に鋭い木槍に変化した腕が突き出され——

「——刃風、断ち斬れ」

刹那、真空の刃が唸った。

キジムの腕が、すっぽりと両断される。そして、レナの身体は、キジムの腕を斬った人物により、片腕で抱えられたまま後方に退避させられていた。

「……スサノ」

レナは、啞然と自分を抱える少年を見上げる。

それも当然だった。

今の一瞬の動きは、以前までの少年のものとは、まるで別物だったのだ。

フウガはレナを優しく地面に下ろすと、一歩前に出た。

——敵を排除しろ。

「——怪我はないな、タマヨリ」

「え、ええ」

「そうか。なら良い」

「スサ、ノ……？」

レナが何かを訝しがる様に、少年の名を口にした。だが、彼女自身、その理由を掴めていないようにも見えた。

しかし、佇む少年の気配には、紛れもなく異変が現れ始めている。少年のまま、別の何かに変貌していく様な。

少年のまま、何かが大きく欠けている様な。

——盲目に。一途に。感情を殺して。

「……キジム」

フウガは、静かに妖魔の名を口にする。

——限界だった。

ミヨが毒で苦しむ姿を見るのも。

レナが妖魔の手で傷つきそうになるのも耐えられない。

だから、あの妖魔のときには辛うじて抑え込まれたものが面に出る。

——大切な誰かを守り、それを傷つけようとする敵を排除しろ。

次の瞬間。

その変化は、明確なものとなってレナの瞳に映った。

少年の顔左半分から首に掛けて——亀裂が走っていた。

否。

まるで亀裂のような漆黒の痣が浮かび上がってきていたのだ。

——お前は、そういうソンザイだ。

「奪うぞ。お前の——命をな」

＊ ＊ ＊

——……覚悟はあるか？

かつて。

少年の父は、未だ幼かった彼にこう問うた。

——お前に、大切な誰かを守り抜く覚悟はあるか？

すかさず頷こうとする少年。

だが、それを制し、父をさらに続ける。

——誰かを守るという事は、他者から奪うという事だ。そして、自身もまた失うという事だ。

少年の前に、二本の小剣が突き立てられた。

特別、鋭い切れ味を感じさせるわけでもなく。

特別、美しさに魅せられるわけでもなく。

だけど、何故か。

酷く神々しさを漂わせる、少年をどうしようもなく惹きつける剣だった。

父は言った。

——もう一度訊く。お前に……その覚悟はあるか？

今度こそ、少年は答えを示した。

その手に。

己の誓いを体現する、二本の刃を握る事で。

——守る。

そのためにだけに。

＊ ＊ ＊

「奪うぞ。お前の――命をな」

殺意の宣告をした少年の身体が激しく発光した。

同時に〈異界〉が、何かを恐れるように静かな鳴動を始める。

「……何よ……この大量のプラナ……普通じゃない……」

レナは、有り得ないものを見たように呻く。

フウガが纏う白光は、あまりに高密度なために視覚化したプラナだった。その力に共鳴して、〈異界〉すらもが震えているのだ。

「吹け」

不意に、フウガが呟く。

そして、無造作に振るわれた刃から、強烈な風がキジムに向けて疾った。

「っ！　ぬおおおおおおおっ！？」

奇襲に、キジムは回避も防御も出来ない。彼の身体は、木々を薙ぎ倒しながら遙か後方へと吹っ飛んでいく。

「タマヨリ。ナスノを頼む」

吹いた風によって、緑葉が雨のように降り注ぐ中。

それだけを告げて、フウガは、キジムの後を追おうとする。

「ま、待ちなさいよ！」

レナが慌てて呼び止めた。

「一人で行く気！？　相手は仮にも上級妖魔なのよ！」

「……………」

「しかも、あんた……その痣、一体……」

「……俺が、学園に来た理由」

レナの言葉を遮って、フウガは真っ直ぐに前を見たまま言った。

「え……」

「俺が、ヒノカワカミ学園に来た理由を知っているか？」

「し、知るわけないでしょう！ あんた何を言って……！」

「それはな。俺のある行為を、親父がやめさせようとしたからだ」
その台詞に、不吉な響きを感じたのか。

レナが問い詰める言葉を止める。そして、未だこちらを見ようとしないフウガを不安そうに見つめた。

「……ある、行為……？」

「――妖魔狩りだ」

「……………！」

レナは絶句する。

言葉など何一つ出なかった。
当然だろう。

学園に入れるのは、その年に十四歳になる少年少女のみ。

つまり学園に入る前となれば、フウガは間違いなくそれ以下の年齢だった事になる。そんな子供が妖魔狩りを行うなど常識的な人間なら、想像出来るものではない。

「俺は母さんとセツナを失ってからずっと、ひたすらに、無我夢中で妖魔を狩り続けてきた。憎しみのままに剣を振るい、この手を血に染め、命を奪い続けてきた。その中には下級だけじゃなく、中級妖魔や――上級妖魔だって居た」

一歩、少年は踏み出す。

「だから、大丈夫だ。俺は負けない。お前もナスノも守ってみせるから。助けて見せるから。だから……」

一回だけ、レナを振り返って、

「だから……信じて待っていてくれ」

祈るように、そう言った。

……そう。

守るという行為こそが、スサノ・フウガという存在の意味。

――いや、違う。

自分は、スサノ・フウガに限りなく近く、決してスサノ・フウガでは在り得ない者。

母と、これから生まれるはずだった家族を失った、あの日。

少年は、心を欠けさせ。

固き誓いを胸に宿し。

守護の刃を握る事を決意した。

欠けて、継ぎ接ぎとなった心と酷く強固な想いは、その存在すらも歪ませ、変質させていった。

つまりは、心欠けし守護者。

大切な誰かを守るためだけに存在する——欠落の騎士。

「ナスノの事、頼む」

言い残して。

今度こそ、フウガは駆け出した。

「あ……ま、待って！」

少女の必死の制止にも足を止めない。

〈龍身〉で強化された脚力は、普段の彼のそれを大きく凌駕し、

あっという間にその身を樹海の奥へと進めて行く。

そして、ほんの僅か。

まるで侵食するかのように、彼の亀裂の如き痣がざわりと広がっていた。

五章 心欠け、誓いは胸に宿る その四（後書き）

お読み頂きありがとうございました。

五章 心欠け、誓いは胸に宿る その五

しばらく進むと、大きく樹海の開けた場所に出た。

無理矢理に切り開かれたかのような不自然さを感じさせるそこは、おそらくはキジムの意思で部分的に〈異界〉の構造を変化させたのだろう。

当のキジムは、その開けた地面の真ん中で腕を組み、悠然と佇んでいた。その姿からは、先ほどの不意の一撃によるダメージは見受けられない。

フウガは足を止めると、正面からキジムと対峙する。

「……それがお前の異質か、スサノ・フウガ」

こちらの姿をじっくりと観察した後、キジムは感嘆したような声で言った。

フウガの目が陰しく細まる。同時に、亀裂の痣が生き物のようにざわりと揺れた。

「もともと知っていたかのような口ぶりだな」

「ああ、聞いてはいた。シラユリ様からな。『フウガに近しい人間を適当に危機に陥れば、面白いものが見られるかもしれない』……と。そのときには訝る事しか出来なかったが——なるほど、確かに興味深いものだ」

「……あいつの仕業か」

ぎりつと歯噛みする。

何故かは知らないが、あの正体の知れぬ少女は、こちらの内面の事情に関して熟知しているらしい。それが不可解であり、また怒りを増長させた。

キジムは、その唇をあからさまに蔑みの笑みで歪めた。

「どういう仕組みかは知らんが、その姿になると能力が高まるらしいな。全く人間とは、妙な生き物だよ。理解に苦しむ」

「理解する必要は——ない」

その一言を後方に置き去りにして、フウガは一瞬で間合いを詰めた。

一気に懷に飛び込むと、峻烈な突きを放つ。

しかし、それは瞬時に硬質化したキジムの掌に、甲高い音と共に受け止められた。

二人は、間近で視線を交錯させ、ぎりぎりと刃と腕を押し合う。

「やはり、臂力、速力、プラナの汲力量、〈言力〉の威力——全てが上昇しているな。いや——」

瞬間、剣を受け止めた方のキジムの腕が倍近くまで膨れ上がった。そして、フウガを刃ごと後方に弾き飛ばす。

「ぐっ！」

空中で身を捻って、フウガは着地する。

転瞬、その頭上を襲う、槍の如き鋭さを持った木根の群れ。

「——風壁、聳え立て！」

咄嗟に前方に展開された風の障壁が、木槍を全て防ぎ切り、粉碎する。

その様子を注意深く観察していたキジムが、改めて得心したように頷いた。

「上昇と言うよりも回帰……そう、在るべき形に戻ったと言うべきか。そういう印象を受ける」

「——そうだ」

降り落ちる木片を振り払いながら、フウガは肯定する。

「九年前のあの日から、俺は守るためだけに生きてきた。

——大切な誰かを害する者を決して許さず、この両の手の刃で滅する。

それが俺の罪と存在の証明。魂の在り方。

今の俺こそが——欠落したスサノ・フウガの真実だ」

その言葉に呼応するように、肌の亀裂が広がる。

身に纏う息吹は、より雄々しく、より激しくなる。

「——キジム」

そして、少年は宣告した。

眼前の敵の辿るべき運命を。

「お前は俺の存在に食い潰されろ」

「ほざいたな、人間風情が」

妖魔の口が横に大きく裂けた。そして、それが象るのは嘲笑。

強大な妖力が吹き荒れ、刹那、その姿が三人へと増殖した。

文字通り増えたのだ。

見間違いでも、幻覚でもない。

現実には、全く同じ姿の三人のキジムはそこに並んでいた。

「な——んだと」

目の前の光景に、フウガは瞠目する。

三人のキジムが同時に跳躍した。その両腕を鋭い木刃へと変化。

それらが、鋼の刃を越える硬度と切れ味を誇っているのを、一目でフウガは看破する。

「食い潰されるのがどちらか、その身を持って知るが良い！」

「キジムッ！」

迫りくる殺気に、素早く驚愕より抜け出したフウガが、唸る風と共に不利を承知で敵を迎え撃つ。

一際激しい両者の激突に、樹海が大きく震えた。

◇ ◇ ◇

「ミヨっ！ 大丈夫！」

毒に倒れたミヨを傍の大樹の一本に寄り掛かせ、レナは声を掛けた。

介抱しようにも、ろくに出来る事など思い浮かばなかった。治癒の〈言力〉は血止めくらいしか使えないし、そもそも妖魔の毒を解毒するなど、それこそヒナコのような専門家にしか不可能だろう。

せめてもと、レナは取り出したハンカチで、絶え間なく嘔き出る汗を拭いてやる。

苦痛に喘ぐ少女の姿を見る度に、自身の不甲斐なさが胸を激しく苛んだ。

そんな親友の心を察してか、ミヨが弱々しく微笑む。

「……大丈、夫だよ……。ごめん、ね……。足手まといになっ、ちゃって……」

「何言ってるのよっ。足手まといなんかじゃないわ。それより、すぐにスサノがあいつを倒して〈異界〉を消すから。そしたらスクナ先生に……」

「レナちゃん……」

ゆっくりと持ち上がったミヨの手が、レナの腕を掴んだ。少女の栗色の瞳が、何かを訴えるように揺れていた。

「ミヨ……？」

「スサノ君の所に、行ってあげて……」

「何を……出来るわけないでしょう！ あんたを置いてなんて——！」

ミヨは、先ほどよりさらに蒼白になった顔をゆっくりと横に振る。

「……私は、平気だよ……。〈龍身〉を使えば、毒の回りは抑えられるもの……。だから、レナちゃんはスサノ君を……」

「な、何だよ。あいつは……何だかわからないけど凄い力を見せて——あれならきつとキジムにだって勝てるわっ！」

「……うん……でもね……」

酷く悲しげな表情を見せて、ミヨが呟く。

「……スサノ君……とつても寂しそうな……孤独な顔してたよ……」

「………っ」

絶句する。

それはレナも感じていた事であり、ずっと気に掛かっていた事でもあったのだから。

「……レナちゃんも知ってるよね……」

呼吸をするだけでも辛いはずなのに、それでもミヨは喋り続ける。「スサノ君、この学園に入ってから、ずっと辛い思いをしてきてる

……。入学してすぐは『ラシンの息子のくせに、とんだ落ちこぼれだって』って言われて……。その後、たまたま同じスサノという苗字だったただけだって勘違いされるようになってからは、もっと酷い事を陰で言われ続けてた……。でも、スサノ君は、そんな素振りは私達の前では全然見せたりはしなかったよね……」

「……………ええ」

レナは、これまでフウガと過ごしてきた日々を思い出す。

互いを深く知り合うには、あまりに短い時間。それでも、ミヨの言う通り、あの少年が自身を取り巻く環境を悲観するような様子を見せた記憶はなかった。

自ら落ちこぼれを演じた事で招いたものであるという事もあったのかもしれない。だが、それ以上に彼は周囲に心配を掛ける事を望んでいなかった——そんな気がしてならなかった。

「しかも、自分には何にも非のない事で、突然オロチに取り憑かれる目にあって……それなのに原因を作った私達を何一つ責めずに、自分にも責任があるって笑って許してくれた……。凄いよね……。真似出来ないよね……。レナちゃんが好きになっちゃうのも……。わかるよ……」

「え……?!」

予想外の一言に、レナは頬を紅く染めて、大きく目を見開いた。心臓が、自分でも信じられないくらい早鐘を打つ。

「ミ、ミヨ……あんた……っ」

咄嗟に言い訳をしようとするが、動揺のあまり何も思い浮かばない。結局、出来た事は、どうしようもなく目を泳がせる事だけだった。

「ふふ……私、レナちゃんの親友だよ……？　その気持ちが誰に向いてるかなんてお見通しなんだから……」

ミヨが可笑しそうに、くすくすと笑う。

その後、真摯な光を宿す瞳で、レナの目を見据えた。

「だから、ね……行ってあげて……。今、スサノ君、独りなんだよ

……うん、独りで居る事で他の誰も傷つけないようにしようとしてる……。でも、きっとそれはとても辛くて、悲しい事……。誰かが支えてあげないと……。独りにしちゃ、駄目なんだよ……」

「で、でも……」

唇を噛みしめて、レナは俯く。

胸の内には、一抹の不安が渦巻いていた。

「私に……出来るかな……。スサノを……支える事が……」

「出来るよ……」

迷わず、はつきりと。

ミヨは断言した。

「だって、レナちゃん、スサノ君の事、本当に好きなんだって……。私、わかってるんだから……」

「ば、馬鹿っ！」

あまりに率直な物言いに、レナは再び顔を紅くしてそっぽを向く。そして、程なくして。

その羞恥の表情は、次第に決意のものへと変化していった。

ゆっくりと立ち上がる。そして、剣を握ると、毒に苦しむ親友の姿を振り払うように背を向けた。

「……スサノと一緒に必ずキジムを倒して、すぐに戻ってくる。だから、少しだけ……。ほんの少しだけ待ってて」

ミヨは微笑を浮かべ、頷いた。

「……うん……。信じてる……」

一度、オトヒメの柄を強く握り締めた後。

意を決してレナは走り出した。

振り向く事はしなかった。すれば、きっと自分の決意は揺らいでしまう。親友の想いを無駄にしてしまう。

それだけは――絶対に出来なかった。

レナの姿が樹海の奥に消えてから。

「……信じてるよ……。レナちゃん……」

独り目を細めたまま、ミヨは呟いていた。

◇ ◇ ◇

——それは。

何かの悪い冗談のような。

酷くふざけた悪夢のような。

そんな表現しか出来ない、目を疑う光景だった。

「くそっ……！」

深き樹海の中。

悪態を吐きながら、フウガは悠然と立ち並ぶ木々の間を駆ける。

それを追って周囲に舞うのは、回転する無数の緑葉。一見、何の変哲もないそれらは、人の身など容易く切り裂く死の刃だった。

葉刃の群れが一切の逃げ道を塞いで、全方位からフウガに襲い掛かる。

「剛風、吹き荒めっ！」

二振りの刃より放たれた颶風が、迫る葉刃達を吹き飛ばしていく。しかし、あまりに数が多く、全ては撃墜出来ない。いくつかが腕や頬を掠め、鮮血が舞い散る。

「っ……！」

僅かに速度を緩んだ所を、地面を突き破って現れた数本の鋭い木根が、フウガを串刺しにせんと向かってくる。

〈言力〉を発動する暇はない。

「……のっ！」

身を捻りながら、ほぼ直角に跳躍。

強引な動作に全身の筋肉と骨が軋むが、そんなものに構ってられない。なんとか背中から受身を取りつつ着地すると、灌木を押し折りながら土の上を転がる。そして、勢いのままに立ち上がり、素早くプラナを汲み上げると同時に、世界への願いを乞う。

「魔風——」

刹那、黒き風が吼える。

「喰らい尽くせ——！」

顎を開いた魔性の風が、追ってきた木槍を葉刃を——さらに、その先に居たキジムすらも飲み込み、消し飛ばした。

だが、

「これで十八人目。なかなか頑張るではないか、スサノ・フウガ」
息を吐く暇すらなく、今度は木々の陰から、別の四人のキジムが次々と姿を見せた。

全員が全員、その両腕を木刃へと変え、斬り掛かってくる。

「舐め、るなあっ——！」

咆哮を引き金にするように、亀裂がフウガの左半身を完全に覆い尽くした。

途端に速力を上げたフウガは、前方の一人の放ってきた突きを躲すと、逆に右の刃で相手の胸を刺し貫き、さらに横手から迫る二人目の首を左の刃で刎ね斬る。

刺した剣を引き抜きつつ、その場で旋回。

背後の三人目と、崩れ落ちた一人目の後ろから飛び込んできた四人目を、回転の勢いの乗せた強烈な斬撃で両断する。

四人全員が地に伏し——

今度は、さらに六人のキジムが、頭上の木々の枝の上に唐突に出現した。

「……っ、はっ……はあっ……はあ……」

休みなく動き続けた事で枯渇する酸素を、激しく脈動する心臓が全身に巡らせる。そして、フウガは頭上を仰いで、こちらを余裕の表情で見下ろしてくるキジム“達”を睨めつけた。

正面に降り立ったキジムの一人が、酷く愉快そうに口の端を吊り上げる。

「どうした？ もう、憎まれ口を叩く余裕もないか？」

「……………はっ……………はあ……………」

フウガは答えない。

不可解なキジムの増殖と、そして、いくら斬っても堪えない——

その絡繰り。この秘密を解き明かさねば、この戦いに決して勝利はない。今はそのために、喋るための体力すらも惜しかった。

キジムもそれがわかつているのだろう。答えがない事を気にした風もなく、さらに続ける。

「スサノ・フウガ。確かにお前は、私が思っていた以上に強い。その力は、上級妖魔すらも屠るかもしれん。それは認めてやろう。

だが、それでもお前は私には決して勝てない。八百年を越える年月によって培われし我が力はそれほどに強大で、お前がどう足掻こうと越えられぬ遥か高き壁よ」

己に酔ったような恍惚な表情で、キジムは両手を掲げる。

「故に絶望しろ。思い知れ。お前達人間と、我々妖魔の格の違いを生れ落ちしときより定められし、生命の価値の差を。」

そして、死ね。お前には誰一人守れぬ。自身の命すら――！」
最後まで言い終える事なく、その体躯がゆっくりと背中から倒れた。

胸に真っ直ぐに突き立つのは、蒼色の柄を持つイザナギだ。

「……いちいちよく喋る奴だ。黙ってやがれ」

倒れた敵へと歩み寄り、突き刺さった剣を引き抜く。

そのとき。

ぼごと、不気味な異音が耳朶を叩いた。

「っ！――ぐあああっ！？」

気づいたときには、フウガは蠢く巨大な木腕によって、大樹の一本に背中から押しつけられていた。衝撃で内臓を痛めたのか、口の端から赤黒い血が零れる。

肥大した木腕は、倒れたキジムのものだ。

不意に、以前の数倍の大きさに膨れ上がったかと思えば、フウガの身体を掴み、そのまま伸びて、後方にあった大樹にまで叩きつけたのだ。

フウガは完全に拘束されていた。

身動きはまるで取れず、自由を奪う掌は、常に凄まじい圧力を掛

けてくる。それは〈言力〉を発動する集中さえもさせてくれなかった。

そこに残り五人のキジム達が降りてくる。

「無様な姿だな、スサノ・フウガ」

「言ったはずだ、お前は私に勝てない」と

「お前は、ここで私に殺される」

「所詮、人の身上級たる妖魔に敵うはずがなろう」

「人間など、我々に搾取されるだけの下等な存在でしかない」

キジム達が、動けぬ少年を一斉に嘲笑う。

フウガは血が溢れるほどに唇を噛みしめ、拳を強く握り込む。

「……『所詮、人の身』……『下等な存在』……お前ら妖魔は、いつもそうだ……！ 俺達人間を虫ケラ程度にしか思っていない！

だから、あのときも母さんを！ セツナを！ 親父を……！」

「どれほど喚こうが、無駄な事。無慈悲な現実を前に、無力なお前如きに出来る事は、もはや何もありはせん。時間もない。そろそろ

——死ね」

「くっ……！」

五人のキジムの腕が、まっすぐにこちらに向けられる。

腕は、鋭い穂先を持つ槍へと形を変えていく。

一斉にあれが突き込まれれば、今のフウガに防ぐ術はない。

「さらばだ」

「——っ！」

一瞬、死の絶望が胸を埋め尽くしかけ——

だが、槍は少年を貫かなかった。

「怒涛、押し潰せええええええええええっ！」

「何!？」

突然、まさに巨大な津波の如き怒涛が押し寄せたのである。それは、キジム達だけに収まらず、辺りの木々や茂みごと一息に飲み込んでいった。

フウガを押さえつけていた木腕もまた、根元から粉碎される。だ

が、怒涛は解放されたフウガだけは避けて、他の全てのみを押し流していった。

「……今、のは……まさか……？」

「——スサノ、無事！」

呼びかけに顔を上げる。

血相を変えて走ってきたのは、やはりレナだった。

「タマヨリ、何で……？ ナスノはどうしたんだ……」

「ミヨは大丈夫。あの子自身がそう言ったんだからね。それより助けにきたわよ」

「……駄目だ。戻れ、タマヨリ。お前が戦うには、キジムは危険過ぎる」

「今、まさにやられそうだったあんたが何言ってるのよ！」

「……………」

「それにね。あんた、私に言ったわよね。——『信じて』って。だったら……！」

レナは、フウガの胸倉を掴んで、額が突きそうなほどに顔を寄せてくる。そして、有無を言わせぬ強い口調で言った。

「だったら、あんたも少しは私を……私達を信じてよ」

少女は俯き、悔しそうに唇を噛む。

「もちろん、私一人じゃキジムに勝てないのはわかってる。でも、だからこそ力を合わせて戦うんでしょう。昨日の屋上でも言ったけど、独りで何でも抱え込むなんて格好良くなかないし——卑怯よ」

「……………俺は」

一方的に攻め立てられても、返す言葉は口に出なかった。

レナは服から手を離すと、今度は取り出したハンカチで、優しくフウガの口元と頬の血を拭ってくれる。そして、ふわりと、思わず見惚れるような微笑を見せた。

「あんたがね、私達を守りたいって思ってくれるように、私達だってあんたを守りたいの。——お願い、一緒に戦わせて」

「一緒に……」

眩き、手元に視線を落とす。瞳に映るのは、両の手に握られたイザナギとイザナミだった。

この二本の剣を握る事を決意した、あのとき。

自分は大切な誰かを、今度こそ絶対に守り通すと決めた。

しかし、独りで守れるものなんてほんの一握りで、フウガはいつだって自身の無力を呪ってきた。そして、それでも、守る事だけを盲目に己に課してきたのだ。

今の自分には……他に何も在りはしなかったから。

だけど、今。

共に戦い、守ろうと——そう手を差し出してくれる少女が、ここに居る。

フウガは血を拭ってくれていたレナの手を掴むと、そっと握り締めた。

レナが酷く焦った様子で声を上げる。

「ちよっ……スサノっ?!」

守る事。守り通す事。

それが、かつてスサノ・フウガだった自身の罪と存在の証明。魂の在り方。

あの日に定められた終わりを迎える瞬間まで、自分は他の生き方など出来はしない。する事など許されない。

でも。

その生き方を通すために——誰かと手を取り合う事は……——

「……………タマヨリ」

「な、何?　　というか手!　手!」

「一緒にここを脱出するって、そう……約束したもんな」
顔を上げると、自然と笑みがこぼれていた。

こんな自分でも守りたいと、そう言ってくれた事が、本当に泣きたいほどに嬉しかったから。

そして、言った。

「——改めて頼むよ。俺に力を貸してくれるか?」

「だ、だから、そんなの今更、訊かないでよ！　良いから、手をっ！」

「え……？　あ、ああ、悪い」

そういえば無意識に握ってしまっている事に気づいて、フウガは慌てて手を離れた。

レナは耳まで顔を真っ赤にして、フウガを睨みつける。

「ま、全く、急にこんな……」

「ごめん。思わずな」

すまなそうに笑った後、すぐにフウガは顔つきを厳しくする。

「……それよりキジムだ。あいつは、あんな攻撃じゃ倒せない。またすぐに襲ってくるぞ」

「――その通り」

「――！」

樹海に響く、胸の奥から不快を湧き上がらせる敵の声。
すぐさま身構えると、二人は視線を巡らせる。

そして、

「……………え」

「……………な」

二人は目を剥き、息を止めた。思考すらも停止しそうだった。

やはり、平然な様子で再び現れたキジムは。

十を超える――否、二十人以上となつて、折り重なる木々の残骸の上に立っていたのである。

五章 心欠け、誓いは胸に宿る その五（後書き）

お読み頂きありがとうございました。

五章 心欠け、誓いは胸に宿る その六

「……っ……はあ……はあっ……はあ……」

熱っぽい喘ぎが、大樹にもたれかかる少女の唇から絶え間なく漏れる。

キジムの毒は徐々に――だが確実に少女の身を侵食し、その命を奪わんとその魔性の手を伸ばしていた。

ミヨを全身を苛む苦痛に耐えながら、集中する。

必死に〈龍身〉を保つ事で、毒の進行を阻む。

「っ……はっ……はあ……はっ……」

そんな孤独な戦いをしながらも、震える腕を伸ばして、ある物を掴んだ。

弓だ。

彼女の〈真名武具〉であるカグヤ。

それを強く掴んで、俯き加減だった顔を上げる。

「……一つ……せめて一つくらい……私だって……」

負けてたまるものかと。

普段の大人しく少し臆病な彼女なら、まず表に出さない感情を支えに心と身体に力を入れる。

それは、もしかしたら。

いつも傍らに居た、ちょっと我がままだけど、本当は優しく、誰よりも負けん気の強い親友が与えてくれた、一つの財産なのかもしれない。

人は人を支え、人は人を成長させる。

レナがいつも隣に居てくれたからこそ、この苦境に挫けぬ今の自分が在り、

フウガと出会ったからこそ、誰かを笑って許せる心の尊さを知る事が出来た。

だから――だからこそ、せめて一つだけでも。

今も命懸けで戦う二人を助ける事の出来る何かを。

「我が眼は、千里見通す鷹の眼……されば、見よ——！」
なけなしの力を振り絞り。

少女は、その願いを確かな形とした。



まるで、いくつもの鏡にその姿を映したかのように、全く同じ姿で立ち並ぶキジム達。

その光景は、対峙する少年と少女の驚愕に染めるには十分過ぎた。レナが啞然とした表情で呻く。

「な……何よ、これ……」

「——悪趣味な奴め」

フウガは目付きを険しくつつ、必死に思考を巡らせる。

実を言えば、キジムの不死身ぶりの絡操りがどんなものなのか、すでに彼は気づいていた。

これまで斬ってきたキジム達には、その全てに確かな手応えを感じた。そして、樹鬼という妖魔は、夢魔のような幻術などは使わない。その事実が示すのは、あれらは全員が実体のある本物だという事。

だが、キジム自身は、いくら斬ったり突いたりしても、何一つ堪えた様子は見られない。つまり、今、姿を見せている無数のキジム達は、おそらくは妖術により木屑か何かで作られた分身体であり、急所というものが無いのだ。だから、いくら攻撃されても痛くも痒くもないし、死ぬ事もない。キジムの本体——あるいは、妖魔にとつての心臓である核そのものを別の場所に隠し、そこから分身体を操っているのだろう。

ならば、答えは簡単だ。その本体さえ見つけ出せば、キジムは間違いないで倒せる。これだけ正確に分身体を操っている以上、そう遠くには隠れては居ないはずだ。

——そう。ここまでは比較的容易に推測出来た。

だが、そこまでわかっていても、実行に移せない理由がある。

その理由とはつまり、肝心の本体を探る暇を与えてもらえないという事だ。

キジムとて、本体を発見されれば敗北が必至な事は理解している。だからこそ、分身体で休みなく攻撃を仕掛けてくる。そして、それらに対処しながら、妖気を辿って敵の本体を見つけ出すのは限りなく不可能に近い。それはレナが加勢にきてくれた現在でも変わらないだろう。

幸い、分身体は増える度に一体一体の攻撃が雑になるので、倒す事自体は困難ではないが、それも根本的な解決には繋がらない。なにせ、相手は上級妖魔故の豊富な妖力で、キリなく分身体を作りだしてくるのだ。

（……せめて……そう、せめて本体の潜んでいる場所の手がかりさえあれば……）

上空、地中、この樹海にある木々の全て——あるいは、分身体の中に紛れているのか。ここがキジム自身の生み出した〈異界〉である事を考慮すれば、可能性はいくらでもある。それら全てをしらみつぶしに潰していく事など出来るはずがない。

ゆつくりと包囲を狭めるキジムの分身体達を前に、フウガは強く歯を噛み合わせる。

隣のレナも大剣を構えながらも、焦りは隠せない。

「さすがに……これはちよつと、まずそうね……」

「……………迎え撃つしかない、か」

湧き上がりそうになる絶望の感情を必死に抑え込む。レナと、今も毒に耐えているミヨを助けるためにも諦める事など出来るはずがない。

そして、覚悟を決め、今にも跳び出さんと腰を落としたそのとき

『――苦戦しているようだな、フウガ』

久しく聞いていない声が頭に響いた。

フウガは、大きく目を見開く。

「……………オロチっ」

『どうだ？ 私が助言をしてやろうか。キジムの本体――私ならば、その場所もわかるう』

「ふざけるなっ！ 誰がお前の……………！」

反射的に、フウガはその申し出を拒絶していた。

『ふむ。まあ、お前がそう言うのなら仕方ないが……………』

オロチは残念そうに唸ると、一旦、間を空けて、こう続けた。

『だが、良いのか？ このままではお前だけではない。他の二人も死ぬ事になるのだぞ』

「……………それ、は……………」

両の手にある剣の柄を強く握り締めて、フウガは懊悩する。

確かに、このままでは皆、キジムの手に掛かって命を落とすだろう。

それは自身の誓いと存在が、決して許す結果ではない。

だが……………

だが、それでも……………妖魔であるオロチの力を借りるなど……………！

すると、誰かが嘆息する音が聞こえた。

オロチだった。

『やれやれ。いつも理解に苦しむのだがな……………』

「何がだ……………」

『どうして――』

そして、オロチは言ったのだ。

今まで一度として聞いた事のなかった、憤りの響きすら宿した声で。

『どうして、妖魔が人間を助けようと思ってはいけない。どうして、人間が妖魔に助けられてはいけない。そんなものを誰が決めた』

「……………!!」

まるで、後頭部を槌か何かで殴られたような衝撃。
ただただ、フウガは絶句する。

『確かに、多くの妖魔は、人間に危害を加える天敵とも呼べる存在かもしれない。これまでの歴史の中で、多くの命を奪い、悲しみを生んできたのかもしれない。』

だが、それが妖魔の全てではない。決して変わる事のない真実ではない。人を羨み、人を愛し、人と共に生きようとする者も……少数とはいえ居るはず——いや、居るのだ。人の心が全て同一でないように、妖魔とて、一つとして重ならぬそれぞれの心を持っている。少なくとも、私は今、本気でお前を助けようと思っているつもりだ』
「……………」

『フウガ。お前の存在は、大切な誰かを何があろうとも守り抜く事だと言ったな。それは、かつての憎しみ、怨み、呪い、悲しみ、苦しみ——それら全ての想いを再び生み出さぬために、そういう生き方を選んだのではないのか？　なのに、お前は憎むべき妖魔の示すものだからと言って、大切な者を守る道から目を逸らすのか？　それをお前の存在は……許すのか？』

「っ！　わかったような事を言いやがって……！」
胸中で渦巻く葛藤をそのまま表すように、フウガは吐き捨てる。
頭で理解出来ていても、感情が、心が、言う事を利かない。オロチの言葉の全てを、身勝手に否定しようとしてしまう。

「スサノ……」

レナが、そっとフウガの肩に触れる。

だが、それ以上は何も口にしない。

ただ、真っ直ぐとフウガを見つめ、その答えを待つ。その視線にあるのは、少年への確かな信頼だった。

フウガは俯き、目を閉じると、自身の心を向き合う。

(……俺は……俺、は……)

わかっている。わかっているのだ。

今、どうすべきか。自身とオロチ、どちらが正しい事を言っているのか。

そして、あの夜、オロチへ出て行けと罵倒したときの――あの胸の苦しみの正体も。

きつと自分は、妖魔だとしてもオロチを憎み切れていない。

妖魔の全ては倒すべき敵なのだという、己の中で絶対だったはずの真実が揺らいでいるのだ。

（俺は、俺は俺は俺は俺は……俺は……！）

顔を上げ、目を開く。

選択は為される。

今もまとわりつき、縛ろうとする全てのしがらみを振り払って、フウガは叫んだ。

「言え、オロチ！　今は――お前に助けられてやるっ！」

その答えが正しいかどうかなんてわからない。

今だって、心のどこかに迷いはあるかもしれない。

でも、そんな事よりも何よりも。

何も出来ず、目の前で守りたい誰かが死んでいく事を許してしまう方が嫌だったのだ。

『ぬはは！　そうこなくては面白くないっ！』

途端、愉快そうにオロチは大笑した。

そして、告げる。

倒すべき敵――キジムの本体の場所を。

それを聞いたフウガは、意外そうに目を瞬かせる。

「……本当に、そんな単純な場所なのか？」

『真実というのは、大概は単純明快なものだ。それを不必要に複雑なものと思ひ込んでしまうのは、人の愚かな性の一つだな。』

そして、何より奴の正体は、樹鬼。その性質を考えれば、本体の潜む場所が、そこになるのも当然の帰結だろうさ。木々を支え、命を育む養分を吸い上げるものが在る場所になるのはな』

「なににせよ、本体の場所がわかれば、こっちのものだ」

『だが、どうする？ 奴の本体は容易く正確な位置を特定されぬよう、常に移動を繰り返しているだろう。潜んでいる場所がわかって、それだけでは解決にはならんぞ』

「それこそ単純な話だ。手当たり次第にひっくり返してやれば良い」
フウガは不敵に笑った。そして、二本の小剣を逆手に握ると、切っ先を下に向ける。

「タマヨリ、俺の傍から離れないでくれ」

「——ええ、あんたに任せる。信じてるからね」

レナは何も訊く事なく、力強く頷いた。

「……さて、最後の会話は終わったか？」

そこに割り込んでくる嘲りの声。

「終わったのならば、今度こそ死んでもらおう。いいかげん、この〈異界〉にも邪魔者が侵入してきかねんからな」

周囲を取り囲むキジムの一人が冷笑する。

その表情からは、自身の勝利への疑いは一片として見受けられない。
い。

「ああ、もう会話の必要はない。ただし——」

今、汲み上げられるだけのありったけのプラナ。フウガは、それを一気に〈龍脈〉より自身の身体へと汲み上げ、集わせる。そして、そのほとんどを一つの〈言力〉へと改変していく。

「死ぬのは、お前の方だ！ キジム！」

真下に向けられた二振りの刃の切っ先が、深々と地面へと突き立てられた。

「————鳥よ！」

次いで、紡がれる〈具言〉は、詠うが如く流れる。

「誇り高き、碧の鳥よ！ 我が願いのまま、果てを忘れ、終わりを捨てた、その翼を広げよ！」

世界の息吹を代償に、その願いは具現化される。

強大かつ、偉大な風が生まれ落ちる。

「こ、これは……?!」

咄嗟にフウガの身体にしがみついたレナが驚愕に呻く。

フウガを中心として凄まじい風が走り、網目状に広がる。それは地面を引き裂き、切り裂き、急速にその範囲を拡大していった。

そして。

「――吹け！」

再度、乞われた願いを合図に一気に地中より噴き上げる！

まるで地下より巨人の吐息にでも吹かれたかのような光景。これに地上は破壊しつくされ、土塊は宙を舞い、木々は根元より引き抜かれる。樹海が――“めくられていく”。

（このまま奴の本体を引き摺り出す……！）

だが、この強力な〈言力〉の代償は、確実に少年の身に刻まれていた。

肉体が軋んで悲鳴を上げる。全身の至る所が自然に裂け、鮮血が噴出する。

「ぐうっ……！」

「ス、スサノ！」

「大丈夫だ……！ この程度っ！」

身体のうちここに針をねじ込まれるような痛みを捻じ伏せ、薄れそうになる意識を繋ぎ止める。

強靱な意志で、さらなるプラナを〈言力〉へと注いでいく。

蠢く亀裂の痣は、今にも全身へと広がろうとしていた。

◇ ◇ ◇

「馬鹿な……っ！」

キジムの分身体達は、張り巡らせた木根で荒れ狂う風を防いでいた。

彼ら自体には、風は何の被害も及ぼしていない。しかし、その表情は驚愕と疑念に染まっている。

「まさか……私の本体の場所に気づいたのか?!」

すでに、先ほどのまでの余裕は、顔からは消え失せている。

あんな後の事など考えない行動は、こちらの本体がどこにあるのか、確信でもしていないと出来ないはずだ。だが、今の今までの少年には、それを察する情報を与えてなどいない。

「何故、急に……っ」

『申し訳ないが、私が少々手助けさせてもらった』
「っ！」

頭上から落ちる声に、弾かれるように天を仰ぐ。

そこに居たのは、長い灰色の髪と紅い瞳を持つ、長身で大柄の男。幻体故に、風の影響も受けず、泰然と浮くオロチであった。

「お前は……オロチ……なのか?！」

『いかにも。確かに私は〈六魔天〉の石柱――魔帝オロチだ。まだまだ妖魔間での私の知名度も捨てたものではないな』

「そんな……そんな話は聞いていない! この件にオロチが関わっているなどと、そんな事は……!」

キジムは腕を振って、激昂する。

これにオロチは、意外そうに片眉を持ち上げた。

『おや、知らなかったのか。それは可哀想にな』

「どういう……意味だ!」

『それほどの重要な話を聞かされていなかったという事は、つまり――お前は、シラユリにとってその程度の存在でしかなかったという事だろうさ』

「っ……! だ、黙れ! 仮にも〈妖界〉の頂点に立つ一人でありながら、人間如きに封印された愚か者めが!」

『これは辛辣だな。耳が痛い』

オロチは、いかにもわざとらしく悲しそうな顔をする。

だが、すぐに何でもなかったように微笑へと表情を変えた。

『だが、まあ、安心すると良い。私は、これ以上は何も介入はせんよ。これは――フウガの戦いだからな』

肩を竦め、もう用はないと言わんばかりに身を翻す。

そして、次に口にされた言葉は、言い知れない重さが含まれていた。

『……人であろうと妖魔であろうと、己に奢った者は、その時点であらゆる真実を見失う。他者にではなく、何よりも己の心に敗北する。

キジム。お前はここで滅びるだろう。その奢り故に——人間を侮るが故に、な』

言い残し、風の中へと溶けるように消えていく。

キジムは、もはや誰も居なくなつた空間を、それでも睨み殺さんばかり凝視する。

「戯言を！ 私があんな小僧に敗れるだと。たかが子供！ たかが人間に……！ 有り得ぬ！ そんな事があって良いはずがない！」
そして、勢い良く振り返る。

視線の先には、樹海を蹂躪し続ける少年。

こうも広範囲に影響が及んでは、本体の避難は間に合わない。その姿が露になるのは時間の問題だった。

「こんな風……本体が見つかる前に小僧を殺してしまえば良いだけの事よ！」



噴き上げる風などものとのせず、二十人を越えるキジム達が一斉に、フウガへと向けて駆け出す。

直後、そこを渦巻く水塊が襲い、数人のキジムが巻き込まれて吹っ飛んでいった。

フウガの隣で、必死に踏ん張りながら剣を構えるレナが叫ぶ。

「スサノの邪魔はさせない！」

「ちいっ！ 小娘が！」

苛立ちのまま舌打ちしながら、キジム達は構わず跳躍する。

「そんなもので、私が止められるものかっ！」

「それでも止める！——水斧、叩き斬れえっ！」

瞬時に形作られた水斧の一撃が、再び幾人かのキジムを撃退する。しかし、あれだけの数は、少女一人では抑えきれない。十人余りの妖魔達がレナの脇を抜け、フウガへと殺到した。

「スサノッ！」

「死ねっ！」

葉刃が、木剣が、木槍が、次々と少年へと襲い掛かる。

転瞬、

「——魔風、喰らい尽くせ」

碧き鳥の風は収まり、代わりに黒風が荒れ狂った。

全ての攻撃が風の顎に飲まれ、キジム達もまたその餌食となる。

フウガはゆっくりと立ち上がった。

「——悪いが、キジム。もう遅い」

「何っ！」

ただ一人残ったキジムの分身体が背後を振り返る。

木々が土ごと根こそぎ引き抜かれたせいで、広げる視界の向こう。大きく割れた地面の陰に隠れるように、脈打つ一つの巨大な赤黒い肉塊があった。それこそフウガの渾身の風を前に逃れきれず、その姿を露にする事になったキジムの本体だった。

そして、それは、唐突に姿を見せたオロチに、キジムが気を取られた時間があったからこそ得られた結果でもある。あの何気ないオロチの行動は、僅かでも本体を見つけ出すための時間を稼ぐためのものでもあったのだ。

核そのものと思われるキジムの本体は、不気味に蠢き、土の中に戻ろうとする。だが、地中に押し出されたせいか、その動作はあまりに鈍い。

「逃がしはしない！」

言うが早いか、フウガは満身創痍の身体を押して地を蹴った。

「疾く、駆けよ！」

風の後押しを受けて、少年は加速。愕然と立ち竦んでいたキジム

の分身体を一刀の下に切り伏せ、一直線に本体を目指して疾駆する。

「「「スサノ・フウガアアアアアアアアっ!」」」」

それを妨害せんと頭上から襲ってくる、新たな四人の分身体。

だが、フウガはそれに目もくれない。

確信がある。この攻撃は自分には届かないと。

「水人の巨腕よ、その御手を開け!」

少年の確信を証明するように、レナの〈具言〉と共に、中空に巨大な水掌が生まれ、キジム達を弾き飛ばし、撃砕する。

「だから、邪魔はさせないって言ってるでしょ!」

「くっ! おのれえっ!!」

少年はさらに走る。

今度は、十三人のキジムが立ちはだかった。

しかし、七人が一瞬でフウガに斬られ、六人がレナの水に押し潰された。

所詮は、闇雲に生み出される分身体。目の前にある勝利へと邁進する二人の勢いを止めるには到底至らない。

ここにきて、戦況は完全にフウガ達の方に傾いていた。

『お、おのれ、おのれ、おのれえええええっ!』

数で押した戦法がまるで通用せず、分身体ではなく、喋る口を持つためキジムの本体自体が念話で絶叫する。

どうやら、あらゆる行動を分身体に委ねた代償に、キジム本体は著しく動作を制限されるらしい。つまり、本体自体には、攻撃や防御をする能力は、ほぼないに等しいという事。

(なら、あそこに辿り着けさえすれば……!)

なおも邪魔に入る分身体をひたすらに斬り捨てながら、フウガは、キジムの本体へと迫る。

形勢は逆転したが、決して余裕があるわけではない。

先ほどの強力な〈言力〉な発動も含めて、体力も精神も極限近くまで磨り減っている。

だが、踏み出す足は止まらない。

振るわれる剣は、敵を斬り続ける。

その誓い故に。

その存在故に。

少年は、ただ剣を振るい、走り続ける。

そして、本体に後一步で剣が届く所にまで迫る――！

「これで！」

最後の〈言力〉を発動しようと集中する寸前。

本体の脇の地中から、一つの影が飛び出す。

「！」

咄嗟に身を捌くが、間に合わない。

「かっ――！？」

視界が真っ赤に染まる。

肉の裂ける嫌な音と共に、異物が体内に侵入する。

その腹部に、深々とキジムの分身体の木剣が突き刺さっていた。

キジムは、最後の最後に、分身体を一人だけ本体の守護に隠していたのだ。

「ぐっ、つううあ……っ」

かろうじて急所は外したものの、傷は深い。激痛が脳髓を焼き、どす黒い鮮血が、ぼたぼたと地面に落ちて跳ねた。

レナが悲鳴にも近い声で叫ぶ。

「ス、スサノツ！！ そんな――！」

「そうだ！ これが現実だ！ お前のような人間が！ 欠けた存在が！ 私に勝つなど有り得んのだっ！！！」

キジムの分身体が、少年の身を引き裂かんと腕に力を込める。

だが、その寸前。

――樹海の奥より一条の閃光が迸った。

「――あ？」

光は――光矢は、キジムの分身体の額を貫通。そのまま彼方へと

消えていった。

妖魔は言葉もなく背中から倒れ、刃が少年の身体から抜ける。

「……」

「あの光は……まさか！」

レナは、光の飛んできた樹海の奥を振り返った。

体内からせり上がる血を口の端より流しながら、フウガは微笑む。

「ありがとう……ナスノ……」

毒の苦しみに屈する事なく、最後の手助けをしてくれた少女への礼を口にする。両手の剣を改めて強く握った。

剣が抜けた事で、さらに大量の血が傷より溢れ、少年の足元に溜まる。

しかし、今は体力の限界も、傷の痛みも、その全てを忘却した。

「今度こそ……終わりだ、キジム！」

[illegible]

妖魔の制止など届かない。

欠落の騎士の証たる亀裂の痣が、ついに完全に全身へと広がる。

「閃風——」

紡がれる願い——〈具言〉に従い、光の風が二本の刃を取り巻いていく。

そして、終焉の一撃が振り下ろされる！

「――染め上げろ！！！！！！」

その叫びのままに。

世界は、白き光へと染め上げられた。

五章 心欠け、誓いは胸に宿る その六（後書き）

お読み頂きありがとうございました。

五章 心欠け、誓いは胸に宿る その七

しゅうしゅうと不快な異臭が、樹海を漂っていた。

閃風の斬撃に裂かれたキジムの本体である。ぱっくりと開いた傷からは、そこだけは人と同じ赤黒い血が溢れ、地面を濡らしている。その醜い肉塊の前で、フウガは崩れ落ちるように膝を突いた。前のめりに倒れそうになるのを、かろうじて両手で支えて止める。

それから、亀裂の痣がざわざわと蠢動し、引いていく。

欠落の騎士から、ただのスサノ・フウガへと変わっていく。

「スサノッ！！！」

顔を真っ青にして、レナが大剣を放り出す。深く傷ついた少年に駆け寄り、恐る恐るその身体を支えた。

「ちょ、ちよっと大丈夫なの？！ 血が……こんなに！」

「……平気、だ。急所は、逸れてる。……それより、早くナスノをスクナ先生の所に……」

「それはあんたもでしょ！ それにまだ〈異界〉が……ああ、もう

っ！ 何でキジムが死んだのに消えないのよ！」

「……消え……ない……？」

冷たい予感が背筋を這い登る。

今も血を流し続ける傷の痛みも忘れて、フウガは弾かれるように眼前の肉塊を見た。

土が舞い上がった。

突然、目の前を覆い尽くすほどの木根の群れが生え出したのだ。

その槍のような鋭い先が一斉にフウガ達を向く。

「そんな……！ まさかっ」

「キジム……！」

『——終わらんぞ！ まだ終わらんぞおっ！』

念話による絶叫が、脳裏に響き渡る。

『この身が朽ちる前に、お前達も道連れにしてくれるうっ……！』

そして、木槍が動いた。

放たれた矢のように、逃げ道すら残さず、動けない二人へ向けて突き込まれていく。

「……………っ！」

「……………鋼閃、迸れ」

次の瞬間。

その全てが中空で停止した。

「え……………」

レナが、呆然と目をしばたかせた。
動かない。

木の根は、二人を貫く寸前で、時が止まったかのように完全に固まっていた。

「……………あれ、は」

フウガは、自分達を中心に、周囲に僅かに光を反射する線が縦横に走っている事に気づく。

「……………私の教え子に、これ以上、手を出す事は許さない」
酷く感情を殺した声が、背後から届いた。

二人が、はっとなって振り返る。

その視線の先には、長い銀髪と海色の瞳を持つ美女が立っていた。
その両の十指には銀の指輪が嵌っており、光の線は全てそこから伸びている。

「ミカツチ教官……………！」

フウガの声に応えるように、フヨウは淡く微笑んだ。
そして、すぐに容赦のない殺意が瞳に戻る。

「……………細き刃檻、震断せよ」

ぶん、と微かな震動音が鳴った。

同時に、いくつも鋭い切断音が響く。

ばらばらと落ちるのは、断ち斬られた木根の残骸。

「な、何が起きたの？」

状況が掴めないレナが疑問を漏らす。

「……鋼糸、だ。ミカヅチ教官の〈真名武具〉は、あの銀の指輪と、そこから伸びる極細の鋼の糸……それでキジムの木の根を縛り、震動を送って斬ったんだ……」

掠れた声で説明しながら、フウガは辺りに首を巡らせる。

フウウが居るという事は、〈異界〉の歪みを見つけて、自分達を助けるために侵入してきたのだろう。

だとすれば、おそらくもう一人――

『ぬおおおオオオおおおおおおおおおおおおおおおおおッ！』

もはや言葉にならぬ咆哮を上げて、再びキジムが攻撃を仕掛けようとする。

「往生際が悪い」

それを、フヨウ以上に冷徹な声が遮った。

キジムの本体の真上から、一つの影が落ちる。

「三連一牙――」

翻るは、鈍く光る三つの穂先を持つ槍。

敵を見据えるは、氷の眼光。

そして、〈具言〉は完成する。

「穿て！」

冷酷無比な破壊の奔流が解き放たれる。

轟音。爆碎。

『……………っ』

断末魔はなかった。

それすらも飲み込み、一撃は〈異界〉の樹海に、底の見えぬ大穴を刻んでいたのだ。後には、キジムの姿など欠片も残らない。

一撃の余波で生まれた風に、身を低くしていたフウガとレナは、改めてその常識外れの威力に啞然となる。

そんな二人の傍に、一撃を放った人物が軽やかに着地する。

眼鏡を外し、すでに戦士の顔となっているソウゴだった。

「すまない、遅くなった。無事か」

「わ、私はなんとか……。でも、スサノが深手を……。それにミヨが向こうで、キジムの毒に……！」

レナが慌てて、状況を説明しようとする。

ソウゴは冷静に頷き、頭上を振り仰いだ。

「大丈夫だ。〈異界〉が解ければ――」

その呟きを合図とするように、周囲の景色がぐにやりと大きく歪んだ。

強い目眩を覚え、思わずフウガは目を閉じる。そして、次に目を開いたときには、すでにそこは見慣れた、あの簡易舞台の上だった。「ミヨ！」

途端、レナが声を上げた。

すぐ傍に、ウズメに抱きかかえられたミヨが居たのである。

〈異界〉が解ければ、中に居た者は皆、その〈異界〉が展開された場所へと戻される。どうやらウズメも、ソウゴやフヨウと共に異変に気づき、〈異界〉の中へと侵入していたらしかった。

「大丈夫だ。まだ息はある。すぐにスクナ先生に診せれば助かるだろう」

気を失っている腕の中のミヨを気遣う視線で見下ろしながら、ウズメは言った。

そして、不意にその表情が強張る。

「！ フウガッ、その傷は……?!」

「……はは……少し派手にやられちゃっ……て……」

フウガは、何とか苦笑いをして見せようとして――失敗した。

全身が急速に脱力して、ずっと支えてくれていたレナへともたれ掛かってしまう。

「フウガ!!!!」

「スサノ!!!!」

二人の少女が、悲痛な声で少年の名を叫ぶ。

「タマヨリ、スサノをこっちに。僕が運ぶ」

「は、はいっ」

駆け寄ってきたソウゴに、レナは支えていた少年を託す。そして、そのままフウガは、ウズメに抱きかかえられたミヨと共に医務室へと運ばれていく。

たゆたう意識の中。

フウガは掠れる声で呟いた。

「オロチ……」

『……何だ？』

「……」

『どうした？ 特に何もないなら、喋らない方が良い。傷に障るぞ』

「気に食わないけど……」

『む？』

迷って。躊躇って。

でも、言った。

「酷く気に食わないけど……言わないと自分で自分が許せなくなるから、一応、言っておく。」

……ありがとう。おかげで、タマヨリとナスノを守れた」

姿は見えないのに、可笑しそうにオロチが笑う気配がした。

『なるほど。では、私もこう返しておくかな。』

………気にするな。たいした事ではないさ』

フウガの唇が、淡い微笑みを象る。

それは、初めてオロチに向けて浮かべた表情でもあった。

「……本当、ムカツク奴だよ、お前は……」

そんな憎まれ口を叩きながら。

オロチに対する嫌悪感が不思議と薄れていくのを、少年は確かに感じていたのだった。

＊ ＊ ＊

意識が戻ったのは深夜だった。

医務室である。

闇に包まれた静寂の空間。

横の棚に置かれたランプの光と、窓から差し込む月光だけが、暗闇を侵食している。

フウガは、ベッドの上で寝たまま、ゆっくりと何度か瞬きする。次第にはっきりしていく意識と共に、ここに自分が居る理由が思いだされていく。

(……助かった、か……)

そつと腹部に手を這わせると――ヒナコの治療のおかげだろう――すでにキジムに刺された傷は塞がっていた。未だに断続的に続く鈍痛と、大量の血を失った故の虚脱感が残っていたが、これだけはどうしようもない。

フウガは、ぼんやりとした頭で、ベッドに横になったまま、首を巡らせる。隣に、自分と同じようにミヨが寝ているのが見えた。

顔色は、もう正常な赤みを取り戻している。こちらも解毒が間に合ったらしい。

フウガは、ほつと安堵の息を漏らす。

と、それと同時に医務室の扉が開く音が聞こえた。

「――スサノ！ 目が覚めたの！」

慌てて誰かが駆け寄る足音。

そのすぐ後に視界に入ったのは、レナの顔だった。

安堵と憤りとが入り混じった、なんとも複雑な表情をしていた。

「馬鹿っ！ 無茶して……死んだらどうする気よっ！」

「タマヨリ……」

レナは、半ば泣き声で怒鳴ってくる。

フウガは、彼女が水の入った桶を手に行っている事に気づく。どうやら、今も自分の額に乗っているタオルを濡らすためのものらしいかった。

「……もしかして、ずっと看病していてくれたのか？」

「え……」

問われた途端、レナは先ほどの勢いを失って身を引いた。さりげなく目元の涙を手の甲で拭いながら、ぼそぼそと呟く。

「そ、そうよ。スクナ先生には寮で休めとは言われたけど、ミヨの事も心配だし、とてもじゃないけど寝れる気分じゃなかったから……」

「ナスノは……もう平気なのか？」

「ええ。結構前に、一度意識は戻ったし、毒は完全に除去したって。結果的には、あんたの方がよっぽど危なかったらしいわ。本当……助ける側が死にそうになってたら世話ないでしょ」

「……はは、全くだ」

フウガは、思わず苦笑を漏らす。それと一緒に、傷が僅かに痛んだが、レナに心配掛けないよう表情には出さなかった。

「一応、言っておくけど……看病してたのは私だけじゃないわよ。

今は外に煙草を吸いに行ったスクナ先生に……それと……」

「フウガっ」

レナが言い終わるより先に、別の人間の声が飛び込んできた。

新たに姿を見せたのは、夜から生まれたような黒髪黒瞳を持つ凛々しき一人の少女。

ウズメだった。

替えのタオルを取ってきたらしい彼女は、珍しく取り乱した様子で走り寄ってくる。そして、フウガが意識を取り戻しているのを確認すると、心から安堵したように息を吐いた。

「……良かった。気がついたんだな」

「先輩……。先輩も看ててくれたんですね」

ウズメは持っていたタオルを脇の棚の上に置き、ベッドの脇に膝を突いた。

微笑むと、そっとフウガの手を握る。

「当たり前だろう。君の事を放って寝てなど居られるものか」

「……………」

彼女もまた、微笑しつつも泣きそうな声をしていた。

本当に心配を掛けたのだな、と罪悪感で胸が痛んだ。

そんなウズメとフウガのやり取りを見て、レナが酷く不満気な顔で目を逸らした。

同時に、異様な圧力を感じ、フウガは脂汗を浮かべる。

（……なんだろう。すごい刺々しいものが向けられているような……）

だが、指摘するともっと恐ろしい事になる気がするたので黙っていた。

ふん、とレナが鼻を鳴らす。

「……とにかく今は動ける状態じゃないんだから大人しく寝ときなさいよね。そんなんじゃ特訓だって出来やしないんだから」

「ああ、そうだな。でも……寝る前に少し話をしたいんだ。先輩も居てくれるなら、ちょうど良い」

「え……？」

逸れていたレナの顔が戻ってくる。

ウズメも訝しがるように、フウガの顔を見つめていた。

「確証があるわけじゃない。でも、シラユリの事は、あの……俺が母さんとお腹の中の子——セツナを失った九年前の事件が関係しているような気がしてならないんだ。それは初めてシラユリに会ったときから、ずっと感じていた。……もし本当にそうだとしたら、俺は自分の問題に皆を巻き込んでしまった事になる」

レナもウズメも何も言わない。

深更の静けさの中、フウガの言葉に、ただ耳を傾けていた。

「だから、きちんとけじめをつけておきたい。九年前に何があったのか、ちゃんと話しておきたいんだ。俺が話すのが辛いからって、誤魔化しておきたくはない。それが……仲間だと言ってくれて、今もこうやって心配してくれる皆へ、俺が出来る数少ない事だと思うから」

「私は……」

ウズメが、そつと口を開いた。

「君が話す決意が出来たのなら、止めはしない。正直、私自身、聞きたいと思っていた事だからな」

「……私も……うん、同じ」

続けて、少し逡巡してからレナが言った。
と。

「――それは、私も聞いて良いんですね？」

不意に、医務室に響いた三人目の声。

ぎよつと振り返った三人の視線が、一つのベッドに集まる。

「ミ、ミヨっ?! あんた、起きてたの!」

「今、ちようど目が覚めたの。……ねえ、スサノ君、私も聞いて良いですか?」

「ああ。もちろん。むしろ、そうしてくれた方が良いよ」

頷いて、フウガは天井を見据えた。

よく掃除された、清潔で真っ白な天井。

白。

あの日の世界と同じ色。

フウガは目を閉じる。

「そう……。あれは九年前、俺が八歳の頃だったな……」

そして、ゆっくりと。

彼にとって忌まわしい、そして、忘れられぬ過去を語り始めた。

＊ ＊ ＊

――最初に、結論を言ってしまうば。

スサノ・フウガという少年は、紛れもない天才だった。

物心ついたときには、すでに〈龍脈〉の存在を感じ取り。

世界の息吹を自身の身へと汲み上げる術を知り。

誰に教わるでもなく、〈言力〉の発動を成功させた。

それこそ、まるで赤子が生まれながらに呼吸の仕方を知っているのと同じ自然さで、それらを全てこなしたのである。

決して容易い事ではない。

〈言力〉を扱う上での最初の段階である、〈龍脈〉の存在の感知にすら苦戦する〈言力師〉は大勢いる。それをまだ、流暢に物を喋る事すらままならない、幼子が為し得たのだ。

戦神――

人の身でありながら、戦の神とまで呼ばれたスサノ・ラシン。

そして。

彼の妻であり、同じく元神聖騎士、スサノ・ヒスイ。

その両親の才を余す事なく受け継いだ神童。

二人は、この才氣溢れる自らの子に、力を暴走させぬように、最低限の知識と技術を教えた。そして、決して無闇にそれを振るわぬ事を戒めさせた。

だが、それでも幼い子供。

周囲の同い年の友人達が決して出来ぬ事が己に出来るという事実に、自惚れ、傲慢になるなという方が無理というものだったのだろう。幼き少年は親に隠れて、いつもその力を自慢気に見せびらかし、己の顕示欲を満たしていた。

それが、おそらくは。

悲劇へ繋がる、最初のきっかけ。

そして。

あの日が訪れる。

――じゃあ、妖魔を倒して見せてよ。

そんな一言を口にしたのは、一体誰だっただろう。

たぶん、いつもつるんでいた友人達の誰かだったような気がする。いや……もはや今となっては、その答えに意味などない。

確かにその言葉は、少年へと向けられ。

彼の力へ対する疑いすら含んだそれは、少年の矜持を著しく刺激した。

ちょうどその頃、王都から北に進んだ所にある森では、ある妖魔が旅人を誘い込んで襲っているという噂が立っていた。近いうちに、神聖騎士団が討伐に行くと、そんな噂が。

——不幸にも。

その噂は、少年の耳にも入っていた。

冬だった。

白い雪がちらつき、その無垢な色に染め上げられた森。春が訪れれば、多くの生命に溢れるそこは、今は冷たい眠りにつき、外から来る者を強く拒絶しているようにも思えた。

それは、今も少年の心に焼きついて離れない白の世界。

少年は無謀にも一人で、その森へと妖魔退治へ出掛けた。

自信はあった。

心から尊敬する偉大なる父。

その息子である自分。

なればこそ、妖魔の一匹や二匹、軽く捻ってやれるものだ。

そんなわけもないのに、根拠もなくそう信じて疑わなかった。

年相応に未熟で。

年相応に愚かだった。

故に、結果もまた必然なものとなる。

いざ対峙した妖魔には、拙い少年の〈言力〉など通じるはずもなく、無様に敗走する他なかったのだ。

——そして、不幸にも。

少年が王都を離れてすぐに、彼の母のヒスイも、少年が森へと向かった事の経緯を知る事になる。

だから。

少年が命からがら逃げ込んだ洞窟の奥で、悲劇は起きてしまった。妖魔の冷酷な一撃から少年を庇った身重のヒスイは、その身に宿っていた新たな命と共に絶命した。

……あるいは。

悲劇がここで終わっていたのならば、少年の運命は、あれほどまでに歪む事はなかったのかもしれない。

——だが、不幸にも。

その日、ラシンは、ある一人の強敵との戦いにより激しく消耗していた。

だから。

遅れて駆けつけたラシンは、中級に過ぎぬ妖魔に、本来なら有り得ない苦戦を強いられる。そして、片目と片足という大き過ぎる代償を支払わされて、それでも自らの息子だけをかろうじて救った。

……血の海に沈む母の屍。

……騎士の命を絶たれた血塗れの父。

己が招いた惨劇。

それを突きつけられた少年の心は、致命的に欠けた。

こうして少年は、愛する母と新たな家族となるはずだった命を失い、尊敬する父の未来を奪う事になった。

それが九年前の悲劇の事の顛末。

ああ、なんて事はない。

つまり。

全ての悲劇の原因は。

幼く未熟な少年の、自惚れと傲慢にあったという事――

＊ ＊ ＊

「……これが九年前にあった出来事の全てだ」

全てを語り終えて、フウガは疲労感と一緒に息を吐く。

だが、同時に、何か肩の荷を下ろしたような安堵感もあった。

三人の少女は、しばらく何も言わなかった。

いや、言えなかったのかもしれない。

例え、フウガが幼かったからとはいえ、結果的に悲劇を生む原因は、紛れもなく彼自身にあったのだ。

「軽蔑されても、失望されても仕方ないと思っている。皆がどんな風に思ったとしても、俺は全てを受け入れるつもりだ」

沈黙の後。

「……ない……でよっ」

まず一人の少女が口を開いた。

レナだった。

「は？」

「ふざけないでよっ！」

あまりに唐突な一言に、フウガは目を丸くする。

「軽蔑とか失望とか……そんなの出来るわけじゃない！ だって、九年前の事があって一番辛いのは何よりもスサノでしょっ。なのに……どうやってあんたを責める事なんて出来るのよ……！ 見損なわないでよねっ……！」

腕を振って激昂する少女は、その実、少年の気持ちを心から慮っていた。

「――レナの言う通りだよ」

ウズメも同意した。

少年の手を握った指に、優しく力を込める。

まるで我が事のように哀しそうな顔をしていた。

「誰だって間違いは犯すものだ。ときには、それが九年前のときのように、取り返しのつかない事を引き起こしてしまう事もある。だけれど、だからと言って、それで君の全てが否定されるかと言えば――それは違う。」

間違ったのなら、次は間違わぬように自らを正せば良い。

大切な何かを失ったのならば、次は失わぬよう強くなれば良い。それこそが、今は亡き人達に対する償いにもなるだろう。

……フウガ。君は、ちゃんとそうしているじゃないか
「そうですよ」

最後にミヨが、微笑んだ。

向ける瞳には、嫌悪も蔑みもなく、ただ真摯な光が宿っていた。

「あんなに必死に私達を守ろうと戦ってくれたスサノ君を見ちゃったら、とても嫌うなんて出来ません。それに、辛い事があって苦しんでいる人が居たら、それを支えて励ましてあげるのが友達で仲間でしょう？」

「……………」

フウガは、この少女達の言葉に、ただただ呆然となっていた。
恐れていた。

今までの好意も。

今までの親しみも。

全てを話す事で、全て失われるのではないかと、怖かった。
でも、違った。

少女達は、少年の過去を知った上で、受け入れてくれたのだ。
過去も。罪も。今の彼もまた。

「……………良いのか？ ……本当に、そんな簡単に片付けてしまつて……？ だって俺は、罪人なのに……」

「言っただろう。この世に罪を背負わない人間なんて居ないよ、フウガ。差こそあれど、人は生きている限りは、皆、罪人だ。」

そして、私達には、君の罪を裁く権利も、つもりも——ありはしないんだよ」

ウズメは、どこか遠くを見つめながら言った。その眼差しは、もしかしたら己の背負う何かの罪を見ているのだろうか。

「きつと誰のモノであろうとも、どんなモノであろうとも、罪は死ぬまで消える事はないのだと思う。だけど、それを理由に自分をずっと責め続けて、傷つける必要なんてないんだ。それは償いじゃない。ただの悲しい自虐だ。

罪は生きる限り消えない。でも、犯した罪がその人間の価値の全てを否定するわけじゃない。

だから、フウガ。私達は、君を責める事もなく、許す事もなく……ただ、大事に思うんだ」

何も言わず、頷きもせず——だけど、レナとミヨの瞳には、ウズメの言葉に対する同意の意志があった。

「……………」

無言で仰向けになると、フウガは持ち上げた腕で目を覆う。

「スサノ？」

「フウガ……………」

「スサノ君、どうしたんですか？」

どこか様子が変な少年を、三人の少女が心配そうな視線を送った。フウガの唇が、どこか困ったような笑みを象る。

「……………いや……………おかしいんだ……………」

次の瞬間、少女達の誰かが「あ……………」と小さく声を上げた。

目の上に乗せられた少年の腕の陰。

そこから、月光を反射して微かに輝く雫が見えたからだった。

「……………なんでかな……………あの日と同じで……………止まらないんだ……………」

——フウガは思い出す。

それは、この学園に入学して、まもなくの記憶。

学園に来てから——いや、九年前のあの日から、フウガは他者との接触を極力拒むようになった。常に、孤独で居る事を己に課した。

そうすれば、また自分の未熟さのせいで誰かを犠牲にする事はないだろう——とそう思ったのである。

そんな静かで、でも、明らかな拒絶の空気を纏う少年に、あえて近寄ろうという物好きな人間は居なかった。ずっと居なかったのだ。あの二人——そう、ライとゴウタに出会うまでは。

半ば無視を決め込むフウガに、二人は懲りずに何度も声を掛けてきた。

何度も、何度も、何度も、何度もだ。

どれだけ冷たく当たっても諦めない二人に痺れを切らしたフウガは、自分の過去を聞かせる事にした。自分がどんな人間なのか知れば、きっとこの二人も、もう話し掛けようなどと思わなくなるだろうと。

きつと、他の皆と同じで、自分から離れていくだろうと。

そう思った。

だけど。

——……そう。だったら、なおさら僕達がついてないよね。

——え……？

——辛い事があったときに独りでおるなんて、もっと凹むだけで逆効果なんやぞ？ やっぱ、俺らみたいなやかましい人間が傍におらへんとな！

——ああ、やまかしいのは保証済みだよ。特にゴウタが。特にゴウタが。

——何で二回言うねん！？

——さあ？ なんでだろう？

——ああ、馬鹿にしとる！ 絶対にしとる——っ！

——……………。

信じられなかった。

なんで、あんな過去を聞かされて、そんな反応が出来るのかと。どうして、最低だと、愚かだと、自分をなじらないのかと。

そして、少年は自分が泣いている事に気づいた。

驚いて、戸惑って、でも、止められなくて。

泣いて泣いて泣いて——

いつしか……三人は親友となっていた。

今も覚えている。

この涙は、きつとあれと同じモノ。

熱くて、切なくて、暖かいモノ。

「……………ありがとう……………」

自然と口に出た、その一言は。

たくさんの思いを込めて、たくさんの人々へ向けて紡がれたような気がした。

◇ ◇ ◇

「……フウちゃん、良かったな」

廊下から、医務室の様子を覗う三人の影があった。

ゴウタとライ、そして、ソウゴだった。

この三人は、フウガの容態を見に来たものの、医務室内の空気に基づいて入るに入れなくなり、結果的に盗み聞きするような状態になってしまっていたのである。

「そろそろ戻りましょうか。もう声を掛けるような雰囲気じゃないし」

「そうだね。まあ、フウガ君も意識が戻ったみたいだし、もう大丈夫だろう」

ライの言葉に、眼鏡を掛けて普段通りのソウゴが頷いた。

「……了解。じゃ、ばれないようにこっそりと……」

「おい。その三馬鹿。盗み聞きとは良い趣味してるじゃないか」

「「「……………?!」」」

横手からの唐突な声に、三人が硬直する。

ぎぎぎ、と三つの首がぎごちなく横を向く。

廊下の奥の闇から出てきたのは、腰に片手を当てたヒナコだった。隣には、フヨウも一緒に居た。

ヒナコは、にやりと、それはもう邪悪な笑みを浮かべる。

「そういうお痛をする子には、優しいお姉さんがしっかりとお仕置きをしてあげないとね」

「いやいやいやっ、ちゃうんですよっ」

「こ、これは不可抗力だからっ。決して盗み聞きをしようだなんて……」

医務室のフウガ達に気づかれぬように、ゴウタとソウゴは必死に小声で弁解を口にする。そして、ライだけは観念したように一人両手を挙げていた。

すると、ヒナコは愉快そうに鼻を鳴らした。

「冗談だ。スサノの事が心配だったんだろう。アイツもなんだかなだで慕われてるな」

彼女は、ちらりと扉の隙間から室内へと視線を送り、

「……全く余計な心配したもんだ。押し潰される所か、支える人間が多すぎて浮き上がりそうならいいものね」

そう言って、どこか嬉しそうに笑う。

彼女もまた、レナやウズメに気を使って部屋を離れた振りをしながらも、ずっと傍でフヨウと共に様子を覗っていたのだ。

他の四人もそれぞれ顔を見合わせた後――同じように笑んだ。

そのときは、ちょうど夜が最も更ける時間。

世界は、どこまでも静かで。

傷ついた者達もそれを囲む者達も、平等に優しく包んでいたのだ
った。

五章 心欠け、誓いは胸に宿る その七（後書き）

お読み頂きありがとうございました。

これで五章は終了となります。次回からは、少し本筋を離れて、コメディタッチな短編をいくつか載せた後、六章を始める予定です。どうぞお楽しみに。

幕間 騒がしき日々は、かけがえなき日常 その一

「あれ……？ 誰も居ない？」
放課後。

レナは、人気のない医務室に首を傾げた。

ヒナコはもちろん、他の医者や看護婦の姿もない。騎士養成所という顔を持つ学園故に多い怪我人も、今は珍しく来ては居ないようだった。

おそらく偶然に偶然が重なって、こんな状況になったのだろうが……

「これ、大丈夫なの？ もしも急患が来たら、誰も対応出来ないじゃない」

変な所で緩いこの学園らしいと言えばらしいかもしれない。しかし、さすがに問題がある気がして、レナは呆れを含んだ溜息を吐いた。

キジムとの死闘から、三日。

毒を受けたミヨは昨日復帰したばかりなので、今はヒナコに一週間は絶対安静を厳命されたフウガだけが、ずらっと並ぶベッドの一つに横になっている。

そう、レナが医務室を訪れたのは、そのフウガの見舞いのためだ。彼が寝込んで以来、放課後には、毎日こうやって顔を出している。

もちろん、それはレナだけではない。ライやゴウター――さらにはウズメまでもが一緒なのだが、今日はたまたま彼女だけが先に来る事になったのである。

「さて」

気を取り直して、一步踏み出す。

微かに外の喧騒の声が聞こえてくる以外、しんと静まり返った医務室内。新鮮の空気を入れるために空けられた窓から入ってくる春の風が、清潔な白いカーテンを揺らしていた。

「……………」

静寂の空間を、レナは無言で進む。

そして、目的の人物のベッドの傍まで来て、彼女は気づいた。

「……………寝てるし」

フウガは静かな寝息を立てて、眠っていたのだ。

レナは、二度目の溜息を吐いた。

手に持っていた紙包みを柵の上に置く。中身は、フウガが怪我で動けない事を知った食堂のおばちゃんにもらった林檎である。

見舞いに行くならやっぱり林檎でしょ！ ……という、わかるようなわからないような理屈で半ば無理矢理に渡されたのだ。

「だけど、肝心の渡す相手が寝てるんじゃないかね」

まだ誰も医務室にやって来る気配はない。

フウガは寝ているし、他には誰も居ないしで、レナは完全に手持ち無沙汰になってしまう。

仕方ないので、なんとはなしにフウガの寝顔を観察する。

少年は、普段の悪人面と呼ばれる面影など全く感じさせない、穏やかな表情で眠っていた。むしろ、年相応のあどけなさすら感じさせる寝顔である。

（……………なんだ。こうやって見ると、全然、悪人面なんかじゃないじゃない）

なんとなく可笑しくなって、レナはくすりと笑う。

微笑ましさと共に、無意識に手が伸びる。指が少年の頬をそっと撫でて――

「……………あつ」

口元の近くを通ったときに少年の寝息が指に掛かった。どくんと心臓が高鳴った。

途端、視線が規則正しい寝息を吐き出す少年の唇から離せなくなる。

同時に脳裏を掠めたのは、三週間近く前の〈練技場〉での光景。ウズメが、フウガに突然の口付けをした――あの場面。

（…………駄目）

咄嗟に己を制止する。

必死に理性へと訴えかける。

（…………駄目よ、何を考えてるの、私は……）
なのに。

その意思に反して、彼女の身体は少年へと近づいていた。
いけないと、そう思うのに。わかっているのに。

一度、意識してしまったから、もう止まる事が出来ない。

今、この場に自分と少年以外、誰も居ないという事実もそれを後
押ししてしまっていた。

……少年の顔の向こう側に片手を置く。

……それを支えに、覆い被さるように顔を近づける。
不意に、ぎしっとベッドが軋んだ。

「…………っ」

反射的に、少年の顔を覗うが起きた様子はない。

レナは、ほうっと安堵の息を吐く。

もうすでに、少年の顔は目の前にある。

あと数センチ、近づけば互いの唇は触れ合う。

「……………」

誰か。

どうせ誰か人が来て未遂に終わるんだ――

そんな勝手に、確証などない期待。

それがあるからこそ、こんな事が出来てしまっている。
だけど――

全てが終わるまで、医務室には誰も訪れなかった。

徐々に恐る恐る近づいた少女の唇は。

誰の邪魔も入る事なく少年のそれと触れた。

「……………っ！！！」

だが、それも一瞬。

弾かれるように少年から離れる。

背後のベッドにぶつかって、そのままずると床に座り込む。

「あ……………」

声が漏れる。

顔はもう、茹で上がった蛸のように耳まで真っ赤。

（……………しちゃ、った……………）

寝ている少年に、こっそりと勝手に。

してしまった。

羞恥心と背徳感で、しばらく動けなかった。

その後、慌てて周囲を覗う。

誰も居ない。誰も見ていない。

それを確認して、改めて胸を撫で下ろす。

（……………私、最低だ）

こんな事、本人が知ったら、どう言うのか。どう思うのか。

……………いや、きっと。

彼は動揺しながらも、結局、レナの事を許すのだろう。

フウガは、そういう人間だ。

そんな事は、もう呆れるくらい理解している。

そんな少年だからこそ——自分は好きになったのだから。

心臓の激しい脈動は未だ収まらない。

こんなに動揺してるくせに、触れ合った唇の感触だけははっきり

と覚えていた。

レナは何度も頭を振って、なんとか平静を取り戻そうと努める。

と、そこで。

「……………っ！」

唐突に、とんでもない事実思い当たった。

（あ、あああああああああ！）

あまりに迂闊。

あまりに馬鹿。

なんで、忘れていた！

なんで、気づかなかった！

レナは慌てて立ち上がると、誰も居ない空間にそうっと呼び掛けた。

「オ、オロチ……？」

返事はない。

もしかしたら、今は幻体で意識を飛ばしていて、少年の中には居ないのでは——と、そんな淡い期待が過ぎて。

『——おや、お前が私を呼ぶとは珍しい』

当たり前のように、そんな返事があった。

「……………」

『む？ どうした？』

「……………」

『お前が呼んだのだろう？ どうか言ったらどうだ？』

「……………」

『おーい？ レナ？』

「……………見た？」

『は？』

「だから、さっきの見たの？！」

少年が起きないよう小声で——しかし、噛みつくような迫力で問い詰める。

オロチは、数瞬ほど間を空けた後、思い当たったように言った。

『ああ、なるほど。うむ、見てない。私は、何にも見てないぞ。お前がフウガが寝ている所に、こっそりひっそり口付けする所なんて見てはいないぞ』

「思いつき見てるんじゃないの！！ ……あ」

思わず怒鳴って、慌てて口を押さえる。

幸い少年は、寝苦しそうに唸っただけで目は覚まさなかった。

これにほっと息を吐いた後、改めてオロチの憑いた少年の身体を睨めつける。

「……………言う気？」

『言うとは？』

「だ、だから、フウガにキ、キスした事をよ……………」

『なんだ、そんな事か。なに、安心すると良い。私は紳士なのだぞ？ そんな告げ口などという低俗な真似はせんよ。まあ、そうだな……………せいぜい無意識に鼻歌で歌うぐらいだ』

「十分、駄目でしょうがあっ！！！！……………あ」

再び口を押さえる。

しかし、またしても運良く少年は起きない。

『ぬはははっ、怪我人の前で発声練習はいかんぞ。ちなみにフウガは、今だけ私が〈妖術〉で目覚めないようにしておいたりするのだかな』

「……………はったおすわよ、本当に？」

レナは、必死に怒りを抑え込んで、引きつった笑みを浮かべた。それでも抑えきれないものが、こめかみをぴくぴくと痙攣させる。

「う、ううーん……………」

すぐ傍で立ち昇る怒気に当てられたのか、汗びっしょりになったフウガがうなされる。完全なる、とぼちりである。

しかし、そんなものはどこ吹く風のオロチは、ひとしきり笑った後、

『——まあ、冗談さておき、あれだ』

と、不意に声に僅かな真剣味を帯びさせて言った。

『本当に告げ口などせんから安心しろ。若気の至りは大いに結構。そういう失敗を重ねて、人は成長するものだろう？』

「……………何よ、偉そうな事を言っちゃって」

レナは腕を組んで、不満の表情を全く隠さない。

何が楽しくて、妖魔に人生を語られなければならないのか。

これに、オロチは心外だと言わんばかりに返してくる。

『おやおや、私はこれでもお前の何十倍も生きているのだぞ。偉そうな事の一つや二つ言うさ。……………いや、しかし、いつの時代も若者

が恋心に翻弄される姿は変わらんものだな』

オロチの言葉の中に意外な一言聞いて、レナは訝しがる。

「おかしい事を言うわね。まるで、私以外の誰かの恋愛を見た事あるみたいな物言いじゃない」

『いや、実際あるのだ。もう随分前の話になるが、まさにお前と同じこの学園の候補生のものをな。普段は飄々としていた“あいつ”の酷い狼狽ぶりは、なかなか愉快——いやいや、微笑ましいものだったよ』

どこか楽しそうに、オロチは過去の記憶を語る。その声には、懐かしむ感情と一緒に、不思議と優しい響きが在った。

「……………」

レナは不可解に思う。

オロチは五十年前に〈八尺瓊勾玉〉に封印されて以来、ずっとこの学園の〈極・重要宝物庫〉へと押し込まれていたはずだ。あの場所、レナのとりのように無断で鍵でも持ち出さない限りは、滅多に人が立ち入る事はない。そんな所で、一体どうやって、誰の恋愛を知る事が出来るというのだろうか。

(…………相変わらず…………よくわからない奴…………)

あまりに掴み所がなくて、思わず相手が妖魔だという事を忘れそうになる。

フウガほどではないにしろ、レナにだって妖魔へ対する嫌悪や警戒の感情はある。だと言うのに、このオロチという妖魔は、話している内にそんなものをまるで無意味だと思わされそうになるのだ。

『…………と、私が昔話をしてもし方なかったな』

ふと、我に返ったようにオロチが言う。

『それよりも、一応は長生きな私から、お前に一つだけアドバイスしておこうか』

「アドバイス？」

そして、オロチは少女へと告げた。

からかうのではなく、本当にただ助言するというような物言いだ。

『恋敵が強敵だから、自分を卑下してしまいそうな気持ちはわかるがな。一度、そういうものを全部忘れて、ウズメと同じように自分の気持ちを正直にフウガへと伝えてみる事だ。こいつは、きちんとお前達の気持ちを考えた上での答えを返してくれるだろう。スサノ・フウガは、そういう男だ。お前とて、それはわかっているのだろうか？』

「……………」

レナは、目を見開いて絶句する。

見事なまでに本心を見透かされていたからだだった。だから、反論の言葉も出てこない。

ただ呆然と、オロチの宿る少年の横顔を見つめた。

『もちろん、素直に自分の気持ちを伝えるというのが口にするほど簡単ではないのもわかってはいるがな。だが、それでも、お前はそれが出来る女だと私は思っているよ』

「……っ！ か、勝手に人の事をわかった風に言わないでよね！」

『ぬはは、すまんすまん。これ以上、怒られては堪らんな。フウガに掛けた〈妖術〉を解いて、さっさと退散するでしょう』

その言葉を最後に、その場からオロチの気配が消える。

少年の奥底に潜ったか、意識を別の場所に飛ばしたのだろう。

「……………」

再び、静けさを取り戻した医務室。

気づけば、もう随分と日が傾いていて、橙色の光が医務室へと差し込んでいた。さすがに、そろそろライ達もやって来る頃だろう。

レナは、ぼんやりと少年の寝顔を見る。

「素直に、か……」

ぼつりと呟く。

オロチは、自分にはそれが出来るとは言っただけだったが、レナ自身はともそうは思えなかった。

いざとなると恥ずかしさが先行して、怒鳴ったり、目を背けたり。いつだって逃げてばかりだ。

でも……

「逃げっぱなし、負けっぱなしは確かに性に合わないのよね」
両手で自分の頬を叩く。

うん、と誰へでもなく頷いてみせる。

「今は無理でも、そのときが来たら私だってやってやるんだから」
そう。

今はそのときじゃない。

オロチの呪いやシラユリの事。そして、今も少年を苦しめ続ける、
あまりに辛い九年前の出来事。

これ以上、この少年に何か背負わせるような事はしたくはないの
だ。

伝えるのならば——そう、せめて、オロチの呪いとシラユリの件
が片付いた後。

そのときまでには、自分もウズメに負けなくらい強くなろう。

勇気を持とう。

「でも、とりあえず今は……」

ずっと視線を隣に滑らせる。

棚の上には、紙包みから零れ落ちた林檎が一つ。

鮮やかな紅色のそれは、夕陽に照らされて、見た事ないような不
思議な色合いを見せていた。

それを手にとって、少女は淡く微笑む。

「起きる前に、一つぐらい剥いておいてやろうかな。せっかくだし
ね」

……今は、こんな形でしか表せないけれど。

いつかきつと、この想いを確かな言葉にして、この少年に伝えて
みせる——

そんな決意をした、少女の午後的一幕であった。

幕間 願がしき日々は、かけがえなき日常 その一（後書き）

お読み頂きありがとうございました。

幕間 騒がしき日々は、かけがえなき日常 その二・前編

――それは。

暖かな春の陽気に包まれた学園での、ある昼の出来事。

「お姉ちゃん………見つかる？」

小さな女の子だった。

四、五歳程の少女が、潤んだ瞳で半べそをかいている。

「大丈夫よ。私が、絶対に見つけてあげるからね」

少女の頭上から優しい声が降りてきた。

細くて白い指が、そっと頭を撫でる。

手の主は、夜闇を梳いたような黒髪に、凛々しい美貌の少女。
ウズメだった。

彼女は、普段は使わない女らしい口調で幼い少女を慰めると、
「約束だから、お姉ちゃんを信じて？」

と、そう言って、穏やかに微笑んでいた。



「……………肝試し？」

授業の合間の休み時間、〈三の風〉の教室である。

ゴウタの発した単語に、フウガは怪訝な声を上げた。

「肝試しって………終わりにかけてるとは言え、今は、まだ春だぞ。あれは普通、夏にやるもんじゃないのか？」

「駄目やなあ。フウちゃん、駄目駄目や。そんな常識に囚われるなんて、全く持って凡人やで」

わざとらしく大袈裟な仕草で肩を竦ませて、ゴウタが嘆息した。
そして、がっとな拳を握ると、天へ向けて突き上げる。

「やる気があれば春だろうが、秋だろうが、冬だろうが、一年中間

題なしや！ 舞台は、今は使われてない旧校舎！ 時間は、もちろん夜！ 嬉し恥ずかし肝試し！ ポロリもあるかもね！」

「一体、何が嬉しくて恥ずかしいのよ？」

「さすがにポロリはないと思いますけど……」

暇潰しに〈三の水〉の教室から顔を出していたレナとミヨも、さすがに胡散臭げに突っ込みを入れる。

すると、ライがにっこり笑って、ゴウタの肩に手を乗せた。

「大丈夫。ポロリ担当は、ゴウタがやるから」

「俺！？ ——ちゃうやん！ ポロリは女の子の特権！ 男の子の僕には無理です！」

「僕はゴウタを信じてるよ。ガンバ！」

「いらんわ、そんな信頼！」

さっそく話が脱線を始め、フウガは溜息を吐く。

放っておけば、このまま際限なく話が逸れていくのは想像するまでもない。

仕方なしに、手を振って投げやりに続きを促した。

「……どうでもいいから、まず、肝試しをやろうなんて言い出した理由を説明してくれ、ポロリ担当」

「フウちゃんまで！？ せえへんよ！ 俺はせえへんからな！」

「いいよ、別にやらなくて。どうせ誰も見たくないし。それより早く説明」

「そ、それも何だか凹むんやけど……」

がつくりと肩を落とす。

それでも、ゴウタは気を持ち直して、理由を口にした。

「ま、まあ、あれや。フウちゃんもようやく怪我から復帰したわけやし、そのお祝いと息抜きも兼ねてと思ってな」

むう、と、フウガは眉根を寄せた。

「主旨はわかるけど、それが肝試しをする理由にはならないような気がするぞ」

「たぶん、あれでしょ」

と、そこに再びライが口を挟む。

「最近、候補生の間で噂になってるからね。旧校舎に出る幽霊」

「幽霊、ですか？」

初耳だったのか、ミヨが怪訝な声で訊いた。

「そう。変な呻き声を聞いたとか、夜な夜な何かの這いずる音がするとか。……ま、ありがちなやつだね。実際に幽霊自体を見た人は居ないらしいけど」

「いわゆる怪談話か」

さほど興味もなさそうに、フウガは相槌を打った。

そういえば、三年に上がってすぐくらいから、それらしい噂を何度か耳にした事はあった気がした。ただ、オロチに取り憑かれたり、ウズメに告白されたり、シラユリに命を狙われたりと、怒涛の如く問題が山積したので、そんな些細な事など、とっくの昔に忘れ去っていたのだ。

「なるほど。それで、復帰祝いとか息抜きとか適当に理由をつけて、幽霊の正体を確かめてやろうとか思ってるわけね」

腕を組んだレナが、呆れ返った視線をゴウタへ送る。

対して、ゴウタは慌てて顔の前で手を振った。

「ちゃ、ちゃうぞっ。いや、ちよっとはそんな気持ちもあるけど、俺は純粹にフウちゃんに元気になってもらおうと思って……でも、一応、謝っておこうと思うんや。うん、ごめんなさい」

「つまり、凶星って事かい」

何だかもう怒る気にもなくて、ただフウガは半眼になる。その視線の先で、ゴウタは「あはははー」と誤魔化すように笑っていた。

「しかし、旧校舎ね……あそこか……」

不意に、レナが複雑そうな顔で呟いた。

それに気づいたフウガが、声を掛ける。

「どうしたんだ、レナ？」

口にされるのは、自然と苗字ではなく名前。

今では、五人は全員、名前で呼び合っているのだ。

それは、あのキジムとの戦いの後、この五人の間で、明確に変わった所でもあった。その変化も最初は、フウガ、レナ、ミヨの間だけだったが、そのうちゴウタやライも、それに倣うようになったのだ。

きっとそれは、フウガが自身の過去を打ち明けた事をきっかけに、皆の間の目には見えない距離が、少しだけ近づいた証明なのだろう。しかし、未だにレナだけは、何故かフウガに名前を呼ばれる際には、落ち着かない様子を見せる事が多かった。

今回も少しだけ間があってから、返事がある。

「え、ええ……。実は、あの旧校舎ね。ずっと以前から、取り壊しの予定があるの。この学園、無駄に敷地は広いから別に残していても問題はないんだけど――あそこは随分と古くなってるから、もしも崩れたときに危ないって」

「ああ、そういえば、取り壊すべきだとか教頭が言っていたのを聞いた事あるかな」

ふと、ライが思い出したように掌を打つ。

「確かに一番、それを言ってるのはタワラ教頭なんだけど……ただ、おばあちゃんがね」

「レナのおばあちゃんって……学園長？」

フウガの問いに、レナは困った顔で頷いた。

「そう。なんか学園には、ああいうスポットが一つくらいはないと駄目だって言い張って、ずっと取り壊しの予定を引き伸ばしてるらしいの」

「……わけのわからんこだわりを、また……」

フウガは、頭痛でもしたように掌で顔を覆う。

普段のシズネは、間違いなく慕うに値する良き学園長だ。しかし、オロチの呪いの件のときもそうだったが、時折、その評価を覆したくなるような困った一面を見せるときがある。それが、この学園のどこか緩い空気の遠因になっているのは間違いない。

ゴウタは、まるで感銘を受けたかのように目を輝かせる。

「いやー、正論やなあ。確かに、必要やで。でかい学園には、いかにも怪しく不気味な旧校舎がな！」

「そ、そうなのかなあ……」

曖昧な笑顔で、ミヨが首を傾げる。

だが、そんな反応は気にせず、ゴウタはびしっと旧校舎の方へと指を向ける。

「これはもう、暗に学園長も肝試しをしろと言ってるようなもんやろ！ って事で、早速、今日の夜にな！」

「……………やれやれ」

もうどうにでもしてくれ、という気分で、フウガは肩を竦める。

そして、結局。

ほぼゴウタに押し切られる形で、この日の夜の肝試しが決定したのであった。

＊ ＊ ＊

「――で、まさか俺が一番手とは」

夜の十一時半過ぎ。

黒く染まった空には、欠けた月がぼんやりと浮かんでいる。

消灯時間の後、寮を抜け出したフウガは、ランタンを手にして、

学園の敷地の端にある旧校舎の前に立っていた。

およそ五十年近く前までは使われていたらしい古い校舎は、現在、使われている校舎に比べるとかなり規模は小さい。そもそも、すでに大部分は取り壊れていて、今、残っている建物は、ほんの一部らしかった。

その姿は、過ごした長い時間を体現するように、見事なまでに朽ちている。

しかも、夜の暗さも相まって、確かに幽霊の一人や二人くらいは住んで居そうな薄気味悪い雰囲気漂わせていた。実際、陽が暮れ

てからは、学園の候補生達はもちろん、教官達もまず近づかないような場所なのだ。

何気に、ここに来る途中で、目の前を黒猫に三回ほど横切られ、頭上ではずつとやかましく鴉が鳴き続けている辺り、不吉な事この上なかった。

「それでなくても俺は運が良い方じゃないんだけどな……」

冗談抜きで嫌な予感を感じつつ、フウガは旧校舎を見上げる。

肝試しのルールは、くじ引きで決めた順に一人ずつ旧校舎の最奥の部屋まで行って、証拠の印を刻んでくるという単純なものである。後の人間が先に行った人間が刻んだ印があるかどうかを確認するので、ズルをして途中で逃げ帰ってくる事も出来ないという仕組みらしい。まあ、全員が途中で戻ってきたら、確認も何もない気はするが。

ちなみに他の四人は、皆が旧校舎の傍に居ると緊張感がないとゴウタが主張するので、離れた場所で待機している。

「……っというか、ライ達は、俺を出来る限り一人にしないようにって教官達に言われてるんじゃないのか？」

『ああ、すっかり忘れてるんだろうな、きっと』

と、すかさずオロチが愉快そうに呟く。

「当たり前のように、切なくなる事を言うなっ！」

『おおっと、失敬』

くっくと喉の奥で笑いながら、オロチは心ない謝罪をする。

「たくっ……。もうさっさと印をつけて帰るぞ」

『おや、お前は幽霊は怖くないようだな』

「当然だろ。幽霊より、そこらの妖魔の方がよっぽど怖い。実際に俺はこうやって誰かさんに憑かれてるんだしな」

最後には、しっかりと皮肉を込めて、返してやる。

しかし、当然そんなものはさらりと流して、オロチはさらに訊いてきた。

『では、噂にあった呻き声や這いずる音は、本当に幽霊の仕業と思

うか？』

「俺に訊くなよ。……まあ、よくあるやつだと風の音とか、入り込んだ野良猫とかその辺りじゃないのか？　少なくともやたらと幽霊だと騒ぎ立ててるときの方が、実際は違う場合の方が多いもんだろ」
別に、フウガ自身は、幽霊の存在を否定する気はない。人には理解しがたいという意味では妖魔の存在とて在るし、他にも理屈では説明出来ない物事は、それこそ世にはごまんとある。ならば、人の死後、魂だけの存在となった幽霊だって居ても不思議はないはずだ。ただ、こういう騒動に関しては、原因を全部幽霊のせいにするというのは、あまりに早計だとは思っていた。今も言ったように、呻き声や這いずる音などというものは、他の物音でも十分勘違い出来る程度の代物なのだ。

『妥当な答えだな。ただ、私としてはどうにもつまらんのだが』

「一体、どうしたら楽しいってんだ、お前は」

『それはもう、今の時点で卒倒寸前なくらいに怖がってくれた方が、見ていて楽しいな。……五十年前も、怖がりな人間を見つけては、気絶するまで何度も驚かしたものだよ。いやはや、今となっては良い思い出だ……』

しみじみと、何とも酷い思い出をオロチは語る。

「こんのド外道め……」

フウガは、口の端を盛大に引きつらせた。

やはりこの妖魔は、今すぐ退治した方が世のためだと、心から思う。

（まあ、それが出来ないから、俺はツクヨミ先輩に勝たなきゃいけないハメになったんだけど……）

嫌な現実を思い出して、独りで凹みそうになる。

どんよりとした空気を背負いつつも、フウガは旧校舎の入り口の前に辿り着いた。

「――まあ、こんな所で、落ち込んでいても仕方がない。早く終わらせよ」

気を取り直して、顔を上げる。

そして、一步踏み出そうとした寸前――

「……………フウガ？」

およそ聞き慣れた――しかし、この場所、この時間に聞くとは思わなかった声が横手から届いた。

「え？」

顔を向けると、そこには近づいてくる一つの人影。そして、月光によって露になったのは、漆黒の鞘に収まった長刀を手にした、ウズメの姿だった。

「先輩！？ 何で、こんな所に！」

「それはこっちの台詞だ、フウガ。もう消灯時間を過ぎてる上に、ここは立ち入り禁止だぞ？」

「それを言ったら、先輩だって」

「え？ あ…………いや、私は…………その…………」

珍しくウズメは言い淀む。

さらに、何故か頬を少し紅く染めて、目を逸らした。

「先輩？」

「……………むう」

しばらく逡巡した後。

「…………と、とりあえず君の理由から聞かせてくれるか？ 私もその後には話すから」

ウズメは、どこか観念したように、そう提案したのだった。

＊ ＊ ＊

「…………というわけなんですけど」

今に至るまで経緯を、フウガがかいつまんで説明すると、ウズメは可笑しそうに笑った。

「なるほど。フドウらしい。君の復帰祝いや息抜きという理由も、たぶん嘘ではないんだろうな」

「さて、それはどうですかね」

フウガは、わざと曖昧に返して、苦笑する。

ゴウタが、この肝試しをやろうと言い出した理由の一つが、あの噂への好奇心故なのは間違いない。だが、最近、気を張り詰める事の多かったフウガに少しでも気を緩めてもらおうと思ってくれた事も確かに事実なのだろう。だからこそ、何だかんだと文句を言いつつも、フウガもこうやって参加している。

「それで先輩が、この旧校舎にきた理由は何なんですか？」

自分の方の説明を終えて、ウズメに問う。

「む……実は、な」

途端に、また目を泳がせて、ウズメは話し始めた。

「君も当然知っているだろうが、食堂のおばちゃんが居るだろう？」

「ああ。あの人ですか」

言われてフウガは、ふくよかな体型で、齢五十前後の人の良い女性の姿を思い出す。先日まで医務室で寝込んでいた少年に、林檎を見舞いにくれたのは記憶に新しい。食堂の厨房を一手に仕切る彼女は、その人柄から候補生達に慕われており、フウガにとっても、学園の中では気兼ねなく話せる人物の一人だった。

ただ、そのわりには実際の年齢やら、本名やら、彼女の素性に関わる事柄は、誰一人知らないという変わった人物でもある。なので、教官達も含めて候補生は皆、“食堂のおばちゃん”と呼ぶのが定着していた。

「実は、そのおばちゃんの知り合いの娘さんを、諸事情で、この学園で数日ほど預かる事になったそうなんだ。その子は神聖騎士に憧れていて、学園を見たいという自身の要望もあったかららしいんだが……まあ、学園長としては、将来、騎士候補生になるかもしれない子供の気持ちは反故に出来なかったんだろうな」

そこまで説明して、ウズメは先を言い辛そうに頬を掻いた。

「で、私が今日の昼頃に、たまたま泣きじゃくってるその子に出会ったんだ。泣いている理由を訊くと、どうやら立ち入り禁止の旧校

舎に好奇心で忍び込んで、そのときに不気味な呻き声を聞いたらしい」

「呻き声……ですか」

「ああ、君も聞いた事ぐらいはあるだろう？ 春になってから、ずっと騒ぎになってる幽霊のやつだ。それでその子は、呻き声に驚いて逃げ出すときに、旧校舎の中にお気に入りのぬいぐるみを落としてきてしまったみたいでな」

「ははあ……じゃあ、つまり……」

そこまで聞いて、ウズメの理由を察したフウガは言った。

「その子に頼まれて、わざわざぬいぐるみを取りにきたんですか？」

「あ、ああ……。もうあの声が怖くて、旧校舎には近づきたくないと言うし、どのみちあんな危ない場所に、子供をまた一人で行かせるわけにはいかないだろう？ だから、咄嗟に私が取ってきてあげると言ってしまったんだ」

フウガは、さっきから妙に挙動不審なウズメをじっと見つめる。

「――何だか先輩って……」

「な、何だ？」

どこか慌てて、少女が問うてくる。

「あ、いえ……やっぱり優しいんだなあ、と……」

「っ……。そ、そんな事はないと思うぞ？」

「いえ、そうだと思いますよ？ だけど、何もそんなに恥ずかしそうにしないでいいんじゃない」

「……だが、何だか照れ臭くてな。特に君に知られたというのが。」

――お人好しだと、君も思っただろう？」

困った顔で上目遣いに見てくるウズメの姿が微笑ましくて、フウガは思わず吹き出してしまう。普段、どこか大人びた彼女のそんな子供地味な仕草が、どうにも可愛らしかったのだ。

「わ、笑う事はないだろう」

「すいません。――でも、お人好しと言うなら、お互い様ですよ。たぶん、その状況なら、俺も同じ事をしちゃったでしょうし、恥ず

かしがらなくても大丈夫です」

「……確かに、君なら間違いないくそうするだろうな」
妙に納得した風に言って、ウズメも淡く笑う。

どことなく、フウガと同じという部分に喜んでいるようにも見えた。

「だけど、何でこんな時間に？ その子に頼まれたときに、すぐにくれば良かったんじゃないんですか？」

「いや、さすがに立ち入り禁止となっている場所に、昼間から堂々と入るのは気が引けてな。それで、夜になってから、人目を避けて、こっそりと回収するつもりだったんだ」

「で、たまたま肝試しをきていた俺とばったり出くわした、と」

「ああ、そういう事らしい」

とりあえず互いの事情を把握した二人は、改めて一緒に旧校舎を眺める。夜闇に沈む朽ち果てた建物は、相変わらず気味の悪い空気を纏っていた。

狙い済ましたように、頭上を飛翔する鴉が一匹、一際高い声で鳴く。

時刻は、ちょうど正子。

まさに肝試しに向いた、絶好の時機の到来である。……別に嬉しくはなかったが。

「まあ、こうやって出会ったのも縁という事で」

「……一緒に行くか？」

「そうしましょうか。探し物なら二人の方が効率良いでしょうしね」
話も決まって、早速フウガは歩き出そうとする。

だが、何故かウズメは立ち止まったまま、何かを考え込んでいた。
「……確かにフウガが居れば心強いが……いや、しかし……」

「先輩？ どうしたんですか？」

「……………え？ あ、何でもないんだっ。そ、それより早く中に入ろう。こんな所を、誰かに見られたらまずいしな」

弁解するように早口で言って、ウズメは早足で旧校舎の中へと入

って行ってしまう。何事かと、問う暇さえなかった。

「……一体、どうしたんだろ？」

もういつも通りかと思った少女は、やはりどこかおかしかった。まさか幽霊が怖いという事もないだろうし、はっきり言って謎である。

『フウガ。早く行かんとウズメとはぐれるぞ』

「あ、ああ……」

オロチに急かされて、フウガは我に返って頷く。

そして、首を捻りながらも、先に行ってしまった、どこか様子の変な少女の後を追うのだった。

幕間 願がしき日々は、かけがえなき日常 その二・前編（後書き）

お読み頂きありがとうございました。

幕間 騒がしき日々は、かけがえなき日常 その二・中編

一歩進む度に、ぎしぎしと耳障りな音が廊下に響く。

上を見上げれば、天井にはいくつもの蜘蛛の巣。壁も床も所々に朽ちて穴が空いており、油断すると手や足を取られそうである。

さすがに五十年近く使われていないだけあって、旧校舎の内部は、酷い惨状であった。

ただ、それでも、もともとの造りがしつかりしていたのだろう。慎重に探索さえすれば、いきなり床が抜けたり、天井が崩れたりという危険は今の所はなさそうだった。……あくまで、慎重に、という前提が必須ではあるが。

「ええと、旧校舎の一番奥の部屋って何だっけ……？」
闇に包まれた廊下をランタンの灯りで照らしながら、フウガは呟く。

肝試しのルールは、最奥の部屋に、そこまで辿り着いた証拠の印を刻んで帰ってくる事だ。だが、肝心のその最奥の部屋が、何に使われていた部屋かまでは、ゴウタからは聞いていない。

今更だが、なんとも無計画な事である。

「……ああ、それなら」

と、隣を歩くウズメが口を開いた。

「一応、昼の間に図書塔で、残っていた旧校舎の見取り図を見てきた。確か一番奥なら……学園長室だな」

「さすが先輩。じゃあ、そこに印を刻めば俺の用事は終わりですね。その道中で、ぬいぐるみが落ちてないか探せば大丈夫でしょう」

「そうだな。たぶん、あの子もそんなに奥にまでは入ってないだろうし、よっぽど見つかりにくい所にあるのでなければ、すぐに見つかるだろう」

「……………」

とりあえずの行動の指針が決まる。

そして、フウガは、ずっと気になっていた事を、思い切って言うてみる事にした。

「……あ、あの、先輩？ そのですね？」

「……何だ？」

「……非常に言い辛いんですけど」

「……ああ」

「……ちょ、ちょっと……くっつき過ぎでは……？」

と、言って、紅くなった顔を逸らしつつ、隣の少女へと目だけ向ける。

そう。

何故かウズメは、旧校舎に入ったからというものの、ずっとフウガの腕に縋りつくような態勢だったのである。しかも、奥へ進むほどそれは悪化していき、歩き辛いやら、恥ずかしいやら、何かの柔らかな感触があったりやらで、表面には出していないものの、すでにフウガは、相当に冷静さを失いつつあった。心臓なんて、さっきからもう絶好調でばくばくと鳴りまくっている。

関係ない話題で意識を逸らそうと努めてみたものの、それもさすがに限界に近い。

「まず、かったか……？」

途端、酷く不安そうな視線と声音で、ウズメが問うてくる。

その表情は、猛獣に怯える小動物の如しだ。普段との姿との差異も相まって、その破壊力といったらもう。

「……………」

もちろん、フウガは完全完璧完膚なきまでに敗北を喫して、二の句を失う——いや、むしろ永遠に喪失したような気さえする。なんだか、この少女の新しい顔を知れば知るほど、良くも悪くも自分の天敵である事を思い知らされるようにも思えた。

「い、いえ、問題ないです。頑張れます。ええ」

『ほほう、一体、何を頑張るんだ？』

「お前は口を閉じてろっ！」

相変わらず余計な口を挟んでくるオロチを一喝する。とはいえ、このままの状態が続けば、身が保たない。

なんとか現状を打破しようと、別の角度から攻めてみる事にした。「――まさか、その、幽霊が苦手とか……じゃないですよ？」

「いや、特に怖いと思う事はない」

「ですよ……」

フウガは、先日の夢魔の件を思い出す。

あのとき彼女は、幻術に囚われたフウガを追って、独りで夜の学園にまでやってきていたのだ。もちろん、特に何かを怖がっていた覚えもない。そんな少女が、今更になって幽霊を怖がるというのは、やはり不自然である。

（でも、だったら理由は何なんだ……？）

今のウズメが、何かに怯えているのは間違いないのだ。

王国内にある他二校のヒノカワカミ学園を含めても、紛れもなく現在の候補生の中では最強――勇ましく凛々しい、この少女が、である。

正直言って、想像がつかない。

一体、何がこの少女をここまで恐怖させるというのか。

（……俺の心臓、このままだと破裂するんじゃないだろうか……）

びっしりと額に脂汗を浮かべ、フウガは思う。

依然、フウガとウズメは、絶賛密着中。

これはもう、一刻も早い原因の究明が求められていた。

――と。

そのときであった。

「！ おっと」

不意に、眼前に降りてきた影を、フウガは咄嗟に首を傾げて躲す。それはお尻から伸ばした糸で天井からぶら下がる、一匹の大きな蜘蛛である。こんな廃墟のような建物の中なら、別段珍しいものでもない。

だから、フウガは何事もなかったように、また懊悩したまま、先

へ進もうとする。

だが。

「え？」

腕にしがみついたウズメが唐突に立ち止まったのだ。そのせいで、フウガは後ろに引つ張られる形になる。

何事かと背後を振り返った。

「先輩？ どうしたんです？」

「……………」

反応はない。

ウズメは硬直したまま、ある一点を凝視していた。

視線の先には、ぶらぶらと揺れる、何の変哲もない蜘蛛が一匹。

「先、輩……………」

まさか、と思いつつ、フウガが問い掛けた瞬間であった。

「きゃ……………」

「へ？」

「きゃあああああああああああああああああああああああああああああああ
あああああああああああああああああああああっ！？！！？」

「どわあああああっ！？」

いきなり、問答無用で押し倒された。

五十年間、積もりに積もった埃が舞い上がり、ランタンの灯りに照らされてキラキラと光る。もちろん、そんな光景を綺麗だな、なんて思う余裕があるはずもない。

「せ、先輩いっ！？」

ウズメに抱きつかれるのは二度目だが、場所と状況も相まって、前以上にフウガは狼狽する。一瞬にして、平静さなんて吹っ飛んでいく。

少年の胸にがっちり抱きついたまま、ウズメはぶんぶん腕を振りながら、背後を指差した。

「く、くくくく、蜘蛛がつ！！！！」

「は、はい！ 蜘蛛ですけど！！！！」

「クモクモクモクモ——ッ!!!!!!」

「ええ！　クモですクモですクモですクモですっ！！」

二人共、お手本の如く見事に動転しまくって、もはや会話が成立していない。ただ、ひたすらに不毛なやり取りを延々と繰り返す。

『——全く本当に笑わせてくれるな、お前達は』

そんな中、笑いを噛み殺した声が念話で響いた。

当然、オロチである。

『落ち着け、フウガ。この状況でお前まで冷静さを失ったら、誰が収拾をつけるのだ』

「はっ！」

途端、フウガは我に返った。

そして、蜘蛛とウズメを交互に見た後、ようやく状況を飲み込む。要するに、ウズメの様子が出会ったときからおかしかった原因は、“これ”だったのだ。

これだけ古びた建物なら、当然、蜘蛛の巣は多くあるし、その主である蜘蛛自身もまた同じ事である。だから、ウズメはずっと何かに怯えていて、フウガと一緒に旧校舎に入る事も躊躇っていたのだろう。

しかし、まさかのあのウズメの苦手なものが蜘蛛だったとは——！

「せ、先輩！　落ち着いて！」

「フ、フウガ！　蜘蛛が蜘蛛が蜘蛛があっ——！」

「ええ、わかってますっ。大丈夫、俺がどこかにやりますから！」
ともかく言い聞かせて、苦労しつつもウズメを引き剥がす。

そして、立ち上がると、今もぶらぶらと呑気に揺れている蜘蛛へと慌てて駆け寄った。糸を切って、蜘蛛をそっと指に乗せると、ウズメから見えない場所へまで移動してから放してやる。

「——ごめんな。別の場所で巣を張ってくれ」

事を終えると、すぐさまウズメのもとへと戻る。

あの様子を見ては、独りにしておくのは不安で仕方がなかった。
「先輩」

戻ってみると、少女は未だ座り込んだままだったが、蜘蛛が視界から消えたおかげか、もう取り乱してはいないようだった。それでも恐る恐ると言った風に、こちらを見上げてくる。

「……フウガ……あの……」

膝を突いて目線を合わせると、フウガは優しく声を掛けた。

「もう平気です。蜘蛛は向こうに逃がしましたから」

「あ、ああ……そうか。ありがとう……」

礼を言って、ウズメは顔を合わせるのを避けるように俯く。

続けて、ぼそぼそと何か呟いた。

「……………か……………」

「はい？」

「……呆れたか……？」

じっと床を見つめたまま、ウズメは不安に揺れる声で言い募る。

「以前に、ツクヨミ家の人間として相応しい振る舞いを心がけるなどと言っていたのに——蜘蛛一匹を怖がって、あんなみつともない姿を見せて……呆れてるんじゃないのか……？」

蜘蛛の事以上に、フウガにそんな風に思われてしまう事を恐れている——そう、はつきりとわかる言い方だった。

「……」

「何で、俺がそんな事を思うんです？」

逆に、フウガはそう訊き返していた。

「え……？」

ウズメは顔を上げ、呆氣に取られたように、ぽかんと固まる。よほど予想外だったのだろう、そのまましばらく表情が動く事はなかった。

それに構わず、フウガは続ける。

「確かに突然の事で驚きはしましたが……世の中、完璧な人間なんて居ません。俺も含めて、誰にだって苦手なものはあります。だから、何も恥ずかしい事なんてありませんよ。むしろ、先輩もそういう所は普通なんだなって、安堵するぐらいなもんです」

それは慰めでも、誤魔化しでもなく、フウガの正直な気持ちだ。もとより、こんな状況で、その場しのぎの嘘など吐けるほど器用な性格でもないのだ。

「さ、行きましょう。ぬいぐるみ、探さない」と

淡く微笑んで、手を差し出す。

「……………」

しばらくウズメは反応出来ないまま、差し出された手をじっと見つめていた。

だが、ふと。

彼女もまた微笑むと、フウガの手を取る。

本当に嬉しそうな、でも、ちよつと照れ臭がっている——そんな可愛らしい微笑。

「そう……だな。——ただ、また蜘蛛が出たら……」

「ええ、俺がちゃんとどこかにやりますから大丈夫です」

頷いて応えようと、手を引いて、ウズメを立たせてやる。

「——君は、ずるいな」

立ち上がったウズメは、服についた埃を払いながら、悪戯っぽい口調で言った。

意味が理解出来なくて、フウガはきよんとする。

「ずるい？」

「ああ、ずるい。あんな言葉を掛けられてしまったら……私は君を惚れ直さずにはいられないよ」

「……………っ!」

不意打ちに、フウガは動揺を隠せない。

いや、そもそもこの少女は、いつも唐突に、こちらが平静でなどいられない言葉を口にするのだ。

「え、ええと……お、お手柔らかに」

動揺した末に、なんだか間抜けな返答をしてしまう。

よほど困った顔をしていたのか、ウズメは小さく噴き出した。そして、彼女の方も改めて恥ずかしさが湧き上がってきたのか、頬を

紅くする。

「しかし、出来れば蜘蛛の事は君には知られたくなかったな……」

フウガは申し訳ない気持ちで、頭を掻く。

「すみません。でも、誰にも言いませんから」

「そうしてくれると助かるよ」

「ええ、安心してください。それにしても――」

フウガはランタンで、天井の蜘蛛の巣を照らすと、

「あんなに蜘蛛が苦手なのに、女の子の頼みを引き受けちゃう辺り、確かに俺に負けず劣らず、先輩はお人好しかもしれませんね」

と、さっきのお返しばかりにそう言って、笑って見せた。

「――ああ、全くだな」

否定出来なかったのか、ウズメは目尻を下げて苦笑した。

＊ ＊ ＊

それから、十数分後。

「あ、先輩、あれ！」

再び廊下を歩いている途中、フウガは声を上げた。

視界の端に、この朽ちた旧校舎には不釣り合いな物体が見えたのだ。

「あれは……もしかしたら当たりか」

ウズメは小走りで駆け寄って、それを拾い上げる。

ごく平凡な子犬のぬいぐるみだった。

少々埃を被ってはいたが、ずっとここに放置されていたとしたら、

あまりに綺麗過ぎる物である。

ウズメはぬいぐるみの埃を払うと、優しく頭を撫でてやった。

「あの子も犬のぬいぐるみだと言っていたし、たぶん、これで間違いないだろう」

「ええ。……だけど、ここって、もう旧校舎の中程ぐらいですよ。ね。その子、よく独りでこんな所まで入り込んだもんだ」

訪れた時間がいくら昼間だったとはいえ、大人も不気味がるよう

な場所なのだ。年齢も考えると、相当に肝っ玉が据わっていると言わざるを得ない。

「ふふ、なかなか将来有望な神聖騎士候補かもしれないな」

「ですね」

二人で、ひとしきり笑いあう。

その後、ウズメはぬいぐるみを片手に抱きながら、言った。

「さて、じゃあ、次は君の用事の方だな」

「……ちよつと忘れかけてました。そういえば、肝試しにきたんでしたね」

「こらこら。皆、外で待っているんだろう？」

そう言って、フウガを笑顔で叱ってくるウズメは――相変わらず蜘蛛の巣を見かけると、びくびくとはしていたが――先ほどまでと比べると随分と余裕が出てきたようだった。

そんな様子を見ていると、まさかとは思うものの、

（俺の事を信頼してくれてるのかな……？）

と、そんな自惚れみたいな考えを抱いてしまう。

ただ、基本的に無害な蜘蛛から護るために頼られるというのも、なんとも微妙な所ではあるのだが……。

「……まあ、だからと言って、危険な蜘蛛なんて、正直ごめんだけど」

「ん？ 何か言ったか？」

まだちよつとフウガの方に寄りがちに歩くウズメが、不思議そうに見てくる。

慌てて、手を振って誤魔化した。

「あ、何でもないんです。気にしないでください」

「そうか？ ならいいが」

首を傾げたものの、特に追求する事なく、ウズメはまた前を向いた。

フウガは、こっそり息を吐く。

（……危ない危ない。下手な事を言ったら、また怖がらせちゃうし

な)

と、そんな風に自分を戒めたのと、同時。
それは、二人の耳朵をざわりと叩いた。

「……………!」

低く低く低く。

地の底から響くような。

不気味な——呻き声。

素早くそれぞれの武器の柄に手をやって、二人が身構える。

一瞬にして、薄暗い空間に満ちる空気が張り詰めていく。

「聞こえたか？」

「ええ、ばっちり」と

春先から、ずっと候補生の間で噂になっていた幽霊。

その内容は、不気味な呻き声と——そして、何かが這いずるような音だったはず。

「じゃあ、次は……」

かりかりかり。

かさかさかさ。

フウガの弦きに応えるように、呻き声と共にそれは聞こえた。

警戒する二人を嘲笑うように、何度も何度も何度も。

繰り返すたびに、声も音も、徐々に近づいてくる。

次第に大きくなって、異様な気配と共に迫ってくる。

かりかりかり。

かさかさかさ。

かりかりかり。

かさかさかさ。

「——フウガ。気をつけろ」

「はい」

二人は油断なく、前方を見据える。

もう数秒もすれば、ランタンの灯りで、近づいてくるモノの正体は明らかにされるだろう。

そのときに備えて、フウガは緊張感と集中力を極限までに高め――

それは、きた。

幕間 騒がしき日々は、かけがえなき日常 その二・中編（後書き）

お読み頂きありがとうございました。

次回の後編で、幕間の二は完結となります。長くなってしまい、申し訳ありません。

もしも感想などあれば、どうぞお気軽に。とても励みになります。

幕間 騒がしき日々は、かけがえなき日常 その二・後編

ランタンの光の下に――“それは姿を露にした。”

「――」

「なっ……!？」

ウズメが引きつった悲鳴を喉からこぼし、フウガは焦慮の声を上げる。

[illegible]

しかも、ただの蜘蛛ではない。

『――禍蜘蛛だな』

オロチが冷静に、幽霊の正体の名を口にする。

禍蜘蛛。

力も知能も低い、下級妖魔の中でも底辺に位置する存在。だから基本的な習性として、常に群れを成して動くというものがある。

しかし、この数は異常だ。こんなものは妖魔学での、教官の話でも聞いた事がない。

そして、さらに問題なのは、今、この場には蜘蛛を苦手とするウ

ズメが――

「あ」

「先輩！」

戦意も闘志も一瞬で奪われ尽くして、ウズメはその場にへたり込む。

無理もない。もともと苦手だというのは、こんな、蜘蛛を特に嫌

悪しない人間でも吐き気を覚えるような光景を目の前にすれば、放心してしまうのは当然だろう。

「くっ——」

咄嗟にランタンを放り出すと、フウガは放心した少女を両手で抱え上げる。

この状況で敵を迎え撃つのは、無謀以外の何物でもない。故に、

「ここは逃げだ！——疾く、駆けよ！」

速力上昇の〈言力〉を発動。

少女を抱えたまま、一目散に逃走へと移る。

数は多くても、禍蜘蛛自体の移動速度は、たいしたものではない。あつという間に群れを後方に置き去りにすると、しばらく走った後に、フウガは適当な教室へ選んで、そこへと飛び込んだ。

ウズメを優しく降ろした後、そこらに落ちていた木片を素早く拾い上げると、つかえ棒にして扉を開かないようにしておく。

ひとまずの安全を確保して、フウガは窓の方を振り返った。

「……やっぱり〈異界〉か」

嬉しくない想像が的中して、暗い声で呟く。

旧校舎の周囲は、淀んだ桃色で覆われていた。この事態は、ここに逃げてくるまでの間に巡らせた推測で、すでに予想済みであった。あの禍蜘蛛の増え方は、どう考えても異常だ。ならば、中級、もしくは上級の妖魔の手によるものと考えるのが自然である。妖魔が、自身より力の劣る者を駒に使うのはよく聞く話だ。

そして、何よりも、下級妖魔では扱えない〈異界〉が展開されるといふ事実が、中級か上級の妖魔の仕業である事を明確に告げていた。

「……さて、どうする」

ウズメといえど、内側からの〈異界〉の脱出は、さすがに無理だろう。オロチはいつものように不干渉を決め込むつもりのようなだし、残るこの危機を切り抜ける手段は——

「元凶の妖魔を倒すしかないか……」

結局、一番妥当な答えは、それしかなさそうだった。

夜で、しかも人気ない旧校舎で助けを期待するのは、さすがに樂觀的過ぎる。時間が経てば、離れた場所で待つゴウタ達が異常に気づく可能性もあるが、あの数を相手にそれまで逃げ切れるとも思えない。やはり、ここは、こちらから打って出るしかない。

ただ一つ疑問なのは、何故、妖魔は、こんな旧校舎に巢食っていたのかだが……今は、その理由を考える時間があるとは思えなかった。このまま隠れていても、禍蜘蛛達に捕捉されるまで、そう時間は掛からないだろう。

「……先輩、大丈夫ですか？」

「ああ……なんとか……」

壁際に座り込むウズメは気丈に答えるが、顔は真っ青だった。

群れを前にしただけで、これなのだ。とてもではないが、彼女を戦わせるわけにはいかない。

ほとんど反射的に覚悟を決め、フウガは言った。

「先輩、俺は囧になりつつ、あの禍蜘蛛を操っているだろう親玉の妖魔を探しに行きます。先輩は、ここから動かないで下さい」

「いや……フウガ、私も行く」

精一杯の虚勢を張って、ウズメは自分も戦うと訴える。

フウガは首を横に振って、はっきりとそれを拒否した。

「駄目です。また禍蜘蛛を前にしたら、先輩は戦えないでしょう？」

「……それは」

自らの不甲斐なさへの憤りを表すように、ウズメは俯いて唇を噛む。

フウガは、少女を安心させようと、おどけて笑って見せた。

「心配いりませんって。正面から立ち向かわなきゃ、いくら数が多くても禍蜘蛛程度に負けはしませんし、あいつらを操ってる妖魔を倒せば、すぐに片はつきます」

「サあ……果たして、ソんナに簡単ニイくかな」

唐突に、どこかおかしな発音の音が教室内に響いた。

「「!」?」

弾かれるように二人が振り返る。

あるのは、長い年月の後に汚れて朽ちた反対側の壁だけ。

だが、その表面がぐにゃぐにゃと大きく歪み始める。歪みが収まったときには、そこには異形の巨躯が在った。

「……………」

ウズメの顔から、さらに血の気が引いていく。

異形の正体は、人頭ほどの禍蜘蛛よりもさらに大きい、優に人間の大人三人分はあるだろう巨大な蜘蛛だったのだ。虎のような胴体から伸びる長い八本の足で壁に張り付き、鬼の如き顔の双眸が二人を捉える。

——八握脛^{やつかはぎ}。

この中級に属する妖魔こそが、あの禍蜘蛛達の主か。

フウガは忌々しい思いで舌打ちする。

「……まさか、こうも早く見つかるとはな」

「当然だ。オ前達が、ここニ侵入しテから、ずっと見張っていたのだ。逃がスはズもナイ」

かかか、と八握脛が醜い鬼面で笑う。

同時に、二つの方向から破碎音が響いた。扉と窓が禍蜘蛛達によって破壊されたのだ。

フウガ達は、教室に侵入してきた妖魔の群れにあってという間に囲まれる。

「くっ……」

フウガは、蜘蛛達を前にして、再び硬直してしまったウズメを庇うように動く。

「まさニ蜘蛛の巣にかかった哀れナ羽虫ヨな。所詮、騎士候補生ナドといッテも、コの程度カ」

この危機的状況にも怯む事なく、フウガは八握脛を睨みつける。

「お前は、騎士候補生を狙って、ここに巢食ったのか」

「当然ダ。そうデなければ、わざわざこんな危険の多い場所を選ぶものカ。我々妖魔は、価値ノ高い魂を持つ人間ノ血肉を喰らウ事で、より力を高めル。デは、価値の高い魂を持つ人間とハ如何ニ？」

八握脛の問いの答えに、フウガはすぐに思い当たる。

「……〈言力師〉」

「そうダ。〈龍脈〉の力ヲ借り、こザカシい術を操ル人間共ダ。だが、下手ニそイツラニ手を出せば、返り討チに合いカネン。——だが、ソれも精神ヤ肉体がまだ未熟ナ者なうば、どうダ？」

妖魔の狙いが何か、フウガはすぐに察した。

「そういう事カッ。騎士候補生を誘い込むために、わざと幽霊の存在を匂わせるような真似を……」

「御明察ダ。頭の悪い人間ノ餓鬼が、こウいう噂ニ愚カナ好奇心で寄ってクルのはワカッてイタ。適当に何かガ潜んでイるようニ見せかけテ、貴様達のヨウな馬鹿者がわざワザ罠に飛び込んでクルノを待ち構エてイタのヨ」

「獲物を喰らった後は、自らの存在を悟られる前に逃げ出せば良い……カ。そうすれば騎士候補生を少ない危険で喰らって、自らの食欲を満たし、力を高める事が出来る。妖魔にしては、考えたもんだ。だが——」

腰の後ろの鞘から、刃が抜き放たれる。

イザナギとイザナミ。

スサノ・フウガの誓いを宿す二振りの〈真名武具〉。

「掛かった獲物が俺だったのが、お前の不運ダ。その企みは失敗に終わる」

「かかか。好きニ吼エろ。どうせ我ニ喰ラわれルときにハ、無様な悲鳴シカ上げラレんのダ」

八握脛が足の一本を振って、禍蜘蛛達に包囲網を狭めさせる。

フウガは禍蜘蛛達の動きを警戒しつつ、天井を見上げる。

(……くそ、ご丁寧に旧校舎のボロさ加減まで、しつかり模倣してやがる)

この場で、強力な〈言力〉で敵を薙ぎ払ったりすれば、校舎が崩れて、そのまま生き埋めになりかねない。八握脛は、そこまで考えて、ここに罠を張ったものか。

「烈風、研ぎ澄ませ！」

両の刃に風を纏わせる。

所詮、この禍蜘蛛達は、八握脛による傀儡だ。頭さえ仕留めれば、残った統率性を失った手足など、なんら脅威ではなくなる。故に、狙うべきは八握脛のみ。さらに、動けないウズメの存在と数の不利がある以上、長期戦は選択肢に存在しない。速攻で、片をつけなければならぬ。

フウガは迷わず躊躇わず、前へと出る。異形の蜘蛛達の群れへと駆け込んでいく。

遠距離からの攻撃は、禍蜘蛛を盾にされれば、容易く防がれるだろう。ならば、臆す事なく敵への接近を挑む事しか、フウガには許されない。

「勇敢ト無謀を履キ違エたカ、小僧」

八握脛が嗤い、命じる。

蠢く群れが少年の進路を阻み、牙を剥いた。

「邪魔——だっ！——！」

風の宿りし二刃による斬撃が唸る。

前に出る足を一切止める事なく、進行の障害となる妖魔だけを瞬時に見極め、悉く斬り捨てていく。

あくまで八握脛を斬れる間合いまで近づく事が最優先。だから、少しばかり肉を切られようが、挟られようが構わない。脳髓を苛む苦痛など、戦う者として強固な意志によって黙らせる。

そして、朽ちた床で幾度と跳ねる鮮血を代償に、フウガは、八握脛への接近という報酬をかううじて得た。

「ほウ……まさカ、そノ身を削ッテ、ここまデ迫ろウとハ。驚いテ、

少しばかり傍観してしまつたゾ」

「お前の戯言を聞く気はない！」

すでに剣の間合いには足を踏み入れている。あとは、フウガが刃を振り下ろせば戦いは幕を下ろす。

しかし、八握脛の言葉は、ハツタリでも負け惜しみでもなかった。あくまで、この場での主導権を持つのは、あちらであり、蜘蛛の巣に掛かった哀れな羽虫は、フウガとウズメの方。

故に――少年の剣は敵を斬るには至らない。

「なっ――これは!？」

四肢に絡み、フウガの自由を奪つたのは、禍蜘蛛が口腔より吐いた蜘蛛の糸。粘り、伸縮性と強度に富むそれは、束縛からの脱出を容易としない。

動きを止めたフウガは、殺到した蜘蛛達に押し掛かれ、床に伏した。

「く……そっ！」

「小僧、貴様は、しばらくソこで寝テい口。先ニ喰らウは女ヨ。柔ラかく、美味ナ獲物を前ニ、溢レル涎が止まらんノでな。我ハ好きなモノから喰うノが好みダ」

未だ教室の端でへたり込むウズメを、ざわざわと禍蜘蛛達が囲む。「恐怖デ竦ンデ、動く事モ出来ヌか? これハ愉快ヨ」

状況は、絶望的。眼前に広がる危機を前に、ウズメは剣を抜く事すら出来ていない。

このままだと、間違いなくウズメは死ぬ。

妖魔の欲望と腹を満たすだけの、人としての誇りも尊厳も与えられぬような最期で。

「――っ」

少女の危機を前に、内に眠る欠落の騎士が身を起こさんとする。亀裂の痣が、ゆっくりと浮かび上がり始める。

だが、次の刹那。少年の視界に広がった光景は、彼の脳裏に在った想像とはあまりにもかけ離れていた。

――断ち斬られる。

体液を撒き散らし、木床を打つのは、禍蜘蛛の残骸。妖魔が少女へと近づく先から、屍は量産される。

「何事、ダ」

鬼面にも動揺が浮かぶ。

少女の〈真名武具〉であるカグヅチは、すでに鞘から抜き放たれ、宝石の如き緋色の刀身は、その美しい姿を戦いの場へと晒していた。ゆらりと少女が立ち上がる。その佇まいに、先ほどの怯えも恐怖も何もありはしない。そこにあるのは、ただただ騎士候補生最強――ツクヨミ・ウズメとしての、揺るがぬ威容であった。

対し、一切の隙などなく刃を構える彼女を前にして、怯えるように引いていく妖魔の群れとそれを呆然と見守る八握脛の姿が、フウガには哀れなほどに矮小に見えた。

「――至極、簡単な事だったな」

静かな、落ち着いた声音で、ウズメは言った。そこには、どこか自嘲も含まれている。

「蜘蛛が苦手だというのなら、その姿を視界に入れなければ良い。私は、何よりもあの姿形を好まないだけなのだから」

つまり、ウズメは目を閉じていた。

今の彼女が知り得る情報は、耳朶に触れる物音と肌で感じる気配のみ。

だが、しかし、この少女の感覚は、常軌を逸して鋭敏である。フウガとの初めての手合わせで、完璧な不意打ちにも見事に反応して見せたあの光景は、少年の目に今もはっきりと焼きついている。

ウズメには、戦略も戦法もなく襲いくる有象無象など、目に頼って相手をする必要などなかったのだ。ただ感じ、斬れば良い。全ては、それで事足りる。

「オのレ……小賢しい！」

八握脛は浅慮にも、再度、禍蜘蛛達に特攻させる。当然、結果は、命を絶たれた異形の肉片が無駄に増えるだけだ。近づく一切の敵の存在を許さず排除するそれは、少女の類稀なる鋭い感覚と、磨き抜かれた技術に支えられた正確無比な斬撃による結界そのもの。

禍蜘蛛は苦し紛れに、フウガのときと同じく糸を射出するが、ウズメが僅かに身を捌いただけで、まるで予測していたかのように空を切られる。所詮、すでに一度明らかにになった手札だ。極限まで感覚を鋭敏化させている今の彼女の脅威には成り得ない。

「……………」

ウズメの人間離れた所業に、フウガは、驚嘆以外の感情を覚えられなかった。

目を閉じたまま、禍蜘蛛を次々と斬り捨てている事もそうだが、それ以上に、あれほど恐れていた蜘蛛という存在を、まるで意に介していない事が一番の驚きだった。

姿形が苦手——だから、見なければ良い。

理屈はわかる。

だが、だとしても、すでに彼女の意識の中には、この場を埋め尽くすのは禍蜘蛛であるという認識があるはずなのだ。

おそらく彼女は、目を閉じるという行為と同時に、襲いくるのが蜘蛛の姿をした妖魔であるという事実を、強引に意識から遮断している。

迫ってくるのは、敵。——だから、斬る。

それのみを、盲目に遂行しているだけ。

戦いの場に在るが故の驚異的な集中力があるからこそ為せる業なのだろうが、常人に可能な事ではない。少なくとも、今の自分には真似出来る自信など有りはしない。

フウガは、改めての納得と呆れさえも滲んだ苦笑混じりの呟きを漏らす。

「……やっぱり最強だ、この人は」

気づけば、半数近くの禍蜘蛛は、すでに長刀の餌食となっていた。

火炎の羽衣が、翼を広げる大鳥のように、一際大きく燃え上がった。

＊ ＊ ＊

夜明けが近かった。

白み始めた空へ向けて、白煙がゆっくりと立ち昇っていく。

「ああああ……旧校舎が……」

「なくなってもうた……」

鏡写しのように、同じ動作でがっくりと肩を落とすのは、シズネとゴウタである。視線の先にあるのは、すっかりとしてしまった空間と炭と化した旧校舎の残骸の山だ。

「見事に燃え尽きたわね……」

「うん、本当……」

「むしろ、爽やかなぐらいだね」

隣では、レナ、ミヨ、ライの三人が啞然とした様子で、そんな感想を口にしていたりする。

フウガが肝試しから帰ってくるのを待っていたら、いきなり旧校舎がなくなってしまったのだ。この反応は、当然と言えば当然であった。

「……申し訳ありません。手加減を忘れてしまって……」

深々と頭を下げて、美貌をススだらけにしたウズメは謝罪を繰り返す。先ほどの妖魔を前にしたときの威容が嘘のように、その姿は小さく見える。

「いや、先輩。あの状況じゃ仕方ありませんよ。捕まった俺が迂闊だったんですし……」

同じくススだらけなフウガは、少女を庇う言葉を口にする。実際、彼女のおかげで自分の命は助かったのだから、責められるはずもない。

ウズメが八握脛を仕留めた後、すぐに〈異界〉は消滅した。だが、

ウズメの〈言力〉の余波が、本物の旧校舎の方へまで及んでしまい、出火——急速に広がる炎を止める術はなく、フウガ達は慌てて、その場から脱出したのだ。

旧校舎は一晩中燃え続けると、完全に焼け落ちていた。その炎に気づいたシズネとミチザネが駆けつけて、現在のような状況に至っている。

「気にする事はない。どのみち取り壊す予定だった物だ。妖魔の企みも未然に防げたわけだし、結果的には僥倖だったと言えるだろう」すちやりと慣れた仕草で眼鏡を指で押し上げ、ミチザネが至極冷静に言った。

どんよりとした表情のまま、シズネも同意する。

「ええ、そうですね。タワラ教頭の言う通り、ツクヨミさんが気にする事はありませんよ。……ああ、ですけど……旧校舎が……皆の肝試しスポットが……もったいない、ああ、もったいない……」

再び眼鏡を押し上げ、ミチザネは嘆息する。

「——学園長、いいかげん自重してください」

「本当、申し訳ありません……」

相変わらず、ウズメの表情は晴れない。周りがどう言ってくれた所で、旧校舎の事で、自身の責任を感じずにはいられないのだろう。それは、名門ツクヨミ家の人間として——そして、何よりも彼女自身の性格として、責任感が強い故だ。

しかし、こんな事態になったのは、八握脛にフウガが未熟にも捕らわれてしまった事が原因である。それなのに、ウズメが責任を感じ、落ち込んでいる姿を見るのは、フウガには辛かった。

やっぱり彼女には——いつものように笑って居て欲しい。

フウガは、何とかならないかと、しばらく考え込んだ後、

「先輩」

と、未だに暗い表情なままのウズメに声を掛けた。

「……フウガ。どうした？」

「えっと、それです」

「それ……？」

フウガの指差す先にあったのは、燃え上がる旧校舎から脱出する
ときにも、決して燃やしたり、焦がしたりしないよう、ウズメが大
事に守っていた子犬のぬいぐるみだ。それは今も、彼女が大切そう
に胸に抱いている。

「確かに旧校舎はなくなっちゃいました。でも、ちゃんとぬいぐる
みは持って帰れたじゃないですか。先輩がそんな顔してたら、女の
子も素直に喜んでぬいぐるみを受け取れませんかよ」

「……………だが」

「先輩、この間、俺に言ってくれたばかりでしょう。誰だって間違
える事ぐらいあるって。だから、笑っていきましよう。そんな暗い
顔してたら、何も良い事なんてないんです」

そこまで言って、フウガは困った顔で笑った。

「それに正直な所、先輩の元氣のない姿を見てるのは、俺も苦しい
んです。旧校舎が燃えたのは、俺を助けるために起きた事ですし、
やっぱり先輩は凛々しく、自信に溢れていて——そして、笑って
るのが一番です。……………すいません、気の利いた励まし方とか出来な
くて」

「…………フウガ」

ウズメは、きゅっとぬいぐるみを抱きしめる。そして、腕の中で
無垢に微笑む子犬の顔をしばらく見つめた。

次に、顔を上げたとき——彼女は、旧校舎を脱出してから初めて
の笑顔を形作っていた。

「そんな事はないよ、フウガ。君の言葉、嬉しかった。……………そう
だな。確かに、こんな顔してたら、あの子に心配を掛けてしまうな」
先ほどの様子が嘘のように弾んだ声で、ウズメは礼を口にす
る。

「ありがとう。今日は何だか、君に励まされてばかりだ」

「あ、いえ。……………礼を言わなきゃいけないのは、こっちも同じです
から」

まさか自分の励ましが、こんなに効果があるとは思っていなかった。フウガは戸惑いつつも、笑顔で応える。

そんな二人のやり取りを遠くから見ていたミヨが、隣で背後に恐ろしく黒い何かを立ち昇らせる親友の方へと顔を向けた。

「レ、レナちゃん、もしかして機嫌悪い？」

「……そう思うなら話しかけないでくれる？」

「…………ごめんなさい」

一瞬で三十歩くらい距離をとつて、ミヨは泣きそうな顔で自身の失言を後悔する。

「……鬼って、ああいうのを言うんやろうな、やつぱり」

「ゴウタ。長生きしたかったら、その口は、今すぐ閉じようね」

異様なレナの姿に、ゴウタは焼け落ちた旧校舎の事を嘆くのさえずり忘れて、もの凄いい作りの笑顔でライがそれを諫めていた。

こうして、いろいろと騒動はあったものの、綺麗に話が片付くかと思われたときだった。

「――ああ、そうだ。忘れていた」

ミチザネの口から、冷酷な宣告がされたのである。

「立ち入り禁止の場所に入ったという事で、スサノ・フウガと他五名——反省文五十枚だ。忘れるなよ」

東の空に朝陽が昇る中。

『え———ええええええええええええええええ！』

「！！？」

早朝の爽やかな空気を震わせて、フウガ達の盛大な絶叫が旧校舎跡に響いたのだった。

幕間 願がしき日々は、かけがえなき日常 その二・後編（後書き）

お読み頂きありがとうございました。

今回で幕間の二は完結となります。感想などありましたら、どうぞお気軽に。

幕間 騒がしき日々は、かけがえなき日常 その三

「ようやくと九枚目か。ライ、今、何枚や……?」

「僕は、ちょうど二十枚かな」

「は、早いわね。私なんて、まだ八枚目なのに……」

「うう……私、六枚目……」

暗い声で、そんな会話をしているのは、ゴウタ、ライ、レナ、ミヨの四人である。黙々と筆を進めているが、当然、そこにはフウガもいる。

五人の纏う空気は、やたらと重かった。

無駄と言って良いほどの広大な敷地もつ第一ヒノカワカミ学園。

その中であって、頭一つ抜けて高さを持つ建造物がある。

それが、図書塔だった。

文字通り、所謂、図書館の役割を持つ建物ではあるが、どんな理由か、この学園では、塔の形を取っているのである。

階ごとに種類分けされた書物が無数に並び、その蔵書量は、王都にある王立図書館に次ぐ量を誇っている。円形の部屋を囲むように設置された書架は、ぴっちりと隙間なく本で埋められ、まるで塔そのものが本で作られているのではと錯覚するようだった。

この顔ぶれの中では、普段はミヨぐらいしか縁のない場所だが、今日に限っては、フウガ達全員が揃っている。その理由は唯一つだ。昨日の肝試し騒動の際に、教頭のミチザネから課せられた反省文五十枚を、必死に書き進めているのだ。

自分達の教室では、周囲の人間の冷やかしやからかいがあって集中出来ない。なので、読書や調べ物を行う場所という性質上、常に静寂が約束されている、この図書塔を訪れたというのが、現在の状況に至るまでの経緯であった。

ちなみに、一緒に反省文五十枚を言い渡されたはずのウズメは、この場には居ない。なんと、その日のうちに全て書き終え、ミチザ

ネも内容に納得したらしい。それを聞いたときのフウガ達は、驚く以前に啞然とするしかなかったのは言うまでもないだろう。

「……フウガは？ 今、何枚？」

目の下にクマさえ作ったレナが問うてくる。

相変わらず、こちらの名前を呼ぶときには、どこか躊躇いがある。それは、フウガがキジムとの戦いの怪我から復帰した辺りからずっとなのだが、フウガ自身には、その理由には、と思い当たるものがない。

「俺は、これで四十枚目だな」

フウガもまた疲労感溢れる表情で答える。

途端、ライ以外の三人が硬直して、目を丸くした。

「よ、四十枚って、フウちゃん、ちょい早過ぎんかっ？」

「す、凄過ぎです……」

「こんなもの一体、何をそんなに書く事があるってのよ？」

三人が疑惑の視線を投げかけてくる。

まるで、こちらがイカサマでもしたかのような態度である。全く持って、失礼極まりない。

フウガは不満を隠さず、もともと悪い目付きを、さらに陰しくして言い返す。

「あのな……俺はこういうのに慣れてるんだよ。だから、ちょっと早いだけだろ」

「慣れてるって、どうしてよ」

「そうやそうや」

「気になります。教えてください」

なおも言い募る三人。

何故か、気づけば尋問状態だった。

「お前らな……」

そこに助け舟を出したのは、ライだった。

「フウガは、今までずっと落ちこぼれで通してきたからね。わざと失敗して、反省文書かされる事も多かったんだよ」

「そう。そういう事だよ」

言って、フウガは顔の横で器用にペンをくるりと回す。

ゴウタは腕を組んで、納得したように頷いた。

「……言われてみりゃ、そうやなあ。フウちゃんは、慣れっこやもんなあ。全然、羨ましくないけど」

「そりゃないわよ、そんなもの」

「正直、見習いたくはないですね……」

今度は、それぞれそんな酷い事を言ったりする。

至極もつともな意見だが、勝手に疑いの眼差しを向けておいて、理由を言えば、その反応とは、いくら何でもあんまりだ。

「あのな……お前ら、もうちょっと人には気を使って喋れ」
なんか泣きたい気分で、フウガが仲間を非難したとき。

「……あらあら、大変そうですね」

そんな、せせら嗤うような甲高い声が、部屋に響いた。
皆が一斉に視線を向ける。

「……………うわあ」

誰ともなく、心底、嫌そうな声を上げた。

視線の先に居たのは、ふんぞり返る見事な金色の巻き毛の少女。
その背後に付き従うのは、瓜二つの双子の少女だ。

この特徴的過ぎる個性と構成を見れば、もはや確認するまでもない。

サワメ・ナキと、その従者であるハニヤ・スビコとスビメだった。
一体、どこで聞きつけたのか、彼女達は、フウガ達の事情を知り得ているようだった。……まあ、その日の朝のうちの学園中に広まっていたようだから、当然なのかもしれない。

ナキは、折った指を唇に当てて、さも愉快そうに嗤う。

「話は聞きましたわ。何やら肝試しなどと言う戯けた遊びに興じて、旧校舎に不法侵入したせいで、タワラ教頭に反省文を命じられたと

か。ふふ、さすが貴方達のような身分の低い方は、やる事も相応のようね」

「「相応のようですね」」

きつちり最後の方には、双子が言葉を重ねてくる。

嫌味度を倍加させるような、この演出はわざとやっているのだろうか？　だとしたら、全くご苦勞な事である。

「サワメ先輩。その戯けた遊びには、一応、ツクヨミ先輩も一緒に居たんですけど……」

わかっていると思うものの、フウガは念のため、その点を指摘してみる。

「そんな事は知っています。ですが、ウズメ様は、ぬいぐるみをなくした少女の願いを受けて、感涙ものの御慈悲により、規則に反すると承知で旧校舎に行かれたのです。それを下らない遊びに巻き込んだのは、貴方達でしょう？　何より、ウズメ様は、不当にも課せられた反省文も、当の昔に終えられたとの事。やはり貴方達とは、そもそも生まれからして格が違うのだわ」

「……………ははあ、なるほど」

これはもう、感心すれば良いのか、それとも呆れる所なのか。どうにも判断に苦しむ見事なウズメ愛炸裂の理論を展開されて、フウガは返す言葉もない。

と。

唐突に、傍でだんっ！　と誰かが掌で机を叩く音が鳴った。

広がっていた微妙な空気が、途端に変化する。

「わざわざ、そんな事を言いにくまできたんですか？　そもそも先輩に、そんな風に言われる筋合いなんてないですよ。特にフウガは、先輩達の命の恩人のはずですけど」

険のある声で、そう反論したのは椅子から立ち上がったレナだった。

常からつり気味の目が、今は研いだ刃のようにも思えた。

「…………それは別の話でしょう？　貴方達が騎士候補生にふ

さわしくない行動を取って、罰を与えられたのは確かなのよ」

売られた喧嘩を買うのに迷いはないようで。

ナキもまた、声に怒気を孕まして言った。

(……うあ、まずいな)

レナの性格からして、こんな一方的に馬鹿にされたら、そりゃあ黙ってなどいられないだろう。そして、ナキの方も馬鹿にした相手が嘸み付いたとくれば容赦などしそうにない。

すでに、部屋は一触即発の空気へと切り替わっている。他の机で勉強に勤しんでいたはずの見知らぬ騎士候補生達も、そそくさと退散を始めていた。

どうしたものかと、フウガは助けを求めて、ライとゴウタの方に視線を馳せた。しかし、期待に反して、二人は早くもお手上げのポーズである。どうやら、触らぬ神に祟りなしの方針で早々に手を打ったらしい。

駄目だ、この二人は役に立たない。

だから言って、先ほどから何も口を出せず、あわあわとなつているミヨには、とてもこの場は收拾出来まい。

結局、残されたのは、フウガ自身一人か。

(ええい、ままよ!)

確実に精神的損傷を負う事は確實ではあるが、自分が止めようと、フウガは立ち上がる。

それと同時に。

「そこおおっ!」

怒声と共に、どこからともなく高速で飛来してくる、細長い物体。

「だっ!」

「「ナキ様!」」

それは、まずナキの後頭部に命中。

反動でくるくると宙を舞った後、

「っあっ?!」

狙い済ましたかのように、レナの頭頂部に落ちた。

二人は不意の激痛に悶絶して、その場に蹲る。その際、ナキが勢い余って、傍の机で足の脛まで打っているのは、隠れ天然の面目躍如と言った所か。

「~~~~っ！　だ、誰ですか！　こんな無礼が許されると思って！？」

「そ、そうよ！　なんか目の前で星が光ったわよ！」

さっきまで喧嘩寸前だったわりには、二人は息ぴったりで自分達の頭を打った物体——硬い櫓の杖の飛んできた方向へと一斉に怒鳴る。

「やかましいいっ！！」

そんな少女二人の勢いをばっさりと一刀両断する大音声が轟いた。床に転がった杖を拾い上げたのは、頭部の禿げ上がった齢八十を超える老人である。だが、その腰は今もぴんと真っ直ぐで、表情にも年を感じさせない生気が溢れている。例えるならば、年老いてなお氣勢衰えぬ獅子の様相か。

「ここは図書塔だ！　知識と研鑽を求める輩が集う聖地！　ならばこそ、この場に置いては、静寂は絶対の規律！　それを破った故に、儂が罰を与えたまでよっ！」

……って言うか、あなたが一番、静寂破ってます——とは、もちろん誰も言えない。

そんな突っ込みを入れられるような剣幕ではなかった。

「そ、そうだとし……」

「黙れえっ！」

それでも反論しようとしたナキの言葉を、即座に遮断する老人。聞く耳を持たないというのは、まさにこの事だろう。

「いいか！　そもそも貴様らは……！！」

「ゲン爺、落ち着けてば。血管が切れるぞ」

説教がまさに始まらんとした所で、すかさずフウガが口を挟む。ここで止めておかなければ、このゲン爺と呼んだ老人は、軽く数時間話が始まらないからだ。

「何だ。誰かと思えば……ふん、ラシンとこの倅か」

話の出鼻を挫かれたゲン爺が、あからさまに不満そうに鼻を鳴らす。

図書塔の管理を任されているこの老人は、例によって元々は神聖騎士であり、引退後この学園にきたらしかった。当然、フウガの父、ラシンの騎士候補生時代も知っているようなのだが、当時の話を彼から聞いた事は一度もなかった。

ゲン爺は、興味深げにフウガを上から下へと凝視する。

「貴様、オロチに憑かれたらしいな」

そして、唐突にそんな事を言った。

「え？ ……あ、ああ、そういえば憑かれてからゲン爺と話するのは今日が初めてか。でも、今、オロチは意識をどこかに飛ばしてるから話せないぞ」

オロチが王国で悪戯して回って封印されたのは、約五十年前。

当時のゲン爺は、ばりばりの騎士現役である。オロチと既知であってもおかしくはない。

「かつ！ 別に話とうないわい。あんな疫病神と」

心から不愉快そうにゲン爺は吐き捨てる。

（まあ、そうだろうなあ……）

と、フウガは納得してしまう。たまに忘れかけるが、自分だって女になってしまう呪いなんて代物を掛けられているのだ。この反応に同意するなという方が無理だ。

その後、不意にゲン爺は声を落とした。

「……それよりも憑いた相手が妖魔なわりには落ち着いとなるな。貴様にとって仇みしたいなモンだろう」

「……………」

フウガは、一瞬、押し黙る。

老人もまた、フウガの過去の事情に通じている一人だ。だとしても、こんなに直球でこんな事を訊いてくるのは、この老人ならではだろう。良くも悪くも実直な人間なのだ。

「……………いろいろあつたんだよ。そう、いろいろ、な」

「ふん。そうか。まあ良い」

深くは追求せず、ゲン爺は、視線を未だに痛みで頭を抑える少女二人へと向けた。

「それよりも少しは反省したか、餓鬼共。したなら、用のない奴は帰れ。ある奴は、とっとと済ませて帰れ」

言い切ると、相手の反応も待たずに、ゲン爺は拾った杖を突きながら、奥の方へと引っ込んでいく。あまりの容赦ない態度に、さすがのレナとナキも言葉もない。

向こうに居た司書の女性が、ごめんなさいね、とこっそりと小さく頭を下げているのが、フウガには見えた。おそらく、こういう騒ぎは、日常茶飯事なのだろう。

「なんちゅう無茶苦茶な物言い。怖いわあ」

「ゲン爺節全開だねえ」

「いや、お二人は、いくら何でも他人事過ぎると思うんですけど……」

あの騒ぎの中、席から立ちもしないゴウタとライに、ミヨが呆れたような困ったような微妙な表情を浮かべていた。

「……興が削がれました。今日は失礼しますわ」

まだ頭部と脛の痛みは残っているだろうに、ナキは無理矢理に優雅な仕草で立ち上がると、服の埃を払う。

「行くわよ、スビコ、スビメ」

「「はい」」

ちよつとふらつくナキをさりげなく支えながら、双子が続く。

そのまま立ち去るかと思われたが、

「――最後の一つだけ」

と、突然、ナキは足を止める。

顔だけで振り返って、フウガを見据えた。

「……先日の件、改めて礼を言っておきます。助けてくださって――ありがとうございます」

「「ありがとうございます」」

早口で言い残すと、今度こそ少女達は退散していった。

去り際の顔が、紅潮していたように見えたのは、たぶん気のせいではないだろう。

後には、最初の五人と戻った図書館の静寂だけが残される。

「……何よ」

レナが呆れた顔で、唇を尖らす。

「初めから、そのために顔を出したの？　だったら、最初からそう言えば良いじゃない」

「だからさ」

フウガは、肩をすくめて、苦笑いを浮かべる。

「素直じゃないんだよ、あの人は。根は悪い人じゃないよ」

貴族という自負がある故にプライドは高いし、傲岸不遜で、ウズメへの敬愛は過剰ではある。でも、やはりフウガは、彼女達は嫌いではなかった。

「……全く。あんな態度を取らなきゃ、私だって……」

「でも、ちよっとレナちゃんに似てるよね」

ミヨはくすりと笑って、そんな事を言った。

——それが失敗だった。

「誰が」

一瞬で背後に回ったレナに。

「……………え？」

ミヨのおさげ髪の手が両の拳で挟まれて。

「誰に似てるって言うの？　ミヨオ？」

問答無用で、ぐりぐりと力が込められる。

「いたたたたっ！？　いい、痛いよ、レナちゃん！　頭蓋骨が陥没するよおっ！！？」

「そうなる前に、さっきの言葉を撤回なさい！」

「す、するから！　するから、ごめんなさいいいいい！！！！！」

ミヨが絶叫して、必死に謝罪を訴える。

『……………』

再び始まった大騒ぎの中、残った男性陣は、こっそりとその場を離れようとしていた。

「いいんか、フウちゃん？ 放っておいて？」

「この後の展開ってわかりやす過ぎるけど」

「……悪いけど、いくら俺でも、毎回、自分から面倒事に首を突っ込んでいられないんだよ」

「まあ、正論やなあ」

「じゃあ、ここは例によって他人事という事で。ごめんね、レナ、ミヨ」

結論して、忍び足で三人は部屋を退出する。

そのすぐ後、図書塔に、再びゲン爺の怒号が響き渡ったのは言うまでもない。

学園は、なんだかんだあっても今日も平和であった。

……ちなみに。

結局、その日は中断してしまった反省文の作業が全員終わったのは、さらにその翌日の事であり、当然その分、フウガのウズメに勝つための訓練の時間は減ってしまったのであった。

幕間 騒がしき日々は、かけがえなき日常 その三（後書き）

更新が遅くなってしまう、申し訳ありません。
感想などありましたら、ぜひどうぞ。

幕間 騒がしき日々は、かけがえなき日常 その四

ヤマトの中で最強最大を誇る国——アマテラス神聖王国を象徴する一つでもあり、多くの人々が憧れ、目指す神聖騎士という存在。その候補生である少年少女を養成するのがヒノカワカミ学園である。あくまで学園という形式を取りながら、騎士としての才を伸ばしていく事を目的とするこの場所に置いて、当然、英気を養うための休日というものは存在する。

週に一回のその日には、普段は厳しい訓練や眠たい授業に臨む騎士候補生達も、思い思いに羽を伸ばすのである。もちろん本来なら——例えば、落ちこぼれを演じているが故に、訓練や授業をサボりがちであったとしても——フウガも例外ではない。

しかし、今の彼は大きな問題をいくつか抱えている。

その最大にして、解決が急務なのものが、〈魔帝〉の称号をもって呼ばれる妖界最強の妖魔が一人——オロチによって掛けられた三ヵ月後に女になってしまいう呪いを解く事だった。

肝心の呪いを解くための条件は、現在の全ての騎士候補生の中でも最強であり、最高の階位であるS参を与えられたツクヨミ・ウズメに、実力で勝利する事。

この困難にも程がある事柄を為すため、フウガは休日を犠牲にしても、ウズメに勝つための特訓に少しでも励まないといけないのであった。

——そう。

そのはずだったのだが……。

「あの……何で俺達、こんな場所に呼ばれてるんですか？ しかも、よりによって休日……」

明確に覚える嫌な予感をあえて無視しつつ、眼前の執務机に腰を

下ろす人物にフウガは問いを投げ掛けた。

学園長室である。

さらに言うならば、朝である。

当然、フウガの問い掛けた相手は、学園長であり、レナの祖母でもあるタマヨリ・シズネであった。その脇には、教頭のタワラ・ミチザネが眼鏡を指で押し上げながら佇んでいた。

ちなみに、フウガの後ろには、ライ、ゴウタ、レナ、ミヨという、いつもの顔ぶれが揃っていたりする。一様にフウガと同じく、今の状況を訝しがっている雰囲気があった。

さらにその後ろに居る、フウガ達を呼びにきた張本人である教官のソウゴとフヨウは、一人は申し訳なさそうに、もう一人は相変わらず何を考えているのかわからないとろんとした眠そうな目つきで、フウガ達を見ている。

「……何故、ですか。当然の疑問ですね」

神妙な声で呟き、シズネは椅子より立ち上がる。

そのまま背中を向け、硝子張りの壁側へと目を向けた。

「貴方達を休日にも関わらず呼び出したのは、他でもありません」

『はあ……』

フウガ達全員が、気のない返事をする。

もうこの時点で、どうせ下らない理由だろう、と皆が半ば予想していたのだ。

しかし、現実には、さらにその斜め上をいく事になる。

「皆さんに、やってもらわなければいけない事があります」

「やってもらう？ 何をですか？」

皆の疑問をライが代表して訊いた。

シズネが勢い良く振り返る。

「それは！」

『それは？』

振り落とされた掌が丈夫な造りの執務机を叩く。

「将棋ですっ」

数瞬の沈黙。

その後、

『……………は？』

これまた一斉に全員が耳を疑い、声を漏らした。

……将棋？

将棋って、どの将棋？ あの将棋？

「今から貴方達は将棋を指し、このタワラ教頭を負かすのです！
って言うか、負かしなさい！ これは命令です！」

『は……はいいいいいい？？？』

呆れるよりも。

怒るよりも。

疑問の声を上げるよりも先に。

フウガ達は、三度一斉に――脱力したのであった。

◇ ◇ ◇

話を整理すると、こういう事である。

もともとシズネとミチザネの間には、忙しい仕事の合間に息抜きを兼ねて、将棋で対戦するという習慣があったらしい。

シズネの方は普通に指せる程度だったが、ミチザネの方は、将棋には相当に腕に覚えがあったそうで、二人が対戦を始めた当初は、ミチザネばかりが勝利を重ねていった。

この時点では、シズネも特には何も思わなかった。

それなりに悔しくはあったが、そもそも実力はミチザネの方が上である。ならば、こちらの方が負けが込むのは必至。それでも、対戦を続けていけば、シズネの腕も上がるし、ミチザネだって気を使っ
て手を抜いてくれたりもするはずだ。だから、自分の方も少しずつ勝てるようになっていくだろうと……そう楽観的に思っていたのだ。

それが甘かった。

まず、そもそもミチザネの方には、将棋に関して容赦というものが一切合切なかったのだ。当然、手を抜くなんて事は微塵もなかった。

さらに、二人の実力差は、シズネが想像した以上のものであり、少々シズネの腕が上がった所で、手も足も出なかったのである。

そうこうしているうちに、シズネは負けに負け——三百五十四戦して三百五十四敗という屈辱的な数字を積み重ねていった。

これには、シズネもさすがに頭にきたものである。

だが、まともに正面から挑んでも勝ち目はない。とはいえ、反則で勝利した所で、そんなものに意味はなからう。

では、どうすれば良い？ 子供じめているとは自覚してはいるが、このまま負けっぱなしは、どうしても我慢出来ない。

……そうだ。

だったら、自分以外の誰かに代わりに挑ませて、この年寄りを労わる事を知らない厚顔無恥な若き教頭に辛酸を舐めさせてやろう、と、そう思ったのだ。——いや、思ってしまったと言うべきか。

で、その結果が……

「何の関係もない俺らが呼び出されたわけですかいな。しょうもない……」

ゴウタにして、この反応である。他の皆の意見など言わずもがなだ。

「しょうもないとは何事ですか！ これは私の矜持の問題です！

私は、タワラ教頭に勝たねばならない！ 例え、それが自分以外の誰かの手によるものだったとしても……！」

ばんばんと何度も机を叩いて、シズネは訴える。これではもはや、ただの駄々っ子だ。

「……学園長、子供達の前でみっともないですよ。負け犬の遠吠えは」

しかも、勝者の余裕を漂わせるミチザネが、空気の読めてない余

計な発言をしたりするので、火に油である。

「むぐぐぐぐ！」

「が、学園長、落ち着いてくださいっ」

「おばあちゃん、私と同じで負けず嫌いだからなあ……」

ミヨが慌ててシズネを宥め、レナは祖母の恥ずかしい姿に困り果てる。

そんな混沌とした状況の中、ライだけはいつもの冷静さで問う。

「で、どうする、フウガ？ 学園長の代わりに頑張ってみる？」

フウガは、すまなそうに頭を掻く。

「いや、どうにも気が進まないって言うか……それ以前に俺、こんな事やっている時間ないんだよな。——本当に悪いとは思うんだけど、この場は皆に任せて良いか？」

それをシズネは聞き逃さない。

「そうはいきません！」

すかさず叫んで、逃げようとしたフウガを制止する。

「一人だけ逃げるなんて許しませんよ！ ちゃんと貴方も正々堂々と戦いなさい！」

「……貴女がそれを言っちゃうんですか……学園長……」

さすがに呆れた様子で、ソウゴがぼやく。隣の眠そうな顔のフヨウまでもが、その言葉に同意する目をしていた。

「黙らっしゃい！ 教頭に勝つためには、一人でも多くの戦力が必要です！ 逃げる事は許しませんよ！」

「いや、でも、学園長……俺、オロチの呪いの件が……」

何とかして説得しようとするフウガは言い募る。

正直、こんな事で時間を割くのは、本気で遠慮したい。

「——良いんですか？」

不意に声を落として、シズネは双眸に不穏な光を灯す。

「そんな冷たい事を言うなら、皆にバラしちやいますよ、あれを」

「……あ、あれ？ あれって何ですか？」

途端に背筋に冷たいものを感じて、思わずフウガは訊き返す。

なんだか半端じゃないくらいに嫌な予感がした。そして、不幸にもこういう予感ほど当たってしまうのが世の中の常である。

「つまり、あれですよ。スサノ君の初恋のひ——」

「わあああああああっ!!!」

刹那、フウガは力の限り絶叫して、シズネの言葉を遮る。

「な、ななな何をいきなり言おうとしてんですか、あんたはっ！
そもそも何でそんな事を知ってるんです!!」

シズネは、ふっと悪い笑みを浮かべる。

「学園中に伸びる私の学園長情報網を舐めちゃいけませんよ？ スサノ君。その気になれば、貴方達のアレやコレな事まで全部わかってしまうんですから」

「なに、そのうさんくさい情報網！？ つーか、どうせ情報元は、うちのクソ親父でしょーが！ あいつ以外そんな事を知ってるわけがない！」

「悪いですけど、情報源はバラせませんね」

もはや完全に悪人の顔で、くっくっとしてシズネは喉を震わせる。
その姿に、おおっとゴウタが少し後退った。

「……なんか黒いつ。さすがレナのばあちゃ……ごふうっ!？」
そこへ飛び込んでくる一撃。

見事な肘の一撃は、ゴウタの脇腹を強打する。

犯人は、もちろんレナだ。

「それは一体、どーいう意味かしら、ゴウタ？ じっくりと話を聞きたいんだけど？ そう、主に拳で」

「……か、堪忍して。話し終わった時点で、それ死にます……」
崩れ落ちたゴウタが息も絶え絶えで、ギブアップを宣言する。
「わかれば良いのよ、わかれば」

冷たくゴウタを見下ろした後、レナは改めてフウガを見据える。
それにライとミヨと、さらにはソウゴとフヨウまでもが倣って、
『……で、初恋の人って誰？』

と、訊いたのである。何気に、その問いにはオロチの声までちゃ

つかりと混ざっていた。

「言うかあっ！」

当然、フウガは全力で答える事を拒否したのであった。

＊ ＊ ＊

「はあああ……」

レナは面倒そうな表情を隠さず、盛大に溜息を吐いた。

眼前には、学園長室の隣にある応接室にばっちりと準備された将棋対決の舞台がある。教頭は一人、対面の椅子に腰を下ろし、完全なる臨戦態勢であった。

「なんてゆーか……結局、将棋を指すわけね」

「まあ、逃げたくても逃がしてくれそうにないもの」

答えるミヨは、すでに諦念を含んだ苦笑を浮かべる。そして、隣のフウガへと意味ありげな視線を向けた。

「それにフウガ君は初恋の人が――」

「……ミヨ。それ以上は言わないでくれ。頼むから」

頭痛でもしたように――否、実際に頭痛を覚えているフウガは頭を抑えつつ、ミヨの発言を制止する。

「勝てるかどうかは別にして将棋対決には付き合いますから、絶対に話さないで下さいよ、学園長」

じと目で訴えると、シズネは満面の笑顔で頷いた。

「ええ、もちろん。私は約束は守る女ですよ」

「だと良いんですけどね……」

あんな脅しを掛けておいて、よく言ったものである。まあ、貴重な時間は割かれるが、将棋するだけなら、さして問題はなкаろう。

そう判断して、フウガは皆の方へと振り返る。

「じゃあ、最初は誰がいくんだ？」

「おっしや！　じゃあ俺からいくわ」

拳をがっと思げて、ゴウタが前に出る。

「こう見えて、将棋には結構自信あるんやで」

レナが感心した声を上げる。

「へえ、意外ね。頭なんて使えなさそうなのに」

「……さりげなく酷くない？」

「はいはい。戦う前からテンションを下げてどうする」

泣きそうな顔のゴウタを宥めて、フウガは椅子に座らせる。

初戦の相手を前にして、余裕を全く崩さずミチザネを眼鏡を指で押し上げた。

「誰が相手でも関係ないな。さあ、掛かってきなさい」

「言いましたな。そう簡単にはいかへんでっ」

自らを奮い立たせて、ゴウタは叫んだ。

――五分後。

「……負けました」

『早いな、おいっ!!』

あまりに早い敗北に、ミチザネ以外の全員が一斉に突っ込んだ。

ゴウタが涙目で叫ぶ。

「だって、強いんやもん! 本当に容赦ないんやもん!」

「――全くとんだ役立たずね」

必死な弁解をレナが一刀両断する。

「うわーん! 皆が苛めるーっ!」

だだーっとゴウタは部屋の端っこまで駆けて座り込むと、指で床を突いていじけだす。

「さあ、あんなアホは放っておいて、今度はミヨよ!」

レナが、そう言ってミヨの背中を押した。

「え、ええ、私いっ!？」

――五分後。

「……負けました」

『やっぱりかよっ!!』

これまた一斉に突っ込んだ。

「うわーん！ 皆が苛めるーっ!!」

ただーっとミヨは部屋の端っこまで……以下省略。

「二人共、役に立たないんだから！ 次は私がいくわ！」
腕まくりをして、レナが挑み掛かった。

——十五分後。

「くっ、負けました」

フウガとライの冷めた視線が、敗北を喫したレナへと集まる。

「それなりには頑張ってたけど………なんか凄い普通に負けたな」

「うん、普通に負けた」

「な、何よ！ 私、頑張ったじゃない！ 粘ったじゃない！」

「でも、負けたよな」

「うん、負けた」

「むぐううう……」

レナは悔しさで顔を真っ赤にして、地団駄を踏む。

「じゃあ、次は僕が行こうかな」

ライは、普段通りの冷静な物腰で言った。

——三十分後。

「——ああ、負けちゃったね。残念」

ライは、その結果を特に気にした風もなく、いつもの調子で言った。

「ふむ。思ったより手こずったかな」

今までとは違い、感心した様子でミチザネが呟く。

確かに今までの三人に比べれば、ライは善戦していたが、しかし

……

「なあ、気のせいかな？」

戻ってきたライに、フウガがどうにも釈然としない心持ちで訊く。
「なんとなくお前が、ワザと負けたような気がしたんだが」

「うん。本気でやれば、五分五分ぐらいで勝てたんじゃないかな」
「って、どうして本気でやらないんだよっ」

「いや、今後の学園生活の事を考えたら、タワラ教頭の機嫌を損ねるのって良くないじゃない？ 僕って世渡り上手だから」

「……ああ、そうですか」

吹き抜ける様な爽やかな笑顔で計算高い事をのたまいやがるので、
なんだかもう怒る気にもなれない。

なんにせよ、一時間も掛からず、五人中四人が敗北という散々な
結果である。

「もう！ 皆さん、何をやってるんですか！ もうちょっと頑張っ
て下さい！」

もはや他力本願を完璧なまでに体现したシズネが、腕を組んで不
満を表す。その鋭い視線が、フウガへと向いた。

「最後はスサノ君ですか」

「はあ。そういう事になりますね」

「……勝って下さい。何としても。絶対に。必ず。何が何でも。え
えもう死ぬ気で」

「……どんだけプレッシャー掛ける気ですか」

げんなりと項垂れる。

正直言って、フウガにはミチザネに勝てる自信などなかった。

将棋なんて、やり方を知っているだけ、程度の腕しかない。明
らかに指し慣れたミチザネ相手になんて、まず勝ち目はないだろう。
「ツクヨミ先輩なら、こんなのも強そうなんだけども……」

今、この場にはいない少女への期待を口にして、

「呼んだか、フウガ？」

まさかの返事が横から届いた。

フウガはぎよつとなつて、声の主へと振り返る。

「ええ！？ 何で先輩がここに！」

「いや、学園長に少し用があつて、学園長室を訊ねたんだが姿が見えなくてな。で、隣の応接室が騒がしいので見にきたんだが……これは一体、何の騒ぎだ？」

「え……ええと、それは……」

フウガは言い淀む。

こんな馬鹿馬鹿しい状況を、わざわざ説明するべきなのか。

と、そのときフウガの脳裏に光明が射した。

「そ、そうだ！ 先輩って、将棋は強いですか？」

「将棋？ うーん……それなりだと思うが」

その答えを聞いた瞬間、フウガは切り出していた。

「――先輩。今は何も訊かずに、とにかく教頭と指してくれませんか」

「私がか？ まあ、別に構わないが」

「じゃあ、お願いします！」

自分が挑んだ所で結果は見えているのだ。だったら、ここはこの少女の天下無敵っぷりに掛けるしかない――

そんな思いで、フウガはウズメへと託したのだった。

――そして、三分後。

「王手」

「ぐううう……ま、待ったは……」

「なし、と最初に決めたと思いますが」

「ぐっ……ば、馬鹿な。この私が……負けるなんて……」

ミチザネは、これまで見た事ない程に取り乱していた。どう考えてもやり過ぎなくらい、眼鏡をすちやすちやと何度も指で押し上げる。

「では、終局ですね」

対して、見事に勝利を飾ったウズメは平然している。

勝負内容は、圧倒的だった。半ば苛めじゃないかというくらいの強さで、ウズメがミチザネを瞬殺したのだ。

「……何でしょうか。ツクヨミさんが勝ってくれて嬉しいはずなのに、なんかタワラ教頭に同情したい気分……」

シズネの笑顔は引きつっていた。

それも当然だ。あれだけ一方的では、さっきまで余裕綽々だったミチザネには立つ瀬がなさ過ぎるというものだった。

「ふ、ふふふ……負けた。私が負けた……」

「タ、タワラ教頭！ 元気を出して下さい！ 一回負けただけじゃないですか！ ですよね、ミカヅチ教官!？」

「……明日には明日の風が吹く」

敗北のショックで放心状態のミチザネを、必死にソウゴとフヨウが励ます（フヨウの方は怪しいものだが）。だが、あのミチザネの様子では、しばらくは再起不能かと思われた。

「あの……先輩。将棋って、どこでどうやって覚えたんですか？」

フウガは、率直な疑問をウズメにぶつけた。

「ん？ ああ、将棋は、父に習ったんだ。幼い頃は、毎日のように相手をしてもらったものだが、当然、最初は負け続けたよ。それでも、半年ぐらいして初めて父に勝てたんだ。しかし、それ以後、何故か父は私と将棋を指してくれなくなってな。今回は、あれ以来の一局だよ」

「……さすが実の父親。危険を察知したのね」

話を聞いていたレナが悟った様子で言った。

「……だろうな」

フウガも頷く。

おそらくウズメの父親は、最初の敗北にして、このまま指し続けてたら、いずれ娘に勝てなくなり、父の威厳がぼろぼろになるという、あまりに切ない未来の訪れを察したのだろう。さすがは血の繋がった父親——そして、常識外れの天才少女である。幼い頃から、

その片鱗を見せていたらしい。

「……それで、結局、これは何の騒ぎだったんだ？」

未だ事態を飲み込めないウズメは、困惑気味に訊く。

「後で話しますよ。聞いても呆れるだけだとは思いますが……」

言って、フウガは改めて混沌とした室内を見回す。

すぐ脇では放心状態のミチザネをソウゴとフヨウが励まし、それをシズネが複雑な表情で眺めている。さらに端の方では、ゴウタとミヨがどんよりした空気を纏って落ち込んでいた。

「ともかく、俺の秘密は守られて、学園長の目的も果たされたわけだけど……『めでたし、めでたし』とはいきそうもないか……」

フウガは、漏れる嘆息を抑える事など出来なかったのだった。

で。

ミチザネはもちろん、ゴウタとミヨが再起不能から復活したのは、この日から一週間も後の事だった。そして、その間にフウガは、特に落ち込んでいないライにレナ、さらにはウズメから、事ある事に「初恋の人って誰？」と訊かれ続けて、辟易するはめになったのである。

ちなみに、この出来事をきっかけに、ミチザネは将棋を引退し、候補生の間では、彼の前での将棋の話題は禁句となったという。

幕間 願がしき日々は、かけがえなき日常 その四（後書き）

お読み頂きありがとうございました。

感想などありましたら、ぜひお気軽に……。

六章 月 その一

ずっと。

“殺人”は、隣人だった。

彼は、物心つく前から独りだった。

捨てられたのかもしれない。

行きずりのごろつきにでも殺されたのかもしれない。

もう覚えていない。

とにかく、弱い自分を保護し、独りで生きられるよう育ててくれる人間は傍にはいなかった。大きな街ならどこにでもあるような、堕ちた人間だけが集まる掃き溜めに、ただ独り取り残されていたのだ。

そんな境遇だったから、親を知らず、兄弟を知らず、他人との繋がりを知らず——つまり、愛を理解出来ない彼は、他者から何かを与えられるという事実もよくわからなかった。

そして、四歳で初めて人を殺した。

相手は、こちらを無力で無害な子供だと思っていたようで、驚くほど簡単だった。

拾ったナイフで、背後から刺しただけ。

倒れた相手は、しばらく苦痛に呻いていたが、地面に大きな血だまりを作った所で動かなくなった。

殺した理由は、空腹を満たすために一切れのパンが欲しかったから。他には何もない。罪の意識もない。

欲しかった。必要だった。生きるために。

だから、余計なモノを排除し、手に入れた。

それだけ。

ただ、それだけ。

自身の命以外の何も持たない彼が生きるためには、他の手段など

有り得ず知り得ず、故に罪など感じる余地があるはずもない。獲物を狩る獣が、命を奪い、肉を食らう事に疑問を持たないのと同じだ。そして、そんな生活を続けるうち……彼は、本当に獣となっていた。いや、生きていくためには、獣にならざるを得なかったと言わべきだろう。

まともな言葉も知らぬまま、幼い彼は、本能のまま人を殺す事だけに長けていく。人に溢れ繁栄する街の片隅の腐った場所で、血と汚物に塗れて、醜く……だが、ある意味で誰よりも純粹無垢に生き足掻き続けた。

——三年ほど過ぎて。

ある日、彼は一人の男によって返り討ちにあった。

いつものように、食べ物奪おうと人を襲って、逆に負かされた。人の脂と血に濡れた、刃こぼれだらけのナイフも奪われた。

地面に叩きつけられた衝撃で思考は乱れ、全身は苦痛でまともに動かない。

それでも彼は悔しがりもせず、冷静に思った。ただ、素直に己の敗北を受け入れた。

……ああ、今度は自分が食われる側になったのだと。

獣の思考で、静かにそう思ったのだ。

ただ、本物の獣と違い、人という生き物は他の仲間を食わない。極限近くまで飢えているのならともかく、自分を至極あっさりと倒したこの男は、そんな風には見えなかった。だったら、自分の持つ物で男が必要な物だけを奪われて、後は殺して屍を打ち捨てるだけだろう。

彼には、死への恐怖はない。

強い者が弱い者を殺し、奪う。

当たり前の事だ。そして、この男は自分より強かったのだから、自分を殺す正当な権利がある。

彼の中には、死を覚悟するなんて考えすら存在しなかった。それが、二桁にも満たない彼の人生の中で構築された常識。

でも、自分が持つ物なんて、向こうに転がった強引に刺す事ぐらいしか出来ないぼろぼろのナイフ一本。他には何も持ってない。全く運のない男だと、彼は思った。

でも……男は殺す事も、奪う事もしなかったのだ。

「恐怖も後悔も怒りも悲しみもなく、ただ死を享受するのか」

「……………」

彼には、男の言葉が理解出来ない。そもそも彼自身、まともに喋る事も出来ない。これまで彼の生き方には、言葉というものは、限りなく不必要なものだったからだ。

腹が減れば、人を襲い食べ物を奪う。そして、安全な場所を探し寝て、また空腹で目覚めれば、人を襲う。そんな生活。まさに獣そのものの。

男はさらに言う。

「弱者は、ただ強者に食われる存在だという世界の真理の一つを、本能で理解しているのだな。それに至るような生活を、ここで送ってきたか。……なるほど、人の身であれほどの獣の殺意を纏えるわけだ。おそらくお前は、普通の人間の言う“人を殺す”という意味すら理解出来ていまい」

男が興味深そうに、こちらを見下ろす。

今まで見た事もないような知性と強靱な意志な光が、その双眸の奥にはあった。身体が、痛みとは違う何かで芯から震えた。

「だが、所詮は獣。ただの本能は、理性と知恵を手にする人間の前では、無様に敗れ去るのみ。それはこの世界の歩んだ歴史が証明し

ていよう。……しかし。在るがままに“殺人”を隣人とするその在り方は惜しくはある」

男が、彼へ向けて手を伸ばす。
どこか試すように言った。

「もしもお前が求めるなら、私は与えよう。人の持つべき知恵を。私は変えよう。獲物を食らう牙から、研ぎ澄まされた人殺しの業へと。」

お前の腕が、足が、呼吸が、鼓動が、視線が、命が、魂が、存在が——人の死そのものとなろう。

お前はなれる。お前だけがなれる。

そう、運命に定められるまま、“殺人”を生営みの一つとしてきたお前だけが——なれるのだ」

男が何を言っているかなんて、わからない。

どうして、弱い自分が殺されないのかも、わからない。

でも、彼は男の手を取り、共に歩む事を決めた。

——今思えば。

彼が知る限り、初めて彼を獣ではなく“人間”として扱ったのは、その男だったのだろう。

それが理由と言えば理由。

どんなに獣のように生きて、自身が人だと理解出来ていなくても。

でも、やっぱり彼は人だったから。

だから、無意識に男の強さへ憧憬を覚え、未だ知らぬ人の温もりを求めた。それは、七歳ばかりの少年の心の動きとしては、何の間違ひはなかったはずだ。

そう。

結果、男が彼に温もりなど与えず、ただ彼を“殺人”の存在へと

変えたのだとしても——その事実だけは確かだった。

＊ ＊ ＊

「あゝあ……駄目ね」

聞こえた溜息交じりの声に、カラスは閉じていた目をゆっくりと開いた。

途端、視界は過去から現在へと切り替わる。

隣で座り込む声の主は、髪から瞳、纏う服まで全身が純白の少女だった。

シラユリ——

この見た目幼く、麗しい異質な少女こそが、今の彼の主だ。

彼らが居るのは、学園で最も高さを誇る建物、図書館の屋上である。吹き曝しのその場所は、まず人がこない上に、学園を見渡すには一番の場所だ。

逆に言えば、かなり人の目につく所でもあるのだが、彼らの存在に気づく者はいない。シラユリの妖術によって、気配と姿を完璧に断っているのだ。これを見破るのは、余程の実力者でも、この場で直接訪れ、強く意識しない限りは不可能であろう。

シラユリに倣って、学園の敷地を見下ろしながら、カラスは口を開いた。

「姐さん、また殺られたのかい？」

「ええ。またよ。シンラン・ソウゴに、ミカヅチ・フヨウ——さすがは、学園の教官達の中でも、並ぶ者の居ない手錬れと言うわけかしら。それでもう三回目。一応全部、上級の妖魔だったのに、フウガに近づく前に見つかって、殺されちゃったわ」

自分の膝の上で頬杖をついて、シラユリは唇を尖らせる。

「シンラン・ソウゴは、神聖騎士時代から有名だったから良いとして、ミカヅチ・フヨウの方は盲点だったわね。他の教官連中程度なら、出し抜くのは簡単なんだけど」

「ま、基本、引退した神聖騎士になる事が多いらしいからな、学園の教官は。現役のキレは衰えてるって訳だ」

「そういう事。……仕方ない。今度は、あの二人を封じる事も想定して動くかなさそうね。だけど、それじゃあ傀儡の妖魔程度じゃ荷が重いか……」

カラスは、主である少女の言葉に、驚きを隠さず片眉を上げる。
「もしかして姐さんも出るのかい？」

「ええ、そのつもり。ただ、出るのは私だけじゃないわ」

シラユリが、隣に立つカラスを見上げる。

「お待ちせ。貴方の出番よ」

「……へえ、もうかい」

カラスの口の端が、心底嬉しそうな笑みで吊り上がった。

逆にシラユリが不本意そうに、溜息を吐いた。

「予定よりも少し早いけど、仕方ないわ。あと、“彼”の方にも動いてもらう」

「おお。オッサンもか」

意外そうにカラスは目を見開いた。

脳裏に浮かぶのは、鍛え上げられた鋼を思わせる在り方を持つ、一人の巨軀の男。一応は同士である彼とは、向こうの口数が極端に少ないため、ほとんど意志の疎通をした事はない。

「そりゃあの人にとっちゃ朗報だろうな。何が楽しいのか、ずっとじっとしてるぐらいしか、オッサンしてなさそうだったし」

「さすがに私でも、あの二人を一人で抑えるのは厳しいもの。彼が適役でしょう。実力だけはピカ一よ」

「だろうな。しかし、姐さんとオッサンが教官二人担当って事は、坊主にちよっかい掛ける役は俺って事か。やれやれ、ついに死んで来いという命令かい？」

「あら、酷い物言いね。前にも言ったでしょう？」

シラユリが意味ありげな笑みを紅い唇で象る。

彼女の言いたい事を、考えるまでもなくカラスは察していた。

「――『別に殺しちゃいけない』とは言っていない……か」

「そうよ。むしろ、殺す気でやってくれないと意味ないもの」

「こっちとしても助かるよ。殺さないように――なんて柄じゃないんでね。……で、決行は？」

「少なくとも一週間は待つわ。フウガ達、しばらく学園を離れるみたいだから。下手に王都で手を出して、神聖騎士団に目をつけられる事だけは避けないといけない」

カラスは、「ふむ」と思案して、顎を撫でる。

思い出すのは、先ほど見ていた過去の残影。

「じゃあ、俺もちよっと学園を離れて良いかい？」

「構わないけど……何か用でもあるの？」

「ああ。せっかくの二度目の生だし、坊主達の動向の監視ついでに、育ての親に顔ぐらい見せとこうかと思ってる」

「育ての親……ね」

「そうそう。親孝行ってやつさ」

と、冗談交じりに笑う。

しかし、その瞳には、言葉とは裏腹に、人の温かさとは程遠い冷たさしか存在していなかったのだった。



それは、早朝に唐突に訪れた。

「……ぐうっ……っ……」

掛かっていた毛布を蹴り飛ばす。

胸を、ベッドのシーツを強く握り締め、悶絶する。

「……がっ……うっ……」

飛び出しそうになる絶叫を、あらん限りの力で抑え込む。

叫べば、人に気づかれる。そうなれば、この発作の事も知られてしまう。それだけは避けなくては。

「……あっ！ うあっ……ぐっ……！！」

痛い。

痛い。

痛い。

イタイ。

イタイ。

肉体の痛みではない。

もっと根本的な、深い、魂の……いや、存在の痛み。

壊れる。碎ける。ひび割れる。剥離する。崩れていく。

スサノ・フウガが、ガラクタになっていく。

でも……

——私は君が好きだ。それだけは何があっても変わらない真実^{ほんとう}だから——信じて欲しい。

——あんたがね、私達を守りたいって思ってくれるように、私達だっであんたを守りたいの。

……そんな二人の少女の声が聞こえた気がした。

「っ！」

駄目だ。やめろ。

止まれ。戻れ。もう少しだけ。

俺というソンザイよ……壊れないでくれ……っ！

「————っはあ！」

刹那、痛みが急速に沈んでいった。

引きつっていた全身が、それに合わせて脱力していく。

しかし、あの痛みは消えたのではない。

奥に奥に奥に……魂の深奥へと潜んだだけ。

いつか、それはまた浮上してくるだろう。

そして、少年を壊していく。

「……………」

ベッドの上に転がったまま、掌で顔を抑える。

全身汗まみれで、毛布は部屋の端っこでくしゃくしゃ、シーツは所々が裂けていた。なんとも酷い有様。

「この……学園にきて以来……発作は起きてなかったんだけど……」

息も絶え絶えに漏らす。

それは、あの亀裂の痣に……欠落の騎士へと戻る事がなかったから。

偽りである今の自分は、でも、確かにスサノ・フウガという存在が終わるまでの時間を引き延ばしてくれたのだろう。

だが、所詮は時間稼ぎ。

必ず終わりは訪れる。

それは命ある者ならば全て平等に訪れるものだけど、きっと自分のものは他の皆のものとは異なり……そして、その日がくるのは、そう遠くはない。守るといふ誓いと存在のため、痣が浮かび上がる度に、終わりは加速度的に近づいていく。

でも、自分は逃げないだろう。恐れないだろう。

だって、スサノ・フウガは、そういう存在でしかないのだ。

『——残された時間は少ないか、フウガ』

「——っ！」

頭に響いた声に、フウガは弾かれるように上半身を起こす。

「……オロチ、お前……！」

『ああ、知っているさ。お前の抱く秘密を。必ず辿り着く結末を』
「知っている……？ 何故……っ」

疑問を抱き、数瞬ほどで答えはすぐに浮かんだ。

——なに、この少年の記憶を少しだけ探ったのだ。

「――あるときっ」

脳裏に浮かんだのは、この妖魔に憑かれてすぐに聞いた台詞。
フウガは苛立ちのまま、舌打ちする。

「何が少しだけだ。そんな事まで……！」

『致し方あるまい？ 記憶の表層を探るだけでも、否が応でもそれは知れた。お前にとって、常に意識せずにおれぬ事実のようだからな。』

お前は、終焉の訪れを恐れてはいない。

だが、仲間にそれを知られてしまう事を何よりも恐れている』

「……ああ、そうだ。俺は怖い。あの夜にも、この事だけは話さなかった。もうどうしようもないこの現実――でも、皆に話せば、きっと皆は俺を助けようとしてくれるだろう。それが俺は……辛いんだ」

これは業だ。

自らが招いた罪が課した、覆しようのない罰。

だから……皆に知られてはいけない。

自分は終わりを享受し、ただ誓いとその存在のために、皆を守り続けるのだ。九年前に定められた、その日が訪れるまで……。

『でも、仲間達は、お前に在り続けて欲しいと願っているだろう。……ああ、私としても、呪いの結果がわかるまでは、お前には生きていてもらわねばな』

「わかっている。わかっているさ……っ！」

拳をベッドに叩きつける。

強く歯噛みし、「でも……っ」と押し殺した声が喉から零れた。

「だったら、俺にどうしろって言うんだ……」

受け入れているのに。そうするしかないのに。

いつだって笑っていて欲しい大切な皆は、それを望んでいない。

ただ、その事実が、少年には苦しくて仕方がなかった。

◇◇◇

「……………平和だな」

休憩用の椅子に腰を下ろして、ヒナコは呟いた。

今日も何事もなく、放課後を迎え、一時の自由を与えられた候補生達によって、学園はにわかになじめいている。しかし、この場所は静かなものだ。

「ああ、本当に平和だ。喜ばしい。結構だ」
独りごちる。

今日は珍しく煙草を手にしていなかった。伸ばした手が机の上のカップを掴み、ぞんざいに茶をすする。

そうしながら、赤の双眸が医務室内を巡った。

神聖騎士を目指す候補生が訓練に励む場所だけあって、この学園は普段から怪我人が多い。それに合わせて、医務室の規模や人員も、それなりに大きいものになっている。だが、今現在、何十人分用のベッドのほとんどは空いていた。幾人か候補生の怪我人が横になっているものもあるが、大事を取っただけだ。特別、気に掛けるほどの患者でもない。

もちろん医者という肩書きを持つ彼女に取って、その状況は喜ぶべきものではあっても、決して文句など言うべきではないのだろう。

「だが……」

……暇だ。

凄く暇だ。

中身を飲み干したカップを置く。

仕方ない。隣の事務室から、同じく暇そうな同僚か看護婦でも適当に捕まえて愉快的話をさせる……もとい、談笑でもしようか。

「……よし、そうしよう」

と、百人中百人が、見た瞬間に後退りしそうな笑顔を浮かべた所で、医務室の戸が叩かれた。

一拍置いて、扉が開く。

その向こうに居たのは、少々意外な人物だった。

「何だ、タマヨリか。……どうした？ ソウゴとフウガの特訓を見にいったんじゃないかったのか？」

なんにせよ、ちょうど良い暇潰しの相手がきてくれた。そんな医務室の責任者としては、あまりよろしくない気持ちが声を少し弾ませる。

しかし。

「スクナ先生」

ヒナコの内心とは裏腹に、少女の声は重く沈んでいる。

表情も真剣そのものだ。

「話があるんですけど……大丈夫ですか？」

……どうやら、愉快的話をする気はなさそうだった。

退屈が解消されるかと思えば、これだ。

全く神様という奴は、なかなか気持ち穏やかな日々を与えてはくれないらしい。

「——良いぞ。ただその前に、場所だけ変えようか」

ヒナコは何も訊かず、そう言って立ち上がった。



放たれた斬撃を、咄嗟にソウゴは槍の柄で受ける。

眼前で、金属のぶつかり合う音と共に、細い火花が舞い散った。

「むっ」

「おおおー！」

舞台の外で、特訓を見守るゴウタ達が歓声を上げる。

すでに七回目を数えるフウガとソウゴの〈錬守結界〉内での実戦訓練。これまで一方的にやられるだけだったフウガが、ここにきて初めて、まともな反撃をして見せたのだ。

「……烈風、研ぎ澄ませ！」

この機会を逃さぬと、フウガは〈具言〉を唱え、両手に握る二振りの刃へと風を纏わせる。そのままソウゴの槍を強引に跳ね上げ、

がら空きになった脇腹へ剣を迸らせた。

「甘い」

しかし、そこは幾多の戦いを生き抜いたソウゴだ。僅かに後方へ退くだけで、紙一重で刃に空を切らせる。そして、頭上の槍を容赦なく少年の肩口へ振り下ろした。

「がっ——!?」

容赦ない衝撃に、フウガの動きが止まる。

それは、ソウゴを相手にするには致命的な隙。

すかさず放たれた槍の連撃がフウガを襲い、捌き切れずに、強烈な突きの一つを胸に受ける。〈錬守結界〉内であるため、穂先が身体を貫く事はないが、その威力は十分過ぎる程に少年を打ち据える。今度こそ踏ん張れずに、フウガは背中から倒れた。

「終わりだ」

槍の切っ先を、倒れた相手の喉元に突きつける。

「……結局、こうなるのか……」

はあ、と大きく息を吐くと、フウガの全身が脱力する。

「やっと反撃出来たのになぁ……」

「攻撃は、相手へ当たってこそ意味がある。……まだまだだ」
冷たい声を落として、ソウゴは簡易舞台を降りる。

背後で「厳しい……」と切なそうなフウガの声が聞こえた。

（……それにしても）

観戦していた皆が、少年の元へ集まるのを見ながら、ソウゴは思う。

（まさか、反撃を許すとは思わなかった）

それは、紛れもない彼の本音。

フウガが、この特訓を行う際にソウゴに望んだのは、彼に手加減抜きで本気で戦ってもらう事。それぐらいしなければ、大きな実力の開きがあるウズメに勝つに至る実力を、三ヶ月と言う短期間で身に着ける事は出来ないからだ。

……いや。

例え、どれほど厳しい修練を重ねようと、あの稀に見る才を持つウズメという少女に勝てる程の力を、そんな短い時間で得るのは、まず不可能に近い。少なくとも、フウガとウズメの力の差は、それほどに在るはずだ。

（だが、あるいは可能なのか……？）

あのスサノ・フウガという少年ならば、出来てしまうのかもしれない。

戦神とまで呼ばれた男、スサノ・ラシン。

彼は、確かにその父の非凡な才能を受け継いでいる。

決して油断などしていなかったのに、たった一度と言え、予想外の反撃を許してしまったソウゴは、己の考えを改めずにはいられない。

そして、それとは別に言い知れぬ不安も同時に抱いていた。

（……何だ？ この違和感は何？）

フウガの成長振りは素晴らしい。

実戦に近い訓練の中で、確かに見る見る実力を上げている。なのに。それなのに。

（何かが足りない……）

そう、何かが欠けている。

その何かは、きっと言葉などでは明確に表せるものではない。例えるならば、人が当たり前に人であるために必要な芯のようなモノ。だけど、刃を交える毎に、ソウゴは感じるのだ。

その芯が、スサノ・フウガには欠けている。

それが、彼の本来の才を発揮するのを阻害している。

だから、このままでは、やはりフウガは、ウズメには勝てないだろう。欠けているもの、足りないもの――それを取り戻さねば勝てない。

いや、それ以前に、彼という存在自体がもしかすると……

（馬鹿な）

ソウゴは、頭を振る。

なんて愚かな推測だ。確証も何もない。

今も、フウガは友人達と普通に笑いあっている。そこに何の問題もなく生きている。

そんな馬鹿げた考えなど、正しい訳がない。信じたくもない。

「……………どうかしました？」

不意に、横手から声が掛かった。

「え…………？ ああ、ミカヅチ教官」

同僚である若き教官、ミカヅチ・フヨウだった。

彼女は、その性質上、現役を引退した神聖騎士になる事が多い教官に、元神聖騎士でもなく、僅か二十代という若さでなった変り種だった。

とは言え、上官であるラシンが怪我による引退をしたのを機に、まだ十分に現役だというのに、自らも騎士から学園の教官へと鞍替えしたソウゴも、そういう意味では同じなのだろう。

フヨウは、いつも通りの眠そうな目で、でも、確かにこちらを氣遣うような表情をしていた。

彼女は、普段から何を考えているか掴み辛い。

だが、本当は女性らしい優しさを持った好感の持てる人物である事を、シラユリの件をきっかけに行動を共にする事が多いソウゴは知っていた。

「いえ、ちょっと考え事を。大丈夫です」

ソウゴは眼鏡を掛け、もう一人の氣弱な自分へと切り替えると、微笑んで見せる。

「……………そうですか」

フヨウもまた、安心したように淡く微笑んだ。

弟のライと同じ銀色の輝く髪に、海色の瞳。さらには、もともと美しい顔立ちをしている彼女だ。普段から、今みたいに笑えば、周囲の男も放っておかないだろうに、すぐにまたとろんと眠そうな顔になってしまうので、非常にもったいない。

そんな事を思っていると、ふと向こうで話すフウガ達の会話が聞

こえた。それは、明日から一週間、学園を離れる事に関しての話だ。
「……そういえば、ミカツチ教官も、明日からスサノ君達と一緒に王都の方へ行かれるんでしたね」

数日後の学園の創立記念日を挟んだ一週間は、毎年、長期の休日となつて居るのだ。この機会に、比較的近くの街から学園にきた候補生は、実家へと帰る者も多い。そして、ライとゴウタ、それに付き添いするフヨウが王都の郊外にある孤児院へ帰郷するのに、フウガ達も付き合う事になったのだ。

そもそもフウガは、去年も同じようにライ達に付き合つて、孤児院へ訪れている。今回は、それにレナとミヨが加わつた形だ。

「……はい。ですが、それが？」

フヨウが不思議そうに訊き返す。

「王都ならば、神聖騎士団の目も光っていますし、万が一の事もないとは思いますが……スサノ君達の事、よろしくお願いします」

言つて、ソウゴは頭を下げる。

フヨウは、珍しく戸惑つた様子で首を傾げた。

「………やっぱり何かあつたんですか？」

「……いえ。念のためです。そう……それだけです」

未だに消えない不安と違和感を拭い去ろうと。

ソウゴは、自身に言い聞かせるように、そう呟いていた。

六章 月 その一（後書き）

お読み頂きありがとうございます。
感想などあれば、ぜひお気軽に……。

六章 月 その二

凍てつく冬の夜。

老人は、物思いに耽りながら、独り外へ出掛けた。降り積もる雪を踏みしめ、空を仰ぐ。

視界に入るのは、夜闇の向こうにある分厚い灰色の雲だけ。月も星々もその姿を隠している。同時に、昼間に一度は止んだ雪が、再びちらつき始めていた。明朝には、銀世界が、より一層その白色を濃くする事は想像に難くない。

「……世界が凍てつけば、人の心も冷たくなるのか」

自然と言葉が漏れる。

老人は、〈鴉の止まり木〉と名付けた孤児院の院長を務めている。……とは言っても、開院して一年は、孤児院の体裁を整える事のみに時間を費やし、まだ一人の孤児も院内には居ない。——いや、居なかった。

ほんの昨日の事だ。

今日と同じ、雪の降りしきる夜に、孤児院の前に一人の男の子が置き去りにされていた。およそ一歳にも満たぬ、物心もついていないような幼子だ。

まともに言葉を交す事もままならぬその子から、唯一知り得た情報、ゴウタという名だけだった。

……どこからきたのか。

……親は、一体どうしたのか。

……どうして、彼を置いていったのか。

何一つわからなかった。

老人は、少年を孤児院で最初の孤児として預かる事を決めた。一応は、親が見つかるまでという形ではあったが、おそらく親が迎えに現れる事も、見つかる事もないだろう——と、そんな確信に近い予感があった。

まだ子供を愛しているのなら、いつか迎えにくるつもりなのなら……あんな冬の夜に、子供を一人、外に残していくような真似をするはずはないのだから。

老人は、憂いを含んだ瞳を伏せる。

「いや、関係ないか……。人はときに、どれほど凍てついた世界よりも冷たくなれる。私は、それを知っている……」

呟き、しばらく歩いた後、不意に足を止めた。

物思いに耽るまま、何も考えず外に出てきてしまったが、今日は出歩くにはあまりに寒い。何より、今は気持ちも沈痛としている。こんな気分するとき、冬の夜の寒さは、よりその身を刺そう。

「……それに、テナにばかり、あの子の世話は任せられんしな」

扱い慣れない子供に四苦八苦する少女の姿を思い浮かべ、老人は微笑む。自分も決して手馴れているわけではないが、あの少女に比べれば、幾分ましであろう。

そんな事を思いつつ、孤児院へと戻るため踵を返して――
静かに振り返った。

「……………」

そこに、先ほどまでは居なかった一人の少女が佇んでいた。
年は、八歳ほどだろうか。

美しい娘だった。

まるで銀糸のような長く滑らかな髪と、母性を抱く深い海のような青い瞳。無表情な白い面は、人間というより、作り物の人形染みでもある。だが、そこには確かに生氣が存在していた。

そして、そんな美しい風貌の少女には、無垢な白の支配する銀世界には似合わない、生臭い赤色もが一緒に彩られている。

赤色は、人の返り血だった。

さらに、少女の手には、彼女と同じ色を持つ、男の子とおぼしき幼子が抱かれている。おそらくは、少女の弟か何かだろう。

「親は？」

その様子から、大体の事情を推測し、老人は無駄を廃した質問を

する。

「……………死んだ」

答えは、端的だった。

感情のない声は、悲しんでいるのか、怒っているのかもわからない。

「――野盗にでも襲われたか。ここ最近、王都の近辺で暴れている輩が居ると聞いている。だが、それだけの返り血を浴びながら、君達が無傷で生きている事実からすると、君達の親は勇敢に戦ったようだな」

同情するわけでもなく、ただ老人は、少女達の親が見せたのであろう勇気を讃えた。

「……………っ」

少女が、無表情だった顔を僅かに強張らせて俯いた。

どうやら、老人の想像は、さほどの外れではなかったらしい。

だが、いかに親が自らの子をその身を挺して守ろうと、今の彼女達が行き場所を失くしてしまったという現実が変わるわけではない。そんな冷酷な現実を前にしても、少女が涙一つ見せないのは、彼女の強さ故か、それとも疾うに涙など涸れ果てたか。どちらにしても、哀れな事には違いなかった。

老人はしばし熟考した後、問い掛けた。

「私の元にくるか？」

「……………」

老人の言葉の真意を測りかねているのか、少女が不可解そうに顔を上げる。

「一応、私は孤児院をやっている。……とは言っても、昨日ようやく一人目の孤児を引き取った程度の新米だがね。

君としても、他に行くあてなどあるまい。ただ助けを求めて、王都までその子を抱いたまま、歩いてきたのだろうか？ 街外れとはいえ、よくここまで辿り着いたものだよ」

少女は、こんな雪の日にも関わらず、素足だった。しかも、よほ

ど長い道程を歩んできたのか、その足は傷だらけの上、冷え切って青白くになっており、半ば凍傷になりかけている。身体だって、先ほどからずっと寒さで小刻みに震え続けていた。それでも、抱いている子供だけは、決して冷やさぬようにと、巻いた毛布と自らの腕で、必死に暖めているのが健気でさえあった。

「……いいもの？」

少女は目の前の希望に縋って良いのか逡巡するように、問うてきた。

老人は、ゆっくりと首肯する。

「もちろんだ。むしろ、そのための孤児院だろう。ここで君を拒む事は、自らが選んだ道を否定する事にもなる」

言って、先ほどと同じように、老人を天を仰いだ。

相変わらず、月も星々も見えない灰色の曇天だけが広がっている。

「何よりも……もう私達は心を凍てつかせぬと、そう決めたからな」

「……よく、わからない」

「ああ、すまない。これは私の問題だ。君が気にする事でないさ」

小首を傾げる少女へ謝罪し、老人は身振りで促す。

「……さあ、外は酷く冷える。孤児院へ行って、まずは暖まろう。

昨日の子は、おそらく君の抱いている子と年代か。きっと良き友となる事だろう」

「……………」

少女は、まだ迷いを振り払えないのか、俯くだけで答えない。

彼女は、親を野盗に殺されたばかりなのだ。出会ったばかり相手の言葉を、すぐに信じろという方が確かに無理があるのだろう。

「これを」

少女の内心を察して、老人は懷より取り出した物を差し出した。

「え……？」

少女が目丸くする。

差し出したのは、一振りのナイフだった。特別な意匠は何もない、ごく普通の代物。だが、人一人を殺す道具としては十分過ぎる凶器。

「もし、私が信じるに値しない相手だと感じたなら、迷わずこれで私を刺すと良い」

「……どうして……そんな……」

「私がここでどれだけ優しい言葉を並べようと、敵ではないと態度で示そうと――君の中に確かな信用を根付かせる事など不可能だろう。だから、私は、私自身の言葉を裏切ったときの代償をここに提示する。もしものときには、君は躊躇いなくそれを奪えば良い。……君のような幼い子に、手を汚せというのはいささか酷とは思う。だが、親を失った君が、その手に抱く小さな家族を守ろうと思うなら、その程度の覚悟は必要だろう」

「……………」

「さあ、受け取りなさい」

老人が手にしたナイフを、少女の眼前まで下げる。

数瞬の間――

少女は、黙って頭を振った。

「どうした？」

「……いない」

「何故？」

「……信じるから……」

凍える寒さで紫色になり、上手く動かない唇で、でも、少女ははつきりと言い切った。

「……おじいさんの事を信じるから……いない、そんなの……」

「……………」

老人は、少女を静かに見下ろす。

こちらを真っ直ぐに見返す少女の双眸には、もはや迷いは見られなかった。

老人は、目を閉じる。その口元が、淡く微笑みを象った。

「そうか。なら、仕方ないな。……では、いこうか」

ナイフを再び仕舞った後、老人が歩き出すと、少女も頼りない足取りでついてくる。

孤児院へこないかと誘いはしても、老人は手を貸す事はしなかった。

(……失い、そして、新たに得る居場所。せめて、自らの足で辿り着かねばな)

それは、小さな事のように、きつととても大切な事。

無闇な優しさで手を差し出す事は、決して少女のためにはならない。

——少女は親を目の前で失い、それでも弟を守るために、自らの足で歩き続け、孤児院という新たな居場所まで辿り着く。

この記憶は、きつとこの先の人生の財産となる。困難に挫けぬ彼女の強さになる。

だから、老人は助けない。

ほんの僅かな距離。でも、痛みかじかむ足では、酷く長い道。

「——歩け。悲しみに飲まれぬように。冷たき世界に抗えるように」

老人は呟き、少女が見失わぬような速度で、ただ歩き続ける。

少女も不満一つ口にせず、ただ夢中で後を追う。

……そして。

孤児院の扉は、確かに少女達へと開かれたのだった。

この日。

新たに加わった孤児二人の名は、ミカヅチの姓を持つ、フヨウとライという名の子供達だった。



「では、すまんが、後は頼む」

幾分の申し訳なさを含めつつも、その声には確かな重みがあった。

声の主は、初老の男だ。

髪や瞳は、夜闇を塗り固めたような黒。

人の上に立つ者に相応しい、威厳溢れる風貌。

男の大柄な身体を包むのは、王国の象徴であるアマテラスの化身——白狼を象った紋章の刺繍された制服だった。その派手過ぎず、だが、揺るがぬ権威を感じさせる意匠は、アマテラス神聖騎士団を総括する者の身に着ける物だ。

ツクヨミ・ヒヤギ。

彼こそが、ウズメの父であり、その制服が示すように、神聖將軍を務める男であった。

「謝る事など何ありません。閣下は、日頃から働き過ぎなのです。一年に一度の大切な日ぐらい、將軍としての責務をお忘れになったとしても、陛下も——そして、大神アマテラス様もお責めにはならないでしょう」

執務机の向こうから、將軍であるヒヤギに対して忌憚のない意見が述べられる。

しなやかに鍛え上げられた細身の体躯に、ヒヤギの物とは僅かに意匠の異なる、師団長用の制服を纏う一人の女——アマテラス神聖騎士団、第四師団・師団長、オオヤマ・クシナである。

青空を連想する蒼色の髪を背中束ね、同じく蒼の瞳を、ヒヤギに対する尊敬の念と共に、どこか咎めるように細めていた。誠実の文字を体現するような整った顔つきは、彼女の生来の真面目さを表すようでもある。

現在、騎士団宿舎内にある神聖將軍用の執務室には、ヒヤギとクシナの二人の姿だけがあった。

ヒヤギは、信を置く自らの部下の言葉に苦笑を浮かべる。

「これは耳が痛いな。だが、將軍である私が、あまり怠ける姿を見せるわけにもいくまい」

「もちろん、程度は考えて頂かねば困ります。しかし、閣下は、間違はなく自らを大切になさっていません。正直、今回の休暇も二日ではなく、一週間は取って頂いて良いぐらいです。その程度の期間ならば、私が將軍代理を務めても、問題なく騎士団は動くでしょう」
「……うむ。まあ、君ならばそのまま將軍をやっても問題ないかも

しれんな」

クシナの剣幕に押されるように出たヒヤギの言葉は、ほとんど本音に近かった。

実際、三十一歳という若さにして、一師団の師団長と騎士団参謀を任せられるだけの才を、確実に彼女は持ち合わせている。

しかし、クシナは迷わず首を横に振った。

「まさか。一時の代理ならともかく、私のような若輩者が、將軍となり騎士団を束ねる事など出来るはずがありません。そもそも師団長や参謀の立場とて、本来なら今の私では、まだ身に余るものです」「いや、そんな事はないだろう。陛下も私も……それに君に従う騎士達も、皆、君の事を高く評価している。謙遜も大事だが、自らの成果をしっかりと受け止める事も必要な事だ」

「もったいないお言葉です」

クシナは美麗な動作で頭を下げる。

しかし、次に口にされた言葉は、やはり手厳しい。

「ですが、それはそれとして、やはり閣下は御自愛されるべきです」

「……………。そうだな。今後は、善処しよう」

それとなく話を逸らすという目論見が見事に失敗したヒヤギは、結局、そんな妥協を含んだ答えを苦い顔で返した。

クシナは決して柔軟な考えの出来ない頭の固いだけの人物ではないし、今も自身の事を慮って言ってくれている事はわかっている。しかし、普段から、どうにも説教臭い発言が多い事だけが、玉に傷であった。

（まあ、これに関しては私にも非があるか……）

ヒヤギが内心で独り自省していると、クシナが不意に語気を優しくして言った。

「そういえば、ウズメ様とお会いになられるのも、随分と久しぶりなのではないですか？」

「ん？ ……ああ、そうだな。もともと会う機会も少ないのに、学園に入ってからはおさらだ。今回は……四ヶ月ぶりか」

「――奥様もお喜びでしょう。毎年、命日にはかかさずお二人が顔を見せてくれるのですから」

「……………。だと良いがな」

ふと複雑な表情を見せて、ヒヤギは視線を落とす。

過ぎる残影には、今は亡き妻と――もう一人。

未だ忘れ得ぬ過去の過ちは、実の娘とも、どこか壁を作ってしまったように思えた。事実、ここ数年は、ウズメと心からの談笑などした事はない。

ヒヤギの暗い反応を見て、しかし、クシナは迷わず続けた。

「いえ、お喜びですよ。例え、過去にどんな事があったとしても、奥様にとって閣下とウズメ様が、愛すべき夫と娘である事は違いありません。だから、そんな顔をなさらないでください」

「――すまんな。気を使わせる」

「お気になさらず。この程度は、淑女の嗜みです」

クシナは胸に手を当て微笑むと、冗談交じりに言ってみせる。

「……………そうか」

これに、ヒヤギは思わず声を出して笑っていた。

「では、まあ、二日ほどだが……騎士団を頼んだぞ」

「はい。――どうぞ、ごゆっくり英気を養われてください」

クシナは右腕を胸の前に水平に掲げる敬礼の体勢を取ると、丁寧に頭を下げた。



アマテラス神聖王国の王都アシハラは、王立第一ヒノカワカミ学園から、馬車で街道を進んで、約三時間程の位置にある。学園が王都より独立しているのは、候補生達の自立性を養うためと、有事に際して、民の避難場所や騎士達の駐留基地などに用いるなどの理由からだった。

フウガ達や他の候補生を乗せた乗り合い馬車は、南門を抜け、王

都の中へと進んでいく。王都は、アマテラス神聖王国の繁栄を表すように、多くの人々とそれに伴う活気に溢れていた。

都の中心には、威風堂々たる王城が据えられ、そこに近づくほど、より身分の高い者が屋敷を構えている。そのため、中央部に近づくほどに都は煌びやかさを増していた。だが、もともと活気に満ちているのは、やはり商店や露店が立ち並ぶ商業区画である。フウガ達が行き交う南門の周辺も、行き交う人の多さから、特に露店などに溢れる区画の一つであった。

門を抜けた馬車は、しばらく進むと動きを止めた。

一拍置いて、車両の扉が開くと、中に乗っていた候補生達がい思いの会話を交しながら、久々の王都の石畳へと次々と降り立つ。

その中に居たゴウタが、ようやくぎゅうぎゅう詰めの馬車内から解放されて、思いつきり背筋を伸ばした。

「ぐはー。息苦しくて死ぬかと思ったわー」

隣のライも、少し安堵したように息を吐く。

「うん。創立記念日の前後は、帰郷する候補生が多いから、乗り合い馬車の数を普段より増やしてあるのに、それでも狭苦しかったからね」

続いて降りてきたレナは、げんなり顔で愚痴をこぼす。

「正直、男衆とは別にして欲しかったわ……。あんなに密着して気持ち悪いとまでは言わないけど、辛かった……。絶対に、女性専用馬車が必要だと私は思う……」

「気持ちわかるけど、そこまで望むのは贅沢じゃないかなあ……」
ミヨが困った顔で相槌を打った。

「はー、気持ちええ……って、あれ、フウちゃんは？」

思いつきり外の新鮮の空気を吸った後、少年の不在に気づいて、ゴウタが周囲をきよろきよろと見回す。

「そういや、ツクヨミ先輩にミカヅチ教官もおらんけど……」

「お・ま・え・ら……!」

と、そこに、怒りに震えた声が馬車の車両の中から響いてきた。

「面倒事を全部、俺に押し付けてとっと降りるんじゃないっ」
そう不満をぶちまけながら馬車から降り立ったフウガは、人を一人を背負っていた。背負われているのは、フウガ達の付き添いである教官のフヨウである。

「……教官っ。もう着きましたよっ。起きてくださいっ」

さらに、フウガに追隨して馬車を降りたウズメは、完璧に熟睡するフヨウを何とか起こそうと必死に耳元で声を張っている。だが、フヨウの眠りは相当に深いのか、穏やかな寝顔のまま、ぴくりとも反応しない。

ライが今思い出したように、わざとらしく手を叩いた。

「あー、ごめんね、フウガ。姉さんは馬車に乗ると、何故か爆睡するという変わった体質の持ち主なんだ」

「あ、そうやったそうやった。すっかり忘れとったなー」
物凄い棒読みでゴウタが頷く。

「確実に確信犯だろ！？　っと言うか、何だ、その迷惑千万な体質はっ！　子供か！　子供なのか、この人は！」

「……ある意味、単なる乗り物酔いより質が悪いわね……」

「あははは、確かに……」

レナとミヨが呆れ顔で、呟く。

この後、フヨウが目覚めたのは、王都到着より三十分も経ってからの事であった。

＊ ＊ ＊

「……………んー、眠、い……」

ようやく目覚めたものの、フヨウの足取りは未だに頼りなかった。不安で仕方ないフウガは、気が気でなくて声を掛ける。

「ミカヅチ教官、大丈夫ですか？　なんかまだフラフラしてますよ」

「……………大丈夫。大丈夫だから、後五分だけ……」

「いや、何が！？」　頼むから、もう寝ないでくださいよ！　お願い

い！」

相変わらずの苦労性を発揮しながら、フウガは涙目で絶叫する。その光景を眺めながら、ゴウタはやれやれと、頭を掻いた。

「……こりゃー、駄目やなあ。久々の王都を見回る前に、孤児院の方へ行って、フヨウ姉……もとい、ミカヅチ教官を寝かせた方がいいやろ」

「そうだね。姉さんなら、立ったまま寝るなんて事、朝飯前だし」ライが頷き、その視線を、この休日に実家の方へ用事があるという事で、同行していたウズメへと向ける。

「先輩は、どうしますか？ 一緒に孤児院へいきますか？」

「いや、私は……」

そう、ウズメが否定の言葉を発しかけて、

「――ウズメ様、お迎えに上がりました」

と、そんな丁寧な台詞が脇から掛かった。

「な……何だ？」

思わずフウガが声を上げる。

集まった皆の視線の先には、先ほどの乗り合い馬車などお呼びもつかないほどの豪華な馬車が一台と、その前に佇む一人の侍女の姿があった。貴族の乗る馬車としても、一際目を引くその存在感に、近くの通行人も足を止めて、振り返っていた。

ウズメもまた、そちらへ顔を向けて、苦い顔をする。

「スズ。迎えはいらないと、予め連絡をしたはずだが……」

「そうは参りません」

スズと呼ばれた二十代前半程と思われる侍女は、断固とした口調で否定を口にした。

「遠路はるばる、ウズメ様が学園からお帰りになられたのです。だと言うのに、お屋敷で何もせず待機しているなどという愚行を、ツクヨミ家に仕える者として、どうして出来ましようか」

「……遠路はるばるは、いくら何でも言い過ぎだ。馬車で、ほんの数時間程だぞ。気持ち嬉しいが、なんでそう融通が利かないかな

……」

ウズメは呆れ顔になって、眉根を指で押さえる。
しかし、スズは涼しい顔で、深々と頭を下げた。

「全ては、ウズメ様の事を想うが故でございます。……さあ、馬車へ。ヒヤギ様も、城より、もうお戻りになられる頃です」

「……………」

ウズメは、もうお手上げといった様子で嘆息する。その後、申し訳なさそうな顔で、フウガ達を振り返った。

「まあ、こういう事なんだ。申し訳ないんだが、孤児院の方へは後日、顔を出すよ」

「わかりました。まあ、せっかくですし、御家族に顔を見せてあげてください……って、ミカツチ教官！ 寄り掛かってこないで！」

未だにフヨウの世話を押し付けられっぱなしのフウガに、慣れた様子で馬車へと乗り込んだウズメは、窓からくすりと笑顔を見せた。

「人の事は言えないが、あまりお人好しが過ぎると、苦労ばかりを背負い込むぞ、フウガ」

「もう身に染みてますよ。それでも治せないから困ってるんです」
諦念に満ちた顔で、それでもフウガは苦笑気味に微笑んだ。

ウズメもまた、可笑しそうに笑い返した。

「確かに、それでこそ君なのかもしれないがな」

「……ウズメ様、そろそろ」

馬車の中で、隣に腰を降ろしたスズが、控えめに口を開く。

「ああ、わかつている。……では、皆、また」

ウズメは別れの言葉と共に、手を振った。

同時に、隣に座るスズの指示を受けて、御者が馬車が出発をさせる。

その姿が人波の向こうへ消えた後、レナが感嘆の息を吐いた。

「本当に今更だけど……先輩ってツクヨミ家のご令嬢だったのよね」

「うん……なんか凄かった」

ミヨの方も、改めてそれを思い知ったように惚けている。

「……………」

その反応には、正直、フウガも同意だった。

ここ最近では、当然のように単なる学園の先輩として接する事も多かったが、本来ならウズメは、ただの騎士候補生であるフウガ達が、そんな風に気軽に声を掛けられるような相手ではないのだ。もしも、彼女が神聖騎士を目指して学園に入学していなかったら、自分達は顔を合わせる事すらなかったかもしれない。

(……でも、俺達は先輩と出会った。そして、仲間になった)

——だから。

きつと、そんな考えには何の意味もない。何より、ウズメ自身がそんな態度で接される事は望んでいないはずだ。それは、いつかの屋上での彼女自身の言葉が証明している。

「さて……」

軽く頭を振り、余計な考えを振り払うと、フウガは口を開いた。

「いつまでもこんな場所に居ても仕方がない。とりあえず、ミカツチ教官を寝かせるためにも、孤児院の方へいこう」

それに、皆が頷き、

「よっしゃ！　じゃあ、俺に付いてきてや！」

何故か、こういうときはやけに張り切るゴウタの先導で、王都の郊外にある孤児院へと移動し始める。

フウガは、今も半ば睡眠状態のフヨウをライと共に支えながら、その後を追った。

その途中、ふと王都の中心に聳え立つ王城の方へと振り返った。

あの中には、アマテラス神聖王国の頂点に立つ国王が居り、同時に神聖騎士団の騎士達も控えている。

(……そうだ。あの人も……居る……)

——……フウガ君。貴方は、月のように在りなさい。

……それは、学園に入る前。

二年以上の昔、別れ際に、とある人物に言われた台詞だ。

その意味を、フウガは未だに掴みかねている。

(……元気にしてるのかな)

ぼんやりと、その言葉を残した相手を想う。

だが、一年前に王都へ訪れたときもそうだったように、今回もま
ず顔を合わせる機会はないだろう。もう今の彼女は、そんな気軽に
会いにいけるような立場にはない。

「……フウガ？」

「――え？」

「急に立ち止まって、どうしたの？」

一緒にフヨウを支えるライが不思議そうに、こちらを見ていた。

我に返ったフウガは、頭を振り、

「いや、悪い。ちよつと考え事してた。……さ、いこうか」

誤魔化すように笑うと、再び孤児院への道を歩み始める。

そんな少年達を、去年と何も変わらぬ威容で在り続ける城が、遥
か高みから見下ろしていたのだった。

六章 月 その二（後書き）

お読み頂きありがとうございます。
感想などあれば、どうぞお気軽に……。。

六章 月 その三

孤児院〈鴉の止まり木〉は、王都の郊外、小さな森に半ば埋まるような形で建っていた。その敷地は、よく手入れされた芝生と花壇で覆われ、穏やかな空間を作り出している。

見た目は古びてはいるものの、なかなかの大きさを誇る建物は、元々は変わり者の貴族が別邸として建てたものだと思っていた。それを、現在、院長をやっている老人が、故あって譲り受け、それをそのまま孤児院へと改装したそうだった。

「変わってないな……」

フウガにとって、この場所を訪れるのは一年振り、そしてまだ二度目だった。なのに、その変わらぬ姿に、不思議と安堵する。

例えるならば……そう、ずっと前から知っているような、どこか懐かしい空気があるのだ。それは、孤児院という特殊な空間だからこそその感覚なのかもしれない。

「なんだか思った以上に綺麗な所なのね……」

フウガと違い、初めて訪れたレナが感嘆の言葉を口にする。

隣で、ミヨも似たような表情をしていた。

「こまめに手入れしてる人がいるからね。子供達の世話役の人なんだけど。まあ、中に入れば、すぐに当人に会えるよ」

ライが頷きながら応えた。

そんな話をしている間に、敷地を抜け、孤児院の前まで辿り着く。

「おっし、ただいまー」

ノックもなしに、ゴウタが久々の我が家の扉を開いた。

瞬間。

「ライ、ゴウタ、フヨウ姉、おっ帰りー！」

「皆ー、悪人面もきたぞ！」

「気をつけるー、食べられるー！」

「」「全員、突撃ー！！」「」

と、いきなり複数の影が突進してきたのだ。

その狙いは、全てフウガ。

影の正体は、孤児院の子供達である。

「誰が悪人面!? ……って、どわああああ!」

フウガは、避ける暇もなく、その餌食となった。

この突然の展開に、ゴウタとライは「やっぱりこうなったか」と達観した表情を浮かべ、フヨウは立ったまま眠りこけ、レナとミヨはただ呆然となっていた。

「相変わらずフウちゃん人気者やな!」

「同じ孤児院育ちの僕達より人気があるんだから、羨ましい限りだよ」

「この状況のどこが羨ましいん……痛っ! こら、上で飛び跳ねるなあっ!」

子供達に完全に押し潰されたフウガは絶叫する。

しかし、元氣溢れる子供達の耳に、そんな言葉が届くはずもない。引っ張られ、押し掛かれ、しかし、幼い子供達相手に本気で抵抗するわけにもいかず、フウガはされるがままになる。

と、そこに。

「あら、皆、お帰りなさい!」

そんな、おっとりとした明るい声が聞こえたのだ。

「ああ、テナさん!」

フウガは天の助けだと言わんばかりに、床に這い蹲ったまま顔を上げる。

広間の奥から姿を見せたのは、細い目をした、いかにものんびりとした空気と、よく似合うエプロンドレスを纏う女性だった。フウガにテナと呼ばれた彼女は、先程の会話にも出た、へ鴉の止まり木での子供達の世話役を務める人物だ。

テナは、フウガの状況を見ると、驚いた様子で掌で口を覆う。

「まあ、フウガ君、大丈夫?」

「テナさん! この悪魔達を静めて!」

「全くもう……皆、ちゃんと手加減はしてあげなさいって言ったでしょ」

「いや、違うでしょ?! 手加減云々以前に止めてくださいよっ! っていうか、こいつらがこうする事を最初から知ってたんですか?!!」

「だって、皆、フウガ君の事が大好きみたいだから。子供らしい愛情表現を無理に止めるのも可愛そうでしょう?」

「こんな暴力的な愛情表現は嫌だーっ!!」

フウガは再び絶叫するが、やはりテナにも子供達にも届かない。ひたすら、愛情表現という名の嵐に、もみくちゃにされ続ける。

「……ねえ、去年もこんなだったの?」

ようやく我に返ったレナは、ゴウタとライに訊く。

「ああ、全く同じやな。去年の光景をそのまんま見てるみたいや」

「ここで過ごしてる間、ずっと子供達に悪人面って呼ばれて、追い掛け回されたよ。適当に追い払えば良いのに、フウガも律儀に付き合うからね」

二人は、苦笑気味に笑う。

レナも同意するように、息を吐いた。

「……本当、お人好しの馬鹿なんだから」

「そ、それより、いいかげん助けなくて良いんですか?」

さすがに見かねたミヨが、おずおずと言った。

「しゃーない。そろそろいきますか」

「このままじゃフウガ、ぼろぼろになっちゃうしね」

ライとゴウタがようやく助けに入ろうとした所で、

「そこまでしておきなさい。フウガ君が困っているだろう」

と、そんな重厚な声が広間に響いたのだ。

途端に、ぴたりと子供達は動きを止める。「はい」と渋々ながら、素直に言う事に従って、フウガを解放した。

フウガは息も絶え絶えといった感じで、なんとか立ち上がる。

「た、助かりました、ナツチさん……」

「いや、子供達が迷惑を掛けたね、フウガ君」

そう言っ、声の主が、しとやかな笑みを浮かべる。

姿を見せたのは、一人の老人だった。

優しいな笑みを浮かべているのに、その静謐な雰囲気のせい、まるで隙を感じさせない。ゲン爺とは違った意味で衰えを感じさせないその存在感に満ちた立ち姿は、長き時を生きる大樹を連想させた。

このナツチという老人が、この孤児院の院長であり、ゴウタやライ、そして、フヨウの育ての親であった。

「じーじ、俺達、迷惑なんて掛けてないぞー」

「そうそう。すきんしつぷをしてただけー」

「私達、悪くないもんー」

子供達は口々に抗弁する。

これにナツチは笑みを崩さぬまま、子供達を叱った。

「お前達に悪気がないのは知っている。だが、加減と相手の気持ちを慮る事を忘れるないつも言っているだろう」

「うー……お、おもんばかる？　じーじの言う事難しくて良くわからない」

「いーもん、向こうで遊ぶ」

「いこいこー」

不満そうにそう漏らして、子供達は外へと飛び出していった。

これに老人は困った顔で、肩をすくめる。

「……どうにも、未だに子供達にわかりやすい言葉を選ぶのが苦手だね。我ながら、良く院長などやっているものだ」

「大丈夫ですよ、院長。あの子達はああ見えて、ちゃんと反省します。……まあ、明日には忘れてるでしょうけどね」

ふふ、とテナが笑う。

「……ああ、忘れちゃうんですね」

フウガは顔を強張らせて、呟く。

出来れば忘れないで欲しいとは思うのだが、言った所で無駄だというのもわかってるので口には出さなかった。

ナヅチは、その静かな光を宿す双眸をライ達へと向ける。

「ライ、ゴウタ、フヨウ……よく帰ってきたね。息災のようで何よりだ」

「おう、ただいまや、じーじ」

「それなりに元気にやってたよ」

「……………ぐう」

未だに眠っているフヨウは置いていて、ゴウタとライが笑顔で応える。その表情は、心なしか学園で見せるものとは違う感じがした。(……まあ、自分達の育った場所だもんな)

フウガは思う。

故郷に帰るという事は、それだけで特別な行為だ。

他のどんな場所にも真似出来ない、唯一つの心許せる世界。

例え、どんな辛い境遇を辿ってきたとしても、そういう場所があるという事は、きつととても大切な事だ。

ナヅチの視線がさらに巡って、二人の少女を捉える。

「そちらのお嬢さん達は、新しい友人かな？」

「え？ あ、はじめましてっ、タマヨリ・レナです。お世話になります」

「わ、私はナスノ・ミヨです。しばらくの間、よろしく願いします」

話を振られて、レナとミヨが慌てて頭を下げる。

王都に居る間は、全員、孤児院の空き部屋を借りて、そこに泊まる事になっているので、余計に恐縮しているようだった。

「私はナヅチという。先程も言ったが、この孤児院の院長をやっている者だ。……それと、そんなに畏まらないでくれて良い。孤児院というのは、開放的な空間であるべきだからね。ここを新たな家として生活する子供達も、堅苦しい態度で接される事は望まないだろ

う」

「「は、はい……」」

ナヅチの言葉には、一つ一つに妙な重みがある。だからか、二人の少女は、返事とは裏腹に、かくかくと変に固い表情で頷いていた。

「……さて、もう昼が近いが、皆はもう食べたかな？」

ナヅチが、皆の顔を見回しながら訊いた。

途端、テナがぱっと笑顔を見せて、手を叩く。

「ああ、そうそう。皆がそろそろ帰ってくると思って、お昼御飯を張り切って作ったのよ。いっぱい食べてねー」

「……………うん、食べる」

すかさず寝ていたはずのフヨウが覚醒して、返事をする。

これに、ナヅチとテナが顔を見合わせて苦笑をこぼした。

「ミカヅチ教官、なんでこういうときだけ寝起き良いんですか……」
フウガは、これまでの疲れにどっと襲われながら、そうぼやいていた。



フウガ達一行が王都に到着した、その翌日――

初夏も近いというのに、その場所にはどこか寒々しい風が吹き込んでいた。

王都に満ちた活気は、遠く離れている。

貴族墓地。

一定の地位を持つ者以外、埋葬を許されない場所。

死者の眠りを妨げぬよう、訪れる者は誰しもが声を落とすし、足音を潜め――静寂だけが広がっている。それは亡き者達への生在る者の礼儀であり、大切な誰かを失った事に対する悲しみの表れでもあるのだろう。

整然と並ぶ墓標の一つ。

その前に、ツクヨミ・ウズメは無言で佇んでいた。

今、彼女の身を包むのは、学園の制服ではない。腰に巻いた朱色の帯で、淡い桃色に可憐な意匠を施した長着を固定させた衣服——着物である。さらに、長い漆黒の髪も巧みに纏められ、梅の花を象った美しいかんざしが刺さっている。

そもそも王国では、着物は、一般的なドレスと共に、儀礼用によく用いられる衣装である。だが、一部の貴婦人は、出歩くときなどにも普段着代わりに身に纏う事も多かった。

ちなみに、ウズメがこの格好をする事になったのは、スズを中心とした侍女陣に、半ば強引に着せられたからであった。着物姿で出掛ける事自体は彼女も慣れていて抵抗はないのだが、まず本人の意思の確認を先にして欲しいと思う。

少々いき過ぎではあるものの、そんな皆の優しい気配りに、ウズメは淡い微笑を浮かべた。

彼女の見下ろす墓標には、今は亡き彼女の母の名が刻まれている。その下で、ウズメが供えたばかりの花束が置かれていた。

亡くなった日付は、六年前の今日。

名は、ツクヨミ・カンナ。

「……母様、この着物、似合っていますか？ スズ達が、昔、母様が着ていた物を私に合うように仕立て直してくれたんですよ」

笑みもそのままに、囁くように墓標へと問い掛ける。

スズ達が、強引なまでに着物を着せようとしたのは、一年振りの墓参りに、母の墓前でウズメが着物姿を見せられれば……という、そういう思いからだっただ。

——柳のような人だった。

母の事を思い出す度に、ウズメはそう思う。

向かってくる困難の全てを自然体で受け流し、受け入れて、見て

いるだけで心穏やかにしてくれる柔らかい笑みを湛える女性だった。もともと身体が強い方ではなく、ウズメを生んでからは、床に伏せる事も多かった。およそ戦いの世界とも無縁——でも、幼い頃に神聖騎士になる事を志し、剣を握る事を決意したウズメの気持ちを、誰よりも最初に理解してくれた。誰よりも心配しながらも、ただ見守ってくれていた。

……好きだった。

そんな母が、ウズメは大好きだった。

だから、母の最期を看取ったとき、ウズメは、自身の周囲の世界そのものが終わってしまったように感じた程だ。

毎日毎日、涸れる事を忘れてしまったのかと思う程に泣いた。

そして、そんな自分という人間の弱さに絶望すらした。

でも……

それでも……

母は死んだのだ。

その事実を受け入れ、悲しみを乗り越えたとき、ウズメは一つ強くなれた。

きっとそれは、亡き母のくれた最後の贈り物だ。

母はただ死んだのではなく、娘が一人として成長するきっかけを与えてくれたのだ。もしかするとそれこそが、親との死別という、多くの者が通る試練の本当の意味なのかもしれない。

そんな風に思えるようになったのは、ごく最近の事だ。

「……ウズメは、今年で十九になります。無事に学園を卒業出来れば、来年には騎士見習いとして、王城へ出向する事になるでしょう」
僅かに震える声で、母へ向けて報告する。

自然と溢れそうになる涙を抑えて、目を細める。

「……私が神聖騎士の制服を身に着けた姿……母様に見て欲しかった……」

無意識に拳が固く握られていた。

乗り越えたつもりでも、やはり母の死は悲しい。

そんなものは当たり前だ。

その悲しみで、もう立ち止まる事はないけれど、忘れる事なんて出来るわけではない。

だって……自分はその人の娘なのだから。

「――出来過ぎた女だったな」

背後から声が掛かった。

誰かが歩んでくる足音がする。

ウズメは何も答えない。無言で、母の墓標だけを見据える。

隣に並んだ偉丈夫は、ツクヨミ・ヒヤギ。

もう一つの花束を抱えた彼女の父。

二人は、昨日の再会の際に、簡単な挨拶を交わした以外、未だにまともな会話をしてはいなかった。

「そうでなければ、もっと別の幸せを掴めたのではと――今でも、そう思う事がある」

「……母様は」

ウズメは、そこで口を開いた。

「全てを知った上で、父様の傍に居る事を選びました。それは、己が想いに従った選択です。ならば、後悔などあるはずがありません。そんな事……誰であろうと言わせはしません」

「……そうだな。ウズメ、お前の言う通りだ。私もそれが嬉しく……少し辛い」

ヒヤギは、その場に屈んだ。

手にした花束が、ウズメの置いた物の横に置かれる。

しばし、互いに無言で目を閉じ、墓標の下に眠る者の安らかな眠りを祈った。

それを終えてから、不意にヒヤギは口を開いた。

「……“彼”と一悶着あったそうだな」

問いには、これまでと異なる重さと緊張が含まれていた。

それだけでウズメは、ヒヤギが何の事を訊いているかを察する。

「はい。訓練中、〈練守結界〉外で刃を向けられました。自身の身

を守るため、やむなく反撃し、彼を沈黙させましたが……」

それは、およそ四ヶ月程前。

まだフウガがオロチに取り憑かれるより前に、学園で起きた事件だ。

「報告は聞いている。表面上は、お前に憧れるあまり、自身の実力がどこまで通じるか試したくなった——という理由で、その件は処理された。そして、彼は、無期限の謹慎となったそうだな」

「表面上は、です。実際は……間違いなく彼は私を殺す気だった。それだけの憎悪が——彼の剣には在った」

「……………」

眉間に皺を寄せ、ヒヤギは、ゆっくりと立ち上がった。

そして、頭を振る。

「……妻の墓前でする話ではなかったな。許せ」

「いえ。母様も……彼の事は気に掛けていました。自分が、彼を——彼ら親子を不幸にしたのではないか、と」

「……あいつらしいな。そんな女を一時とはいえ、伴侶に出来た私は間違いなく果報者だ」

ヒヤギは苦笑と共にこぼすと、踵を返した。

「この続きは、また屋敷でする事にしよう。……お前は、学友の居る孤児院へゆくのだろうか？ 別に私に気を使う事はない。このままいつてくるといい」

そこで一旦、ヒヤギは言葉を切る。

数瞬ほどの逡巡を見せて、彼は続けた。

「学園での事は……すまない。全てを向けられるべきは私だというのに——お前にはいつも面倒を掛ける」

「っ……………そんなのっ」

「それと、着物、良く似合っている。若い頃のあいつを思い出したよ」

ウズメの反応を遮るように、ヒヤギは娘の着物姿を褒める言葉を口にする。

「……………」

だから、ウズメは続く言葉を飲み込むしかなかった。

「ではな」

俯く娘に一言告げて、ヒヤギは墓地を去っていく。

広い背中とは、あの日から変わらず、目に見えぬ暗い何かを背負い続けていた。そこには、妻や娘へ対する言葉に出来ない罪悪感も含まれているように思えた。

「……何故、謝るのです……」

そんな実の父の後ろ姿を、ウズメは見つめ続ける。

眩きは、苦いものを含んで、押し出されるように漏れていた。

「……例えば、父様が二人の女性を愛していたとしても……私は……私達は……」

六章 月 その三（後書き）

お読み頂きありがとうございました。
感想などあれば、どうぞお気軽に……。

現在、キャラ人気投票を行っています。
目次ページのリンクより、お入りください。

六章 月 その四

――時は少し遡る。

フウガ達が孤児院に到着した夜。

ナヅチの自室に、数人の人物が集まっていた。

部屋の主であるナヅチはもちろん、子供達の世話役であるテナ、そして、ライ、ゴウタ、フヨウの五人である。

外はすでに、深更の静寂に包まれている。

子供達やフウガ達は、すでに眠りにつき、ランプの灯りが部屋を照らす中、皆は向き合っていた。

最初に口を開いたのは、ゴウタだった。

「じーじ達が無事で本当に良かったわ。俺らのおらん間に何の問題もなかったか？」

「ああ、大丈夫だ。そう、心配する事もないさ」

ナヅチは鷹揚に首肯して、微笑む。

「そうは言ってもね。これまでだって、何度か危険な事はあったんだ。幸い、他の子達に危害は及ばなかったけど」

と、ライが落ち着いた声音で反論した。

「二人共、心配性ね。私が居るんだから、もしものときだって院長もあの子達も守ってみせるわ」

テナが穏やかに、少年二人を宥める。

ライとゴウタは、それでも納得いかないように視線を交わした。

テナの事を信頼はしていても、どうしても万が一の事態が頭から離れないらしかった。

「ライ、ゴウタ」

それを見かねたのか、ナヅチが神秘的な声で言った。

「お前達が私達を心配してくれる事は嬉しく思う。だが、そういう事を理解した上で、お前達は学園に行き、神聖騎士を目指す事を決

めたのではなかったか？」

「……………」

「もとより、我らを狙う者が表れる事は、孤児院を開院する前より、私もテナも覚悟していた。そもそも、そういう者達と向き合うべきは私達なのだ。お前達が、その志を揺るがしてまで、気を割いてはいかんよ」

「じーじ……」

「なに、私達を信じろ。黙って殺されるほど、私もテナも大人しくはないさ。いざというときは、あの子達だけでも必ず守り抜いてみせる」

「そういう事よ」

テナも頷いて、笑って見せる。

しばし無言が続いた後、観念したように二人も首肯した。

「わかったわ、二人共」

「確かに、心配し過ぎても仕方ないしね」

その後、ライが隣の姉へと視線を送る。

「――で、姉さん、また寝てない？」

「……………平気。ぎりぎりだけど」

「ぎりぎりではあるんやな」

周りがあんな会話を交わしていたというのに、いつも通りのフヨウの様子に、皆が一樣に苦笑する。

だが、フヨウが、ライやゴウタのようにナツチ達を心配する言葉を口にしないのは、ナツチとテナの事を信じているが故にだ。そこには、一片の迷いも存在しない。そういう意味では彼女は、単に年齢が上というだけでなく、紛れもなく少年達よりも一歩も二歩も大人であると言えた。

「……………それよりも」

珍しく口調を鋭くして、フヨウは言った。

「……………スサノ君はもう知っているから良いとして、タマヨリさんやナスノさんに、例の事を教えておかなくて良いの？」

「む……そうやなあ。何かあったときのためにも、教えておいた方がええんやろうけど……」

フヨウの指摘に、ゴウタは迷いを見せる。

それは、ライも同じようで、無言で顔つきを厳しくしていた。

「――教えておきなさい」

その迷いを断ち切るように、ナヅチは強い口調で言い切ったのだ。「私達に気を使っているのなら、その必要はない。何より、お前達が信頼する仲間であるのなら、隠しておくべきではないだろう。もしも全てを明かした事で、彼女達に私やテナが弾劾されたとしても、それは仕方がない。そうされても当然の過ちが私達の過去にはある」老人の覚悟は強固だった。

己の過去の全てと目を逸らす事なく向き合い、そこから伴う痛みから何一つ逃げる事なく受け入れるという――そんな静謐なる決意。

それはナヅチだけでなく、テナもまた同じであった。

二人のその想いを前に、もはや少年達が逡巡など出来ようはずもなかった。

「……そうやな。いつかは言おうと思っとった事やし」

「まあ、レナ達なら、わかってくれるかな」

二人の言葉に、フヨウは微笑んだ。

「……………私も、そのときには付き合う。教官だし、同じ孤児院の人間として、無関係な顔出来るはずないもの」

「そっか。そりゃ助かるわ、フヨウ姉」

「意外。姉さんも教官らしい事するんだね」

「……………うん。たまにはするわ」

「たまに、って自分で言い切ったらいけないでしょ、フヨウ？」

三人のやり取りを見ていたテナが、呆れた顔で突っ込みを入れる。横で椅子に腰掛けるナヅチは、ただ困った顔で肩を竦めていた。



「……………はあ」

翌日の朝。

孤児院の庭の端で、植木の一本に背を預けて座り込んでいたレナは、重い息を吐いた。

庭の真ん中では、フウガ達が子供達の相手をして遊んでいた。遊んでいるといっても、実際は、ライとゴウタが子供達を扇動して、フウガにまとりつかせ、大騒ぎしているだけなのだが。

この場に居ないミヨやフヨウは、朝食を作るテナの手伝いをして
いる。

レナは独り、少し気分が優れないからと断って、この場で休んで
いるのだった。

初夏近くの暖かい風は、心地良く肌を撫でる。

緑や花に溢れる孤児院の敷地は、視覚からも人を癒してくれる。

だが、レナの胸中は重い感情で占められていた。これまで押し隠
してきてはいたが、頭の片隅に存在し続けていたそれは、ずっとレ
ナの心を苛んでいるのだ。

視線は、子供達と戯れる一人の少年――フウガへと自然と向かう。
フウガは、子供達に翻弄されながらも、どことなく楽しそうに見
えた。

不意に見せる笑顔は、十六歳という年相応の幼さの名残もあり、
以前に見た、妖魔と向き合う彼の姿とは、酷く相違している。

きっと。

ああやって笑う姿が、フウガという少年の本来の在り方。

(……………でも)

彼は、今、別の在り方を遵守している。

レナは、二日前の、ヒナコとの会話を思い出していた。

＊ ＊ ＊

「さて、ここなら良いか」

校舎裏の人気のない場所まで移動して、ヒナコは振り返った。後ろを付いて来たレナと向き合う。

「で、話っているのは何だ？」

「……………フウガの事です」

「ほう」

ヒナコは興味深そうに顎を撫でた。

その唇が意地悪い笑みを象る。

「どうした？ 恋の相談でもしたいのか？ だが生憎、それはアタシの専門外だぞ」

「なっ！？ ち、違いますよっ！」

途端、レナは、強く否定の言葉を発した。

少女の反応を見て、ヒナコは腹を押さえて大笑する。

「冗談だ。冗談。そんなに動揺するな」

「してません！」

顔を真っ赤にして、レナは言い返す。

どうやら、レナのフウガへの恋慕は、ミヨだけでなく、このヒナコにも見抜かれてしまっているらしかった。本音を隠すのが苦手な性分なのは自覚してはいるが、それでも恥ずかしいには変わりない。

うー、と威嚇する犬のように唸りながら、レナはヒナコを睨む。

ヒナコは苦笑いを浮かべて、手を振った。

「ほら、そんな目でアタシを見るな。話があるんだろう」

「……………わかりました」

咳払いして、気を取り直す。

確かに自分は、からかわれるために彼女を訪ねたのではない。声を落として、レナは本題に入った。

「以前のキジムの事件とき——フウガが妙な痣を浮かび上がらせて、その途端に、今までにない力を見せた事は報告しましたよね」

「ああ、聞いた。確か、まるで亀裂のような痣だったらしいな」

「はい」

レナは頷く。

「ずっと気になっていたんです。あのときのフウガは、本当に別人みたいだった。そもそも痣があんな風に浮かび上がる事や急に強くなるのだって普通じゃないですよね」

「まあ、そうだな」

「……だったら、何か問題があるんじゃないかって思うんです」

「問題？」

「はい。さっきも言いましたけど、あんなのは、どう考えても普通じゃない。だから……あの痣が浮かび上がる事は、フウガにとって何か良くない事があるんじゃないかって……」

「……なるほどな」

ヒナコは腕を組むと、小さく頷いた。

数秒ほど考えるような仕草を見せて、再び口を開く。

「――病は気から」

「え……？」

「火事場の馬鹿力。心頭滅却すれば火もまた涼し。……さて、これから先人の残したありがたーいお言葉に共通するものは一体何だ？」

「あの……スクナ先生、急に何を……」

「良いから。答えてみな」

「……そんな事言われても、わからないです」

「そうか？ ……まあ、簡単に言うとな。これらは全て、心の在り様が肉体に影響を及ぼしているのを表しているんだ」

「心の在り様が、肉体に影響……？」

「ああ。『こんな病気なんて問題じゃない』と強く思えば、病気が早く治る。危機的状況に陥った人間が、思いもよらない力を発揮する。または、無念無想の境地にあればどんな苦痛も苦痛と感じない、とか。こういうのは稀にだが、実際にある事なんだよ」

ヒナコの言っている事は、レナにも理解出来る。

確かに人間にとって、“思い”というものは決して軽視出来る事

柄ではない。一つの何かに心を傾倒させれば、あるいは奇跡のような結果を為し得る事もあるだろう。

だが、今の話の流れで、ヒナコがその事を口にする理由がわからなかった。

「えっと……結局、どういう事なんでしょうか？」

「要するにだ。フウガの痣もそういう原理なんじゃないかって話さ」「フウガの……痣が？」

「スサノは九年前に、母と共にそのお腹の中の子を目の前で失い、同時に父親の騎士としての未来までも奪ってしまった。それはあいつの心にとって、未だに深い傷となっている。そして、それ以来、あいつは自分の周囲の人間を守る事を異常なまでに強く、己へと課しているように思う。半ば強迫観念にも近い形だな。

——深い心の傷。

——強迫観念に似た守護の誓い。

あくまで推測だが……これだけでも十分に揃っていると思わないか？ 肉体に影響が表れる条件はな」

「……………」

否定は出来なかった。

フウガにとって、九年前の事件がどれほどに重いものかは、レナだってわかっているつもりだ。

——いや。

きっとそれは、本人にしか本当の意味で理解出来ないほどの痛みなのだろう。

「だったら、それはフウガにとって、悪い影響はないんですか？」

レナは、もっとも気になっている点を問う。

ヒナコは静かに目を閉じると、

「ないはずがないだろう」

と、言い切った。

「……………っ！」

胸中にあった嫌な予感をはっきりと肯定され、レナは息を呑む。

「良いか、タマヨリ。力というものは常に代償を求める。それは、力が強ければ強いほど大きく、重要なものになる。……自身の限界を越えた力を引き出す——なんてものになれば、なおさらだ。そんなモノは、振るえば振るうほど、看過出来ない代償を支払わされる事になるだろう」

「じゃあ、フウガは……一体、どうなって……」

「アタシにもスサノが何を犠牲にして、そんな力を引き出しているかはわからない。でもな、そんな事を続けていれば、あいつは確実に……」

その先は、あえてヒナコは口にしなかった。

だが、問うまでもないだろう。

それは、人が迎える中でも、もっとも最悪な運命の一つ。死。

それ以外に、一体何がある。

「どうすれば……それを防ぐには、一体どうすれば良いんですか！？」

思わずレナは身を乗り出して、叫んでいた。

あの少年が死んでしまうなんて。

そんな未来なんて。

どうあっても受け入れたくなかった。

助けられる術があるのなら、そこに自分に出来る何かがあるのなら、何であろうとしてやるつもりだった。

しかし。

「何も手段はない。少なくともアタシ達にはな」

ヒナコは、無慈悲な言葉を容赦なく告げたのだ。

「で、でも、フウガを戦いから遠ざければ、あの痣だって……！」
「なるほど、それは全く無駄という事はないだろうな。……だがな、スサノ自身がそんな状況を受け入れるはずはないだろうし、そもそもシラユリなんて正体の知れない者に狙われている限り、限界がある。もしものときは、あいつは躊躇わず戦いに臨み、そして、その

力の代償を支払うだろう。結局は、時間稼ぎにしかない」

「……そん、な……」

レナは言葉を失う。

もう運命は定められているというのか。

少年は大切な誰かを守るため、己が身を欠けさせ続け、最後には死ぬ。

それを止める事は出来ない……そういうのか。

ヒナコはさらに続ける。

「問題は、スサノの内面の事だ。周囲の人間がどうしようと根本的な解決を決して出来ない。もしもそれが出来る人間がいるとすれば、守るために自らを犠牲にし続けている――」

ヒナコは、衝撃で固まるレナを見据えて断言した。

「スサノ自身、ただだろうな」

「フウガ、自身……」

「そうだ。あえて言うならば、アタシ達に出来る事は、スサノが自身の在り方を変えられるように導いてやる事ぐらいさ。だが、例えそれが叶ったとしても……あいつが助かる保障は、必ずしも無いという事だけは覚悟しておけよ」

つまりは。

スサノ・フウガは今も、そして、これからも。

いつ来るとも知れない終焉の危機に晒され続けるという事。

そこから彼を救う確かな術を、自分達は持たないという事。

だが、そんな現実を踏まえた上で、ヒナコは言った。

「タマヨリ。お前が……お前達がスサノを支えてやれ。それが出来るのは、いつも傍に居て、あいつが心を許しているお前達だけだ。もしも、あいつの在り方を変えられるものがあるとしたら、そんな誰かとの絆や繋がりだけなんだよ」

「……本当に変えられるんでしょうか……私達が……」

「ああ、変えられるさ」

ヒナコの応えに迷いはない。

「お前達がそれを信じなくて、誰が信じる。

お前達があいつを支えなくて、誰が支える。

仲間——なんだろう？」

「……………」

レナは俯き、思い出す。

あの学園の屋上で。

あの〈異界〉の樹海の中で。

フウガに向けて、自分達は仲間だと告げたのはレナ自身だ。

だから……

「——はい。信じてみます。支えてみます。あいつの運命だって——変えてみせます。だって、私達はフウガの仲間なんだから」

ヒナコの目を真正面から見返して、レナははっきりと応えたのだ。だって、そうしなければ。

フウガに告げた言葉の何もかもが嘘になってしまふから。

「……………そうか」

少女の決意を聞いて、ヒナコは、ただ満足気に微笑んでいた。

「……と、あんな風に言ったものの、支えるといっても具体的にどうすれば良いんだろう……？」

回想から戻って、レナは独りぼやく。

幸い、ここ二週間程は、シラユリの襲撃もなく、平穏が続いている。だから、フウガもあの痣を浮かび上がらせる事はなかったはずだ。

でも、いずれはシラユリの刺客も、再び姿を見せるだろう。そして、フウガは迷う事なく、あの力を振るってしまう。

「せめて……私達が足手まといにならないようにしなきゃ駄目よね」それぐらいの事が出来なければ、フウガを支えるなんて事が言えるはずもない。だったら、自分もフウガに負けないぐらいの特訓を

「ああ、でも、痣が出ないようにするだけじゃ、結局、時間稼ぎにしかないんだし……」

再び問題に直面して、レナは頭を抱える。

フウガの在り方を変えない限り。

シラユリをどうにかしない限り。

彼は戦いの場へ臨み、そして、自らを犠牲にしてしまうのだ。

何より“支える”と一言で言っても、一体どうすれば良いのか。

そもそも考えたり、意識したりしてやる事でもないのだろう。だが、フウガに危機が差し迫っている以上、何もせずに居れるはずもない。

(……不毛……だなあ……)

最終的にそんな結論に辿り着いてしまう。

レナは、今日、何度目かもわからなくなった溜息を再び吐く。
と。

「……まだ、体調良くないのか？」

不意打ち気味に、そんな気遣う声が頭上から落ちたのだ。

「ふえっ!？」

間拔けな声を上げて、レナは座ったまま飛び上がりそうになる。
慌てて顔を上げる。

そこには、かなりの疲労感を漂わせるフウガが、レナを心配そうに見下ろしていた。

「フウガ……っ。べ、別にもう大丈夫よっ。今のはちょっと考え事してただけ!」

咄嗟にそんな風に取り繕う。

「? そうか」

フウガは、不可解そうに眉根を寄せる。

しかし、それ以上何か問うような事もなく、隣へと腰を下ろした。少年との距離感を意識して、レナは少し頬を紅潮させる。以前の口付けの光景まで脳裏に浮かびそうになって、慌てて振り払った。

「……こ、子供達の相手は良いの？」

「ああ……もう昨日からずっと引き摺り回されてるし、いいかげんライとゴウタに変わってもらったよ。おかげで昨日から何の訓練も出来てないしな……。あと、何よりも……疲れた……」

フウガは、がっくりと肩を落とした。

レナはそんな少年を疑わしそうに、横目にする。

「ふーん……。その割には、楽しそうにも見えたけど」

「楽しそうに？ 俺が？」

「そ、あんたが」

「……まあ、うん。酷く疲れはするけど、こういう時間は嫌いじゃないかな。なんかこう……暖かいだろう、この孤児院って。昔を思い出して、少し懐かしい気分になるんだよ」

「……………」

そんな少年の言葉に、レナは黙り込む。

昔とは、まだ彼の母が健在だった頃だろうか。

当たり前前に、大好きな母と尊敬する父に囲まれ、愛され……平和だった日々。

もしも、あんな残酷な出来事がなければ、あるいはこの少年は、学園で普通に過ごし、神聖騎士を目指して邁進していたのかもしれない。

だけど、そんな“もしも”は、すでにどんな未来にも存在しないのだ。

「そ、そう。あれだけ悪人面呼ばわりされても、あんたは楽しいのね」

本当なら、氣遣った言葉を掛けたいのに。

レナは、どうしても素直になれなくて、そんな憎まれ口を叩いてしまう。

だけど、少年は怒る事もなく、

「……相変わらずキツイなあ、お前は。まあ、目付きの悪さは今更どうしようもないし、諦めてるよ」

と、そう淡く笑うだけ。

(……………あ)

つい、その笑顔に見惚れてしまった。

そんな自分に気づいて、レナは慌てて視線を逸らす。

(……………こんな事、今更……………でも……………やっぱり……………)

タマヨリ・レナという少女は。

このスサノ・フウガという少年の事が好きなのだ――

そんな事実を、改めて認識した瞬間。

フウガの抱える運命を思い出して、レナは堪らなくなる。

思わず、口にはしてはいけない言葉を発してしまう。

「フウガ……………あんた……………何か隠し事してるわよね？」

「え？」

フウガの怪訝な顔が、こちらを向く。

そこには微かだが……………だけど、確かな動揺があった。

今まで穏やかだった空気が、変わった気がした。

「何、言ってるんだよ。そんなものないぞ」

「嘘」

レナは内心で、こんな事は駄目だと思いつつも、強く否定の言葉を口にしてしまっていた。

少し怒気すら感じさせる目で、フウガは少女を見返す。

「嘘なんか言っていない。一体、何で急にそんな……………」

「じゃあ、あの、亀裂みたいな痣は何？」

「……………」

一旦溢れ出すと、続く言葉は止まらない。

濁流の如く、レナは問いを重ねてしまう。

「あのときのあんたは異常と言っても良かった。普段とは別人みたいで、凄い力も見せて……………何か、あるんでしょう？ 隠してるんでしょう？」

「――あつたら、どうするんだ？」

これまでとは違う雰囲気の中フウガに、レナは勢いを逸する。

「は、話してよ。私達は仲間なんだから、何か問題があるなら……」
今度こそ明らかに。

その場の――いや、少年の空気が変わった。

「仲間でも、言えない事は、言いたくない事はあるだろう」

「……………」

さっきまでとは別人みたいな冷たい声だった。

レナが息を呑む中、フウガは、表情を覗かせないまま立ち上がった。

「あ……フ、フウガ……私は……！」

「――もう詮索しないでくれ。頼むから」

呼び止めようとする声を遮って、フウガは言った。

有無を言わせないその口調に、レナは何の言葉も続けられない。

「少し……街の方を散歩してくる。ライ達にそう言っておいてくれ」
最後にそう告げて、少年は孤児院から足早に離れていく。

レナは、その背中を目で追う事すらも出来なかった。

「……馬鹿、だ……私……」

ただただ、後悔に震えて俯く。

「……違う。支えるっていうのは、こんな事じゃないはずなのに……」

歯噛みして、芝生を強く握りしめる。

不用意な事を口走ってしまった自分の愚かさが、許せなかった。

去っていく少年を追って、謝る事さえも出来ない自分の弱さが恨めしかった。

頬を熱いものがゆっくりと伝う。

「……フウガ……私、どうしたら良い……？ どうしたら……あんなを支えてあげられる……？」

縋るようなその問いに応えるものは、誰も居なかった。

◇
◇
◇

闇があつた。

深い、深い、闇だ。

光など、存在する事さえ許されない空間だった。

世界を光と闇に分けるのならば、間違いなくそこは闇の世界であろう。

そんな闇の中に、一人の男が居た。

闇に紛れ、闇と同化し、そこに無言で独り佇んでいる。

その在り様が、すでに闇そのものとも言えた。
と。

暗黒の中、気配が一つ増える。

増えた気配が、最初から居た男へ跪いた。

「――二人を確認しました」

「そうか」

男は頷いた。

声は無機質で、およそ人として感情が削がれていた。

例えるならば、絶対零度の氷を研いだ刃のようであった。

「情報通り、孤児院など開いていたか。まさか償いのつもりか？」

――反吐が出る愚行だな」

男の双眸が滾る憎悪で光を帯びる。

「始末しますか？」

跪いた気配が問うた。

いや、問いというより、それは確認に近い。

何より、報告を聞いた男の声は、すでに抑えきれぬ殺気に塗れていたのだ。

だから、答えは決まっていた。

「無論だ。――殺せ。全員だ。もちろん孤児も一人残らず、な」

「では、三日後に」

「ああ。神聖騎士団に悟られぬよう、速やかに確実に……肅清する」
男は嗤う。

積年の望みが、ついに叶う喜びに嗤う。

そこで、不可解な事が起きる。

すぐ一歩先すらも視覚する事が困難な暗黒の中。

男の気配が、“増えた”のだ。

だが、そんなものは錯覚だったのか、すぐに元に戻る。

今、そこにあるのは、一人の男の憎悪の噛いのみだった。

六章 月 その四（後書き）

お読み頂きありがとうございました。

感想などありましたら、どうぞお気軽に……。

六章 月 その五

孤児院を離れたフウガは、あてもなく王都を歩いていた。

「くそっ……俺の大馬鹿野郎っ」

がしがしと頭を掻き毟って、自分自身へと悪態を吐いた。胸中で、酷い後悔の念が渦巻く。

レナが、何故、急にあんな事を言い出したのか。

理由なんてわかり切っている。

「……あれは、ただ俺を心配してくれたただけなんだ……」
なのに。

だというのに。

自身の抱える秘密を悟られたくないがために、あんな態度を取ってしまった。

あの場を離れるとき。

一瞬見えた少女の顔は、泣く寸前だったようにも思えて、余計に胸が痛んだ。

『——そう思うのなら、やるべき事は決まっているのではないか？』
と、そこで、オロチの念話が響いた。

その口調は、まるで自分を叱っているようにも思えた。

『こんな所で独り、己を罵倒しているぐらいならばな』

「……わかってるよ。そんな事は」

いつものような反論など出来ず、フウガは素直に肯定する。

だが、このまま取って返して、レナと顔を合わせる勇氣はなかった。

情けないとは思うが、もしもそうして彼女の泣き顔なんて見てしまったら、自分は平静ではいられないだろう。

「少しだけ、時間を潰してから戻る。……それで良いだろ」

『まあ、私は構わんよ。お前の問題だからな』

つれなくそう呟いて、再びオロチは引っ込む。

どうやら、フウガに対して、少なからず憤慨しているのは気のせいではないらしい。

確かにそんな態度を取られても仕方ないとは思うものの、レナに冷たく当たったからといって、オロチが怒るというのも不思議だった。

（――案外、あいつの事を気に入ってるのかな）

何の根拠もないが、なんとなくそう思った。

素直じゃないくせに、わかりやすく、すぐに感情が表に出る少女。思えば、オロチが面白がりそうな相手ではある。

「だけど、今はそんな事より、どんな顔で謝るか、だな……」

とりあえず当面の問題を思い出しながら、フウガは辺りを見回す。気づけば、王都の中央部近くまで歩いて来てしまったらしかった。南門の周囲より、さらに多くの商店や露店の並ぶ区画の一つで、王都でも特に賑わう場所だ。まだ朝だというのに、すでにかなり多くの人々が行き交い、それに伴う活気が溢れ始めている。

「ん？」

と、視界に入った物に、フウガは顔を巡らせるのを止めた。

王城へ続く道などを含めた、特に大きな三つの道が交差する三叉路。

そこは円形に開けた広大な広場になっており、特に店や人々が集う所でもある。その中央に建つ物に、フウガは目を留めていた。

大神アマテラス。

世界を創造したといわれる万象の神であり、この王国の名の由来ともなった存在。

彼が化身したと云われる、白狼を象った石像である。

見ているだけで、思わず跪きそうになる神々しさ。

今にも動き出さんばかりの躍動感。

芸術にはとんと疎いフウガでさえもわかるほどに、見事な出来栄えだった。おそらくは、相当に腕の立つ石彫師の手による作品だろう。

「白い狼、か……」

石像を見上げ、フウガは呟く。

考えてみれば。

何かと自分の中で“白”という色は、重要な意味を持っていた。

母、スサノ・ヒスイは、白という色を好んでいた。

彼女を失った九年前、世界は白雪に覆われていた。

自身を狙うシラユリ。彼女は、異常なまでに純白な容姿を持っている。

そういえば、ライ達が孤児院に引き取られた日も、雪の日だったと聞いていた。

「白。何物にも属さず、何物にも染まる事が出来る——始まりの色」
まさしく、そうだろう。

自分や、それ以外の人間の人生の分岐点。

偶然とはいえ、そこに必ず白という色が絡んでいる。

あの瞬間、それぞれの白は、様々の色に染まったのだ。

あるいは、世界創造の神を象徴する色に。

あるいは、破滅を決定づけられた運命に。

あるいは、もう一つの暖かな故郷に。

そこには、幸福も不幸も善も悪も光も闇も、もれなく全てがある。

人は、始まりの白を、そんな何かに染めていく。

移ろい、変わり続ける色。

では、今の自分を示す色とは、何なのだろうか。

「——そういえば」

そんな事を考えているうちに、ずっと忘れていた、一つの記憶が掘り起こされる。

白。雪。冬の森。

それらで連想される過去が、フウガにはもう一つあったのだ。
確か、まだ学園に入る前。

取り憑かれたように妖魔狩りを続けていた頃だ。

フウガは、ある一人の少女を、妖魔から救った事がある。

しかし、記憶は曖昧で、少女の顔などは思い出せなかった。

当時は、特に人との関わりを避けていた時期で、少女の名前さえも聞いてない。そもそも彼女とは、まともな会話など交わしてさえいなかったはずだ。

それでも、とても綺麗な女の子で、そして――

「そう、周りの雪とは真逆な黒い……」

不意に、記憶が鮮明に思い出されそうになった、刹那。

「フウガ？」

横手から声が掛かって、再び記憶は靄がかってしまう。

「あああっ」

「えっ?!」

思わず叫んでしまい、少年の名を呼んだ相手もまた驚きの声を上げた。

フウガがそちらに顔を向けると、着物姿の少女が目飛び込んで来る。

淡く美しい桃色に、見事な意匠を施した衣装。かなり長いのだろう滑らかな黒髪は、驚くほど巧みに結い上げられ、梅のかんざしがそれを彩っている。さらによく見れば、凜と整った顔にも、薄く化粧がされているようだった。

「……え……あ……?」

数秒程、本当に誰なのかわからなくて、フウガは惚けてしまう。

だが、この少女は、間違いなく自分の名を呼んだのだ。

それは確認ではなく、こちらがフウガであると半ば確信したもの。ならば、彼女が自分の知り合いである事は疑いようがない。

そして、こんな美貌を持つ相手は、彼の記憶の中には一人しか居なかったのである。

「せ、先輩……? ツクヨミ先輩ですか?」

「え、ええ、そうよ。驚いたわ。まさか、あんな声を上げられると

は思わなかったから」

「あ、すいませんっ。ちょっと考え事してたもので……ってあれ？」
咄嗟に謝罪を口にして、ふと違和感を覚える。

何か、今、自分の知るウズメとは、相違するものを感じたのだ。

「どうしたの、フウガ？」

ウズメが不思議そうに、こちらの顔を覗き込んで来る。

「……………」

「フウガ？」

「あの、先輩……」

「うん？」

「口調が……その……変って言うのはあれですけど……」

「え……？ あ！」

フウガが指摘している事が何か気づいて、ウズメは目を大きく見開くと、掌で口を覆う。

その後、恥ずかしそうに苦笑いを浮かべて見せた。

「久々に屋敷に戻っていたから、つい口調が戻ってしまっていたか。すまない、驚かせたな」

「い、いえ、そんな」

フウガはなんとか平静を保ちつつ、頭を振る。

「……なんだか失礼な言い方かも知れませんが、先輩も、あんな喋り方をするんですね」

ウズメは、少し照れた様子で、淡く笑んだ。

「まあ、これでも私も女だからな。初めから、こんな男口調だったわけじゃないさ。この喋り方は、学園に入ってから始めたものだよ。ツクヨミ家の人間として、常に強く在れるように——そんな気持ちと願いを込めてな。まあ、おまじないみたいなものだ」

「はあ……おまじない、ですか」

フウガは、呆れとも感嘆とも取れる返事をする。

ウズメの言っている事は理解出来る。だが、それで口調まで完璧に改めてしまうというのも、なかなか出来る事ではないだろう。

「しかし……」

ウズメは、嬉しそうに唇を綻ばせて、フウガの表情を覗う。

「この格好、少しは見違えてくれたようだな。ふふ、私じゃないみたいだったか？」

「あ、いや……すみません」

「別に謝る事はないさ。思えば、君には学園の制服姿でしか会った事はなかったからな。わからなくてもしょうがない」

「……そう言ってもらえると助かります。」

——あ、でも、似合ってますよ、その着物。とても綺麗です」と、ウズメはいじけたような表情で唇を尖らせて、

「おや、着物だけか？」

と、そう言ったのだ。

「え、えええっ」

これに、フウガは激しく動揺する。

数秒ほど迷いに迷った末に。

「あ、えっと……も、もちろん……先輩も、で、す……」

恥ずかしさのあまり、酷く尻すぼみになりながらも、なんとか言い切った。

「そうか。ありがとう、フウガ」

ウズメは、喜色満面の笑顔を見せる。

こういうときの彼女は、本当に当たり前の女の子以外の何者でもなくて。

フウガは紅潮してしまった顔を隠すように、そっぽを向く。

（——ああ……普通に、可愛いんだもん……）

誤魔化しようのない率直な気持ち。

馬鹿みたいな感想だけど、真実なのだからどうしようもない。

こんな少女に、自分のような人間が好意を寄せられてるなんて、一体、どんな奇跡なのだろうか。

大袈裟ではなく、それは心からの本音だった。

「それで、フウガ」

「え？ あ……は、はい！」

ぼんやりとしていた所に声を掛けられて、フウガは我に返る。

「気のせいかもしれないが……何かあったのか？」

「え？」

いきなりな質問に、フウガはきよんとする。

ウズメは心配そうに、こちらを見つめていた。

「いや、どこか元気がなさそうに見えたものだから。勘違いだったら良いんだが……」

「――それは」

つい先程のレナとのやり取りを思い出して、口ごもる。

なんとなく、ウズメには、あの事は話し辛い気がしたのだ。

しかし、少女は、フウガの表情の機微を見逃さなかった。

「何かあったんだな？」

「……………」

「もちろん言いたくなければ、無理に言わなくても良い。だが、話してくれば、私にも何か力になれる事があるかもしれないぞ？」

ウズメの声は真摯で、優しくかった。

だから、フウガは慌てて否定するように手を振った。

「いえ、そんな大事ではなくて……いや、別に小さいわけでもないんですけど……」

その――実は、少し事情があって、レナに冷たく当たってしまった。それで、勢いのまま孤児院を飛び出して来てしまったんです」
結局、気づけば、痣の件を伏せつつも、本当の事を口にしてしまっていた。

言い辛いのは確かだが、ここで嘘をつくのはもっと後ろめたいと思ったのだ。

「……そうか。レナか」

ウズメは、僅かに表情を強張らせて頷いた。

そして、少しだけ間を置いて、再び口を開く。

「で、君はどうしたいんだ？」

「それは……もちろん、謝ろうと思ってます。どう考えても、俺が悪かったですから。でも——こう、すぐに戻って謝るというのもやりにくくて、ちょっと時間を潰そうかな、と」

言っていて、やっぱり情けないな、とフウガは思う。

だが、今更、格好つけた所で仕方ないのもまた事実で、そのまま本音を告げた。

「そうか。事情はわかった」

ウズメは頷くと、

「では、行こうか」

と、そう言って、踵を返して歩き出したのである。

「え？　行くってどこに……？」

「だから、時間を潰すんだろう？　本当は私もこのまま孤児院に顔を出すつもりだったんだが、せっかくだから君に付き合うよ」

「で、でも、さすがにそれは迷惑……」

そこまでフウガが言いかけて。

「フウガ」

「っ！」

突然、ウズメはフウガに歩み寄って、少年の腕に自分の腕を絡めたのである。

「せ、先輩!？」

「私がそうしたいと思ったからそうするんだ。迷惑なんてものはな、本人がそう感じなければ、何の意味も持たないんだぞ」

「……先輩」

「それに、せっかくの機会だ。君と一緒に王都を見て回りたいしな」
たぶん、それがウズメの本音だったのだろう。

とても楽しそうに肩にしなだれ掛かられて、フウガはもう隠す余裕がない程、顔を紅くする。

「わ、わかりましたっ。……でも、俺、王都に詳しいわけじゃないですよ」

「構わないさ。君と一緒にだという事に意味があるんだから」

応える少女は、本当に弾けるような笑顔。

その一撃で、フウガの中の、ささやかな抗弁の言葉さえもが消滅した。

『これはまた――見事に手玉に取られているな、フウガ』

珍しく、ちよつとだけ同情した様子のオロチの言葉に、

「……ああ、そうだな。本当に」

と、フウガはしみじみとそんな風に返したのであった。

◇ ◇ ◇

フウガが孤児院を離れた後。

レナは意気消沈したまま、朝食が出来たと言われて、孤児院の食堂へ向かっていた。

脳裏ではずっと、去って行く少年の後ろ姿の映像と、別人のような冷たい声が繰り返し流れ、さらに彼女を落ち込ませていた。

足が鉛になったように一步一步が重く、まるで食欲も湧かない。

だが、ナヅチ達には泊まる部屋に、食事の世話までしてもらっている。だと言うのに、呼ばれて行かないわけにもいかないだろう。

とにかくさっきまで泣いていた事だけは悟られないように努めて、レナは食堂の扉を開く。すでにそこには、レナとフウガ以外は全員が揃っていた。

「あ、来たわねー。今日も朝から豪勢にしたから、たくさん食べてね！」

ことさら明るい声で出迎えてくれたテナは、昨日から、やたらと楽しそうだった。久々の大勢の客が、とにかく嬉しいらしい。

「あれ、レナ。フウちゃんは？」

少年の不在に気づいたゴウタが不思議そうに訊いた。

レナは、思わず言葉に詰まる。

「あ……。その……街の方を回って来るって、さっき」

「街を？ 何でまた、朝食も食べずに」

ライが怪訝そうに眉根を寄せた。

「えー、悪人面居ないのー」

「つまんないよー」

フウガが来ないと知って、子供達も不満の声を上げる。

本人がそれを望んでいるかは別にして、本当にフウガは、子供達に慕われているらしい。

レナは走る胸の痛みを自覚しながら、俯いた。

「ごめん、ね……。私が、怒らせちゃったから……。そのせいで」

「怒らせた……。？ フウガを？ レナが？」

ライとゴウタが、まさかと言わんばかりに顔を見合わせる。

「フウちゃんは、そう滅多な事では怒らんとするやんけど」

「レナ、一体、何があったの？」

「……………」

レナは、押し黙る。

二人の反応はもつともだ。

確かに、フウガは滅多な事で怒るような人間ではない。

レナ達が原因でオロチに憑かれてしまったときだって、「自分にも責任がある」なんてお人好しな事を、少年は笑って口にしていた。それなのに、あんな態度を取らせてしまったのは、全て浅はかな行動を取ってしまった己の責任。

後悔しても……。し切れない。

「レナちゃん……………」

何も言わないレナを心配して、ミヨが立ち上がって駆け寄って来る。

こんな風に、皆に心配掛けてしまうのも申し訳なくて、辛かった。だが、どうしても今の心境で、嘘でも笑顔を浮かべる事は、彼女には出来なかったのだ。

「そう……。ね。皆にも話した方が良いよね……」

ぽつりと、呟く。

ヒナコは、皆で支えてやれ、とそう言ったのだ。

自分一人で抱えてどうにかなる問題でもないし、何よりこんな大事な事を、仲間である皆に隠しておくべきではないだろう。

「――なんやわからんけど、とりあえず先に飯にしとくか？ 落ち込んだときに腹減ってたなら、なおさら凹むやろ。ちょうど俺らの方にも、レナとミヨに話さんといかん事あったしな」

「話？ 私達に？」

ゴウタの言葉に、レナは訝しがりながら顔を上げる。

ライが、妙に真剣味を帯びた表情で頷く。

「うん、まあ、こっちはもうフウガは知ってる話だから、居なくても問題はないんだけどね」

「……そう。わかった」

ライ達の言う話がどんなものかはわからなかったが、とりあえずレナはそう応えていた。

正直、今は、他の事に思考を回す余裕を失っていたのだ。

「――レナちゃん、とにかく座ろう？」

ぼんやりと立ったままのレナの手を引いて、ミヨが席まで誘導してくれる。

「さて。では、朝食にしようか」

話が纏まったのを見て、ナヅチが落ち着いた声で食事の開始を告げる。

その後、ゆっくりと顔を巡らせると、暗い顔のままのレナを優しい眼差しで捉え、

「……大丈夫だ。フウガ君なら、すぐに戻って来るさ。あの子は、いつまでも君にそんな顔をさせて、平気で居られるような子ではないよ」

と、とても穏やかな声音で、そう言ってくれたのだ。

達観した響きを持つそれは、ほんの少しだけ、ずっと彼女の胸を苛んでいた痛みを和らげてくれる。

「そうそう。フウガ君は、ああ見えて優しい子だもの。だから、あんまり落ち込んでたら駄目よ。そんな事じゃ、可愛い顔が台無しに

なっっちゃうわ」

レナの肩に、そっと後ろから両手を乗せたテナも、まるで子を慰める母のような暖かな声で笑い掛けた。

「元気出せよ、レナ」

「悪人面が苛めたんなら、俺らが成敗するからなー！」

「成敗！ 成敗！」

さらには、子供達が拳を振り上げて、フウガにとっては不幸以外の何物でもない事を言い出す。

「こらこら。貴方達はいつも成敗してるじゃないの、全く」

これにはさすがに呆れたように、テナは苦笑していた。

「……レナちゃん。皆、ああ言ってくれてるよ」

ミヨが微笑みながらレナの手を握って、そう囁いた。

口には出さなくても、彼女もまた自分を元気づけようとしてくれるのが、レナには痛いほどにわかった。

そんな皆の優しさが、再び涙が出そうな程に嬉しくて。

「……はい。ありがとう、ございます」

レナは、その唇に、ようやく淡い笑みを浮かべる事が出来たのだった。

六章 月 その五（後書き）

お読み頂きありがとうございます。

更新が遅くなってしまう、申し訳ありません。
感想などありましたら、ぜひ。

六章 月 その六

フウガは気づいていなかった。

彼が孤児院を離れてから、自分をずっと尾ける存在が居る事を。

だが、それは少年が迂闊なのではない。

彼を尾行する人物は、単なる素人ではなく、確かな鍛錬を積んだ者だったからだ。

そうでなければ、後に合流したウズメまでもが、その尾行者に気づかないという不覚は決して取らなかっただろう。

尾行者は巧みに気配を立ち、人波に紛れ、少年を追い続ける。

しかし、そこに尾行する相手への悪意も殺気もなかった。

あくまで、ただ少年の後を尾けるだけ。

不可解とも思えるその行動は、何かの機会を覗いているようにも見えた。

そして、やはり尾行者には、フウガやウズメへの害意は何一つ存在せず。

だが、その双眸には、ある人種特有の隠し切れない闇があったのだ。

そう。

復讐者の持つ憎悪の闇が。

◇ ◇ ◇

なんて自分は嫌な女なのだろう――

フウガと共に、王都を歩きながらウズメは思っていた。

少年の口から、レナの名前が出た時。

彼女に冷たく当たってしまった事を後悔していると聞いた時。

自分は、どうしようもなく嫉妬していたのだ。

今のフウガは、レナの事だけを考えている。

もちろんそれは、彼女に謝らなければならない、という義務感にも近いものだ。そこに、レナを特別意識した感情があるわけではないのかもしれない。

だが、それでも。

フウガが、自分以外の少女の事を気に掛けているという事実が、どうしようもなく苦しくて、耐えられなくて。

咄嗟に、彼を引っ張って、強引に歩き出していた。

おそらくこんな感情は、大切な誰かを想う人間なら、性別に関わらず誰しものが抱くものだ。

だけど、ウズメは、それに流されて動いてしまった自分自身に嫌悪感を覚え、しかし、そうしてもフウガと共に過ごす時間を手放す事は出来ずにいた。

隣の少年は、無垢なまでに笑っている。

あんな半ば無理矢理にウズメが同行を申し出たというのに、まるで嫌な顔など見せない。いや、実際、彼はウズメに対して、悪感情など抱いてさえいないのだ。

(……それに比べて……私は、なんて醜い……)
でも。

だけど。

もう少しだけ。

一秒でも長く、彼と共に過ごしたい。

そう願う事もやはり……醜いのだろうか？

「先輩」

「え？」

名を呼ばれて、ウズメは振り返る。

フウガが、こちらを見つめていた。

「本当、ありがとうございます」

「……？」

突然の少年の言葉に、ウズメは目を瞬かせる。

文句ならまだしも、礼を言われるなど、予想だになかったのだ。「いえ、俺、ずっとどんな顔で、孤児院に戻ってレナに謝れば良かったからなくて……。でも、こうやって先輩と一緒に歩けたおかげで、大分気持ち紛れた気がするんです。これで少しはましな顔で、レナと向き合えそうです」

そう言って、少年は笑う。

「だから、ありがとうございます」

ちくりと胸が痛む。

どうして、彼はこうも純粹な笑みを向けられるのか。

それが憎らしいぐらい、愛しかった。

「……そんな、礼を言われる事じゃないさ。これは単なる私の我侭だ。本当に、ただそれだけで……」

「でも、それで俺は助かったんですから。行動の理由なんて、気にする必要はないですよ。ほら、さっき先輩の言った『本人が迷惑と思わなければ、それは迷惑じゃない』っていうのと似たようなものです」

「……………」

ウズメは、呆然と目を見開く。

まさか、少女の内心を見抜いたわけでもないだろう。

だけど、少年の言葉は、己を蔑んでいたウズメの気持ちを癒すには十分過ぎたのだ。

「君は本当に……」

その先は言葉にできなかった。

フウガの腕に自分の腕を絡めたまま、ぐいっと身を寄せる。

「わっ、先輩!？」

「ほら、向こう」

「はい？」

「あの露店、何か変わった物を売っているみたいだぞ。見に行こう!」

「せ、先輩、どうしたんですか、急にっ？」

戸惑う少年を引っ張りながら、ウズメは高鳴る胸の鼓動を意識していた。

意識せずにはいられなかった。

少年への恋心の証である、その暖かな音を。

……ああ、君は本当に——どれだけ私を惑わせる。

◇ ◇ ◇

ウズメと王都を見回るといっても、何か特別な場所に行くわけではなかった。特に目的もなく、談笑しながらのんびりと歩き、たまに面白そうな露店や店を適当に覗く。

そんな何でもない行為、平凡な時間。

でも、不思議とフウガは気持ちが高揚していた。

一人の少女とただ過ごすという事が、こんなにも楽しいものなのか、と新鮮な気持ちすら覚えていた。

だから、

（俺は……先輩の事が好きなんだろうか？）

そんな疑問が浮かんで来る。

わからない。

わからなかった。

……いや。

きっと、自分は、少女への想いを自覚する事を無意識に拒否しているのだ。

近い将来、少女の前から——仲間達の前から消えねばならない自分。

ならば、結ばれる事を望む想いなど知らぬ方が良い。

どうせ裏切られる期待など抱かせぬ方が良い。

傷つく事が、傷つけてしまう事がわかっているのなら、誰かを好

きにならぬ方が良い。

そして、もう一つ。

ウズメへの気持ちを自覚出来ぬ理由がある気がした。
それは、孤児院を離れてから、ずっと頭から離れない一人の――

（――いや、やめよう）

フウガは、思考を自ら断ち切る。

こんな事は無意味だ。

もう自らの選ぶ道は決まっている。

だったら、誰が好きかなんて考える必要はないのだ。
そんな風に、フウガが強引に結論づけたときだった。

「この痴れ者が！ 恥を知れ！」

穏やかだった辺りの空気を、鋭い怒号が切り裂く。

反射的に視線を向けると、大通りの真ん中に人だかりが出来ていた。それは、何かを遠巻きに傍観する野次馬の群れのようなだった。

先程の声からすると、間違っても愉快な集いなどではないだろう。

「……何の騒ぎだ？」

不穏な空気を感じ取ったのか、ウズメが表情を曇らせる。

フウガもまた嫌な予感を覚え、少女の方へ表情も陰しく振り向いた。

「少し様子を見て来ます。先輩は、ここで……」

「いや、私も行く」

「駄目です」

予想通りの答えに、すかさずフウガは切り返した。

「その着物、お母さんの形見なんでしょう？ もしも何かあったときに、汚したり、破れたりしたら大変じゃないですか。どのみちその格好じゃ、まともに動けませんし……ここは俺に任せてください」
「……むう」

それでも納得いかないのか、ウズメは逡巡を見せる。

少しだけ悩んだ後、結局、諦めたように息を吐く。

「わかった。だが、忘れるなよ、フウガ。私達、騎士候補生は、その立場故に、学園の外では、〈言力〉はもちろん、武器を振るう事すら著しく制限される。唯一それが許されるのは、本人、または他者に何らかの害が及びそうになった緊急時のみだ。それを破れば、厳しい処罰――最悪の場合は、退学処分と共に、学園から永久追放される事だってある」

それは、王国において神聖騎士という存在が持つ重要性と、〈言力〉という力の危険性を考慮した上での厳正なる規則だ。

神聖騎士を目指す者として、普通の人間にはない力持つ者として、自覚と責任を促す意味もある。

そして、そのどちらをも、フウガは過去の経験から、よく理解していた。

「ええ、わかってますよ」

だから、ウズメの忠告に迷わずそう応えると、声のした方へと向かう。

人の群れを掻き分けていくと、すぐに先程の怒号の主と、その理由が目に入ってきた。

野次馬が囲んでいたのは、三人の人間。

一人は、男。

無造作に伸ばした髪に無精髭。服装もだらしなく乱れ、赤い顔に頼りない足取りは、一見して酒に酔っている事が知れた。

残り二人は、少女。

色取り取りの花々の入った籠を持つ花売りと思いき幼い娘と、フウガより一つか二つほど下だろうと思われる少女だ。

花売りの少女の方に特に変わった点はないが、もう片方は違った。美しい紫色の髪に、簡素な物ではあるが、明らかに上等な衣装。

何より纏う空気に、一般人には決して持ち得ない気品がある。顔立ちだって、ウズメにも劣らない美しさで、その立ち姿だけでも絵になっていた。とにかく、相応の家柄の人間である事だけは間違いない。

さそうだった。

状況としては、酔っ払いの男から、花売りの子を護るように貴族らしき少女が対峙している、といった所だ。

この光景を見ただけで、大体の事情は、すぐに想像出来た。

（質の悪い酔っ払いの男が、花売りの女の子にからんで、それをもう一人の子が助けに入っただけで所か……？）

あくまで推測だ。

だが、男の方はお世辞にも良心的な人間には見えない。

辺りを囲む人間達の会話から判断しても、推測は、さほどの外れではないようだった。

「ああん、何だって……？」

それつの回ってない喋り方で、威圧的に男が言う。

「手前、俺が誰だかわかって言ってるのか、ああ？」

「ああ、わかっておるぞ。汚く無様で、堕ちるに堕ちた酔っ払いじゃ。どこか、間違っておったか？」

「……………餓鬼が。調子に乗るなよ」

「ふん、下種が」

男の恫喝にもまるで怯まず、貴族らしき少女は、腕を組んだまま頭二つは高い相手を睨み返す。

明らかにその場の空気は、より陰悪なものへと向かっている。

周囲の人間もさすがに危険を感じたのか、野次馬をやめる者か、それでも好奇心に負けて留まる者か、の二つに大きく分かれ始めていた。

「まずいな……」

フウガは、焦燥の呟きをこぼす。

同時に、いざという時に備え、ゆっくりと腰の後ろの剣の柄へと手を伸ばした。

あの状況であれだけの余裕があるのだから、貴族らしき少女には何かしら腕に覚えがあるのかもしれない。もしも本当に貴族の、しかも軍閥の娘であるのなら、護身用のために簡単な手ほどきぐらい

はされている可能性はある。そして、相手が単なる酔っ払いなら、その程度でも、あしろう事は出来なくもないだろう。

しかし、あの男は違う。

足元は怪しいし、目の焦点も定まってないような有様だが、目の奥に宿る光や、引き締まった肉体は、紛れもなく戦う者のそれだ。

しかも、そこらのゴロツキ程度というものではない。

元は名のある傭兵か、あるいは賞金稼ぎか。

どちらにせよ、いかにも戦う事に縁遠そうなあの少女では、相手が酔っ払っていても勝てるとは思えなかった。

「……良いだろう。俺に喧嘩を売った事を骨の髄まで後悔させてやるよ……」

そう言って、男は指を噛み切って、しとどに血を溢れさせる。

「！ まさか……！」

フウガは、戦慄の声を漏らした。

男が、石畳に〈言紋〉に訳された自らの名を記していく。

そして、その上に掌を乗せ、紡いだのだ。

「来い！」

血文字より放たれる白き輝きは、世界の息吹——プラナ。

そして、その中に召喚されるのは、無骨な戦斧。

男の〈真名武具〉以外の何物でもなかった。

いくら、酔っているとはいえ、丸腰の、しかも少女相手にそんな物を持ち出すとは、常軌を逸している。

これに野次馬からもとよめきが上がった。さすがに好奇心よりも危機感が勝ったのか、逃げるように人が散っていく。

助けに入るような人間がいないのも無理はなかった。

普通の人間が〈言力師〉相手に立ち向かうなどというのは、確実に勇敢ではなく無謀の部類に入る。そんな事をするぐらいなら、一刻も早く神聖騎士を呼んで来る方が、よほど最善だろう。実際、散って行った人間の何人かは、そのために走って行ったようだった。

「今更、泣いて謝っても、許してもらえと思うなよ」

斧を手にした男が、ゆらりと少女達との間合いを詰める。

怒りと己の武器を手にした事で、幾分か酔いが醒めたのか、足取りも声も平常さを取り戻し始めていた。だが、それが少女達にとって、良い方向に向かっているとは考え難かった。

「……………あ、ああ……………」

「離れるな。大丈夫じゃ」

絶望的な表情で座り込む花売り少女へ、貴族らしき少女は、やはり恐怖の片鱗すら見せずに、威厳の乗った声を掛ける。

しかし、いくら脅威に動じない強心があっても、無慈悲な暴力の前では、蹂躪されるだけだ。

「はっ！ 死んじまえよ、糞餓鬼！」

それをわかつているのだろう、男が嘲笑って、斧を振り下ろす。あろう事か、その叫びには〈具言〉としての意味も持たされ、斧の刃に無色の破壊の力が付加される。

「……………」

死を目前にしても、貴族らしき少女は揺るがない。

そんな物は自らに訪れないと一人悟っているかのように、ただ落ちて来る終焉を見据えていた。

そして。

「烈風、研ぎ澄ませ！！」

確かに、それは訪れなかった。

瞬間に、男と少女の間に割って入ったフウガ。

彼の手にする風纏う二刃が、体重を乗せた斧の一撃を阻み、弾いたのだ。

「何いっ!？」

瞠目した男が、斧を弾かれた勢いのまま後方に跳び、着地する。酔いが醒め始めているとはいえ、不意打ちにも体勢すら崩さない。

「……………お主は」

自らを護ってくれた少年の背中を僅かに目を見開いて見つめ、少女は呟く。

そこには、驚愕と――何かを訝しがる響きがあった。

「そこまでだ。もうすぐ神聖騎士も来る。下手に罪を重くしたくなかったら、大人しく武器を収めろ」

やはり相手が手錬れである事を確認しつつ、フウガは警告する。事ここに至っては、もはやフウガが剣を振るった所で誰も咎める事もない。

次なる行動に備えて、汲み上げたプラナを全身へと送り、へ龍身への効果を確かなものとする。

男は驚愕から抜け出すと、鼻で笑った。

「はん……舐めてんのか、坊主。お前のその格好、騎士候補生だろう。まともに実戦も知らないような青臭い餓鬼が俺に勝てるんでも？」

「挑発はいい。武器を収めるのか、収めないのか。どっちだ」

「決まってんだろ」

にいつと、男の口が醜惡な笑みで歪む。

「知った事かよっ！」

「っ！」

想像以上の速度で、男が間合いを縮めて来る。

斧は横薙ぎに、フウガの右の脇腹へと疾った。

避けるわけにはいかなかった。

そうすれば、背後の少女達に一撃が及んでしまう。

「ぐっ！」

咄嗟に脇腹と斧との間に、イザナギを挟んで受け止める。

目前で金属同士の衝突による火花が散り、右腕から全身に容赦なく衝撃の余波が襲い掛かった。

それでもその場で踏ん張り、逆の刃を男へと突き入れた。

しかし、苦し紛れの攻撃は、容易く回避され、お返しに言わんばかりに、跳ね上がった男の膝がフウガの腹部を打ち抜いた。

「か……はっ！」

咄嗟に後ろに跳び、威力は半減させている。

しかし、完全に殺し切れない凄まじい衝撃に、少年の身が僅かに浮く。

「くたばれや！」

無防備になった所に、振り下ろされる斧。

フウガは苦痛に顔を歪め、戻しそうになった物を無理矢理に飲み込んで、叫んだ。

「旋、風、渦巻け……っ！」

まともな声量も出せず、ろくにイメージを固める事も出来なかったその〈言力〉によって生まれたのは、ほんの小さな風の渦。

だが、それによって巻き上がった砂塵が、狙い済ましたように男の目へと飛び込んだのだ。

「なっ！　っあ、手前！」

男が怯んだ隙に、フウガは体勢を整えると、

「少しだけごめん！」

一言謝って、背後の少女二人を、それぞれ両腕に抱える。

「おおっ」

「きゃあ!？」

一足で、大きく跳躍。

それだけで、フウガの危機を見て、こちらに駆け寄っていたウズメの所まで移動する。

「先輩、二人をお願いします」

「ああ、わかっている」

ウズメに少女達を預けて安全を確保すると、フウガは再び男の方へ歩み寄り、対峙する。

「……やってくれたな」

視界を取り戻した男は、低い声を吐き出す。

放たれる殺気は、まるで突き刺さる槍のようだった。

フウガは何も返さず、無言で剣を構えた。

いきなり攻撃を仕掛けて来た時点で、話が通じるような相手ではない事はわかり切っている。ならば、神聖騎士が駆けつけるまで粘

るか、ここで男を叩き伏せてしまおうしか解決の道はないだろう。
そして、問題があるとすれば。

目の前の男が、想像以上に手強いという事か。

男が斧を一振りして、一步踏み出す。

「後悔させてやる。仮にも、元神聖騎士相手に剣を向けた事を」

「……………な」

不意に、男が口にした一言に、フウガは言葉を失う。

……神聖騎士？

父と母と同じ、王に忠誠を誓い、国を民を護るべき者？

元とはいえ、この男が、そうだというのか？

「せいぜい候補生如きと本物の神聖騎士の格の違いってやつを思い知るんだなっ」

「……………」

男の声など、もう少年の耳には届いていない。

無言で俯き、ただ佇んでいる。

「ああん？ 聞いてんのか、餓鬼」

元神聖騎士だという男は気づかない。

少年の空気が、存在が、決定的に変貌している事を。

真っ先にそれを気づいたウズメが息を呑んだ。

「まさか、これが……」

少年の左顔面から、亀裂の痣がゆっくりと浮かび上がる。

彼の存在が少しずつ、ひび割れ、砕け、崩壊する。

その代償の果てに、少年は欠落の騎士へと回帰する。

「な……んだ、そりゃあ……？」

痣を目にした男が、戸惑いの声を漏らす。

「神聖騎士だと……？」

少年が言った。

声が剣を握る手が、怒りに打ち震えていた。

「お前が、親父と母さんと同じ、騎士だと……？ 無力な者に刃を向け、墮落した姿を晒すお前が……？」

顔を上げる。

咆哮する。

「認めるものか、そんな事を——っ！」

刹那。

ウズメは、次の瞬間には、目の前に広がるだろう惨劇を悟る。それを止めようと、声の限りに叫んだ。

「駄目だ！ フウガ！！」

——遅過ぎた。

「疾く、駆けよ」

〈具言〉の詠唱と共に地を蹴り、フウガはその姿を消失させる。

一瞬で、男の眼前。

「——っ!？」

あまりに突然な少年の速力の上昇に、男はまるで反応出来ず、棒立ち。

フウガは躊躇う事なく、右の刃を振り抜く。

狙いは、首。

刎ね切るに十分過ぎる速力と角度。

もはや血と死の惨劇は、誰にも避けられないように思えた。だが。

刃は、別の何かに阻まれたのだ。

「……………!」

甲高い衝撃音と共に、フウガが目を剥く。

自身の剣を止めたのは、薄汚れた外套を纏う一人の青年と彼の手にする鞘に収まったままの刀。

謎の青年の姿がぶれる。

「がっ!？」

転瞬、元神聖騎士の男が膝を折って、崩れ落ちた。

男の腹部に、青年の肘による強烈な一撃がめり込んでいたのである。

不意を突いたとはいえ、ただの一発であの手強かった男を倒してしまうのは、青年が只者ではない証明でもあった。

「君」

啞然と固まって動けないフウガの腕を、青年が掴む。

「え……？」

予想外の展開に怒りも忘れ、痣も消えたフウガが、青年を見返す。「逃げるよ。もうすぐ神聖騎士が来る。状況的に仕方なかったとはいえ、君だって立場を考えたら、このまま捕まるのは避けたいんじゃないのかい？」

「――」

青年の正体は知れない。

だが、確かに彼の言う事は正論だった。

このまま神聖騎士に捕まれば、しばらくは解放されないだろうし、ウズメにも迷惑を掛けてしまう。彼女本人は気になどしないかもしれないが、フウガはそれを望まない。

フウガは青年に対して頷きだけで返答すると、

「先輩！」

と、少女の名を呼んだ。

ウズメの方も、それだけで事情を察したのだろう。傍に居る少女二人に何か声を掛けてから、こちらに向けて駆け寄って来る。

「よし、行こう」

先導するように青年が駆け出す。

それと入れ替わるように、ウズメがフウガの傍に近づく。

「……フウガ。彼は？」

「わかりません。……とにかく後は神聖騎士に任せて、今は、この場を離れましょう」

少女の問いに短くそう返して。

フウガもまたウズメと共に、青年の後を追って走り出したのだった。

六章 月 その六（後書き）

お読み頂きありがとうございました。

六章 月 その七

「アシハマ・ヒルコ。何か申し開きはあるかしら？」

神聖騎士団、第四師団・師団長——現在は神聖將軍代理であるオヤマ・クシナは、静謐な双眸を男へと向けていた。

場所は、つい先程まではフウガが戦いを繰り広げていた大通りの一角。

クシナの視線の先に居るのは、両腕を縄で縛られ、左右から騎士達に拘束されている、元神聖騎士の戦斧の男だ。

フウガ達がその場を離れてまもなく、神聖騎士達が到着。崩れ落ちていた男——ヒルコは、そのまま騎士達に捕らえられたのである。

「はん。わざわざ騎士団参謀の御登場とは大層な事だ」

ヒルコは、クシナを見上げると、意味ありげな嘲笑で口元を歪めた。

「……まあ、そうだよなあ。元神聖騎士が罪もない民に武器を向けたなんて、そんな恥晒しを見過ごすわけにはいかないもんなあ。そんな事をすりゃあ、皆の憧れ神聖騎士団様の面子は丸潰れってわけだ。いや、もう潰れてたかな……？」

それこそが目的だったと言わんばかりの物言い。

ヒルコは喉の奥で、くっくつと笑った。

「貴様……口を慎め！」

その不遜な態度に、脇に居た騎士の一人が激昂しかける。

「お止めなさい」

即座に、クシナの厳しい声が、それを止めた。

「しかし……クシナ様」

「良いのよ」

彼女は怒りの片鱗すら覗かせない。

ただ静かにヒルコを見据え、言葉を紡ぐ。

「ヒルコ。貴方は、何か勘違いしているようね」

「んだと……？」

訝しむように、ヒルコが目を細める。

「私は——いえ、私達は、騎士団の面子などに興味はないわ。神聖騎士団は、陛下とこの王国、そして、陛下の愛する無辜の民を護るためだけに存在している。だから、貴方がかつて神聖騎士であったという過去など問題ではない。私達が許せぬ事があるとすれば、貴方がその民に危害を加えようとした事実のみよ」

「……そうかい。ああ、そうかよ」

ぎりぎりと言を立てて、ヒルコは歯噛みする。

嘲笑していた面には、今は、抑え切れぬ怒りが浮かび上がっていた。

「俺みたいな野郎は、神聖騎士だったという過去すら認めないってわけか。クシナさんよ」

「関係ないと言っているだけよ。何より、貴方が騎士団を除隊させられたのは、貴方自身の普段の素行が、あまりに目に余ったせいでしょう。——己の未熟の責任を、他者に押し付ける事でしか許容出来ない。ああ、確かに貴方のような男は、神聖騎士には相応しくなかったかもしれないわね」

クシナの並べる言葉は、どこまでも辛辣で、そうでありながら嘲りは何一つ含まれていない。だからこそ相手は、その言葉の意味を否が応でも、真っ直ぐに受け止める事になる。

「手前っ！」

凶星を突かれ、ついに怒りが臨界点を越えたのか。

ヒルコが騎士達を強引に振り払って、前に出ようとする。

「そういうおためごかしが！俺を見下したその態度が……！」

「っ！ ヒルコ！」

「大人しくしろ！」

「あんたの部下だった時から、ずっと気に食わないんだよ——！」
獣のように、吼える。

ぶちぶちと何かが千切れる音がした。

腕を封じていた〈言力〉封じの〈言紋〉の刻まれた縄。それを、ヒルコが驚異的な臂力で強引に引き千切ったのだ。

この異常な行動に、さすがの神聖騎士達も虚を突かれ、咄嗟にヒルコを止められない。

「死ねえっ！」

ヒルコは、血を溢れさせる手首を無視して、殺意を叫ぶ。

同時に、全身から強烈な衝撃波が、クシナへ向けて放たれた。

「――だから、貴方は愚かだと言っているのよ、ヒルコ」

だが、突然の事態にも、クシナは動じない。

両肩に羽織っていた薄手の羽衣を、横に掲げた腕へと滑らせる。

「カゲロウ――払いなさい」

囁くような命令は、〈具言〉。

それに応じて、羽衣が生き物のように優雅に宙を舞う。

一見すれば、路傍の小石すら防げそうにない薄布。

だが、それはヒルコの放った一撃を容易く受け止める。さらに、それだけに留まらず、威力もそのままに跳ね返したのである。

「なっ……！」

軌道を巧みに変化させられた衝撃波は、ヒルコの目の前で弾けた。大通りに轟き渡る爆音。

数秒後、晴れた粉塵の後には、大きく陥没した石畳があった。

まともに食らっていれば、人間など容易く物言わぬ肉片へと変えられる威力だ。だからこそ、クシナの所業が、どれほど信じ難いものかが知れるというものだった。

それを為した物が、彼女の〈真名武具〉――カゲロウ。

見た目こそ、脆そうな羽衣ではあるが、その中には鋼糸が幾重に編み込まれ、そんな印象を裏切る強度を誇っている。だが、あくまで羽衣である以上は、普通に振るっただけでは、武器としてのまともな威力は望めない。その扱いを熟知した彼女の類稀な技術と〈言力〉があつてこそ、カゲロウは武器としての真価を発揮出来るのだ。

「……………」

頭上から、舞いあがった石畳の破片がばらばらと落ちる中。

格の違いを思い知らされたヒルコは、啞然とした表情で、膝から頷れる。

そんな男に対し、クシナは最初から変わる事のない静かな口調で言った。

「貴方が騎士団を逆恨みし、その威光を墮とそうとした所で無駄な事。貴方一人の行動で揺らぐような神聖騎士団ではないわ。所詮、墮ちるのは貴方だけなのよ。その事を理解なさい」

弾劾するというよりも、むしろ優しく諭すような口調。

あるいは、かつての部下へ対する、彼女の最後の慈悲だったのか。

「……………」

もはやヒルコは、嘲笑も反論もしない。

ただただ、何かを思い知らされたように、黙って俯いていた。

「貴方の愚行を止めてくれた、騎士候補生に感謝しておきなさい。

誰も殺めなかったのなら、生きているうちには、再び日の光の下に出る事も出来るでしょう。――連れて行きなさい」

「……立て、ヒルコ」

部下の騎士達が、再びヒルコの腕を縄で封じ、彼を罪人用の馬車へと連行して行く。もはやヒルコは、抵抗一つする事はなかった。

「……………」

それを見届けた後、クシナは無言で踵を返した。

向かうのは、ヒルコが乗せられたのとは別の、巨大で豪華な馬車だった。彼女は、それに乗り込むと、内部の席に腰を下ろす。

「……お怪我は？」

前を見据えたまま、クシナが訊いた。

「問題ない。妾は無傷だ」

不遜とも思える態度と声で、返事があった。

応えたのは、つい先程、花売りの少女を庇っていた、貴族らしき少女である。

少女は足を組んで、逆に問い返した。

「それよりも、あの花売りの娘はどうした？」

「大丈夫です。あちらも怪我一つありませんでした。私の部下に、ちゃんと家まで送らせましたよ」

「そうか。なら良い」

少女は満足気に頷く。

クシナは呆れ果てた様子で眉間に皺を寄せ、嘆息した。

「何も良くはありません。何度申し上げたら理解して下さいのですか。よりにもよって、將軍閣下不在の時に、勝手に王城を抜け出すとは……非常識にも程があります、“陛下”」

今、この場にフウガ達がいれば、このクシナの発言に、間違いなく驚愕していた事だろう。

——そう。

この少女こそが、アマテラス神聖王国、第七代国王、スメラギ・ミコト。

ヤマト最強最大の王国を治める唯一無二の王、その人だったのだ。ミコトは、クシナの非難の言葉に、不満そうに美麗な顔をしかめた。

「何を言っておる。ヒヤギが居ないからこそこの機会ではないか。それに、ちゃんと影も置いておいたじやろう？」

「そういう問題ではありません。仮にも今年、齢四十になられる方が、そんな子供染みた行動を取られるものではないでしょう」

「こら。年の事を言うな。この通り、妾は麗しい乙女なのじゃぞ？ そんな無体な事を言われては、妾の繊細な心が傷つくではないか、ああ、酷いわ！」

芝居じみた仕草で、ミコトが嘆いた声を上げる。

クシナは、再び溜息を漏らした。

「軽く二百年は生きられる王族の方が何を……。私達の感覚に当てはめれば、まだ二十程度ではないですか。——というか、話題を摺り替えようとなさらないで下さい」

「むう……」

ミコトは嘆きの体勢を解いて座り直すと、腕を組んで唸った。

「まあ、良いではないか。我が国の民は、着飾って厚化粧した王の姿しか知らん。すっぴんで簡素な格好しておれば、バレはせんよ」

「バレる、バレないの話ではないのです。一国の王が、こうも好き勝手に行動されては、その下に従う者達に混乱をきたします。あるいは、忠誠心にも影響するかもしれません」

クシナの苦言を、ミコトは鼻を鳴らして一蹴する。

「ふん、その程度で揺らぐ忠誠なぞ、最初からいらんよ。それともクシナ。お主は、王城に引き籠もって、世間も知らず、ただ偉そうに王座でふんぞり返っている王が望みか」

「貴女は、外でも中でもふんぞり返っているではないですか」

「……………お主、さりげなく酷いな」

少し凹んだ様子のミコトは、恨みがましくクシナを横目にする。

しかし、当のクシナは、まるで意に介さず話を続けた。

「別に私は、陛下が外の世界を見ようとする行為自体を咎めているわけではありません。ただ、無断で行動されたせいで護衛もつけられず、陛下の身に危険が及んだ際に、護る事が出来ない事を憂慮しているのです。まさに、今回の件がそれでしょう」

「この妾が、あの程度の男に屈するとしても？」

「屈しはしないでしょう。ですが、私達には私達の立場があります。一体何のために、国王直属の近衛騎士である第八師団の皆が、日々腕を磨いているか御理解頂けていますか？」

「……………」

痛い所を突かれたのか、ミコトは口の端を引きつらせて、反論を止める。

「……………わかった。わかった。妾の負けじゃ。今後は出来る限りは、お主達に声を掛けてから、外に出よう」

結局、ミコトは観念した様子で、顔の横でぞんざいに手を振った。しかし、クシナはそれでは納得せず、

「出来る限りではありません。か・な・ら・ず・です」

と、一部分を強調して言ったのだ。

表情こそ穏やかなのに、その異様な迫力たるは、煉獄の鬼を連想させた。

「そ、そうじゃなつ。必ずじゃ」

そんなクシナの圧力に、さすがのミコトも気圧されたのか。

仰け反りながら、どもった答えを返した。

ミコトの返事を聞いた途端、クシナは矛を納め、にっこりと笑う。

「陛下の寛大な御心に感謝します。ええ、本当に」

「…………それは良かったの」

敗北者の哀愁を漂わせながら、ミコトはぽつりとこぼした。その後、こほんと気を取り直すように咳払いをする。

「まあ、それはともかく。王城へ戻るぞ、クシナ」

「御意に。馬車を出して」

クシナの命に従って、御者が馬車を走らせる。

しばし馬車が揺れるに任せてから、改めてミコトが口を開いた。

「…………それでじゃ」

「何でしょうか」

「しらばつくれるな。妾を助けに入った、あの騎士候補生の少年――あれは、最近、オロチに憑かれたというラシンの息子じゃろう？」

途端、クシナが瞠目する。

彼女は、あの時、ミコトとフウガが、まともな会話すら交わしていない事を目撃者から聞いた話より知っていたのだ。

「…………よく、おわかりになられましたね」

「舐めるでない。あの二振りの剣に、独特の髪と瞳の色。何より纏う空気が、あの男の息子だと妾に告げておったよ。…………して、後から駆けつけたお主は、どうして、そうだとわかった？」

「わかりますよ」

クシナが、初めて厳しい表情を崩して、暖かな微笑を見せた。

彼女にとって、その少年は、特別な意味を持つ存在だったからだ。「目撃者から、立ち去った騎士候補生の容姿については聞き出せま

「妾を誰だと思っておる。当然じやろう」

ミコトは、「そんなもの褒め言葉にもならんよ」と笑った。

逆にクシナは、蒼の双眸に憂いを過ぎらせると、辛そうな顔で俯く。

「彼には……フウガ君には、そうならざるを得なかった過去があるのです」

「――九年前、ヒスイが逝き、ラシンが騎士を引退した件じゃな」
すぐに察して、ミコトが言った。

その顔は、何かに耐えるように引き歪んでいた。

王である彼女もまた、九年前の悲劇を嘆き、胸を痛めた一人だった。

ラシンとヒスイ、そして、ミコト。

三人の関係は、王とそれに仕える騎士というよりは、心許し、共に笑い合う親友と呼ぶ方が近かった。だからこそ、その悲嘆は、より深いものがあつたのだろう。

クシナは小さく頷き、さらに続けた。

「私は、その事件の直後から、彼の事を知っています。まるで取り憑かれたように妖魔を狩り続け、その存在を自ら傷つけ続ける彼を。出来るならば救ってあげたいと思いました。しかし、彼が背負う傷の前では、私達はおよそ無力でしかありません。あれは、彼自身が乗り越えねばならない。そして、乗り越えたとしても、本当の彼が戻るかどうかは……」

最後まで言葉を続けられず、クシナは下唇を噛んだ。

孤児院に居るレナと同じく、彼女もまた自身の無力を嘆いていた。しかし、

「じやろうな。だが、問題はない」

そんなクシナへ向けて返ってきた応えは、その場の重い空気をぶち壊さんばかりに、ことさら明るかった。

「……………え？」

クシナが、珍しくぽかんとした顔で、自身の仕える主へと振り向

く。

「あやつは、そう容易く終わるような男ではないよ」

王国の頂点に立つ少女は、それにふさわしい不敵な笑みを浮かべていた。

「ああ、もちろん、ラシンの息子だから、などという下らん理由ではないぞ？ あの手も大概にしぶとかったが、父は父、息子は息子じゃ。あのスサノ・フウガという少年だからこそ、妾は断言する」

「……………」

無言のクシナに、ミコトが不満を隠さず、半眼になる。

「なんじゃ。王の言葉を信じられぬか？」

「陛下。それは、単なる直感と確信——どちらですか」

クシナは、真っ直ぐにミコトの目を見据えて、逆に問い返した。対し、何を言うかとミコトは、口の端を吊り上げる。

「確信じゃ。王たるもの、例え目の前に広がる可能性が限りなく細いと知っていても、己が是と思えば、必ず確信を持って是とする。それを貫き通し、現実のものとする。迷う事も、戻る事も許されん。それが、王の器と責務というもののよ。故に、妾が信じる限り、あの少年は終わらんだ。決してな」

言葉通り、ミコトの言葉には、確信以外は微塵も存在しなかった。それは己が王であるという誇りと——その麗しい容姿にはまるでそぐわぬ、偉大なる彼女の器故か。

それを理解してか、クシナは、思わずといった風に苦笑を浮かべていた。

「なるほど。陛下らしいお答えです」

そして、ゆっくりと背後を振り返る。

小さな窓の向こうのどこか。

そこに、あの少年が居る事を知っているかのように。

「では、私も信じましょう。……いえ、これまで通り、信じ続けましょう。彼の、強さを」



「さて、もう平気かな」

五分程して、前を走っていた青年が足を止めた。

フウガとウズメも合わせて走るのを止める。

あれだけ走っても息一つ切らしていない青年は、笑顔で振り返った。

「怪我とかはないかい？」

「え、ええ。俺は大丈夫です。少し蹴られただけですし」

友好的な態度に戸惑いつつも、フウガは肯定した。そして、改めて青年の風貌を確認してみる。

（旅人……か？）

雨風を凌ぐための薄汚れた外套に、軽く日に焼けた肌。腰には、ついさっきフウガの剣を止めた刀が、鞘に納まって下がっている。

ウズメのカグツチとは違って、標準的な長さの物だ。

顔つきは、非常に温和で、どちらかと言えば童顔だった。しかし、言葉の端々から感じ取れる落ち着きからして、確実に自分達より七八歳以上は年上だろうと判断する。

「僕は、ハヤザキ・ムソウ。見ての通り旅の者だ。よろしく」

ムソウと名乗った青年は、フウガの印象通りの答えを口にして、手を差し出してくる。

その手をフウガとウズメは、それぞれ握り返した。

「俺はスサノ・フウガです」

「ツクヨミ・ウズメです」

握った手は、思った以上に無骨だった。

父親であるラシンを思い出すその感触は、紛れもない剣を握る者の手だ。しかも、並大抵の修練によるものではない。

互いに自己紹介を終えた後、フウガは青年へと疑問を投げる。

「あの、ハヤザキさん……」

「ああ。ムソウで良いよ。僕もフウガ君とウズメさんと呼ぶから」

「……それじゃ、ムソウさん。どうして、あの時、俺を止めてくれたんですか？」

未だに青年の真意は知れなかった。

とても悪人には見えないが、万が一という事もある。

問う声には、自然と厳しいものが混じってしまっていた。

それに気づいたのか、ムソウが困った顔をして、少し首を傾げた。

「迷惑だったかな」

「いえ、そうではないんです」

フウガは頭を振って、否定する。

「むしろ、礼を言いたいぐらいで。ムソウさんが止めてくれなかったら、俺は街中で、人を一人殺めてしまっていたかもしれない。そうなれば、どんな事情があったにしろ、ただでは済まなかったでしょう」

今では、あの時の激情も収まり、逆に軽率な自身の行動への後悔だけが残っている。

例えば、神聖騎士といえども、全ての人間が清廉潔白なわけではない。そう在るべきなのは確かなのだろうが、人という生き物は、そんな理想を完璧には体現出来ないのだ。

頭ではその現実を理解していながら、感情に流されてしまったのは、ただ未熟であったというしかないだろう。

自責の念に駆られるフウガに対し、ムソウの答えは酷くあっさりしていた。

「うん、そうだね。つまり、僕の理由もそういう事だよ」

「え？」

「君みたいな人が――そう、危機に陥っている女の子を迷わず助けに行けるような人が、あんな男の血で、手を汚すのは見たくなかった。それだけさ」

「……………」

気持ち良い程に真摯な響きを持つムソウの言葉からは、まるで嘘は感じ取れなかった。

真実、口にした通りの理由で、彼は行動したのだと――そう聞く者を確信させる程に。

だから、気づけばフウガも、内に残る重い気持ちも忘れて、破顔していた。

「……理由は、わかりました。だから、改めてお礼を言わせて下さい。……ムソウさん、俺を止めてくれて、ありがとうございます」
「うん、どういたしまして」

ムソウは首肯し、優しい微笑を浮かべた。まだ会ったばかりだというのに、不思議な親しみを感じさせる笑顔だった。

その後、ムソウは、何故か視線をウズメの方へと移動させる。

「……何か？」

自身の行動を気に病んでいた様子のフウガが、笑顔を見せた事に安堵していたのか。

ひっそり微笑していたウズメは、青年の視線を不快に感じた様子もなく見返した。

際立った容姿を持つ彼女からすれば、人の視線に晒される事など日常茶飯事なのだろう。

しかし、それでもムソウは申し訳なさそうに、頭を掻いた。

「いや、ごめん。もしかして、ツクヨミっていうのは、あのツクヨミかなあ、と思ってね」

それを聞いたウズメは、納得したように苦笑した。

「ああ、それならたぶん、ムソウさんの思ったツクヨミで間違いないと思います。他にそんな姓の家は、この王都には在りませんしね」

「やっぱり、そうか。いや、驚いたな。あの軍閥の名門、ツクヨミ家の御令嬢とこんな場所で会えるなんて」

「大袈裟ですよ。どれだけ立派な家で生まれようと、それで人の価値が全て決まるわけではありません。私は、まだまだ未熟者です」

むしろ、自分を戒めるようにウズメは言った。

家名に溺れず、決して慢心しない。

そんな決意を感じさせる台詞。

（先輩らしいな……）

そう思って、フウガは微笑した。

だが、次の瞬間。

ムソウが何気なく口にした言葉に、少年は酷く狼狽する事になる。
「確かにそうだね。それで、二人は恋人同士か何かなのかな？」

「……………へ？」

あまりに想定外の質問に、フウガは呆氣に取られる。

その反応に、ムソウが目を瞬かせた。

「あれ、違った？」

すると、すかさず。

「いえ、間違っていますよ」

と、ウズメが恥らうように頬を染めて、そんな事を言ったのである。

「え……………えええっ!？」

だから当然、フウガは、全身全霊を込めて驚愕した。

みつともないぐらい慌てて、少女の真意を問い質そうとする。

「いやいやいや！ 何を言ってるっ!」

「と、そんな関係になれたら良いな、と常々思っているんです」

「……………って、せんぱい?!」

思わぬすかしに、フウガは振り返った勢いのままずっこけそうになって、その場に両手を突いた。その後には、ほんの一瞬のやり取りだったというのに、一時間は全力疾走したような疲労感が襲ってくる。

冗談にしては、あまりに心臓に悪い。

特にフウガにとっては、なおさらである。

「ははははっ、なるほど、そういう関係か。よくわかったよ」

ムソウが耐えられなかった様に、声を出して笑う。

傍で、ウズメも笑いを必死に噛み殺していた。

「二人共、酷過ぎる……」

『全くだな』

と、そこで聞こえたのはオロチの念話だった。

フウガは、意外そうに目を瞬かせる。

「え？ オロチ……？」

『もう一押しすれば、さらなるフウガの醜態を見る事が出来たというのに、詰めが甘い！』

「埋められたいんか、お前は！」

珍しくまともな反応をしたかと思えば、結局はいつも通りだったオロチに、フウガは半ば殺意混じりに突っ込む。もちろん、ムソウに気づかれぬように小声で、である。

「いや、ごめん。思わずね。怒っちゃったかな」

なんとか笑いを収めたムソウが心配そうに訊いてくる。

本気で氣遣っているかわかる声に、

「いえ、平気です……。いつもの事ですから」

と、なんとか笑顔を見せて、フウガは応える。

途端、ムソウは、同情した表情を浮かべた。

「……そうか。大変だね、それは……」

「……………はい」

こういう反応も、それはそれでなんだか切なくて、複雑な表情でフウガは頷く。

そんなフウガの様子を見て、ムソウは良い事を思いついたように掌を打った。

「そうだ。せっかくだし、お詫びも兼ねて食事でも奢るよ。ちょうどもう、お昼だしね。」

「え？ いや、そんなっ。むしろ、こちらがそうしなきゃいけないぐらいなのに……」

フウガは咄嗟に辞退の言葉を口にしようとする。

それと同時にあった。

どこか間の抜けた音が、少年の腹部から鳴り響いたのだ。すなわち、空腹を訴える腹の虫が。

「あ……」

そういえば、孤児院からは朝食も食べずに出て来たのだ、と思いつく。

ウズメに連れ回されてる時や、先程の騒ぎの時は、そんな事へ気を回す余裕はなかったが、今になって緊張の糸が切れたらしい。

「どうやら、君のお腹の方は諸手を上げて、喜んでくれてるみたいだね？」

ムソウは、フウガのお腹を指して、悪戯っぽく言った。

「……申し訳ないです」

続く恥の上塗りに、フウガは顔を赤くして俯いた。

もちろん、さっきから念話でオロチの含み笑いが聞こえてくる件に関しては、後でじっくりと文句を言ってやろうと心の中で固く誓う。

「良いんだよ。これは僕が勝手にそうしたいだけなんだから、遠慮なんていらさないさ。——ウズメさんも、それで良いかな？」

「ええ。御馳走になります」

好意に対しては遠慮しないのが、彼女の人と接する際の姿勢なのか、ウズメの方は、意外にも躊躇いなく承諾する。

（ああ……今日は失態ばかりだな、俺……）

フウガが一人項垂れる中、こうして三人での食事が決まったのであった。

六章 月 その七（後書き）

お読み頂きありがとうございました。
感想などありましたら、ぜひお気軽に。

第六章 月 その八

「人探し……ですか？」

頬張っていた焼き鳥を飲み込んだフウガは、円卓の対面に腰掛ける青年に問い掛けた。

「うん。僕が王都に来たのは、ちょっと会いたい人がいてね」

頷いたムソウは、御飯粒一つ残さず空にした丼の器の上に、箸を揃えて乗せ、

「ごちそうさま」

と、手を合わせる。

フウガ達が居るのは、広大な王都の中で、最も人の集う広場の一つ。

そこに拠を構える、店の外にまで円卓と椅子を並べ、庶民向けの安価で大味な料理を売りにしている食事処だった。ちょうど昼時という事で店内は満員だったため、フウガ達も外で食事を取っていたのだ。

ともかく、悪く言ってしまうえば、そういう粗雑な店である。

当然、ウズメのような貴族の人間など周囲には一人も居らず、居るのは平民や旅人ばかりだ。故に、その際立った美しい容姿はさる事ながら、着物で着飾った彼女は、かなりの人目を集めていた。さらに最初は、ムソウもフウガも、こんな庶民向けの店の料理が彼女の口に合うのか、そもそもこんな店で良いのか、と、店側からしてみれば失礼千万な心配をしていたのだ。

しかし、当の本人は、そんな周囲の状況を全く気にする事なくこの場に順応し、今では、焼き魚を中心にした定食を上品に口に運んでいたらしい。

そして、そんなウズメの様子を見て、余計な心配だったと悟った二人も、現在はどう、無駄な事に気を回すのは止める事になっていた。「それで、お探しの人は、もう見つかったのですか？」

音一つ立てずに茶をすすり、ウズメが訊いた。

最初こそ目立っていた彼女だが、何だか今となっては、この場に馴染んでしまっていた。

「世話になってばかりはいられませんし、もし良ければ、俺達も協力しますよ」

フウガの提案に、ムソウは微笑と共に首を横に振った。

「いや、大丈夫。実はもう、探し人は見つかったも当然でね。あとは、会いに行くだけなんだよ」

「あ、そうなんですか。それじゃあ、その途中でさっきの騒動に……?」

「……うん。ちょっと違うんだけど、そう間違ってもいないかな」
応えるムソウの言葉には、僅かに言い淀みがあった。

何か違和感を覚える。

(何、だ……?)

ムソウは、おそらく誰から見ても、人の良い好青年に映るような人間だ。実際、フウガは、彼にはつい先程、救われたばかりでもある。

だが、今の一瞬。

何か、そんな印象を裏切る、暗い物が過ぎった気がしたのだ。

どこか懐かしく、忌まわしく……フウガにとっても、決して縁遠くない感情。

「ああ、そういえば」

しかし、それが何か――

フウガが答えを出す前に、ムソウが尋ねてくる。

「昔、神聖騎士団にスサノ・ラシンっていう有名な騎士がいただろう? 確か、戦神とも呼ばれていた。今は怪我で引退してしまったそうだけど……彼って、フウガ君と同じ苗字だよね。何か関係があるのかい?」

「え……。ああ、まあ、その……」

今度は、思わずフウガが言い淀んでしまう。

別にラシンの息子である事に負い目があるわけではない。

知られても問題があるわけでもない。

ただ、自分がかつての英雄から、騎士としての命を奪ってしまっ
たという事実が、咄嗟に答える事を拒ませていた。

「――フウガ」

脇に座るウズメが、そつと声を掛けてくる。

声音と視線だけで、彼女が何を言いたいかは、すぐに察せられた。

――もしも、彼に明かしたくないなら、自分が上手く誤魔化すぞ？

ウズメは、そう言っているのだ。

フウガの心情を慮った、少女の優しい気遣い。

だけど、それに甘えるわけにはいかなかった。

どんなに目を逸らした所で、過去に起きた現実は何一つ変わり
しない。

ならば、向き合わねば。

フウガが決意を持って全てを明かし、それを笑顔で受け止めてく
れた仲間達の気持ちに報いるためにも。

「たぶん、ムソウさんも大体予想は出来ているとは思いますが……
：俺は、そのラシンの息子なんです」

ムソウと真正面から向き合い、フウガは、はっきりと言い切った。
「……そうか」

やはり予想していたのか、青年は特に驚いた様子もなく、その言
葉を受け入れていた。

「さっきは、咄嗟にラシンとは結びつかなくて、思い至らなかった
んだけどね。しかし、凄いな。こんな言い方を君達は望まないだろ
うけど、ツクヨミ家の人間と、かつての英雄の息子――そんな取り
合わせに、王都に来て、すぐに出会うなんてね。はは、僕も変わっ
た縁に恵まれているのかな」

頭を掻きながら、おかしそうにムソウは笑う。

彼の笑顔には、フウガがラシンの息子と知った今でも、まるで変化はなかった。

九年前の真実を知らないのならば、それも当たり前なのかもしれない。

だけど、フウガにとっては、自分の素性を知っても何も変わらぬ青年の態度は、不思議と好ましく映っていた。彼ならば、九年前の真実を語ったとしても、同じような笑顔を向けてくれるかもしれない、と、そんな勝手な期待までしてしまう。

しかし、ここでそれを語るつもりはない。そして、今後もきっと、そんな機会はないだろう。

青年とフウガ達は、王都で偶然に出会った他人――少なくとも今は、ただそれだけの関係なのだ。

その後は、ムソウも氣を使ったのか、ラシンの件に、もう触れる事はなかった。

しばらく、三人は他愛のない談笑をして、

「――さて」

と、全員が食事を終えた所で、不意にムソウが立ち上がった。

「それじゃあ、僕はそろそろおいとまするよ。せつかく二人きりの所を邪魔しても悪いしね」

「あ、はい」

フウガとウズメも、合わせて立ち上がる。

「助けてもらった挙句、食事まで奢らせてしまつて……本当にすみません」

「いやいや。もう、そんな事は気にしなくても良いよ。僕がそうしたいからしただけって言ったろう？」

フウガの肩を優しく叩くと、ムソウは気安く言った。

「再び巡り合わせがある事を願っています。お元気で」

次いで、ウズメが丁寧に頭を下げて、微笑を見せた。

「ありがとう。ウズメさんも、フウガ君と良い関係なれる事を祈つてるよ」

「ええ、ぜひとも」

「先輩……」

迷いなく肯定する少女に、フウガは複雑な顔を向ける。

「はは、それじゃあね、二人共」

二人のやり取りに笑いながら軽く手を振って、ムソウを踵を返す。そのまま何の問題もなく別れるかと思われた――その直後。

「――フウガ君」

直前までの穏やかな空気を一変させる重い声を、ムソウが吐き出したのだ。

「え……？」

反射的にフウガが目を向ける。

背中越しでもそれがわかったかのように、彼は言った。

「気をつける事だ。おそらくは三日後……君が今、滞在している孤児院に襲撃がある」

「ムソウ、さん……？ どうして、〈鴉の止まり木〉の事を……？」

フウガは瞠目し、思わず背後の椅子を倒していた。

隣のウズメも不穏な空気を察して、顔つきを険しくする。

だが、ムソウは、フウガの質問には何も答えず、

「忠告はしたよ」

と、ただ一言残して、足早に去って行く。

「待ってくださいっ」

咄嗟に後を追おうとする。

しかし、ムソウは巧みに人波に紛れ、すぐに視界から消えてしまふ。

何気ない動きだが、素人のものではない。意識的に訓練して、身に着けた技術なのは間違いなかった。あるいはそれは、闇に生きる者特有の技であったか。

「……………」

フウガは追う事を諦め、足を止めた。それでも青年の去って行った方向を見つめ続ける。

「フウガ」

気づけば、隣にウズメが立っていた。

「彼の言葉……どう思う？」

「――わかりません。でも、少なくとも冗談を言っているような雰囲気ではなかった。おそらく、何かの根拠があつての事なんだと思います。ただ……どうして孤児院の事、そして、俺が今、そこに居る事を知っていたのか。さっきは、そんな話一つもしていないのに……」

「そうだな。ともかく、注意だけはしておいた方が良い。孤児院の内情は、私にはわからないが、何か理由があるのかもしれない」

「……………ええ」

狙われる理由。

確かに、あの孤児院には、それが存在する。

ウズメは知らないだろうが、フウガは一年前の時点で、すでにライ達よりその事を聞き知っていた。

だが。

ムソウは、どうやって襲撃の可能性を知り、どうしてそれをフウガに忠告するのか。

彼もまた、あの孤児院の秘密に気づいているのか。

一番気に掛かるその事実は、定かではない。本人が去ってしまった今、もはや聞き出す事も出来なかった。

唐突に吹いた強風が、フウガの全身をなぶっていく。

ウズメが顔をしかめ、乱れぬように着物と髪を押さえた。

初夏らしくない、どこか寒々しい風。

傍を歩く人々もそれを感じたのだろう。身を縮こませて、不思議そうに天を仰いで行く。

らしくない神妙な声で、オロチが呟いた。

『……嫌な、風だ』

＊ ＊ ＊

ムソウと別れた後、フウガ達は、孤児院へと向かった。

これ以上、ウズメを自分の事情に付き合わせては申し訳ない、とフウガ本人が進言したのだ。

何より、今、レナがどうしているのかが気に掛かっていてもいた。

「あ、フウガ君！」

孤児院が見えて来ると、フウガが戻って来るのを待っていたのか、こちらの姿を見つけたミヨが、すぐさま駆け寄って来た。

ミヨは――さすがに女同士故か――隣に居る着物姿の少女がウズメだとすぐ気づいたらしく、

「あ、先輩も来たんですね」

と、嬉しそうに微笑む。

「ああ。こちらに向かっていたら、たまたま王都の方でフウガと会ったんだ。昨日は、すまなかったな」

「いえ、先輩が悪いわけじゃないですし。――あの、フウガ君……」
ミヨが何か言い辛そうに、こちらを見る。

フウガには、彼女の言おうとしている事が、すぐに理解出来た。

「大丈夫だ。ちゃんとレナには謝る。……そんなに落ち込んでるのか？」

「うん……。ここ最近ないくらい……。一応、ナヅチさん達が励ましてくれたから幾分はましになったみたいなんだけど、それでも、やっぱり……」

「……………そうか」

改めて、レナの様子を聞かされて、罪悪感が胸を苛んだ。

だが、今は、すでにやってしまった事を後悔していてもどうしようもない。

「レナは、部屋にいるのか？」

「うん。フウガ君、行ってあげて」

本当に親友の事が心配で仕方ないのだろう。ミヨが懇願するような声音で言う。

それでも、その原因を作ったフウガを責めないのは、この少女の優しさが表れているとも言えた。

「わかってる」

ミヨへ頷いた後、フウガは、ウズメの方へと振り向いた。

「それじゃ、俺は行って来ます。申し訳ないんですけど、孤児院は、ミヨに案内してもらって下さい」

「……ああ。しっかりな」

「はい」

穏やかな笑顔でウズメに送り出され、フウガは一足先に孤児院へと入る。

レナの事で頭が一杯だったせいで、実はウズメの表情が少しぎこちなかった事など、まるで気がつかなかった。

「あれ……」

孤児院に入るとすぐに、フヨウと遭遇した。

少し後ろには、苦笑いを浮かべたゴウタとライも居る。

何故かフヨウは、責めるような目で、こちらをじーっと見つめてきた。

「あ、あのミカヅチ教官……?」

美人に無言で睨まれるというのも、存外に居心地が悪い。

フウガは足を止めて、口の端を引きつらせる。

「…………タマヨリさんをこれ以上傷つけたら、お仕置きね」

「お、お仕置きですか」

フヨウが黙って頷く。

恐る恐る、フウガは訊いた。

「ちなみに、そのお仕置きの内容は……?」

「…………聞きたい?」

「え、遠慮しますっ」

普段は見せない花のような笑顔で問われて、フウガは一步後退る。どうやらミヨと違って、彼女は、フウガの事を優しく許すつもりはないらしかった。

そこで、フヨウの後ろに居たゴウタが背後を指差しながら、言った。

「フウちゃん。急がんとうちの小さいんが、今か今かと襲撃の準備してるで」

「レナがこのまま落ち込んでいるようだったら、皆で成敗するんだってさ。あれは本気だね」

ライが他人事のように、首を竦める。いざとなっても助けません、という意思がびしびしと伝わってくる仕草である。

もちろん、隣のゴウタも同じ意見のようだった。

フウガは、少し肩を落として、息を吐いた。

「――今更、否定する気はないけど、完全に悪者だな、俺」

「フウちゃん。男って生き物はな、平和に生きたかったら、絶対に女の子は泣かせたらいかんのやで？」

「僕達もテナさんにそう教わったよ。……主に拳で」

二人の言葉は、心の底から実感に溢れていた。

テナも一見温厚そうに見えて、裏側はなかなか恐ろしいのかもしれない。伊達に毎日、あんな元氣溢れる子供達の世話はしていないという事なのだろう。

「まあ、じーじとテナさんが子供達を宥めている間に早く行った方が良いよ。姉さんも珍しく角が出てるし」

「……………お仕置き。お仕置き」

ライの脇で、フヨウがぽつりと呟く。

酷く怖いので、止めて欲しい。

「……ああ。確かにまずそうだ」

身の危険を感じて、フウガは足早にその場を離れる。

そして、今度こそ、レナの部屋の前まで辿り着く。

本来は、ミヨとの相部屋だが、今はレナしかいないはずだ。

「ふう……」

一つ大きく深呼吸。

覚悟は、ここに来るまでに十分過ぎる程に決めている。

今更、こんな所で躊躇っているわけにはいかない。

扉をゆっくりと叩く。

しばし沈黙。その後。

「……………はい」

明らかに消沈した少女の声が、かろうじて内部から聞き取れた。

（本当に……落ち込んでるんだな……）

わかっていた事だが、改めて本人の声を聞くと、申し訳ない気持ち
ちが込み上げてくる。

こんな元気のない声は、レナには似合わない。

本当の彼女は、むしろ、こちらがくよくよしている時に容赦なく
背中を張って、前へと進ませてくれるような人間だ。事実、フウガ
は、レナにそうやって叱咤された事もある。少なくとも、自分の知
る彼女は、そういう女の子のはずだ。

だから、迷わず扉を開いた。

レナを、本当のレナへと戻すために。

「……………あ」

レナは、部屋の奥でベッドの端に腰掛けていた。入って来た人物
がフウガだと気づいて、目を見開いて固まる。

その反応を予期していたフウガは、動揺する事なく部屋の中へと
足を踏み入れた。

レナの方も、最初の驚愕から何とか抜け出して、慌てた様子で立
ち上がった。

「……………」

「……………」

無言で、互いに向き合う。

息が詰まりそうな、気まずい空気。

ほんの昨日までは、気兼ねなく話していたはずなのに、今は、最
初の一言を口に出すだけで酷く困難だった。

舌が動かず、呼吸するだけで苦しく、まるで言葉が出て来ない。

（……………でも……………言わないと……………）

フウガは思う。

自分は、感情に任せた不用意な発言で、目の前の少女を傷つけてしまった。

その事を謝るために、この場所へと戻って来た。

そして、この謝罪は、自分の中で本当に重い意味を持っている。

スサノ・フウガという少年にとって――すでに、彼女はそれぐらい大切な存在になっているのだ。

その感情がもはや、単なる仲間へ向ける物ではない事に、少年は気づかない。

いや。

気づかない振りをする。

「レナ……」

「あ、の、フウガ……」

同時に口を開く。

だけど、どちらも余裕がないので、互いの言葉が被っている事なんて気づけなかった。

「すまない。俺が悪かったっ」

「ご、ごめん。私が……っ」

故に、再び同時に下げた頭は、必然、思い切り衝突をしたのである。

激痛と共に、視界が点滅。

反射的に二人は、両手で頭を押さえて、その場にしゃがみ込んだ。

「……………」

しばらく、二人で必死に痛みを堪える。

先程とは違った意味で、言葉が出なかった。

その後、ようやく喋る余裕を取り戻し、二人は叫んだ。

「あ、あんたね！ 痛いじゃないの！！」

「それは、そっちもだろ！ 何で同時に頭を下げてるんだよ！！」

「こっちが聞きたいわよ、もう！ さんざんどうやって謝るか悩んで、結果がこれだなんて……！」

「俺だって、そうだったの！」

「そもそも、あんたが謝る必要なんてないじゃない！」

「あるんだよ！　あるから、謝ったんだろっ！」

今までの鬱憤を晴らすが如く、互いに文句を言い合う。

そして、いいかげん文句も尽きた所で、ううーっと数秒程、フウ

ガとレナは睨み合い――

不意に、本当に長く大きい溜息を吐いた。

「……………さまにならないなあ、本当」

「……………全くだよ」

その後、不思議と怒りは、一瞬で冷めていた。

先程までの重い空気も、気づけば霧散している。

レナは、諦念めいた笑みを浮かべた。

「でも、らしいんじゃない。私達にはこういうのが」

「かも、しれないな」

「……朝は、ごめんね」

「良いんだ。俺の方こそ、すまない」

改めて謝り合って、今度は、自然と笑みがこぼれていた。

それだけでもう、二人の間のわだかまりなんて、何もなくなっていたのだ。

結局な話、両者がこの結果を望んでいたからなのか。

悩んで、悩んで、悩んで、ようやく勇気を出して、行動して。

だけど、終わってみれば、妙にあっさりしたものだった。

でも、たぶん、世の中の仲直りの経緯なんて、ほとんどがこんなものなのかもしれない。

「ほら」

先に立ちあがったフウガが、手を差し伸べる。

「ありがと。フウガ」

レナも、それを素直に掴んだ。

「――って、え……」

その時、フウガは自分の目を疑った。

手を引かれて、立ち上がったレナ。

彼女の瞳から、光る雫が流れていたのだ。

最初はさっき頭をぶつけたせいかと思ったが、違う。明らかに、それはそういう涙とは別の物であった。

「な、何で泣いてるんだよ、レナっ」

「えっ、私……」

レナ本人も気づいてなかったのか、驚いたように顔に触れる。

「あ、あれ……。どうしてだろ。でも、なんか……」

自覚したら、もう止まらなくなったのか、今度は嗚咽まで漏らし出す。

「ご、ごめ……あ、こんなの違うのに、何で……」

「レナ……」

居た堪れない心持ちで、フウガは泣き続ける少女を見つめた。

気が緩んだら、自分の意思とは関係なく泣き出してしまうほどに、彼女は思いつめていたのだ。それだけ、自分は彼女を苦しめていたのだ。

今の状況は、その事実を否が応なくフウガへと突きつけていた。

「……………え、ええとっ」

しかし、今は、その事を反省している場合でもない。

泣いている女の子を放っているなんて、それこそ男のする事ではないだろう。下手したら、本当にフヨウの恐ろしいお仕置きを受ける羽目になる。

さんざん悩みに悩んだ挙句に、フウガは何とか行動を起こす。

「……………フ、フウガ？」

未だに泣きっぱなしのレナが、戸惑ったように、自分よりの背の高いフウガを見上げる。

フウガが最終的に泣いている少女へ対して行った事は……頭を優しく撫でる事だったのだ。

「……………ね、ねえ、もしかして、馬鹿にしてる？」

「し、失礼なっ」

心外な反応に、フウガは憤慨する。

「仕方ないだろっ。他に泣いている女の子に対してどうすれば良いかなんて思いつかなかったんだから！」

「あのね……………男ならそんなじゃなくて、こう……………優しく抱きしめるとか、そういうのは出来ないの…………？」

「……………」

もちろん、レナのその言葉は、本気などではなく、呆れ半分のちよっとした冗談のようなものだったのだろう。

それはフウガにもわかっていたし、そのまま受け止める事は出来た。

だけど。

「……………」

「え!？」

いきなり自分の言った通りに抱きしめられたレナは、泣くのも忘れた様子で、目を剥いた。

耳まで真っ赤にして、フウガの腕の中で身をよじる。

「あ、あんたね! あんなの本気に……………」

「だって、他に出来る事なんてないから」

「な、何が……………」

「ただ謝っても駄目なら、傷つけて、泣かせてしまったお前に対して出来る事なんて、もう他にはないんだ。俺には」

「……………あ」

何かに気づいたように、レナが声を漏らした。

合わせて、腕から逃れようとする動きが止まる。

「……………」

しばし逡巡した後、レナは、フウガの胸に頭を預けた。顔は未だに真っ赤で、恥ずかしさを必死で堪えているのは明らかだった。

でも、そんなのはフウガとて同じだ。

だけど、今は羞恥心を押し殺してでも、やらなければいけない事があった。それだけの事だ。

「……やっぱり、馬鹿だわ。あんたは……」

「自覚してる。もう嫌ってぐらいいに」

「ねえ……」

「……何だ？」

「あの痣の事……もう話したくなければ良いの……でもね」

「……」

「私は、あんたを黙って死なせるなんてしないわ。あんたが嫌って言っても、どんなに拒んでも……絶対に。朝もね、それが言いたかったの」

「……」

自然と少女を抱く腕に力がこもる。

どうして。

どうして。

どうして。

そんな事を言っても、どうしようもないのだ、と。

運命は、もう変わらないのだ、と。

自分は、そう真実を口に出せないのか。

決して叶わぬ期待など、持っても傷つくだけ。いずれ悲しみに崩れ落ちるだけ。

ならば、今のうちにそんな物は奪ってしまった方が良いに決まっている。

でも、言えなかった。

いや――

言いたくなかったのだろうか。

破滅を受け入れていても。もう諦めていても。

やはり、自分は彼女の気持ちが嬉しくて――やはり生きたいと思っていたのかもしれない。

そんな十六歳の少年としてあまりに当たり前な、未来への希望を捨て切れずにいたのかもしれない。

――例え今の自分が。

――そして、その胸に抱く希望さえもが。

どこまでも偽者でしかないと知っていても。

六章 月 その八（後書き）

お読み頂きありがとうございます。
更新が遅れて申し訳ありません。

六章 月 その九

「フウちゃん……？ 戻って来るなりどうしたんや、一体？」

食堂の長卓にうつ伏せになり、まるで動かないフウガに、ゴウタは眉根を寄せていた。

フウガが、レナの部屋に謝罪のために向かって、約数分余り。

妙に焦った様子で、この場に戻って来たと思えば、誰かと顔を合わせる事を拒むように、ずっとこの状態である。

ゴウタでなくても、首を傾げたくなるだろう。

フウガ自身、それは自覚している。自覚した上で、

「……放っておいてくれ」

と、一言だけ返すと、再び口を閉ざす。

今、下手に顔を見せたり、会話を交わしたりすれば、自分は確実にぼろを出してしまう。それだけは避けたかったのだ。

「いや、そう言われてもなあ。気になるやん」

困った顔で、ゴウタが後頭部を掻く。

「それでさ」

少し離れて、その様子を眺めていたライが言った。

「とりあえず、レナとは仲直り出来たの？」

「……………まあ、一応」

「一応、ね」

それだけで大体の事情を察したように、ライは淡い笑みを湛える。非常に察しの良い彼である。案外わかりやすい人間であるフウガの事情を推測する事など、さして難しい事でもないのだろう。

「もしかして、思い余って僕達には言えないような事でもしちゃったとか？」

そして、事実、的確に痛い所を突いてきたのだ。

「……………」

無言。

「……………」

頑なに、無言。

「……………なるほど」

何やら一人で納得したように頷くライ。

「ほほう。フウちゃんも意外にやるんやなあ……」

次いで、ゴウタも妙にいやらしい笑みを浮かべつつ、呟く。

明らかに、これは二人の策略。誘導である。

（くっ、耐えろ。ここで下手に反論したら、逆に肯定するようなものじゃないかっ）

必死に否定の言葉を飲み込んで、フウガは無言を貫き続ける。

しかし。

そこに、傍で話を聞いていたフヨウが音もなく歩み寄って来たのである。

「……………なるほど。つまり、お仕置きね」

「何でっ!？」

さすがに、これには黙っておられず、フウガが勢い良く顔を上げる。声は、情けないくらい動揺で上擦っていた。

「ちょ、ちょっと待って下さい! 本当に、別にやましい事なんてないんですよ! 謝罪はちゃんとしたし、レナだって、きっともう大丈夫です!」

「……………じゃあ、何があったのか言える?」

無表情で、小首を傾げながらフヨウが問う。

何でこう、この姉弟は、こちらが返答を躊躇う質問ばかりしてるのか。

「う、ぐ……………」

言葉に詰まる。

言えるはずがない。

泣いてるレナを、力一杯抱きしめました、なんて言えるわけがない。

きちんと経過さえ言えば、フヨウも納得するかもしれない。だが、

そういう事とは別に、羞恥心がそれを許してくれないのだ。

「……………そう」

フヨウが、非常に不安を誘う表情と仕草で、ゆっくりと頷く。

「……………だったら、とりあえずお仕置きしておきましょう」

「とりあえずって何!？」

「……………だから、はっきりしないから、とりあえず」

「それで、俺が無実だったらどうするんですか!」

「……………その時は、ごめんなさいね」

「前払いで謝罪しないで下さい! ——って、あ、ちょ、何を……
っ?!?」

直後。

孤児院内に、一人の哀れな少年の絶叫が響き渡った。

そして、その光景を目の前にするゴウタとライはと言えば、

「フウちゃん、助けるのは無理なんで……とりあえず、がんばや!」

「頑張っでどうにかなるものかは、疑問けどね」

と、ただただ生暖かい笑顔で見守っていたのだった。

◇ ◇ ◇

ごろりとベッドの上に転がる。

自らの身を抱くようにして、レナは丸まっていた。

顔が——否、全身が火照っている。

しばらく頭を冷やさないと、とてもではないが皆の前に顔は出せ

そうもなかった。

フウガは、すでに部屋を後にしている。

彼も彼で、平静ではいられなかったようだった。酷く固い動きで、
この場を退出していった姿が思い出される。

彼と和解出来た喜びも相まって、思わず頬が緩んだ。

(……優しくかったな……暖かかったな……)

少年に抱きしめられた印象をぼんやりと思う。

もしも彼と結ばれる未来があるのならば。

いつだってあの優しさを温もりを、独り占めに出来る。そして――
「――っ！」

ふと、とんでもない想像が脳裏をかすめた。慌ててレナを横になつたままの状態で、激しく頭を振る。

(……馬鹿……！ 私は何を……！)

ようやく少し冷めかけていた熱がぶり返して、枕に顔を埋める。
でも……でも。

そんな未来があったら、どんなに幸せなのだろう。

彼が、自分だけにあんな優しく暖かい物を向けてくれたら、きっと自分は他には何も望むまい。例えそれが、一時の恋心に酔っただけの気持ちに過ぎなかったとしても、少なくとも今は、心からそう思える。それだけは、決して嘘じゃない。

「……フウガ、好きだよ。大好き……」

正面から未だに告げられぬ想いが、唇からこぼれる。

「……だから、死んだら許さないんだから……」

先程までとは違う熱が目元に集まって、再び涙が溢れそうになる。
それを強く自身を抱いて堪えて――

「――レナ、少し良いか？」

不意に、扉が叩かれたのだ。

「ひゃ、ひゃい！？」

文字通り、レナはベッドの上で跳び上がる。

そして、何故かそのまま正座をして、

「ど、どうぞ！」

と、反射的に応えていた。

静かに扉を開いて部屋に入って来たのは、着物姿の美麗なる少女。
ウズメであった。

すでにレナは、フウガから彼女が孤児院を訪れている事は聞いて

いる。

だが、自分の所へわざわざやって来た理由までわからなかった。そして、何より、

「先、輩？ その格好は一体……？」

着物姿のウズメを見て、レナは怪訝顔になる。

「ん？ ああ、これはちよつとな。まあ、気にしないでくれ」

「はあ……」

「まあ、それよりも、少し話があるんだが……良いかな？」

「あ、はい。ど、どうぞ」

未だ動揺を隠し切れないまま、レナは身振りで入室を促す。

部屋に入って来たウズメは、一拍間を置いて、静かに口を開いた。
「回りくどく言うのは柄じゃないからな。単刀直入に訊く事にするよ」

ウズメは、真っ直ぐにこちらを見つめる。

その真剣な表情から、重要な話である事は問うまでもなく察せられた。

「レナ」

「はい」

「君とフウガのいざこざの原因は、例の痣の事か？」

「……っ!？」

直球かつ的確な問い掛けに、レナは瞠目する。

そんな少女の反応を見て、ウズメは納得したように首肯した。

「……………どうやら、正解のようだな」

「先輩、どうして……？ あ！ も、もしかして、さっきのフウガとのやり取りを……？」

苦笑いして、ウズメは頭を振る。

「いや、いくら何でもそんな無粋な事はしないさ。——なに、そんな特別な事じゃない。フウガのような人間が、仲間である君に対して冷たく当たる理由なんてものは、そう多くはないだろう。そして、思いつく可能性の中で、レナが触れてしまいそうなものと言えば――

―それぐらいしかなかったというだけだ」

「……………。なるほど……………」

フウガのお人好しぶり顔に似合わない優しきは、レナだって知っている。だからこそ、ウズメの説明にも納得がいくというものだった。

「でも…………先輩は、あの痣がどんなものかを知っているんですか……？」

「ああ、知っているよ。私もスクナ先生に話を聞いたからな」

「え…………？」

「実は、レナのすぐ後に、私も先生の所を訪ねていたんだ。もちろん、フウガの痣の件について訊くためにな。先生は、あくまで推測の話でしかないという理由で、訊きに来た人間以外には、あの話はしてないそうだ。だが、逆に訊きに来た人間には、隠さず全てを話しているらしい。実際、他にも訊きに来た人間が居たんじゃないか？」

「…………ええ。そうみたいです」

フウガが孤児院を離れてすぐ後。

レナは、朝食を終えてから、皆にヒナコから聞いた話を全て話したのだ。

仲間に隠しておくべきではないという思いと、一人ではどうしようもないから、皆の力も借りたいという気持ちもあった。

しかし、皆の反応は、レナが予想したものとは違っていた。

なにせ、皆、すでにその事を知っていたのである。

時期こそ違えど、皆、フウガの事を心配して、ヒナコの元に話を聞きに行っていたのだ。

つまり、悩んでいたのは、レナだけではなかったという事。

それを知った時は、思わず脱力したものだ。

「先輩も…………そうだったんですね」

「ああ。私の場合は、痣の事は話で聞いていただけだったが、どう考えても安心出来るようなものとは思えなかったからな…………。そし

て、さつき王都の方で、実際、痣を見る機会があったが――やはりあれはフウガにとって、間違っても良いものではないだろう」

思わずレナは身を乗り出す。

「フウガのやつ、また痣を出したんですか!？」

「……すまない。突然の事だったんだ。止められなかった」

「あ……いえ……先輩の事を責めてるわけじゃないんです」

苦い表情を浮かべるウズメに、レナも勢いを逸する。

「だけど、どうして先輩は、わざわざそんな事を聞きに……?」

「当然だろう。私だってフウガの事は心配だし――好きな相手が自分以外の女の子の事で悩んでいれば、気にもなるさ」

「……あ。……そ、そうですね。先輩はフウガの事を……」

「レナだって、私の立場だったら、そう思うがな」

「へ？」

きょとんとするレナへ、どこか挑戦的な物言い、ウズメは言う。

「君だって、フウガの事が好きなんだろう、と言っているのさ」

「うえっ!?!」

再びの不意打ち。

ぼんつと顔は一瞬で真っ赤で、戻り始めた平静さなんて、どこかへ吹っ飛んで行く。

「あ、いや! それは誤解で! 私はあいつの事なんて何とも! 本当に! だ、だから……その……あの!」

レナは、わたわたとみっともないほどに慌てる。

逆に落ち着き払ったウズメは、少し申し訳なさそうに笑った。

「レナは、見事なまでに嘘がつけない性格だな。まあ、そこが良い所でもあるんだろうが」

「……う……あ……ううう……」

もう何と返せば良いのかわからなくて、レナはただ俯いて、唸るしかなかった。

ミヨやヒナコだけでなく、ウズメにまで自分の気持ちを見抜かれているとは……。こうなるともう、ゴウタやライ辺りにも、とつく

の昔に感づかれていたかと思っただけ。いや、あの二人の事だ。まず間違いない。気づいてるだろう。

そう考えると、今までのフウガの前での言動を思い出すだけで、恥ずかしくて堪らなかった。皆に気持ちを透かされていたとすれば、必死に気持ちを隠して、素直になれない態度を取る自分は、本当に滑稽に見えたはずだ。

「まあ、落ち着いてくれ、レナ」

そんな羞恥に沈む少女の気持ちを察したのか。

歩み寄ってきたウズメが、優しくレナの肩を撫でる。

「何も、私は君をからかいに来たわけじゃないんだ」

「……先輩」

「ただ、何と言うかな……君と私の気持ち——はっきりさせておかないと気持ち悪かったんだ。今のままだと、無闇やたらと君へ向けて、醜い嫉妬心を抱いてしまう自分が嫌だな」

「嫉妬……？先輩が、ですか……？」

意外な台詞に、レナは赤いままの顔を上げる。

常に自信と余裕に溢れているこの少女が、自分なんかになんかそんな感情を抱くなんて、どうにも想像し難かった。

レナの反応を見て、ウズメは、寂しそうに表情を曇らせる。

「私だって、普通に人間で、普通に女だ。誰かに恋もするし……嫉妬もしてしまうさ」

「あ……。すみ、ません」

「良いんだ。強く見せようとしているのは、私自身の行為でもあるからな。ともかく今日は、君に共闘と恋敵宣言をしようと思ったんだ」

「共闘と、恋敵宣言……ですか」

「そうだ。共闘というのは、他の皆と一緒に必ずフウガを救おうという事。これはすでに以前、ゴウタとライとはしたんだがな。そして、恋敵宣言は……君にフウガを渡すつもりはない、という宣戦布告だ」

「……だけど……私なんて、先輩に敵うはずが……」

「そうかな？ 今日のパウガの様子を見る限り、私にはそうは思えなかったよ」

「え……それって……」

「おっと、これ以上は何も教えないぞ？ 敵に必要な以上に塩を送るつもりはないからな。――さあ、レナ」

ウズメは、レナへ向けて、その白く綺麗な手を差し出す。

「この手を握った瞬間から、改めて私達は、仲間で敵同士だ。必ずパウガをあの手縛から解放して……そして、彼と一緒にするのは私だ」

「……………」

レナは、無言で差し出された手を見つめる。

躊躇いがあった。

パウガを救いたい気持ちは、確かだ。そのために、ウズメや他の皆と力を合わせていこうという提案に乗る事に関しては、何の躊躇もない。むしろ、レナ自身がそうしないと、思っていたのだ。

だが。

パウガを賭けて、目の前に居るウズメと争う――

こちらには、咄嗟に乗る事は、どうしても出来なかった。

ウズメは、自分なんかより美しく。

ウズメは、自分なんかより強く。

ウズメは、自分なんかより賢く。

ウズメが、自分なんかより大人だ。

こんな考えは、ただの卑屈でしかないとわかっている。
でも。それでも。

自分がウズメに勝てるなんて、どうしても思えないのだ。どこを探したって、そんな可能性が存在する気がしないのだ。

ここで恋敵宣言を受け入れた所で、最終的にパウガを選ぶのは、

ウズメだろうと思う。

ならば、そんな行為に意味など見出せない。ここで、大人しく身を引いてしまった方が、よほど潔いではないか。

そう、諦めと共に思った時。

不意に、先日の医務室での出来事が思い出された。

——恋敵が強敵だから、自分を卑下してしまいそうな気持ちはわかるがな。

それは、あの少年に憑いた、変わり者の妖魔の言葉。

——一度、そういうものを全部忘れて、ウズメと同じように自分の気持ちを正直にフウガへと伝えてみる事だ。

……何故なのだろう。

唐突に思い出されたその言葉が、身を引こうとする自分を踏み止ませる。

ここで諦めちゃ駄目だとそう思わせる。

(……そうだ……私は……)

ウズメに勝てる要素なんて何一つないんだとしても。

どこにも勝ち目のない戦いなんだとしても。

——フウガを渡したくないと。

——フウガと結ばれたいんだと。

ただ、強くそう思っている。思ってしまったているのだ。

この気持ちに気づかない振りなんて出来ない。出来るはずなどない。

ならば、それが全てではないのか？

勝てる、勝てないじゃない。

今、自分がどうしたいのか。どう在りたいのか。

その気持ちに従うべきだと、オロチの言葉は遠回しに告げている。

己の内から突き上げてくる想いに従って、全力を尽くせば。

例え、その結果、敗北という結末を迎えたのだとしても、そこに惨めさや後悔なんて存在する余地はないのだ。

だったら。

それならば、自分の答えは――！

「……違いますよ、先輩」

――握る。

強く。

負けない、負けたくないという、ただ不器用で、真っ直ぐで、一途な想いを込めて、レナは、ウズメと握手を交わしたのだ。

「最後に笑うのは、私です。フウガは渡しません。絶対に」

自然とレナの口元に浮かぶのは、不敵な笑み。

もう迷いも躊躇いも、その顔からは消え去っていた。

「……そうか。そうこなくては面白くない」

ウズメもまた、どこか満足気に微笑む。

まるで、こうなる事を望んでいたとも言うように。

「これで改めて、私達は仲間で、敵同士だ。互いに全力を尽くしてフウガを救おう。そして、フウガがどちらを選んだとしても、誰を選んだとしても、後悔などしないようにしましょう」

「ええ。もちろんです」

最後に一際強く握り合って、二人は手を離す。

そして、どこかすっきりとした顔で、一緒に笑い合っていた。

――もしも、その光景を眺める第三者の存在が居たのなら。

きっと二人を、疑うべくもない親友同士と思うような――そんな笑顔で。

六章 月 その九（後書き）

お読み頂きありがとうございました。

更新ペースが遅くなりがちで申し訳ないです。

六章 月 その十

陽が傾き始める頃。

フウガ達は、屋敷に戻るウズメを見送るために、孤児院の前に出て来ていた。

「せっかくだし、泊まっていても良いのよ？ どうせ部屋は、たくさん空いているんだし……」

「ありがとうございます。気持ち嬉しいのですが、今は、父様やスズと過ごす時間は優先したいんです」

残念そうに言うテナの申し出を、ウズメはやりわりと断る。

そして、テナの隣に居る子供達へと目を向けた。

「ただ、この孤児院に来て、やはり良かったです。子供達も元気で、とても楽しかった」

「ウズメ姉ちゃんも遊んでくれて、ありがとうー」

「俺らも楽しかった！」

「また来てね！ 絶対！」

子供達が、一斉にわいわいと口を開く。

美人で優しいウズメに、彼らは、とてもよく懐いていた。

ウズメの方も、そんな彼らと接するのが上手かった。いつもは溢れ過ぎる元気で皆が手を焼いている子供達が、彼女の言葉には素直に従うのだ。

それは、普段から世話をしているテナにして「いつも、これぐらい良い子で居てくれると楽なんだけど……」と言わせるほどであり、おかげでフウガも随分と助かったものである。

「ええ、もちろん。皆もまた、私と遊んでね」

ウズメは、子供達の前に屈むと、優しい女口調で微笑む。

「……………」

そんな少女の横顔を、なんとかフヨウのお仕置きから復活したフウガは無言で見つめていた。

具体的な事を口にする事こそ避けてはいたが、孤児院に居る間の会話の中で、彼女が現在、実の父とどこかぎくしゃくしている事は、なんとなく気づいていた。

——父と過ごす時間を優先したい。

彼女が、テナの好意を断ってまで屋敷に戻るのも、おそらくそれがあるからなのだろう。つまり、彼女自身は、父親との関係の修復を望んでいるという事でもある。

（父親、か……）

今も山奥で一人過ごす父——ラシンを思い出す。

今でも愛し、尊敬する父親。

でも、自分が騎士の未来を奪ってしまった英雄。

いつも奔放な父親に対しては、フウガも、ついついむきになって喧嘩腰になってしまう事が多かった。けれど、それは決して仲が悪いというわけではない。

必要な部分では意思の疎通は取れているし、どんなに揉めても、最終的に笑って許し合えた。不器用だけど、確かな親子の繋がりが存在する……そんな関係。

でも、今のウズメと父親は、大切な所で互いの気持ちが通じ合っていないのかもしれない。何かの溝が二人の距離を空け、近づけなくしてしまっているだろう。

その溝が一体何なのか、どうして出来たのか。

フウガにはわからない。

ただ、彼女と父親の関係が良い方向に向かってくれれば、とは心から思っていた。

母を失い、父に取り返しのかかない傷を負わせてしまったからこそ、親の存在の大きさは身に染みてわかっている。

「では、私はもう行くよ、フウガ」

と、近くで声が聞こえて、フウガは俯けていた顔を上げる。

気づけば、すぐ前にウズメが立っていた。

「あ、はい。……すみません。ちょっとぼーっとしてて」

「もしかして、ムソウさんの言っていた事が気になるのか？」
僅かに表情を険しくて、ウズメが言った。

今日の昼に出会った青年——ハヤザキ・ムソウ。

彼は三日後に、この孤児院が襲撃されると告げた。

その真意は不明で、彼の言葉が真実かもわからない。

しかし、ただの冗談だ、と一蹴出来るような物でもないのは確かだったのだ。

「いえ、今、考えていたのはそうではないんですが……でも、そっ
ちも気になっているのは確かです」

「……そうか。念のため、私も可能なら、当日には顔を出してみる
よ。例の話を聞いた後では、あの襲撃の件も杞憂で終わると思え
ない」

ウズメの言う例の話、というのは、この孤児院へ鴉の止まり木
が狙われる理由に直結するものだ。彼女もまた、レナとミヨと同じ
く、すでにその話をゴウタ達より聞かされていた。

「大丈夫ですよ、先輩。俺ら、こういう事は初めてやないですから。
もしも襲撃あったとしても、ばっちり返り討ちです」

掲げた腕を叩いて、ゴウタが自信満々に笑った。

「頼もしいな。だが、やはり襲撃などないに越した事はない。その
事を忘れてはいけないよ、ゴウタ」

と、穏やかな口調でナツチが諭す。

そこには、自らの育てた子を、出来れば危険な目に合わせたくな
いという親心が垣間見えた。

それがわかっていいるのだろう、ゴウタは困った顔で、頭を掻く。

「やだなあ、じーじ。わかつとるって、それぐらい」

「だけど、ありがとうございます、先輩。あの話……先輩の立場な
ら、秘める事には抵抗があったはずなのに」

ライの感謝の言葉に、ウズメは淡い微笑と共に首を横に振る。

「そんな事はないさ。どんな家に生まれた所で、今の私は一介の騎
士候補生だ。未だ誰かを捕らえるべき地位にはなく、もちろん裁く

権利もない。それに、子供達のあるな幸せそうな笑顔を見てしまったら、黙って胸に秘める以外の選択肢なんて思いつかないよ」

「……そうですね」

それに、フウガも同意する。

追ったウズメの視線の先には、今度はレナとミヨの二人とじゃれあっている子供達の姿があった。浮かべるあどけない笑顔は、確かに幸せに満ちていて、それを壊すような真似は、ウズメの言葉通り、とても出来そうにない。

「……と、こんな場所で長々と立ち話をしているのもいけないな。ともかく襲撃の件は用心するんだぞ、フウガ」

「ええ、先輩。わかってます」

子供達から視線を外して、フウガは頷く。

ウズメは、改めてナヅチとテナの方へと向くと、丁寧に頭を下げる。

「それでは、失礼します。ナヅチさん、テナさん。お世話になりました」

「良いのよ。お客様なら大歓迎！ 何より、貴女が来てくれると、子供達が大人しくて助かるしね！」

「こんな所で良ければ、いつでも顔を出しなさい。子供達にとっても、私みたいな年寄りではなく、君のような若い人と過ごす方が有意義だろうしな」

「ええ、ぜひ」

そう応えた後、ウズメは孤児院を立ち去る——……かと思えば、何故か真っ直ぐに、こちらへと歩み寄って来る。

「そうそう、フウガ」

「先輩……？ どうしたんですか？」

「うん。帰る前に、少しばかり先制攻撃をな」

「？ 先制攻撃って——」

訝しがる少年の顔の両脇を、着物の袖が流れていった。

「んう！？」

刹那、唇には、いつかと同じ柔らかい感触。鼻腔には艶かしい白梅香の香りが、たつぷりと飛び込んで来る。少女の両腕はしっかりと少年の首に回され、咄嗟に離れる事も出来なかった。

その瞬間、紛れもなくその場の時間は停止したと言って良い。

誰もが、フウガとウズメのそれに釘付けになっていた。

実際に過ぎた時間は、ほんの数秒程だったのだろうか。

唐突な口付けを終えたウズメが、ゆっくりと身体を離す。

「……………」

フウガには、言葉がない。

これでウズメとの口付けは二度目だが、とても慣れる事なんて出来なかった。というか、二回共いきなり過ぎて、思考が全くついていけない。

向こうでは、こちらを指差して、同じく言葉のないレナが、口をばくばくさせ、すぐ傍の子供達が、凄い物を見たと騒ぎ立てている。

「では、また」

そっとフウガの頬を撫でてから、くすりと笑うと、今度こそウズメは立ち去って行った。少年の脳裏に残された彼女の笑顔の残像は、酷く満足気な物だ。

『ぬははははっ。良い展開だ。非常に面白いぞ。本当にウズメは、私好みの良い仕事するものだ。なあ、フウガ？』

完全に楽しんでいるオロチの戯言にも、フウガは反応出来ない。

「……………」

「ああ、立ったまま放心しとる。フウちゃん、しっかりー」

「二度目とは言え、フウガには衝撃が強すぎたんだろうね。これは、しばらくはこのまんまかな」

「……………フウガ君も大変ね」

「でも、良いわねえ。若いつて。羨ましいわ」

「こらこら、テナ。まだお前は、そんな台詞を口にするような年齢じゃないだろう。そういうのは、私のような年寄りが口にするものだよ」

「……や、やられた。まさかいきなりそう来るなんて……っ」

「レナちゃん。これは負けてられないよ！」

「すげーすげー！ 口付けだぞ！」

「あいだね！ あい！」

「悪人面やるうー！」

半ば魂が抜けかけたフウガをよそに、他の皆がそれぞれの反応を見せる。もはや、この後、フウガを襲うだろう苦労の波は、想像に難くなかった。

背後の建つ孤児院が、美しく夕陽の赤に染まる中で。

早くも輝いていた一番星が、どこか苦笑しているかのように、少年達を見下ろしていた。

◇ ◇ ◇

——三日後。

ムソウの予告した襲撃の日。

深更を迎えた世界は、黒き空に三日月を抱き、静寂に満ちていた。耳を澄ませば、聞こえるのは虫の声のみ。

王都に住む誰もが、今まで通り平穏に一日を終え、このまま朝を迎えると思っているだろう、穏やかで、少しだけ蒸し暑い夜。

しかし、その郊外では、人の道を外れ、闇に生きる事を選んだ者達が、酷く静かに行動を開始しようとしていた。

夜闇に沈む孤児院を見据え、辺りを囲む森の中に身を潜めた影は、七つ。

全員が全身を黒装束で覆い、僅かに覗くのは、人らしさを失った鋭く冷たい眼光のみであった。

「ナヅチとテナは、シロガネ様に任せる」

集団を率いる男が言った。

酷く囁くような声だったというのに、他の者達がゆっくりと頷く。

小さな声だろうが、物音だろうが、確かに聞き取る耳の良さも、彼らの生きる世界では必須の能力であったか。

「我らの役目は、孤児と、今、孤児院に泊まっている騎士候補生達を速やかに始末する事。別働隊と共に、確実に悟られる事なく殺るぞ」

再び、部下達が頷く。

彼らの内で、ゆっくりと、だが確実に殺気が濃縮される。

それでいて、欠片一つ外に漏らす事はない。

彼らは、暗殺者だ。

目的の相手に一切気配を悟られる事なく近づき、命を断つ。それを終えた後、同じく他の誰にも気づかれる事なく立ち去る。

これらの行為のみに特化した者達。

ならば、殺気を漏らすなど、何よりもやってはならない愚行である。

それを見せるときは、標的を始末する刹那のみ。

内なる殺気を研ぎ澄ませながら、男達が衣擦れも音すらも立てずに動き出す。

彼らの想定通りならば、静寂の夜は、孤児院で暮らす者達の鮮血で彩られるはずであった。

しかし。

「残念だけど、皆さん、ここでおねんねや」

おどけた、そんな声を始まりにして、その想定は脆くも崩れ去ったのだ。

「————っ！」

一本の木の上より、影が落ちる。

暗殺者達のお株を奪うような、見事な気配断ちと、音もなき身のこなし。

着地した声の主は、彼らが、まさかの迎撃者の存在という驚愕か

ら抜け出し、対処へ動くより早く、疾った。

「――瞬拳」

紡がれる〈具言〉。

肘下から指まで、ほぼ全て覆う籠手へと破壊の力が付加される。

「打ち抜けるっ!」

どん、と鋭く重く。

衝撃が突き抜ける。

声の主――フドウ・ゴウタの拳は、集団を率いる男の腹部を見事に捉え、

「ぐふっ……!」

「がっ!？」

さらに、その真後ろに居た者までもが共に昏倒した。

最初の男の内部を突き抜けた衝撃が、背後のもう一人までもを叩いたのである。

「貴様!」

根っからの暗殺者である彼らは、正面切って戦う事には慣れない。

だが、それでも腕に覚えのある者達だ。

突然の展開にも判断は早く、ゴウタを取り囲もうとする。

だが、それがすでに間違い。

彼らの頭上には、すでに旋回する六つの戦輪が在ったのである。

「激しき雷腕」

主であるライの命に従い、戦輪が雷を纏う。

「っ――」

暗殺者達が、それに気づいた時には、もう遅い。

「彼の者達を抱擁せよ」

伸びた瞬く雷腕が、一人として逃す事なく暗殺者達を抱き、あっさりと全員の意識を奪い去る。苦悶の声さえ上げられない。

――僅か数瞬。

その間に、この戦いの勝敗は決していた。

暗殺者達を手玉に取るかのような、あまりに見事な手際。

むしろ、二人の方が暗殺者ではないかと思わせるほどの所業であった。

だが、それも当然。

この二人は、“誰よりも優れた暗殺者”に鍛えられたのだから——
「さーて、こっちは終わったな」

肩を回しながら、ゴウタは言った。

森の奥から、手元に戻した戦輪を腕に通したライも姿を見せる。

「さすがにこちらが襲撃に備えていた分、あっさりだったね」

「そうやな。もしも知らなかったら、もっと苦戦しとったやろ。子供らも避難なんてさせられなかったやろうし……何者かはわからんけど、ムソウって人に感謝せんとな」

「それはどうかな。その人の目的がわからないうちは、安易に感謝するのは止めた方が良くと思うけど。こいつらの仲間じゃないなんて証拠はないんだからね」

「ま、そうかもしれんけどな」

ゴウタも肯定し、肩を竦めた。

暗殺者達を拘束するための縄を手にながら、ライが振り返る。

「さて、フウガの方も、もう終わってる頃かな」



「小僧、自ら我々の前に姿を見せるとは、死に急いだか」

ライとゴウタが襲撃者を迎え撃つのと同じ頃。

フウガは、二人からは少し離れた森の反対側で、その襲撃者の別部隊と対峙していた。

「どうやって我らの襲撃を察知したのかは知らぬが、気づいたのならさっさと逃げ出しておけば良いものを。所詮は、騎士候補生か。

自らの身の程も知らぬ愚か者よ」

嘲笑すらなく、暗殺者の一人がフウガを冷たくなじる。

敵は、やはり七人。

全てが練達の闇の者達である。

だが、そんな敵を前にしてなお、フウガには僅かな焦慮すらない。敵の言葉には何も応える事なく、二振りの小剣をゆっくりと抜き放った。

「やはり我らと闘う気か。――よかろう。望み通り確実に殺してやる！」

言うが早いか、先頭の男が、腰から短刀を抜くと同時に跳び掛かる。

音も無駄もなく、刃が最短距離でフウガの首筋へと吸い込まれ――一際甲高い金属音が、森の中に響き渡った。

フウガは、その場から一步も動いていない。

ただの一步も動かぬまま、自らの剣で、男の手から短刀を弾き飛ばしていたのだ。

「な――っ」

唯一露な暗殺者の目が大きく見開かれる。

その隙を逃さず、今度こそフウガは動いた。

棒立ちの男の脇を疾り抜けると同時に、手にした白刃の腹で敵を一閃する。

あまりに速く、あまりに鋭い一撃。

もはや反応すら出来なかった男は、声もなく膝から頽れた。

遅れて宙を舞っていた短刀が、地面へと突き立つ。

「馬鹿な！」

他の六人が予想外の光景に瞠目する。

そんな敵達へ、フウガは刃の切っ先へ向け、吐き捨てた。

「相手の肩書きだけで実力を決めつけ、侮る。お前らは、よく居る下らない妖魔と同じだな。だから――無様を晒すんだ」

「おのれっ!!」

激昂した暗殺者達が、次々と得物を抜く。

濃厚かつ研ぎ澄まされた六つの殺気。

もはや隠す事を止めたそれらが、少年へと正面から容赦なく叩き

つけられる。

だが、フウガはそんな圧力にも揺らぐ事なく言い放った。

「良しさ。まとめて掛かって来い。お前らが見下す騎士候補生の実力がいかほどか、その身で知れ」

「ほざけ！ 餓鬼が！」

正面の敵が、差し入れた懷から手を抜き、極細の針を投擲してくる。

闇の中では限りなく視覚しづらいそれは、おそらくは毒針。暗殺者の用いる物である以上は、一つでも刺されば、その時点で命を終えてもおかしくはない。

さらに、フウガの逃げ道を奪うように、別の二人が左右より斬り掛かって来る。

「———死に濡れよ」

短い〈具言〉により、二人の手にする短刀に、暗い光が宿った。

果たして、あの刃を受ければ、どんな苦痛が襲うものか。

それが何だとしても、毒針と同じく、即座に命に関わる物には違いないだろう。

……そして。

毒針にせよ、〈言力〉の宿った刃にせよ、食らわなければ——それまででもある。

「烈風、研ぎ澄ませ」

もつとも扱い慣れた〈言力〉を発動。

二本の剣が風を纏う。

フウガは手にしたそれらで、向かって来る敵でもなく、飛んで来る毒針でもなく——足元の地面を薙ぎ払った。

「ぐっ！」

「何だっ」

巻き上がる土塊は、敵から少年の身を覆い隠し、さらには毒針を防ぎ、敵の動きを止める。

転瞬。

全ての土塊が地面に落ちる前に、土の壁が二つに断ち切られた。その間を駆け抜け、フウガが敵の懐へと飛び込んで行く。

一瞬、土で視界を奪われた所に、この不意打ち。

「――ぐっ」

「か――っ」

斬り掛かって来た二人は動く事も出来ず、それぞれ気絶させられる。

さらに、もう一人が再度放って来た毒針を紙一重で避け、

「……ずっ……かつふ……」

瞬時に間合いを詰めた所で、肘の一撃で確実に意識を奪い取る。

「調子に――乗るな……っ!!」

そこに同時に襲い掛かって来る、残りの三人。

全員の刃に、すでに〈言力〉が宿っている。

「……疾く、駆けよ」

風の補助を受けて、フウガは、空高く真上に跳躍した。

目標を見失い、敵の刃は空を斬る。

これを見て、暗殺者の一人が嘲笑った。

「愚かな！ 上に逃げれば、もう自由に動けまい！」

確かに、その通りだった。

真上に跳べば、後は落ちる以外になく、下で待ち伏せた敵の餌食となるだけ。

普通に考えれば、これはフウガの失策と見える。

「いや」

だが、彼らは気づいていなかったのだ。

「愚かなのは、お前達だよ」

一人を一斉に狙った事で、自分達が今、密集している事を。

「旋風――巻き起これ！」

「「「………!!?」」」

上空で生まれる激しい竜巻。

その奔流から、油断していた足元の暗殺者達は逃れられなかった。

怒り狂う龍のごとき渦巻く風に弾かれ、吹き飛ばされ、打ち倒される。

湿った森の地面に転がった彼らが、もう立ち上がる事はなかった。

——戦いの決着までは、数十秒にも満たず。

戻った森の静寂の中。

勝者たる少年は、軽やかに地上へと降り立つ。

『お見事。この人数相手にたいしたものだ』

「……そうでもないだろ」

剣を鞘に収めたフウガは、オロチの賛辞を冷静に否定すると、倒れた敵達を一瞥する。

「もともとこういう手合いは、隠れて標的を仕留めるのは得意でも、正面切って戦うのは専門じゃないんだ。例外も居るだろうが、少なくともこいつらはそうじゃなかった」

『なるほどな。だが、それでも十分に感嘆すべき戦いぶりだったとは思うが』

「それはどうも。……じゃあ、褒めるついでに、こいつらを縛るのを手伝ってくれると助かるんだけど？」

『はて？ どうやら耳に物が詰まったらしい。よく聞こえないぞ』

「………言ってる。アホ妖魔」

もともと本気で手伝わせる気はなかったにしても、これには、もはや突っ込む気も起きない。

これ以上の会話は放棄すると、フウガは一人、溜息を漏らしつつも作業に取り掛かったのだった。

……—そして、なおも。

闇の中で蠢く殺意は、在り続ける。

戦いの夜は、未だ続く。

六章 月 その十（後書き）

お読み頂きありがとうございました。

六章 月 その十一

「やっと眠ってくれたみたい」

音を立てぬよう、扉を静かに閉めて、ミヨは言った。

「そう。本当にやっとね。元気があり過ぎるのも困りモノだわ」
腰に手を当てて、少しばかりの疲労感と共に、レナは呟く。

王都の郊外近くで、ひっそりと営まれる安宿の一つ。

現在、彼女達は、そこに部屋を取って滞在していた。

古臭く控えめな建物は、決して立派とは言えない。

だが、内部は非常に清潔に保たれており、宿の主も丁寧な応対をしてくれる、値段のわりには好感の持てる所だった。

彼女達がこんな場所にいるのは、ナヅチの頼みによるものだ。

孤児院の子供達全員を、この宿に泊まらせ、もしもの時は、守る役目を引き受けたのである。

そんな事をする理由は、唯一つ。

今夜あるだろう、孤児院への何者かの襲撃に、子供達が万が一にも巻き込まれぬようにするためだ。

高い確率で危険が及ぶとわかっているのなら、子供達をあな孤児院に置いておくのは得策ではない。冷たい言い方をすれば、足手まといになってしまう。ただ敵を迎え撃つ事と、誰かを護る事では、難易度に大きな開きがあるのだ。

それをよく理解している故に、レナ達も子供達の事を引き受けたのである。

「……はあ。それにしても、疲れた……。テナさんの苦勞が知れるわね……」

「私もへとへとだよ……」

レナの実感のこもった言葉に、ミヨが同意と共に苦笑する。

適当に理由をつけて、子供達を王都の方へ連れ出したまでは良かった。

しかし、暗くなってから、今夜はこの宿に泊まるという事を告げた時、それを納得させるのには酷く苦勞したのだ。

なにせ、この宿に泊まる本当の理由を教えるわけにもいかない。そんな事をすれば、余計な心配をさせてしまう。何より、下手をしたら、孤児院へと子供達が自ら飛び込んで行ってしまう可能性もある。

故にレナ達は、

「フウガ達が居る機会に、夜まで孤児院を徹底的に掃除する。だから、皆には、こっちの宿で一晩だけ過ごして欲しい」

——と、そんな風に説明する事にしたのだ。

だが、そうしたらそうしたで、今度は子供達は、「自分達もじーじ達を手伝う!」とそんな風に言い出したのである。

こんな状況でもなければ本当に素晴らしい話だが、当然、これにはレナとミヨも焦った。

このまま子供達を孤児院へと帰らせてしまったら、何のために王都まで連れて来たのかわからなくなってしまう。

その後は、もう子供達との終わりの見えない押し問答である。

軽く二時間近く掛けた説得の後、結局、昼に王都を回った疲れもあって、子供達の方が根負けして部屋で寝こけてしまい、現在に至っていた。

「だけど……」

ふと、子供達が眠っている部屋を振り返って、ミヨが言った。

「あの時のナヅチさんの話……やっぱり本当なのかな」

「……疑ってるの?」

レナが声に真剣味を帯びさせて訊いた。

ミヨは、頭を振って否定する。

「ううん。そうじゃなくて……突然な上に予想外過ぎて、きちんと飲み込み切れていないんだと思う。だって、ナヅチさんがあの〈常闇〉の首領で、テナさんは暗殺者だったなんて……いくら何でも……」

「そうね……。確かに、簡単には受け入れ切れないわよね……」
レナも同意して、小さく息を吐く。

――〈常闇〉。

今となつては、過去のものとして多く人々に知られるそれは、およそ十七年程前には、世の裏側を知る一部の者しか把握せぬ存在だった。

その正体は、暗殺組織。

大金と引き換えに、依頼した人物が排除して欲しい人間を、誰にも知られず悟られず、確実に始末する。依頼者が望むのなら、それは事故を装った暗殺であり、病死に見せかけた毒殺であり、あるいは、見せしめの意味も込めて、あからさまに暗殺とわかるような殺し方とした。

つまり、〈常闇〉というのは、そういう集団だったのだ。

この組織に依頼をするのは、何も裏に生きる者達だけではない。

権力欲に塗れた貴族、憎悪に取り憑かれた平民――他者に対する殺意を持つならば、地位や立場などは問わなかった。その存在と接触する方法さえ知り得れば、金銭を代償に、誰もが組織に依頼をする事が可能だった。

そして、その増え続ける需要を受けて肥大化した組織は、いつしかアマテラス神聖王国の国王スメラギ・ミコトと神聖騎士団の知る所となる。

結果、第一師団を率いるスサノ・ラシン――フウガの父によって、〈常闇〉は壊滅させられるに至った。

この出来事は、当時は大きな事件として、王国の人々に多く知れ渡った。滅びた〈常闇〉の名も、その日より、多くの者達にとって周知のものとなったのである。

だが、組織の首領たるナツチと、そこに所属していた暗殺者の一人であったテナは、すでに組織壊滅の一年前に組織を抜けていたの

だ。

その動機を二人は、こう語った。

——人を殺める。

その行為を続ける事に、もはや耐えられなかった。

ナヅチは言った。

「当時の私は、暗殺者として生きる己に何ら疑問を持たず、人を殺める事を当然のように是としていた。だが、そうして過ごして来た長い年月と……テナの存在が私を変えてくれたのだ」

組織は、その人員の多くを、素養のある人間を勧誘するか、もしくは身寄りのない子供を攫い、幼い頃より暗殺者として育て上げる事で集めていた。

テナもまた、物心つく前に身寄りを失い、組織に攫われた一人だった。

最初、ナヅチにとって、テナへ向ける感情は、他の攫われてきた子供達に対するものと何ら変わる事はなかった。

これから暗殺者として鍛えられ、将来使い物になるかどうか振るい落とされていくだけの道具のようなもの。特別、興味が向く事もない、ただそれだけの存在。

「しかし、私も年老いていた。もはや若き頃のような氷を鋭く研いだような冷たき心は持てず、長き時により積もった内なる疲労は、無意識にその抛り所を探せていたのだ。……あるいは、そもそもの私の性質が、その生き方を許容出来ていなかったのかも知れない」
本人も気づかぬうちに擦り減っていった彼の心。

それは、いつしか導かれるように、そのテナという少女へと特別な感情を抱かせる。一人前の暗殺者として成長し、優しさも暖かさもまるでない殺伐とした世界に生きながら、未だにその目の奥の光を失わぬ、輝かしい存在に。

だから、テナもまた——そんな変わりゆくナヅチと自然と心を通

わせていくようになる。

……そして、あの日。

ナヅチの元を訪れたテナは、父のように慕い始めていた彼へと、その秘め続けた内心を吐露した。

「もはや、自分は暗殺者として生きていく事に耐えられない。共に組織を抜け、今とは違う、別の生き方を模索しよう」

ナヅチは、それを受け入れ、頷いた。

〈常闇〉を捨てる事を決意したのだ。

およそ、自身の若き頃を思えば、考えられないような選択。

だが、彼もまた、その疲れ切った心は、すでに限界を迎えていたのだ。

「これまでの私の行ってきた事を思えば、全く持って都合の良い話だ。だが、さりとて、その気持ちに気づいてしまった以上、あのまま〈常闇〉の首領として生き続ける事は出来なかった」

「だから、私達は組織を抜けた。今度は奪うのではなく、育むために。償いなんて言うつもりはないの。ただ私達は……もう望まぬままに誰かを殺める事はしなくなったのよ」

その後、彼らは正体を隠したまま王都に潜んだ。

そこで使われなくなった貴族の別邸を改装し、孤児院を開くと、ゴウタ、ライ、フヨウを孤児として引き取り、育て――今も多くの子供達を同じように育ててきたのだ。

これが……ナヅチ達の隠された真実。

全てを明かされたレナとミヨ、そして、ウズメは、しばし言葉を失った。あまりの内容に、すぐには全てを受け止め、理解する事は出来なかったのだ。

それでも、なんとか平静を取り戻した彼女達が、まず思った事は、

——自分達には、この二人を神聖騎士団に突き出すような真似は出来ない。

と、いう一つ的事实。

二人が組織を抜けるまでの間に行ってきた事は、紛れもない罪だろう。

だが、だとしても、孤児院の子供達には、二人が必要なのだ。子供達から彼らを奪う事など出来ない。

そして、今のナヅチとテナは、もはや人を人と思わぬ冷酷な暗殺者ではなく、ただただ子供達を想う当たり前の人間——親そのものなのだ。

ならば、今は胸に秘めようと。

それが騎士候補生としては間違った選択だったとしても、真実を包み隠さず話してくれた二人と——彼らに育てられた仲間であるライ達を信じようと思った。

何故なら、彼女達が知るのには、子供達が心から慕う孤児院の院長であるナヅチと子供達の世話役であるテナであり暗殺者としての彼らではないだから。

数日前に抱いた想いを思い返すと、戸惑いを振り払って、レナは言った。

「でも、私達は決めたんだもの。ナヅチさんとテナさんの味方で居ようって。だから、今は、子供達の安全を確保する事だけを考えましょう」

ミヨも胸に手を当て、頷いた。

「……そうだね。レナちゃんの言う通りだ。今更、そんな事を考えて悩んでたって仕方ないもんね」

そうして話が一段落して。

レナは、ちらりと廊下の窓から、外へと視線を馳せる。

見つめる方角にあるのは、フウガ達が今まさに襲撃者を迎え撃つ

ているだろう、孤児院だった。

「……………」

胸中で、不安が渦巻く。

襲撃者がどれほどの相手かはレナにはわからない。

しかし、何かの弾みで、再びフウガが例の痣を出してしまうのではないかと気が気でなかった。

もちろん傍にはライ達も居るし、心配ばかりした所でどうしようもない事も理解している。それでも、理屈では抑えきれない思いがあるのもまた確かだったのだ。

「レナちゃん」

そんな親友の様子を見かねたのか、ミヨが声を掛けてくる。

「えっ…………な、何？」

「…………全くもう」

呆れたように、ミヨは溜息を吐く。

レナは戸惑って、目をしばたたかせた。

「だ、だから、何なのそのリアクションは」

「——心配なんでしょ？ フウガ君がまた、あの痣を出しちゃうんじゃないかって…………」

「！ う…………いや、そんな事は…………」

「隠しても無駄。私達、何年、友達やってると思ってる？」

ミヨは、したり顔で指を振る。

もはや諦めすら感じながら、レナは肩を落とす。

「やっぱり、バレバレなのね…………」

そんな彼女に、ふと優しい微笑を湛えて、ミヨは言った。

「そうそう。…………っという事で、レナちゃんはフウガ君の所へ行ってあげて」

「え、ええっ！」

まさかの提案に、レナは素っ頓狂な声を上げる。

「だ、だけど、子供達の事、ナツチさんに頼まれているのに…………そんな勝手な理由でここを離れるわけにはいかないじゃない」

しかし、ミヨは退かなかった。

「レナちゃん。私、知ってるんだよ。子供達と一緒にの時だって、頻繁に上の空だった事。本当、わかりやすいよね」

「……………そこまで気づかれてたの」

「そんな状態じゃ、どのみちまともに護衛なんて出来ないでしょう？
だったら、私一人の方がマシだよ」

「ミ、ミヨ…………？ あんた、そんなキツイ事を言うキャラだっけ……？」

「さて、どうだったかな」

くすくすと楽しげにミヨは笑うと、

「ほらほら。そうと決まったら、さっさと行った、行った」

素早くレナの背後に回ると、ぐいぐいと押して来る。

「……………で、でも」

「レナちゃん」

まだ逡巡するレナの名を、ミヨが再度呼ぶ。

少女の双眸の奥に宿るのには、ただただ真摯な光。

自らの最愛の友を純粹に心配し、応援する優しい想い。

「——ミヨ」

それを見た瞬間。

不思議な程にあっさりと、レナの中で決心がついた。

ミヨは、こんなにも自分を氣遣ってくれている。

自分の我が儘な想いの通りにさせてくれようとしている。

（そう……………全部、私のために…………）

だったら今は、そんな彼女の優しさに甘えよう。埋め合わせなら、後からだって出来る。

フウガを痣の呪縛より救い、そして、ウズメにも負けない。

そう決めたのなら、こんな所でじっとしてるわけにはいかないはずだ。

「…………ごめん、ミヨ。この間から、あんたには、いつも背中を押さ
れてばかりで」

ミヨは、まるで何でもないように、ただ暖かな微笑みを浮かべた。「気にしないで。学園に入る前までは、私の方がその立場だったんだもの。ただの恩返しだよ」

「ありがとう。――行って来る！」

迷いを振り払ったレナは、もはや躊躇う事なく宿を飛び出して行く。

「……………」

ミヨは、そんな親友の背中を優しくで……そして、ほんの少しだけ切なさを感じた瞳で見つめ続ける。

そして、誰にも聞こえないような小さな声で囁いていた。

「レナちゃん、絶対に負けちゃ駄目なんだからね……」

◇ ◇ ◇

孤児院内、ナヅチの部屋。

揺れるランプの光に照らされて、薄闇がぼんやりと侵食される。外で行われる戦闘などなかったかのように静寂に包まれた部屋の中で、ナヅチは椅子に深く腰掛け、目を閉じていた。

その姿は、これから訪れる誰かを待っているかのようにも見えた。瞼がゆっくりと持ち上げられる。

「――十八年ぶりか。クロガネ……いや、シロガネか？」

ナヅチは、振り返る事なく、背後へ声を投げた。

「クロガネは死んだ。組織が神聖騎士団に壊滅させられた時にな。」

――そう、貴様のせいだ、ナヅチ」

返事があった。

扉も窓も開いた様子などなかったはずなのに、ナヅチから数歩程離れた後ろに、いつしか一人の男が立っていたのだ。

他の暗殺者達と同じく、全身を黒装束で包み、その目だけを覗かせている。その身に着けた衣装こそ同じでも、放つ殺気、威圧感などは、まるで別物だった。

紛れもなく手練れ。そして、暗殺の技能のみでなく“戦う力”を有した男である事が知れた。

「……なるほど。私のせいかな」

否定する事なく、ナヅチは呟く。

対して、シロガネは憎しみに塗れた言葉を吐き出した。

「他に何かがある。組織を抜けた貴様達が漏らさねば、神聖騎士団に〈常闇〉の所在地が明るみになるはずもなかった」

「さて、な」

「……………あえて、俺をここまで侵入させたのは、何のつもりだ？」

「気づいていたか」

「当然だ」

ナヅチは、ゆっくりと椅子から腰を上げると、振り返った。

「かつて、〈常闇〉の首領であった私……。ならば、最初にお前と向き合うのは、私であるべきだろうとそう思ったただけだ」

「今日訪れるのが、俺であるとかわかっていたと？」

「わかるさ。伊達に、長く組織の首領はやってはいない。その日が迫る度に、この孤児院の周囲で微かに香る空気は、あまりに懐かしかった」

「ふん、ならば死ぬ覚悟も出来ているという事か」

「生憎だが、私は自ら進んで死に行くつもりはない。そんな行為に意味はなからう。ましてや、償いになど、決して成り得えはせん」

「知った事ではないな。〈常闇〉、そして、我が半身——双子の弟クロガネの仇として、存分な苦しみを与えた後、殺してくれる」

じりっと一步、シロガネは前へ出る。

部屋の中に、濃厚な殺気が充満していく。

それを受けても、ナヅチは顔色一つ変える事なく、復讐者を見つめていた。

「知っているぞ、ナヅチ。今の貴様には、もはや戦う力はない。病と老い、それらが貴様をただの老いばれへと変えたのだ。その無力——せいぜい思い知って、死ぬが良い」

言葉とは裏腹に、シロガネは、すぐには飛び掛からなかった。

例え、戦う力を疾うに失っていたとしても、このナヅチという老人が油断ならぬ相手だと、よく理解していたからだった。

しかし、その様子見も、すぐに終わる。

「夜見へ堕ちろ、ナヅチ！」

腕を一振りすると、どこからともなく短刀が出現し、その手に握られる

そのままシロガネは滑るように、ナヅチへ迫った。

「――させはしない」

声は、本棚の陰から、唐突に響いた。

暗殺者として稀なる実力を持つはずのシロガネにして、その存在を気づかせず潜んでいた伏兵。

その人物は、ナヅチを襲う脅威を、手刀一つで弾いた。

シロガネの手を離れた短刀が、部屋の間へと転がって行く。

「……っ！ やはり、貴様も居たか。テナ」

打たれた腕を押さえ、シロガネが後方へと退く。

ナヅチを救ったテナは彼を背後に庇い、シロガネと対峙する。

今の彼女は、子供達と接している時とは別人のように見えた。薄く開いた細目に宿る光は冷たく、その構えには隙はない。

「ナヅチ様は殺させない。この方が抗う力を失ったというならば、私こそが彼の盾であり刃よ」

シロガネが、改めて彼女を眺め、嗤う。

「仮にも、かつては師であった俺へ躊躇わず牙を剥くか。なるほど、裏切り者らしい行動だ」

「……いいえ、違うわ」

テナは、はっきりと否定の言葉を吐く。

「少なくとも、〈常闇〉が滅びたのは私達が原因ではない」

「ほう……。では、何故だと言うのだ」

「私達は組織は抜けた後も、その情報を一切誰かに漏らす事はしなかった。例え、それが許されざる存在だったとしても、〈常闇〉は

私達の生きた場所であり、そこに属す者達は仲間だった。だから、組織は離れても、〈常闇〉に関する事を口外せぬ事が、せめてもの義理立てと思っただのよ。……それが、どうしようもなく自己満足であつたとしてもね」

「それを信じろと？　そして、万が一信じたとしても、俺が大人しく引くだけでも？」

「思わないわ。だけど、これだけは言わせてもらう。

〈常闇〉の存在が明るみに出た理由……それは、ナヅチ様が抜けた後、首領を引き継いだ貴方達が、むやみやたらに組織を拡大したからよ。暗殺組織は、闇に潜むからこそ成り立つもの。その根底を忘却し、より強い権力を求めた故に、〈常闇〉は滅びた……。わかる？　必然だったのよ。組織が潰されたのは。貴方達双子によつてもたらされた破滅だった」

テナの指摘を受けても、シロガネは憤る事もなく、静かに嘲りの笑みを広げ続ける。

「——言ってくれる。だが、例えば貴様の言う通りだとしても、俺にとってナヅチや貴様が憎むべき裏切り者——そう、敵であるという事は変わるまい」

「憎むべき敵……そうね。そうなのでしょ」

テナは肯定し、頷いた。

伸びた手が自身の胸元を掴み、服をはだける。

「けれど、それは私にとっても同じ事。我が師である双子の一人、シロガネ——」

薄闇の中、肌が露になる。

同時に、僅かに覗く豊満な乳房のすぐ上。

そこに、正常な人間なら有り得ぬ物があつた。

半透明で、内部に淡い黄金色の光を宿す石。

それは、肉に深くめり込み、彼女と完全に一体化していた。

「お前は、私の憎むべき——敵よ」

六章 月 その十一（後書き）

長い間、更新が止まってしまい申し訳ありません。

今後も頻繁な更新は出来ないかもしれませんが、執筆だけは続けていきますので……。

六章 月 その十二

龍輝石、と呼ばれる物がある。

極稀に、地中や岩肌などから発掘されるそれは、ヤマトという世界を巡る〈龍脈〉を流れる息吹――すなわちプラナが偶発的に高密度で圧縮される事により、生まれる鉱石である。

この貴重な石には、〈言力〉を増幅する力が備わっていた。

故にその石は、多くの〈真名武具〉へと埋め込むか、もしくは付属させる事で、より強力な武器を生み出すために必須な材料となる。だが、その需要の多さに反して、龍輝石の鉱脈が発見される事は酷く少ない。そのため、それを求める者は常に絶えないのに、手に入れる事だけが困難な状況が、いつしか常態化していた。

当然、値段は高騰していき、偽物を捏造し売り捌こうとする者や、石やその鉱脈を巡って殺し合う者が現れる事が、今現在も頻繁に起きている。

このヤマトにおいて、龍輝石は、そこらの宝石などより、よほど価値ある存在なのだ。

そして、テナの胸に埋め込まれ、淡い輝きを放っている石。

それこそは、まさにその龍輝石。

しかも、余計な混じり気が一切なく、純度も高い、最高品質の物だ。

そんな物が、彼女の白い肌にめり込み、一体化していたのだ。

石をなぞるように、テナの指が自身の胸元を滑る。

「……美しい石。世界の命の欠片が形を為した、稀なる物。

多くの人間が様々な欲望のままに、それを求め、争う。

力を。富を。あるいはそれ以外の何かを欲して。世界という存在

の象徴のような、この石の魅力に取り憑かれるがままに。

どこまでも美しく、かけがえないのに……忌まわしい輝き」

「だが、その石は、お前に力を与えた」

「それもまた――忌まわしい力よ」

シロガネの、どこか誇るかのような言葉を、テナは厳しく切り捨てる。

「組織の人員として集められた、身寄りのない、居なくなっても誰も気に留めないような子供達。――あの日、その中で、特に才能に溢れていると判断された者達が、シロガネとクロガネ。貴方達、双子の元へ連れて行かれたわ」

胸元にやっていた手が、強く固く握り込まれる。

指の間から、紅い物がゆっくりと滴った。

「貴方は暗殺者であり、研究者。より強く、より効率的な、暗殺に特化した人間を生み出す術を求めている。そのために目を付けたのが龍輝石だった」

「そう。龍輝石は、所持しているだけで、〈言力〉の大幅な強化を可能にする。だが、それでは石の持つ本来の増幅力の半分にも満たないものだった。故に俺は試みたのだ。龍輝石と――人間の一体化を」

冷笑を湛え、当たり前の事のようにシロガネは語る。

テナは胸中で煮え滾る灼熱の感情を抑えるように、強く唇を噛んだ。

「でも、石との一体化は、適正を持っている事と……石を埋め込む際に伴う激しい反動に耐え得る事が出来なければならなかった。それこそ容易く精神を破壊し、命さえも奪うような地獄のような苦痛に……！」

「そして、お前はそれに耐え抜いた。俺の実験の成功例第一号となり、紛れもない強力な力を得たではないか。〈真名武具〉を持たずとも増幅された〈言力〉を振るえ、武器を持つ必要がない故に、容易く標的の油断を誘い、接近出来る――暗殺者として、これ以上に適した存在はいまい」

「その代償を……忘れてたとは言わせない」

「代償？ ……ああ、〈言力〉を使用する度に、肉体に多大な負担

を課するため、僅かずつ命を削ってしまうという欠点か」

「それだけじゃないっ。私以外の実験の被験者は、皆、反動に耐え切れず死に絶えた！ 苦痛にのた打ち回り、もはや人とは呼べぬような無残な姿を晒して！」

過去の凄惨な事実を叫ぶテナに対して、シロガネはわざとらしく首を傾げて見せて、言った。

本気でどうでも良い、とそういう口調で。

「それが、どうかしたか？」

「……………っ！」

途端、部屋の窓硝子に、無数のひびが走った。

抑え切れぬテナの怒気が、物理的な力となって、部屋を迸ったのだ。

「……そうね。貴方にとっては、そんな結果なんて、気に留める必要すらない些事なのでしよう。そんな事は、とうにわかっている。わかっていたからこそ、私は、ナヅチ様と共に組織を抜ける事を決意した。——けれど！」

薄闇の中、怒りと憎悪で爛々と燃える双眸が、かつての師を射抜く。

「ナヅチ様の意向を無視して、あんな非道な実験を行い、多くの同胞の命を奪った貴方を、やはり私は許せない！ 死んで行った者達の絶望と痛み——貴方も少しは知るべきだわ！」

「それを吼えるか。組織を裏切ったお前が」

「そう。私は組織を逃げ出した裏切り者。否定するつもりはないわ。でも、貴方が師としての私達の信頼を裏切った事もまた——事実よ！」

叫ぶと同時にテナの身体が、前方へと疾る。

蹴りの強さに耐え切れず、立っていた場所の床が砕け、木片が宙へと舞い上がった。それを背後に置き去りにして、刹那の間に、シロガネとの距離を詰める。

「羅掌」

踏み込み、放たれるは、〈言力〉の宿った掌底。

胸に埋め込まれた龍輝石に増幅されたその一撃は、人の肉体なぞ容易に貫き、砕く。

「ふん」

シロガネは僅かに身を傾け、紙一重に避ける。

しかし、これを読んでいたかのように、テナの身体が瞬時に沈み込み、

「蹴牙」

「――っ!？」

下から伸び上がった蹴りが、シロガネの顎を跳ね上げた。

それでも彼が意識を失わず、肉体が原型を留めているのは、紛れもなく〈龍身〉による身体強化の恩恵だ。だが、それでも襲う衝撃と身体が浮いた事による隙は、消しようもない。

その場で、さらにテナは旋回。勢いの乗せた肘の一撃を相手の腹部へと容赦なく打ち込む。

「肘槍」

接触の瞬間に、爆裂する〈言力〉。

受身を取る余裕さえなく、シロガネは吹っ飛ぶ。

そのまま後方の壁を砕いて、孤児院の外まで転がり出して行った。

「テナ」

「ナヅチ様は、ここに。私がやります」

自らの主にそう言い残し、テナも空いた壁の穴から、外へと跳び出す。

倒れたシロガネは、地面に大の字になったまま、ぴくりとも動かない。

「立ちなさい。まさか、それで私の油断を誘えると思っているわけでもないでしょう」

「……くくっ」

小さく笑い、シロガネはゆっくりと上半身を起こした。

口元を覆っていた布は破け、晒された唇の端から、紅い血がゆる

りと垂れる。

あれだけの攻撃をほぼともに受けていながら、シロガネは、たいした痛手を受けているようには見えなかった。

その事に、テナもまた、特に動揺はしていない。

〈龍身〉による身体強化は、達人のものともなれば、その身を鋼の如き硬さとする。さらに瞬間的に、その強化割合を部分的に変化させる事で、より損害を軽減し、さらに攻撃にすら利用する事も可能だ。

シロガネは、かつて〈常闇〉の幹部の中でも突き抜けた実力者であり、ナヅチが組織を抜けた後には、当然のように首領に収まった男。なれば、その程度の技術、備えていない方がおかしい話であった。

「〈言力〉を振るう度に命を削る——それを理解してなお、力を使用するか」

愉快そうに言って、シロガネは立ち上がる。

その手が、自身の胸元を鷲掴んだ

「だが、これを見て、平静でいられるかな？」

服が引き裂かれ、シロガネもまた、その胸部を露にした。

「な——っ!？」

そこに在った物を見て、テナは瞠目し、息を吞んだ。

「馬鹿な……っ！ シロガネ、貴方は！」

シロガネの胸に埋め込まれていたのは、テナと同じく龍輝石。しかし、テナの物とは違い、その石の表面には〈言紋〉と思しき紋様が細かく刻まれている。

「自らの研究成果……試さない方が愚かと言うものだろう」

「……………」

「言っておくが、俺の場合は、〈言力〉を扱う度に命を削るような不完全なお前とは違う。〈言力〉封じを応用した〈言紋〉を用いる事で、肉体に強い負担は、限りなく軽微となった。すなわち、俺自身がまさに暗殺者の理想像を体現したというわけだ」

「愚かな、事をっ」

「どうかな？」

その声が響いたのは、テナの背後。

予備動作すらなく、シロガネは一瞬で回り込んでいたのだ。

「っ！？」

「遅いな」

先程のお返しと言わんばかりに、掌底がテナの背中を打つ。

一瞬にて、七発。

「か、はっ——」

当然のように〈龍身〉の防御を貫かれ、テナはつんのめる。

「そら、もう一つだ」

そこに、今度は前方に移動したシロガネの跳ね上げた爪先が、彼女を宙に蹴り上げ、

「ついでにおまけだ」

さらに踵落として、地面に叩きつける。

「————っ」

全身を襲う衝撃に、テナは苦痛と共に悶絶する。それでも、上から迫る危険を無意識に感じ取り、反射的に身を横に転がしていた。

一瞬前まで居た場所を、シロガネの拳が貫く。

転がった勢いを利用してテナは素早く立ち上がると、一つ飛んで、大きく間合いを取ろうとする。

それを読んでいたかのように、地面から腕を引き抜いたシロガネが掌を向け、唱えた。

「破玉」

「！」

テナの周囲に、透明な球体が複数、出現する。

今、テナの身は空中にあり、まともな〈言力〉を行使出来る状態でもない。

回避、防御、迎撃、どれもが不可能だった。

「弾けろ」

主の命に従い、球体が容赦なく炸裂する。

四方からの衝撃にもみくちゃにされて、テナは受身も取れないままに地面へと落ちる。なんとか五体満足でいられたのは、強引にでも〈龍身〉での全身強化を、より強い形で施したからだ。

しかし、まともな集中もなく行使する〈言力〉は、術者の体力と精神を大幅に奪う。それは〈言力〉を発動する度に、命を削られるテナにとっては、より大きい負担となって彼女を襲っていた。

倒れ伏し、各処から血を流すその姿は、早くも満身創痍。

「……はあっ……はっ……げほっ……！」

それでもテナは、吐血しながらも腕を立て、身を起こそうとする。「どうした？ 先程までの威勢が嘘のようだぞ？」

シロガネが愉快そうに笑いかける。

その言葉は、敵に投げ掛ける物とは思えぬ程の気安さだ。

伊達に自らに手術を施してはいないという事なのだろう。

彼の一撃は酷く強烈だった。

いとも容易くテナの〈龍身〉の防御は上回って、こちらに痛手を与えてくる。しかも、速力に差があり過ぎる為、攻撃の接触部分を強化して損害を減らすのも間に合わない。さらに悪い事に、こちらの攻撃は、まるで相手には効いていなかった。

それでも、あるいは、渾身の一撃ならば、まだ通じる可能性はある。

しかし、これほどの実力者が、そんな暇を与えてくれるとは思えない。難しい。

傍からみれば、もはや、この戦いの勝敗は、ほぼ決まっているように見えた。

——だが。

この劣勢にあって、テナの顔に、まるで絶望はなかったのだ。

「攻めて来ないのか？ では、こちらから行くぞ」

シロガネは、まだ動けないテナの方へとゆっくりと歩み始める。

その動作は、テナがいかなる攻撃を仕掛けようと対処出来るとい

う自信に溢れていた。

しかし。

「私以外の攻撃ならば——どう？」

血を流す腕を押さえながら、テナは笑った。

それこそ会心の笑みと呼んでも過言でない笑い方で。

「……何？」

シロガネが異変に気づき、足を止める。

否。

異変に、ではない。危険にだ。

……月光を照り返す。

シロガネの周囲、縦横無尽に張り巡らされた、“それ”が。

その檻に囚われた男が、ようやく自らを囲む物の正体に気づいた。

「これは……鋼糸か！」

「………その通り」

建物の陰に生まれた闇から浮かび上がるように、白銀の髪が揺れた。

シロガネを鋭く射抜くのは、深き海色の瞳。

その両手の五指に嵌った銀輪からは無数の鋼糸が伸びる。

月下、その姿を晒したのは、学園の若き教官にして、凡庸ならざる実力を秘める美女——ミカヅチ・フヨウ。

シロガネに悟られず存在を潜めていた伏兵は、もう一人いたのだ。

「………貴方は、刃の檻に囚われた。その細き身に力を凝縮し、高速で襲う鋼糸の前では、強固な〈龍身〉の防御力も意味はなさない」

得心した顔で、シロガネはフヨウを振り返る。

「最初にテナだけで戦わせたのは、この為の伏線か。夜暗、しかも、もともと視覚では捉え辛い鋼糸だ。さすがの俺でも、テナへ意識を向けている状態では、その存在を察する事は不可能に近い」

「………今更、気づいても遅いわ」

フヨウは、冷たい声で言い放つ。

シロガネは、心底おかしそうに喉の奥で笑った。

「しかし、まさかナヅチが、自らの技を育てた孤児の一人に授けていようとはな。鋼糸の技は誰もが扱えるようなものではない。俺とした事が、敵の力量を見誤っていたようだ」

——そう。

鋼糸の技と、フヨウの〈真名武具〉である銀の指輪——オモイカネは、もともと全てナヅチの物だったのだ。それをフヨウが、血反吐を吐くような鍛錬の日々の果てに受け継いだのである。

二十三という齢にして、神聖騎士養成機関であるヒノカワカミ学園の教官を務めている事実からしても、そのための努力と——結果として得た力がどれ程のものか知れるというものだった。

顔を上げたシロガネは、フヨウの隣に、足を引き摺りながら歩み寄って来たテナを見る。

「それで、どうするつもりだ。このまま動けない俺を鋼糸でバラバラにして、仲間の無念でも晴らすか」

「……殺しはしないわ」

シロガネの言葉を、テナはどこか複雑な感情を瞳に宿したまま、否定する。

その先を継いで、フヨウが口を開いた。

「……………私が、この技をじーじから受け継いだのは、人を殺めるためじゃない。じーじの力も、きつと人を生かすために使えるのだと証明するためよ。ライやゴウタだって、そう。」

だから……私達は貴方を殺さない」

その言葉の一つ一つに、普段の彼女からは考えられないほどの強い意志がこもっていた。

「甘いな。虫唾が走る」

シロガネは肩を竦めて、馬鹿げた事だと嘲る。

「こんな甘い人間が、暗殺者をやっていたなど信じ難い話だ」

「……………そう、きつと私達は甘い」

不意に、フヨウの双眸が細まり、殺気が浮かび上がった。

「…………でも、優しくもない。だから、余計な抵抗をされないよう、動けない程度には傷つけさせてもらう」

オモイカネの嵌った片方の五指が、巧みに動かされる。それに合わせて、シロガネを囲む鋼糸が風を切って、渦巻きだす。

「ほう……」

この状況にあって、シロガネは愉快そうに鋼糸の軌跡を追って天を仰いだ。

「…………痛みを——知りなさい」

宣告と共に、フヨウの掌が閉じられる。

怒濤の如く、人の目には捉えられぬ刃の群れが、シロガネへ襲い掛かった。

六章 月 その十二（後書き）

お読み頂きありがとうございました。

六章 月 その十三

回避する隙間など一切許さず、鋼糸がシログネの身を覆い尽くさんとする。

「…………ふ」

だが、しかし。

かつて組織の首領を務めた男は、焦慮一つ見せず、口の端を吊り上げた。

同時に、瞬時に汲み上げられた大量の息吹が、彼の身体を満たす。

「絶波——！」

裂帛の気合と共に、咆哮の如き〈具言〉が口腔から迸る。

刹那、強大な〈言力〉がシログネの内で極限まで凝縮。

次いで、限界を迎えたそれは、溢れる力を存分に開放する。

「いけないっ！」

「……………！」

フヨウとテナが、同時に異変に気づく。

「オモイカネ！」

咄嗟に攻撃を中止したフヨウは、負傷して動けないテナを傷つねぬよう鋼糸で巻きつけ、彼女と共に後方に全力で退避する。

破壊の波は、二人を逃さんと、シログネを中心に半球状に一気に膨れ上がる。余波で周囲の森と傍の孤児院が大きく揺れ、地面が抉り取られていく。

「ぐっう——！？」

「っ……………！」

なんとか〈言力〉の攻撃範囲からは逃れたものの、まともに着地も出来ず、フヨウとテナが地面に身体を打ちつけ、転がる。

それでもテナと違い、大きな怪我を負ってないフヨウは、素早く立ち上がるうとし——

「やあ」

「――あ」

シロガネの姿を目前に見た。

小柄なフヨウの身体が一つ大きく揺れる。その後には、苦悶の声を漏らせぬままに倒れ伏した。

「フヨウ――！」

ようやく膝を立てた所だった、テナが絶叫する。

そんな彼女を、シロガネがゆっくりと振り返った。

「逃げる隙がないのなら、襲い来るものを根こそぎ排除すれば良い。単純な事だろう？　――まあ、瞬時にあれだけの力を爆発させるのは、さすがの俺も些か疲れたがな」

「シロガネ……」

ふらつく身体を、頼りない両足で必死に支え、テナは、かつての師であり、今は憎き敵である男を睨めつける。

「まだ抵抗するか。健気だな。だが、無意味だ」

シロガネが、もはやまともに動く事も出来ないテナの方へと歩き出す。

骨を鳴らしながら握られる拳は、どうしようもなく、彼女の死を連想させた。

「む――？」

不意に、その歩みが止まる。

シロガネが僅かに身体を後方に傾けると、一瞬後に、風を切って何かが通り過ぎて行った。

「あれは……」

それがよく見慣れた戦輪である事に、テナは気づく。

「どうやら、部下共が失態を演じたようだな」

怒るでも、驚くでもなく、淡々とシロガネが呟いた。

その片手が自らの頭上へと持ち上げられ、

「剛拳、打ち砕け！」

孤児院の屋根から飛び降りて来たゴウタの一撃を、いとも容易く受け止めて見せた。

静寂に響いたのは、手を叩く様な乾いた音のみ。

「んな……!?!」

全体重を乗せた上、〈言力〉の宿った一撃を、〈龍身〉を用いているとはいえ、素手で受け止められたゴウタが驚愕に目を剥く。

籠手に覆われた拳を掴み、シロガネが嗤う。

「兎戯だな。身の程を弁えろ」

そのまま無造作に腕が振るわれる。

「……………っ!?!」

拳を掴まれたまま、ゴウタは宙を横に回転し、その勢いのまま投げ飛ばされる。地面を激しく跳ねながら転がって行ったゴウタは、すぐに立ち上がる事は出来ない。

「ゴウタ!」

その光景を目にしたテナが、悲鳴に似た声を上げた。

倒れた少年に、シロガネは早くも興味を失い、歩みを再開しようとする。

「雷輪、舞い斬れ!」

響く、別の少年の声。

森の奥で、蒼白い閃光が瞬く。

同時に、今度は雷を纏う戦輪が、シロガネへと襲い掛かった。

だが、シロガネは、六つの雷の飛来を、最小限かつ、たった一度の動作のみで避け切って見せる。そして、開いた掌を、森の木陰の一点へと迷いなく向けた。

「隼弾」

一瞬で圧縮された大気が、轟音を伴って撃ち出される。

「うあっ!?!」

不可視かつ高速の一撃に、潜んでいたライは弾き出され、ゴウタと同じく倒れる。

だが、当のシロガネは、そんな事に目をくれる事さえもしなかった。ただ、自らの右脇の死角に、素早く手を伸ばす。

「……………あ……………!」

途端、苦痛の呻き声が漏れる。

シロガネがゴウタとライに気を取られている隙に、瞬時に間合いを詰めていたフウガだった。シロガネに喉を掴まれ、そのまま軽々と持ち上げられる。

「周囲をちよろちよろと五月蠅い子蠅がいるな」

「ライ……！ フウガ君……！」

少年達の危機にテナが叫び、しかし、傷ついた彼女には何も出来なかった。

「大事な子供達を傷つけられて、悲しいか？ 辛いかな？ それとも俺が憎いか？ ……なあ、テナよ」

フウガの首を締め上げ、シロガネがせせら囁う。

「だが、それは当然の報い。我らを裏切り、下らぬ温もりを求めた、お前達の選択の結果だ。所詮、闇に身を染めた者は、闇の中で生き続け、朽ち果てるしかない。光の下になど居て良いはずがない。――故に！」

「っ……うあ、あああああ……あああ……！？」

「こいつらもまた、お前達の巻き添えを食って死ぬのだ！」

「やめてえっ！」

泣き叫びながら、テナは駆け出した。

すぐに躓き、両手を地面に突く。立ち上がって、走り出そうとした

途端に、また倒れる。

その歩みはあまりに遅い。遅過ぎた。

だが、それでも止まらない、止まらない。

ここで彼らを死なせるわけにはいかなかった。

もう誰の命を奪わぬと決めたのだ。

例え、ここで少年達を殺めたのがシロガネだったとしても。

その原因を作ったのが自分達なら、それは自分達が殺めたのと同じ事。

そして、何よりも。

この孤児院で共に笑い合った誰かを、目の前でむざむざと死なせ

るなど出来ようはずがない。

そんなテナの想いを踏みにじるように、シロガネは、フウガの首を握り潰さんと、さらなる力を込める。

「……あ、ぐう……あああ……お、まえが……！」

その直前。

今にも命を奪われんとする少年の口が。

ゆっくりと、苦痛に喘ぎながら、でも、こう紡いだのだ。

——お前が、くたばれ。

首を締め上げられ、それでもフウガが両手から離さなかった小剣。イザナギ。イザナミ。

その二振りが、突如、閃風を纏った。

夜暗の中、迸る光は、すぐ傍のシロガネの目を焼き、一時的に視界を奪う。

「つつああああ！？ 貴様！ 〈言力〉を時間差で……！」

「これは……っ」

距離もあって目を焼かれる事はなかったものの、あまりの眩さに持ち上げた腕で光を遮るテナが、驚きの声を漏らす。

シロガネに簡単にあしらわれる事は、フウガ達にとっては計算済みの事だったのだ。本当の狙いは、フウガがシロガネに接近する事。

その後、予め遅れて発動するようにしておいた〈言力〉で、敵の視界を奪い、決定的な隙を生み出す——

咄嗟に考えたのだろうこの策は、間違っても巧みな作戦とは言えない。だが、自らに危険が及ぶ事を厭わぬ少年達の覚悟と、シロガネの自身の力への過信が、これを成功に導いたのだ。

フウガは、シロガネの手から解放されて、咳き込みながら着地する。そのまま、両目に手をやって苦しみもがくシロガネを、テナの居る方へと思い切り蹴り飛ばした。

「テナさん！」

「っ！ フウガ君！」

フウガの呼び掛けに、突然の出来事に棒立ちだったテナも、すぐに反応した。

ゆっくりと状況を把握する時間などない。

ただわかるのは、この好機を逃すわけにいかないという事だけ。

ここでシロガネを倒せねば、もう機会など訪れないだろう。

まともに動かない両脚に鞭を打って、再び駆け出す。

やはり、その速度は、決して速くない。

だが、不意に目を焼かれ、冷静さと視界を失ったシロガネとの距離を詰めるには十分過ぎた。

両手を突き出す。

狙いは、無防備なシロガネの胸部。

残す力は、一滴としていない。

己が全てを込めて、師の〈龍身〉を貫かんとする！

「シロガネ——っ！」

「っ！？ テナか！」

「羅掌！」

二つの掌底の衝撃が合わさり、シロガネの身体を激しく叩く。

「……がっ、ぶ……！！！」

砕け、舞い散るのは、彼の身体と一体化していたはずの龍輝石の破片。

確かな一撃。

〈龍身〉の防御も抜け、その力は間違いなく敵を打った。

さらに追い討ちが続く。

フウガは後方からシロガネへ迫り、ゴウタはテナの脇を駆け抜け、少し離れてライが戦輪を投擲する。

紡がれる三人の〈具言〉が重なった。

「烈風、研ぎ澄ませ！」 「剛拳、打ち砕け！」 「雷輪、切り裂け！」

——研ぎ澄まされた風が。

——愚直な強拳が。

——鮮烈な蒼雷が。

全くの時間差なしにシロガネへと叩き込まれる。

本来なら、それぞれの少年達が個々に攻撃を打ち込んだ所で、シロガネには通じはしないだろう。

しかし、直前のテナの攻撃により龍輝石が欠けた事と、紛れもなく心通じ合った親友である彼らの一撃が見事に合わさる事で、彼を容赦なく打ち据えたのだ。

相次ぐ攻撃にシロガネは、そのまま後方へ、ゆっくりと倒れ――

「……ぬぐ、おあああああっ!!!!」

踏み止まり、倒れそうになった身体がぐんっと持ち直す。

そのまま鬼気迫る形相で伸ばした両手が、テナへと迫る。

「テナァ!!」

「っ、そんな!」

まさかあれだけの傷を負って、まだ動けるなどと誰も思わない。

故に少年達も反応出来ず、狙われたテナも、目を見開くだけしか出来なかった。

「貴様だけで、もお……っ!?!」

――止まる。

瞬間、その場に居る者達、全員の動きが停止した。

テナもシロガネも、そして、フウガ達も。

唯一点に視線を奪われる。

そこに……シロガネのすぐ脇に、誰にも気づかれる事なく立っていた男は、ナツチ。

両手の五指には、倒れたフヨウより借り受けたオモイカネが嵌っている。

「――許せとは言わぬ。私達に道理がない事も承知している」

銀の指輪から、幾本もの鋼糸が音もなく伸びる。

「だが、それでも」

穏やかだった老人の双眸に、冷たく、力強い光が灯る。

「今の私には、護らなければならぬものがあるのだ」

皺だらけで、節くれ立った指が軽やかに踊った。

合わせて、闇夜の中で、鋼糸がシロガネを覆い尽くし、

「紅・細雪」

鮮血の雪を降らせながら、今度こそ彼は敗北を喫した。

◇ ◇ ◇

「ごぶっ……！」

シロガネが倒れた直後。

唐突にナヅチは吐血すると、その場に膝を着く。

「ナヅチ様！」

「「じーじー！」」

自らの怪我の事など忘れて、皆が駆け寄る。

「……さすがに、この老体では、あの技は堪えるな」

口の端から血を垂らしながら、ナヅチが気丈に微笑む。

あの技というのは、彼が“紅・細雪”と口にしたものだろう。無数の鋼糸が月光を照り返す光景は、確かに細雪の如く――しかし、それはシロガネの体軀から噴き出す鮮血により、すぐさま紅に染まったのだ。

まさしく、紅き細雪。

だが、強力であるが故に、病と老いによって衰えたナヅチには、反動が強すぎたのだろう。あの吐血も、それが理由なのは明らかだった。

そして、そんな技を受けたシロガネは、仰向けに倒れたまま、ぴくりとも動かない。

尋常ではない実力と生命力の持ち主だ。ナヅチが彼を殺すはずもなく、微かな呼吸音からして生きている事は確かのようにだった。し

かし、当分、意識を取り戻す様子もない。

「じーじ、無茶し過ぎや！」

「どうしてこんな事を……！」

ゴウタとライが、口々にナヅチへ向けて言う。

ナヅチは、少しだけ申し訳なさそうに淡く笑んだ。

「この事態を招いたのは私達だ。なのに、私だけ何もせず守られて
いるわけにもいかんよ。……なに、もはやオモイカネに刻まれた真
名はフヨウになっている。シロガネの命を奪わぬように手加減もし
ておいた故、私も死ぬ事はあるまいさ」

「ナヅチ様……良かった」

とりあえずナヅチの無事を知って、テナが安堵の吐息をつく。

――と。

「……………だからって、人から勝手に物を借りていくのは駄目よ、
じーじ」

そんな風にナヅチを非難にする声が、少し離れた場所で上がる。
目を覚ましていたらしいフヨウが、気づけば傍に立っていたのだ。

「ミ、ミカヅチ教官！？ いつの間に目を覚ましたんですか！」

ぎょつと振り返ったフウガが目を瞬かせる。

「……………ついさっき。フウガ君達も無茶し過ぎよ。今回は私の失
態でもあるからお仕置きは勘弁しておくけれど……」

「――お、お仕置きしようとか考えていたんですか」

ほんの数日前に、それを受けたばかりのフウガは、うんざりした
ような、ほっとしたような複雑な表情を浮かべる。それはゴウタや
ライも同じだった。

(……………あ)

だが、平気なようにしているフヨウも、僅かに目元を歪めている
事にフウガは気づく。

シロガネは、紛れもない強者だった。その男に不意を突かれ、一
撃を受けたのだ。命こそ奪われずとも、ただでは済んではいなかった
のだらう。あばら骨の一つや二つは砕かれているのかもしれない。

「何にせよ、皆、無事……というのは正しくはないだろうが、生きていてくれて何よりだ。フウガ君は、今更だが、こちらの事情に巻き込んでしまい申し訳ない」

ナヅチの謝罪に、フウガを頭を振る。

「俺にとっても、この孤児院や、ここで暮らす人達は大切な存在ですから。それを守るためなら、この程度の事、なんて事ないですよ」
「さすがフウちゃん、まさに真性のお人好し。つける薬はないってやつやな！」

ゴウタが笑いながら、軽くフウガの背中を叩いた。

フウガは半眼で、振り返る。

「それは褒めてるのか？」

「けなしている！」

「けなすなよ!？」

『よし、もっとけなせ! 私面白いから!』

「お前は黙ってろっ!!」

「フウガ」

フウガが自分の中に居る居候に怒鳴っていると、ライが肩に手を置いて声を掛けてくる。

「? どうした、ライ？」

ライは、何故か必要以上になつこりと笑って、

「なんかこの中で一番元気そうだから、レナ達に、こっちの件が無事に終わった事を伝えてくる役、頼むよ」

「……………いや、うん、断る理由はないんだけど、何だろう、この釈然としない感じ」

「お人好しも程々になって事でしょ」

「ああ、耳が痛い。なんか王都に来てすぐの時、先輩にも言われたばかりなような……」

なんてフウガが頭を抱えていると、ゴウタが思い出したように言った。

「そーいや、ツクヨミ先輩、結局、来うへんかったなあ」

ライも言われて気づいたように、頷く。

「そういえば。あの人の性格からして、見てみぬ振りとか出来なさそうだけど……まあ、巻き込まないで済むなら、それに越した事はないんだけどね」

「先輩も立場上、こんな時間にあんまり不用意に外をうろついたり出来ないだろ。あのスズって人、なかなか生真面目そうだったし、足止めでも食らっているんじゃないのか？」

「ああ、なるほどな。それは凄くありそうや」

フウガの意見に手を打って、ゴウタが得心する。

「じゃあ、もしかしたら、今頃こっちに向かっているかもしれへんな」

「だったら、レナちゃん達の所に向かう途中に、彼女に出会ったら、もう事が片付いた事を教えておいてあげてくれるかな。一応は、お客であるフウガ君にいろいろと押しつける様で悪いんだけど……」

テナが心からすまなそうに目尻を下げる。

この中では、特に見るに痛々しい状態の彼女に頼まれては、フウガも断る言葉は口に出せない。何より、ともに動けない程にナツチやテナが傷ついている以上、ゴウタ達が残っていなければならぬ理由は確かにあるのだ。

「構いませんよ。確かに今、この場で一番動けるのは俺でしょう」

「……大丈夫とは思いますが、まだ残党が居る可能性もある。念のため、気をつけておくようにな」

「わかりました。それじゃあ、行って来ます」

ナツチの言葉に頷くと。

皆に見送られながら、フウガは王都への道を歩み始めた。

——戦いの夜が。

未だ終わらぬ事を知らぬまま。

六章 月 その十三（後書き）

酷く間が空いてしまい申し訳ありません。今後、ペースがどこまで改善出来るか不明ですが、出来る限り頑張ってみます。

六章 月 その十四

孤児院から王都へ続く道。

まるで人気もなく、静寂と世間包まれたそこをフウガは一人で歩んでいた。

『フウガ』

「……わかってる」

オロチの言葉に、フウガはただ一言だけ返した。

——決して確信があったわけではない。

もしかしたら。

そんな予感があっただけ。

出来る事なら的中して欲しくなかったそれは、不幸にも現実となつてしまったのだ。

「——人って言うのは、命の危険が迫るとね」

不意に足を止め、フウガは言った。

「身体中の様々な感覚が鋭くなるんです。きっと自身を守るために、本能がそうさせるんでしょう」

返事はない。

それでも、フウガは前方の闇を見つめたまま続ける。

「自分から飛び込んだとはいえ、俺、さっき半ば殺されかけるような状況になったんです。だから、今は酷く全身の感覚が研ぎ澄まされてる。」

……そう。例えば、普段なら絶対に気づかないような、身を潜めた誰かの気配に気づいたり、ね」

まるで独り言のようにそこまで告げて。

フウガは最後に言った。

「もう良いでしょう……ムソウさん。」

これ以上は無意味だと思いませんか？」

「……ああ、そうだね。君の言う通りだ」

今度こそ返事があった。

変わらず前を向いたフウガの視線の先。

闇から浮かび上がるように、ムソウが姿を見せたのだ。

青年は、数日前に会った時となんら変わる事のない、人の良さそうな微笑と共に、静かに問いかけてくる。

「僕が何故ここにいるのか……もうなんとなくわかっているのかな」
数瞬程、逡巡して、フウガは言った。

「貴方は、今日の襲撃の事を知っていた。さらに、ナヅチさん達の素性に、この王都に人を探して来たという話……これだけの事実が揃えば、少し考えるだけで、ある程度の想像は出来ました」

「そうか。それはどんな内容だい？」

「おそらく、貴方が探していたのは、ナヅチさんとテナさん……あるいは今日の襲撃を行った連中の事だ。そうだとすれば、事前に襲撃の情報を貴方が得ていたとしても、不思議はない。そして、暗殺組織の人間を探し回る理由となれば、思い浮かぶ選択肢は多くなかった。それは――」

言い淀むフウガの言葉を、なお落ち着いた口調でムソウが継いだ。

「――復讐」

「……そうです」

フウガは内心の苦悩に耐えながら、頷く。

「ムソウさん、貴方が俺に襲撃の事を告げたのは、関係ない人間を孤児院から遠ざけたかったからでしょう。これから危険があるとわかれば、俺達が子供達をそのまま孤児院に置いておくはずもありませんから」

「それも理由の一つだね。だけど、それだけじゃない」

「もう一つの理由も察しはついています」

咎めるような目線で、フウガはムソウを見つめる。

「……襲撃の混乱を利用して、復讐の相手を殺すつもりだった。違いますか？」

「ああ、そうだよ」

ムソウは、もはや躊躇う事なく認める。

フウガに自らの存在を気づかれた瞬間から、彼には、もはや何一つ隠すような意図はないように思えた。

「僕の復讐の標的は、〈常闇〉の残党全て……その中でも組織の首領だったナヅチだけは、どんな手段を用いても僕自身が殺すつもりだ」

「……………」

内心、否定し続けた事実をあっさりと告げられ、フウガは苦悶に顔を歪める。

対して、ムソウの様子に大きな変化はなく、ただ冷酷な事実を口にしていく。

「油断ならない相手だが、老いさらばえた奴をただ殺すだけなら、そう難しくはない。それぐらいの自信が僕にはある。だけど、偶然、組織の残党のシロガネ達が同じようにナヅチを命を狙っている事を知った時、僕はそれを利用して、より深い屈辱と絶望の中で、ナヅチを死に追いやろうと考えた」

青年の双眸に、かつてない程に暗い光が宿る。

その光の示す感情は、フウガもよく知っているものだ。

許し難い相手への、果てしない怒りと憎悪。

「シロガネとナヅチ……どちらが勝ったにしても、勝った方が相手の止めを刺す瞬間に僕が割り込み、二人共殺す。

一人は、勝利の愉悦から、まさかの敗北の屈辱と共に死を。

かたやもう一人は、敗北の屈辱から、さらなる屈辱と死を。

卑怯と罵られても仕方ない手段でも、復讐としては、この上なくふさわしいじゃないか」

フウガは何かを振り払いたいかのように、強く頭を振る。

「でも、貴方はそうしなかった……！」

「正確には『出来なかった』だよ。君達の助力は、僕の予想以上にナヅチ側の力になったようだね。こんなに早い決着になるとは思わなかった。さらに言えば、戦力的に勝つのはシロガネ側だとも思っ

ていた。

何にせよ、ここまで計画しておきながら、完全に僕は出遅れたわけだ。間拔けな話だよ、我ながらね」

「ムソウさん……。俺の考えた事は、あくまで推測で何の確証もなかったんです。だから、本当は、俺自身もそんなわけないと樂觀していた。——いや、そんなわけないと、そう信じたかった。激情に駆られ、間違いを犯そうとしていた俺を、貴方は救ってくれたから」
「でも、僕は、この場に居た。復讐の相手を前に抑え切れなかった。僅かな殺気を君に感じ取られ、見つかってしまった。その現実が、全てを物語ってしまったんだよ、フウガ君。君を助けたのだから、計画のために、あの孤児院と関わりのある君と自然な形で接触したかったからだ」

フウガは、まだ最後の望みに縋る様に問うた。

「ムソウさん……。何故、貴方は復讐なんて……！」

「——単純な理由さ。」

大切な人達を理不尽に奪われた。

それが許せない。だから、殺す。

……。何も珍しくもない、だからこそ容易く覆せない深い憎悪だ」

「……………」

否定は出来なかった。

かつて、憎しみのままに妖魔へと刃を向けていたフウガには、嫌というほどに、それが理解出来る。

間違いに気づいた今でも、その憎しみ自体が完全に消え去ったわけではない。

「……僕は、かつてこの王国で、本当に小さな領地を任せられていた領主の息子だった」

ムソウは、自らの復讐の動機となる過去を、ゆっくりと語り始める。

「生活は、普通の平民よりもほんの少し裕福な程度で、特別恵まれていたわけじゃない。でも、幸せだったよ。誰よりも僕を愛してく

れる父と母と兄の三人の家族が居たからだ」

ムソウの過去を懐かしむ遠い目が、途端、激しく燃え滾る怒りへとすり替わっていく。

「だが、領地内のある岩肌から、偶然、龍輝石の鉱脈が見つかって、その平和はすぐさま瓦解したよ。龍輝石は、需要と供給が釣り合わないが故に、非常に貴重で、高価で取引される。その恩恵を奪い取ろうと考えた、ある上級貴族が暗殺者を雇い、僕達の一家を皆殺しにしようとした」

「その組織が……〈常闇〉……」

「ああ。当時、あの組織は全盛と言っても良かった。貴族といえど……いや、むしろ貴族という立場にあるからこそ繋がりのある人間は、少なくはなかったんだろう。」

そんな組織の人間に、為す術なく父達は殺されていき——でも、僕は助かった。父達が命懸けで庇ってくれたおかげで瀕死の重症を負ったものの、一命は取り留めたんだ。治療した医者は、助かったのは奇跡だと言っていたよ。……まあ、それぐらいの傷だったからこそ、一流の暗殺者も死んだものと違いしてくれて、助かったんだろうけどね。

その後、無事に快復した僕は、病院を抜け出し、着の身着のまま、一人王都を離れた。そのまま留まれば、再び暗殺者を差し向けられる事は、幼かった僕でも容易く想像出来たからね。

そして、それから十数年の年月を、僕は復讐の想いだけで生き抜き、力をつける事に全てを費やし続けた」

「〈常闇〉の暗殺者を雇ったという貴族はどうしたんですか？　まさか、もう……」

「ああ、死んだよ」

あっさりとムソウは肯定し、しかし、同時に皮肉めいた笑みを浮かべる。

「でも、僕が殺したわけじゃない。何かの目的のために龍輝石を欲していた〈常闇〉の暗殺者の誰かに殺されたらしい。それが何者か

まではわからなかったが……馬鹿げた話だろう？ 復讐のためだけに生き続け、力をつけて、決死の想いで故郷の地に帰って来てみれば、真っ先に殺してやりたい相手は、勝手にも自業自得な結末を迎えていたんだ。全く笑える話だよ。神様という奴は、とことん僕に意地悪をしたいらしい」

「なら、それで終わりじゃ駄目なんですか！」
必死の思いでフウガは訴える。

「確かにムソウさんの家族を殺したのは、〈常闇〉の暗殺者でしょう。でも、手を下したのは、おそらくナヅチさんじゃない。首領である彼が、そうそう自ら動くとは思えません。なら、暗殺を実行した人間は、まず間違はなく十七年前の神聖騎士団との戦いで死んでいるはずだ……！」

「フウガ君」

ムソウが、少年の名を呼ぶ。

優しく、だけど、有無を言わせぬ声で。

「理屈じゃないんだよ。どれだけ自らに言い聞かせた所で、僕の家が、醜い欲望に塗れた貴族の雇った暗殺者に殺された事実は変わらない。その暗殺組織の首領がナヅチという男である事実もまた……変わりはしないっ！」

先程までの落ち着いた物腰が嘘のように、ムソウは感情も露に腕を振るう。

明確な拒否の意思表示。

下唇を噛み、爪が肉に食い込むほどに拳を握りながら、フウガは俯く。

「もう……止まれないんですか、ムソウさん」

「ああ、もう駄目なんだよ、フウガ君。ここに辿り着くだけでも、僕は十分過ぎるほど汚れてしまった。今更、戻れない。」

だから、そこを退いてくれ。僕の標的は、ナヅチと組織に関わる人間だけだ。君の友人や孤児の子供達には手は出さない。僕に……君を殺させないでくれ」

「でも……」

「フウガ君……?」

「それは貴方自身では止まらないというだけの話だ」
勢い良くフウガは顔を上げる。

腰の後ろに両手を回し、抜剣する。

「フウガ君!」

「だったら、俺が貴方を止めます、ムソウさん。
知ってしまった以上、俺には見過ごせない。貴方に、ナヅチさん
やテナさんを殺させるわけにはいかない。

——あの人達は、俺にとって護るべき人達だから!」

フウガの覚悟と刃を前に、ゆっくりとムソウの周囲を殺気が漂い
始める。

「……君がどうしても立ちはだかるといふのなら、僕は容赦しない
よ」

冷たい声だった。

聞く者に、その言葉が本気だと確信させる程に。

しかし、フウガの決意は、まるで揺るがない。

「構いません。それなら力尽くで止めるだけだ」

「——そうか。残念だよ、本当に」

それが最後だった。

流れるような動きで腕を持ち上げ、ムソウは、今度こそ抜刀した。
切れ味の鋭さを見せ付けるように、磨き抜かれた刀身が月光を照
り返す。

そして、小さく、静かに。

だけど、はっきりと少年の耳に届く冷たい声で。
青年は告げた。

「なら、僕は——君を殺すよ」

◇
◇
◇

「さて、こっちは、こいつをどうにかせんとな」

倒れたシロガネを見下ろして、ゴウタが腰に両手を当てながら言った。

「とりあえず〈言力〉封じの縄で動けないようにして、あとは手当ても必要だね。死なれたりしたら目覚めが悪いし」

そう言いつつも、気が進まない様子でライが呟く。

ライ、ゴウタ、フヨウの三人にとって、ナヅチやテナから教わった戦う術は、決して無闇に人の命を奪うためのものではない。ナヅチ達からすれば暗殺のための忌むべき技術でも、使い方次第で誰か護り、そして、救えるのだと――それを証明するためにライ達はそれを修得する事を決心したのだ。

故に、敵であった男でも、むざむざ死なせるわけにはいかなかった。

「……………じゃあ、じーじとテナは、私が手当てするから、孤児院の方に戻りましょう。――動ける？」

シロガネの方をライとゴウタに任せて、フヨウがナヅチとテナの方へと振り向く。彼女自身も決して軽い怪我ではなかったが、二人に比べれば、まだ軽傷だった。

「私の方は大丈夫だ。歩くくらいなら問題ないさ」

「……私は、少し手を貸してもらえるとありがたいかな……」

辛そうな表情でテナが伸ばした手を、フヨウは握ろうとする。

その時だった。

「――っ！」

唐突にフヨウは顔色を変えると、傷ついた二人を押し倒すように飛んでいた。

三人の頭上を、まさに紙一重のタイミングで、一振りの短刀がほぼ無音で通り過ぎる。その軌道は、間違いないナヅチを狙ったものだ。

「な、なんや!？」

「姉さん!」

すぐに異常に気づいたゴウタとライが振り返る。

そこに、

「……ふん。さすがナヅチの技を受け継ぐ女だな。完全に不意を突いたつもりだったが、感づいたか」

聞き覚えのある声が闇の中に響いた。

「……………誰？」

すかさず身体を起こしたフヨウは、誰何の声を上げる。

それに応えるかの様に、森の木陰より、一人の人物が姿を見せ、歩み寄って来る。

他の暗殺者やシロガネと同じく、その身を黒装束で覆った男だ。

しかし、この男は、シロガネ達とは違い、顔だけは隠していなかった。

「！？　　どういう、事や……………！！？」

真っ先にその事実気づいたゴウタが、傍で倒れたシロガネと、新たに襲って来た男とを見比べる。

——同じだった。

背丈、声、纏う空気、そして、容姿。

全てがシロガネとその男は、そっくりそのまま同じだったのだ。

「双子、か……………！」

ライが呻く様に漏らす。

それを聞いて、フヨウに助け起こされたテナが息を飲む。

「まさか——クロガネなの……………！！？」

そんな彼女の反応を、黒装束の男——シロガネの双子の兄弟であるクロガネは、鼻で嘲笑う。

「どうした、テナ？　そんなに俺が生きている事が不思議か？」

「貴方は、十七年前の神聖騎士団との戦いで死んだと……………！」

「それは俺の半身——シロガネから聞いた事だろう？　まさかお前は、自らの命を狙う敵の言葉を真に受けていたとも言うのか。これは、とんだお笑い種だな。そこまでぬるま湯に浸かっていたとは」

「……………っ」

自らが図られていた事を知り、テナは悔しげに齒噛みする。

「さりげなく自身は死んだ、とシロガネに教えさせ、奴を倒した時点で戦いは終わったと私達を油断させる。そこを、ずっと潜んでいたお前が速やかに仕留める——そんな所か、お前の……いや、お前達の計画は」

冷静に状況を分析したナヅチが言った。

別に優越感を見せるでもなく、クロガネは肩を竦める仕草で、それを認める。

「俺達は暗殺者。そもそもが敵に悟られず背後から刺すのが本来の在り方だ。だとすれば、この程度の伏線を張っておくのは、むしろ当然だろう。……それでも、まさかシロガネが敗れるとは思ひもしなかったがな」

血を分けた兄弟の失態を憤るでもなく、クロガネは淡々と言った。彼からすれば、シロガネとその部下達だけでもナヅチ達の始末は十分と感じたからこそ、あえて自身は、万が一の保険のために身を潜めていたのだ。故に、シロガネがフウガ達に倒された事は、その言葉通り予想外の事だったのだろう。

「だが、シロガネ達の敗北も決して無駄ではなかったな。手強い三人は、もはや全て手負い。まともに戦えるのは、未熟な騎士候補生二人のみだ。不意打ちは失敗したとはいえ、これほど容易い仕事もあるまい」

フヨウ達の元に駆けつけ身構えたゴウタとライは、明らかな侮辱の言葉に、憤怒を見せて吼える。

「なめんなや！」

「僕達が誰一人、死なせたりはしない……！」
しかし、クロガネの見下す態度は崩れない。

「無駄な事を。双子である俺の力は、シロガネと同位だ。当然、龍輝石を埋め込み、〈言力〉も強化してある。シロガネを五人がかりでも仕留め切れず、ナヅチの助力があって、ようやく勝利したお前達に、万が一の勝機もあるものか」

「くそっ……」

「……………」

これに、二人に反論の言葉は続かなかった。

その放たれる威圧感だけで、クロガネの言葉が出任せではない事は明らか。どれだけ感情任せに言葉を荒げた所で、その事実が覆るわけではないのだ。

それでも退くという選択肢を絶対に選べない二人は、臆さず覚悟を決める。

〈龍脈〉より組み上げたプラナをそれぞれの形に改変し、相手の隙を伺う。

その背後では、フヨウが、ナツチより返したもらったオモイカネを両指に嵌め直し、もう戦えないナツチとテナを庇いながら、静かに身構える。

「敗北必至と悟ってなお抗う事は勇氣と言わん。ただの無謀で愚かな行為よ。……まあ、好きにするが良い。過去の復讐と、シロガネをこうも痛めつけてくれた札——存分に返させてもらおう」

存分に余裕を持って告げて。

もはや語る事もないと、クロガネが動く。

星空の下、紅い鮮血がその場を彩った。

六章 月 その十四（後書き）

お読み頂きありがとうございました。

相変わらず更新が酷く遅く、本当に申し訳ありません。

それと、修正報告です。

今回の話で、「シロガネ」と「クロガネ」の表記が逆になっていました。

修正前にお読みになった方は、混乱させてしまい、申し訳ありませんでした。

それと、間違いを指摘して下さった方、本当にありがとうございます。とても助かりました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8270c/>

オロチ様はイタズラがお好き！？

2010年10月10日07時30分発行